学園☆幕末伝 八忍隊

黒鋼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園☆幕末伝　八忍隊

【Ｎコード】
Ｎ０５４２Ｌ

【作者名】
黒鋼

【あらすじ】
古都・杏都に存在する「帯刀の許された武家お嬢様学園」「愛津女学園」。
男子校である「颯間学院」との共学化を推し進めるため、颯間学院の生徒である
主人公「風上　剣」は愛津へと試験的に編入することとなった。
女性に免疫がなく、あがり易い体質の剣は不安いっぱいで校門をくぐる。
そこで彼が見たものは、二派に別れて剣を交えあう女学生の姿だっ

た！

お互いを「佐学派」「討学派」と呼び斬り合う彼女達！

「徒沙班」・「超秀班」・「真選組」など様々な美女たちに戸惑う剣！

そんな彼だが実は颯間最強傭兵集団・八忍隊の切り込み隊長で――！？

Ｍａｙ－Ｂｅ　ＳＯＦＴゲーム「学園☆新選組！」をモデルとした連載小説、ついに解禁！！

～序章～愛津女学園（前書き）

この作品は、「学園☆新選組！　～乙女ゴコロと局中法度～」を元にした
連載小説ですが、主人公は幕末の人間をモデルにしていません。ご了承ください。

～序章～愛津女学園

時は―現代―

古都・杏都に存在する全寮制女子校「私立愛津女学園（しりつあいづじょがくえん）」は、伝統ある名門校として知られる「お嬢様学校」である……はずなのだが通常の学園とはかなり異なる。

まず、生徒達に『帯刀』が許されているという点で何かがおかしい。

これは学園の創設者であった“徳山（とくやま）　康家（やすいえ）”が、いずれ女子の地位が男子と同等のものとなることを予見し、

―「女子も文武両道を兼ね備えるべし」―

として始まったものである。

男子が当然のように優遇されていたその時代において、すでに時代の先見を持った優れた人物であったといえるだろう。

しかし、彼の辞世の句が

―『日本刀（にほんとう）　女子（おなご）が持（も）てば　超萌（ちょうも）ゑる』―

であった為、単に自分の趣味であった事が発覚した。

その後、歴代の学園長は康家の遺志を継ぎ帯刀制度を初めとする古風な校風を継承し、

他の学園とは一線を画する「帯刀の許された武家お嬢様学園」と相成ったのである。

だが、その特殊な校風と年々の少子化問題により現代は生徒数の減少に

歯止めが利かなくなりつつあった。

そこで、教頭の“勝　成舟”は学園の「共学化」を提案。
これに対し、歴史と伝統を重んじる学園長“松平　並盛”は
共学化を良しとせず、現体制を維持する事を強調。
だが、現理事長“徳山　慶春”は今だ結論が出せずにいた。
そのため校内では、教師達以上に女子生徒達も

―『自由な校風や男子生徒との恋愛を望む者は共学に賛成』―

―『伝統と学園の秩序を重視する者は共学に反対』―

と学園が真っ二つに分かれる形となり　いつしか、

―現体制を排除し共学化を望む生徒のことを『討学派』―

―現体制を維持し共学化に反対する生徒のことを『佐学派』―

と呼ぶようになり、学園では二つの勢力が小競り合い続けるようになる。
やがて討学派には、

―柔軟な思考と奇襲を得意とする　武闘派の『徒沙班』―

―学園のエリート達によって構成された　頭脳派の『超秀班（ちょうしゅうはん）』―

が現れる。

これに対して佐学派には、
学園の秩序が乱れ学園の名に傷がつくことを恐れた並盛により

―剣の腕に覚えのある者達によって結成された遊撃剣客風紀部隊『真選組（しんせんぐみ）』―

を結成させる。

討学派と佐学派の対立は日に日に増していく。
そんな中、慶春は愛津女学園との共学化の話が出ている
『私立颯間男子学院（しりつさつまだんしがくいん）』の現理事長
“島津（しまづ）　隼人（はやと）”と相談し、一つの決断を下す。

―「颯間男子学院より、
試験的に何名かの男子生徒を編入させ共学のテストをさせてはどうか」―

共学化に乗り気ではない教師達も、
颯間の理事長の提案を無下にはできず、提案を受け入れる。
その代わりに並盛は、テスト編入するのは一名に限るという条件を
隼人に出したのだ。
そこで隼人は、自分の八人の孫から一人を抜擢し、編入させる事に

したのだ。

―私立颯間男子学院―

杏都の南西に位置するこの学園は、共学化の話が出ている愛津女学園と同じく
帯刀制度を初めとする古風な校風を継承するその一方で、
エレベーター・トレーニング施設など最新技術を取り入れている
『杏都四大学園』の中でも柔軟な学院で有名である。
この学院の理事長室に途方もない巨体をほこる金髪の老人“島津隼人”がいた。

「ふむ、遅いのぉ。」

隼人は理事長室の椅子に腰掛け大あくびをしながらそう呟いた。とそこへ、

―コンコン―

理事長室の扉を叩く音がする。誰かが来たようだ。

「（ふむ、来たか？）どうぞ」
「失礼します。」

理事長室の扉を開き、入って来たのは一人の少年だった。
颯間の紺色の学ランに身を包んだ１８０近い長身、
後ろで１つに結われたプラチナのような白銀の長髪と
右はルビーのような真紅、左はサファイアのような蒼をした

『左右色違いの瞳（オッドアイ）』をした少年はどこか日本人離れした美しさがあった。
「ふむ、来たか剣（つるぎ）。」
隼人に剣と呼ばれた少年は、隼人の前に立ちはっきりとした声で返事する。
「はい、遅くなってしまい申し訳ありません。」
剣は、ペコリと頭を下げる。
「まぁ良い良い。それよりもお主をここに呼んだ本題に入ろう。」
隼人は、先程までののほほ〜んとした声からキリっとした声に変わる。
「風上（かざかみ）　剣（つるぎ）。」
「はいっ」
何時に無く真剣な声と表情をする隼人。そして――――――
「お主には来週からテスト編入として愛津女学園に編入してもらう！！」
「……ふぇ？」

隼人の言葉にポカンとなる剣。

「いやじゃからのぅ、お主も知っておろう。愛津女学園とのテスト編入の話。」

隼人は、剣の状態を全く気にせず言葉を続ける。

「本当は十人くらいの予定だったんじゃが、向こうの先生に1人だけっつー条件つけられちゃったのよ。んで、孫のお前を編入生にしようと決めたわけじゃ。」

「……」

隼人は言葉を続けるが、剣の耳には聞こえてないのか放心状態のままだった。

「つーわけで、頼むぞ剣。」

ニカッと笑う隼人。だが剣は……

「……ちょ、」

「ん？」

「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

理事長室　いや、学園中に剣の絶叫が響く。

「ちょっと待てじいちゃんっ！！何でだっ！？何で俺なんだっ！？」

「何でって、話きいとったか？」

「聞いてたよっ！！」

「んじゃいいじゃん。」

剣の怒鳴りに対して、ケロッと答える隼人。

「だいたいのぉ剣、そんなに嫌か？普通の健全な男子なら
女子校に行けと言ったら喜ぶもんじゃろう。」

正論ではある。女子校という秘密の花園に行ける事を喜ばない男子は普通いない。
ましてや、女っ気のない男子校の生徒なら尚更だ。だが、剣にはどうしても愛津に
行きたくない理由があるのだ。

「……じいちゃん、まさか俺の体質を忘れた訳じゃぁ……
……」

「女性に対しての赤面症と拒絶反応か？」

「覚えてるじゃないかぁ！！」

ケロッと答える隼人に怒りを顕にする剣。
そう、実は剣は女性が大の苦手なのだ。手が触れただけでも赤面し、
パンチラだけでも気絶するほどに。
本人は体質と思ってるが、周りからは免疫がないからと思われているが、

今のところ真実は不明。

「大体何で俺なんだ。女子が相手なら俺より魁(かい)の方が適任なんじゃ……」

「魁は吹奏楽部の用事で無理じゃ。」

「ふぇっ!?」

隼人の言葉に絶句する剣。ちなみに魁とは、剣と同じ隼人の孫八人の一人である。

目を丸くする剣に隼人はさらに続ける。

「ちなみに他の皆は、勇(いさむ)はデリカシー0じゃし、龍牙(りゅうが)は生徒会が忙しいし、

ノアはスケベじゃから愛津に行かす訳にはいかんし、

ユーリはヤンキーじゃから問題起こしそうじゃし、

進(しん)は女嫌いじゃし、幻八(げんぱち)は問題外じゃ。

そうなると残ったのはお主しか居るまい。」

隼人の言葉に言い返せない剣。

「その点お主なら性格は真面で真面目じゃし女子生徒達からも好かれるじゃろう。」

「……だけど……」

「ま、女性恐怖症を克服するためと思って、行きなさい。」

隼人はニコッと微笑む。

「……わかったよ、どうせ断れないんだろう?」

「わかってるのぉ。」

ついに剣は折れた。元々が頼まれたら嫌とは言えない律儀な性格なのだ、
それを知って隼人は剣を選んだのだ。

「では、話は以上じゃ。今のうちに色々と準備しておきなさい。」
「……はい。」

やや弱弱しく返事した剣は、理事長室を後にした。

―私立颯間男子学院　屋上―

剣は、颯間の屋上から杏都の町を眺めていた。
古都とは思えないほど広い町。
ここから東を見れば、『杏都四大学園』の一つ「私立規州学園（しりつきしゅうがくえん）」が見える。
北を見れば、同じく、『杏都四大学園』の一つ「私立未戸学院（しりつみとがくいん）」が見える。
そして、北東を見れば『杏都四大学園』の一つ「私立愛津女学園」が見える。
剣は、屋上から愛津女学園を見つめた。

「あれが……愛津女学園……」

剣は、来週から行くこととなる愛津女学園を唯々見つめ続けた……
……

そして、物語は始まる。

女学園　《終》』

『～序章～愛津

～序章～愛津女学園（後書き）

どうも、黒鋼です。始めさせていただきました『学園☆幕末伝　八忍隊』。
八忍隊ってなんだ?と思う人も多いでしょうが、そこはお楽しみということで。
ではでは。

～第一章～　剣の編入　苦難と安心

愛津女学園―２－Ｂ―

今ここに、この学園に風雲急をつげるであろう一人の生徒が紹介されていた。

「颯間男子学院から来ました、“風上（かざかみ）　剣（つるぎ）”と申します。
どうぞよろしくお願いします。」

そう、颯間男子学院よりテスト編入生として
愛津女学園にやって来た（来る破目になった？）剣である。
彼の白銀に輝く髪と、紅と蒼の左右色違（オッドアイ）いの瞳を持つその容姿は
嫌でも注目を浴びる。

「うわぁ～、すっごい美形。」
「まるでハリウッドスターみたぁ～い。」
「うんうん、どんな人が来るかドキドキしてたけど、
これ程の美男子が来るとはねぇ～。」

キャイキャイと黄色い声が上がる、その一方で

「あれが颯間の理事長の孫か……」
「ん～まぁ、顔はいいけど……」
「油断しない方がいいわ、所詮は男よ。」
と批判的な声も上がる中、当の剣はというと……

「（何で俺ここにいるんだろぅ。うぅ、颯間に帰りたい……
……）」

むっちゃくちゃ緊張し、早くもホームシックになっていた。

「皆さん、静かに。」

担任教師の呼びかけに、教室内は一先ず静かになる。

「それじゃぁ風上君は、あそこの席に座ってもらうわね。」

「あ、はい。」

担任に指名された席へ向かう剣。その間、全生徒からの視線の集中放火を浴びる。

「（……はぁ～、いい男……）」

「（じ～）」

「（あぁ、いいなぁ、お話したいなぁ～）」

「（……こいつの存在で、討学派の勢いが強くならなきゃいいけど……）」

女子生徒達からの視線に、剣はさらに緊張し赤面しまくりだった。

「（……俺、何か悪いことした？）」

と、そんな事を思いながらも指定された席に到着する。

「（早いとこ座ろ……ん？）」

指定された席に着席した剣は、席の左右隣から2つの強い視線を感じ、左右を見渡す。

左隣の席には、薄緑色のロングヘアーをゆるやかなウェーブに波打

たせ、
右肩に星の紋章が入った朱色のマントを着用した
いかにも品のいいお嬢様という印象のある女子生徒が、
剣に熱い視線を向けていた。

「（？何だろうこの人の視線、何だか……熱い。）」

だが、剣はこの視線の意味を理解できず、頭の上に？マークを浮かばせるだけだった。

一方右隣の席には、長い黒髪をポニーテールに結んび
白いだんだら模様を染め抜いた黒いコートを羽織った女子生徒が、
剣を強い殺気で睨み付けていた。

「（……何か……明らかに敵意が……ん？）」

この時剣は、ある事に気が付く。
ここの生徒全員が、朱色か白のマントらしき物を片に着用するか
白いだんだら模様を染め抜いた羽織を着用している事に。

「（何だろう？討学派と佐学派の見分け方か？でもだとするなら何のために？）」
「それでは、以上でホームルームを終わります。」

剣がそんな事を考えている内に、ホームルームが終了。
教室内が休息の空気に包まれる。

「（……まぁ、いずれ知ろう）さてと」

剣は、気分転換のためにカバンから本を取り出す。

「『戦国(せんごく)!!忍(しの)びの謎(なぞ)!!』

結構いいんだよなぁ。さて、続きを……」

「あの、少しよろしいでしょうか？」

「ふぇ？」

不意に呼ばれた剣は、声のした方――左隣の方を向く。

そこにいたのは、先程熱い視線を向けていた女子生徒だった。

「あ、えっと……」

「あ、申し送れました。私(わたくし)、“桂(かつら)　心(こころ)”と申します。

よろしくお願いします。」

『桂　心』と名乗った女子生徒は上品にスカートを持ちながらお辞儀をする。

「あ、ど、どうも、“風上　剣”です。」

慌てて剣はペコリと頭を下げる。

「うふふ、それで剣様。少しよろしいでしょうか？」

「ふぇ？あ、はい　何ですか？」

心臓をバクバクさせながらも、剣は何とか平常心を保ち桂に尋ねる。

「はい、是非私達に颯間学院の事を色々とお聞かせ願いたいのです。」

「ふぇ？達？……！！」

この時剣は気づいた。いつの間にか剣の周りに、マントらしき物を片に着用した
女子生徒達に囲まれている事に。

「ねぇねぇ、颯間学院の事を色々と聞かせてよ。」
「うんうん、それに風上君の事も色々知りたいなぁ。」
「趣味は？女の子のタイプは？」
「（うわぁ、い　いつの間にこんなに！？）」

女子生徒に囲まれた剣の顔はあっと言う間に茹蛸状態(ゆでだこじょうたい)に。

「あ、あぁ、えっと、その……（うっ！？）」

不意に剣は、先程感じた殺気を再び感じ取り後ろを振り返る。
そこには、やはり先程殺気を向けていた女子生徒がいた。
また、彼女の周りには白いだんだら模様を染め抜いた
浅葱色(あさぎいろ)の羽織を着用した女子生徒達がこちらを睨んでいた。
その殺気に桂達も気づき、剣を後ろにやるように前へ出る。

「奴らこっちに気づきましたよ。どうします土方様(ひじかた)。」

剣の事をずっと睨んでいた生徒は、『土方』と言うらしく
どうやら彼女が佐学派のリーダー格のようだ。
土方は部下の言葉に『案ずるな。』と言い、
部下達を後ろにするように前に出る。

「……何かご用ですか、歳緒(としお)さん。」
「ふん、そこの男が何かしないか睨みを利かせているだけだ。」

土方は、ギロッと剣を睨みつける。

「な、何で俺初対面なのにこんなに嫌われてるんだ？」

剣は、はっきり言って今すぐにでも逃げ出したい気持ちでいっぱいだったが、

周りが討学派生徒達に囲まれてるため、逃げるに逃げれなかった。

「剣様、あの女……“土方（ひじかた）　歳緒（としお）”は真選組の副長、相手にするだけだけ無駄ですわ。」

真選組―その名は剣も聞いたことがある。

浅葱色の羽織に身を包んだ“蒼の狼（あおおおかみ）”と呼ばれる佐学派、

いや、学園最強の剣客集団。

その目的は主に、学園・杏都の見廻り、討学派の動きの監視、

そして討学派との小競り合いを制する、いわゆる治安維持である。

学園内だけでなく、杏都も見廻るため学園外での知名度も高く、

他校の生徒達の間でも有名である。

「ふん、学園の秩序を乱す討学派、いずれ決着をつけてくれる。」

「ふふ、時代の流れも直視できぬ佐学派に負ける気など毛頭ありませんわ。」

土方と桂の間でバチバチと火花が飛び散る。

討学派と佐学派――同じ学園の未来を案じながら、

全く違う未来を思い描く二つの勢力。

果たして、この二つの勢力に決着が付く時は来るのだろうかっ！？

乞うご期待！！

『～第一章～　剣、苦難の編入《終》』

「って、終わるなぁ――――――――――――――――――っ！！」

……はいすみません、冗談です。まだまだ続きます。

その後、授業の始まりを告げるチャイムが鳴ったことで
何とか事なきを得たのだが、
やはり女子に囲まれての授業は剣には少々きつかったらしく、
昼休みを迎えると女子達に見つからないように教室を抜け出した剣

は、
屋上で昼食を終わらし図書室にやって来た。

「ここか。」

剣がここにやって来た理由は、まず静かな所で休みたいから。
前述にも述べた通り、女性に囲まれていた剣は
心身休ませるために静かな所を求めているのである。
そしてもう一つは、剣の読書好きである。
特に歴史物には目が無く、休みの日は半日を図書館で過ごす事もあるほどだ。

「（よし、思った通り人は少ない。）」

剣は心の中でガッツをする。
休憩時間は、大抵の生徒は小競り合いに出ているため
図書室を利用する生徒は少ないだろうという剣の読みは的中。
図書室には数える程しか生徒が居ない。

「よし、えぇっと……」

剣は早速、歴史系の本が置いている棚を探す。
途中、生徒達の視線を浴びるが本探しに夢中になった剣に
少数の視線など感じなかった。

「えっと……あ、ここだな」

お探しの棚を見つけた剣は、その棚から本を探す。

「ん～と……ん？」

剣は、棚の中の本の一冊に目が止まる。
「（『戦国放浪―風の狼』！！探してた奴だっ！！）」
剣は心の中で軽く感動する。
『戦国放浪―風の狼』は、最近人気の戦国ファンタジー小説で、
その人気のためどこの書店に行っても売り切れだったため剣は半ば
諦めていたのだが、
それが今目の前にあるのだ。
「（颯間の図書室にはなかったのに……ラッキーッ！
！）」
剣は迷わずその本に手を伸ばす。
……だが、
「ふぇ？」
「え？」
剣とほぼ同時にその本に手を伸ばした女子生徒の手が剣の手と重な
り合う。
女子の手に触れてしまった剣は、顔が茹蛸状態となる。
「あ、あわわわわ」
剣はさっと手を引っ込め、相手の女子生徒を見る。
その子は白銀のロングヘアーをし、背中に小薙刀を背負い
真選組の羽織を着用した、どこかＯＬの様な雰囲気の漂う生徒だっ
た。

「あ、あのぉ」

その生徒は、おずおずと剣に話しかける。

「ふぇ？あ、は、はい、何でしょう？」

「あの、大丈夫ですか？」

「え？」

彼女の予想外の質問に、剣は一瞬ポカンとなる。

「あ、はい、顔が赤いので熱でもあるのではと……」

「ふぇ？」

剣は、ガラス窓で自分の顔を見る。たしかに真っ赤だ。

「あ、いや、これはその、俺、女の子に慣れてないから……」

「え？あぁ、そういう事ですか。」

剣の言ってる意味を理解した生徒は、ニッコリと微笑み掛ける。

「よかった、風上さん何かご病気なのかと心配しました。」

「あ、あぁ、ありがとう……ふぇ？」

この時剣はある事に気づく、自分は自己紹介をしていないのに

何故彼女は自分の名を知っているのだろう。

そう思った剣は、おずおずと尋ねてみる。

「あ、あのぉ、何故俺の名を？」

剣の質問に対し女子生徒は一瞬『え?』とキョトンとしたが、すぐにニコリと微笑む。

「私、風上さんと同じ2－Bですから。」

「ふぇ?そうだったんですか?すいません、気が付かなくて。」

彼女が自分と同じクラスの人とは知らなかった事を剣は素直に謝罪し頭を下げる。

それに対し女子生徒は『いえいえ』とあっさり許してくれた。

「本当にすみません、えっと……」

剣は謝罪と同時に彼女の名を言おうとしたのだが、名を聞いてないのを思い出す。

「あ、もしかして名前ですか?」

「あ、あぁ、すみません、よく考えてみれば名前聞いていませんでしたから」

剣の言葉に彼女は、『あぁ、そうでしたね。』と手をポンと叩く。

「そういう事でしたら、自己紹介させていただきますね。
私は“頼子(よりこ)”、真選組四番隊組長(しんせんぐみよんばんたいくみちょう)“松原(まつばら)　頼子(よりこ)”です。
よろしくお願いしますね、風上さん。」

そう言い『ニッコリ』と頼子は微笑んだ。

「あ、こちらこそよろしくお願いします、松原さん。」

「あ、頼子でいいですよ。」

「ふぇ?あ、あぁ、分かりました……頼子さん。

（女の子って恋人以外に名前で呼ばれるのは嫌がるって聞いてたけどなぁ）」

そんな疑問を抱きながらも、剣は言葉を続ける。

「俺のことも名字じゃなくて名前で呼んでください、風上より言いやすいと思いますから。」

「あ、はい剣さん。」

ニッコリと微笑む頼子とそれに釣られる様に笑う剣。

とそこへ――――

キーンコーンカーンコーン

「「あ、」」

昼休憩の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「チャイム、鳴っちゃいましたね。」

「そうですね。」

昼休憩が終わってしまった事に少し残念そうな2人。

剣はチラッと横目で頼子を見る。

「（本は読めなかったけど、始めてだな、女の子と一緒にいて嫌じゃないって思えたのは）」

正直な所、剣はこの愛津女学園でうまくやってく自信が無かったのだが
頼子と出会って少し緊張が薄れたようだ。

「あ、」

頼子と目が合い、急遽目を逸らす剣。

「あのぉ剣さん？」
「ふぇ？あ、は　はい、何ですか？」

頼子の視線にドキドキする剣。
頼子は、剣が先程手にしようとした本
『戦国放浪―風の狼』を取り出し、剣に差し出す。

「ふぇ？これ……」
「これですよね、さっき手にしようとした本。」

驚く剣にニッコリと微笑む頼子。

「え、えぇ、そうですけど……」

剣の返事で、この本だと確信した頼子は

「（ふぇっ！？）」
「はい、」

そう言い頼子は自分の右手で剣の左手を掴み、少し強引に剣に本を手渡す。

「あ、あぁ、あ……がが……」
頼子にいきなり手を握られた事で、
剣は本日3回目の茹蛸状態（ゆでだこじょうたい）となる。

「お友達になった記念です。図書委員として、その本をお貸ししますね。」
「ふぇ？」

剣は、頼子の言葉に一瞬我が耳を疑う。
自分達は、少し前に出会い少し話をしただけなのだ。
たったそれだけなのに、彼女は自分の事を『お友達』と呼んだのだ。

「私達は、偶然だけど出会いました、ほんの少しだけどお話もしました。
お友達になるのは、そんな些細なことからなんだと思うんです。」

驚く剣に、頼子はニッコリと微笑みながら言い放つ。

「ですから、私達は今日からお友達です。」

「頼子さん……」

頼子の言葉に、剣は再び頬を赤く染める。
自分をこんなにも簡単に友達として見てくれる頼子に剣は軽い感動を覚える。

「それじゃぁ、行きましょうか。」
「ふぇ?あ、あぁ、そうですね。」

頼子との会話に夢中だった剣は、時計をみて内心焦り出す。
何故なら次の授業が始まるまで、あと2分しかないのだ。

「さ、いそぎましょう。」
「あ、あの、頼子さん。」
「?」

剣に呼び止められ、剣に視線を向ける頼子。

「その、これ、ありがとう」

剣は頼子に渡された本、『戦国放浪(せんごくほうろう)―風(かぜ)の狼(おおかみ)』を掲げる。

「いえいえ、お友達ですから~。」

ニッコリと微笑む頼子。
その笑顔に、剣は軽く赤面すると同時に、『かわいい』と思うのであった。

その後、二人は授業にギリギリ間に合ったのだが、その授業の先生に

「何だお前等、二人仲良くギリギリセーフとは、もうカップルになったのか?」

と茶化されたのは全くの蛇足である。
そしてこの言葉により、
剣は土方を初めとする佐学派に授業中睨まれ涙目となり、
頼子は桂を初めとする討学派に好奇の視線にさらされ赤面したのだが、
これもまた全くの蛇足である。

『～第一章～　剣の編入　苦難と安心　《終》』

～第一章～　剣の編入　苦難と安心（後書き）

今回のお話では、オリキャラ『頼子』が登場しました。
原作では、新選組四番隊組長は主人公だったんですけど、
今作の主人公は全くの別物ですのでオリキャラを考えました。
詳しい設定は後に表示します。では皆さん、ごきげんよぉ～。

～第二章～　剣、苦難の逃走・前編

剣は走っていた――――――――――

愛津女学園の廊下を――――――――――

「はぁ、はぁ、はぁ、くっ」

剣は後ろを振り返る。後ろから大勢の女子生徒達が追いかけてくる。

「待って――――――――――剣く――――――――――んっ！！」
「待てぇ――――――――――っ！！」
「ちょっと！！佐学派は引っ込んでなさいっ！！」
「それはこっちの台詞よ討学派っ！！」

女子達が口ゲンカをしながらも自分を追いかけてくる姿を見た剣は、再び前を見て走り出す。

「な、何で……」

剣は一旦言葉を句切り、そして――――

「何でこんな目にいいいいいいいいいいいいっ！！」

剣はそう叫ばずにはいられなかった。

何故剣は女子達に追いかけ廻される羽目になったのか
それは、今から15分前まで遡る。

「ふぅ、終わった。」
午後の授業、掃除、そしてHR（ホームルーム）も終わった放課後、剣は安息の時を浸っていた。

「さてと、そろそろ寮に行って部屋の確認しないと……」
今日から住まう事になっている寮の確認へ向かおうとする剣だが、その剣に近づく影があった。

「……（じ～）」
「ふぇ？」

剣は、背後から妙な視線を感じ後ろを振り向く。
そこには、一人のひどく小柄で奇妙な顔のついた帽子を被り浅葱色の羽織、すなわち真選組の羽織をを着た女子生徒がいた。

「……（じ～）」

だが、その生徒は剣がこちらを向いても眉一つ動かさずただ無言のまま、こちらをじーと見ているだけだった。

「……え……えっと……何か？」

無言の空気に堪えられなくなった剣が問う出が、彼女は直も無言の

まま。

「……（キラーン）」

「（ふぇ？）……っ！？」

彼女の視線が一瞬、本の一瞬だけ妙な殺気になった気がした剣は咄嗟に後退しながらジャンプする、同時に彼女の鞘から刀が抜刀され剣に襲い掛かる。

「（くっ仕方ない！！）」

その迅速の『横なぎ払い』を咄嗟の判断でかわせないと考えた剣は、懐から多角形型の武器――――手裏剣を三つ取り出し、空中バク転をしながら彼女に向かって投げ打つ。

「っ！！」

予想外の攻撃に対し、女子生徒はすぐ様攻撃を止め刀で手裏剣を防ぐ。

それを見た剣は、空中バク転をしながら床に着地。

「（よし、思った通り。）」

剣は彼女の刀を振る速さを見て『彼女なら手裏剣をかわせる』と読んでいた。

剣は端から刀の軌道を逸らすために手裏剣を投げ打ったのだ。

元々手裏剣は別名を『削闘剣』と呼ばれ、地味に痛みつけ相手の戦闘力を削ったり、

相手の注意を逸らしたりするのに用いる物なのだ。

剣が刀の軌道を逸らすために手裏剣を使ったのは必然と言える。
剣は床から立ち上がり先程の女子生徒を見据える。

「……お前、やるな。」
「あ、どうも。」

彼女の賛辞に素直に軽くお辞儀をする剣。
正直な所、女子生徒は驚いていた。自分の刀をかわしただけでなくまさか空中で反撃してくるとは思っても見なかったのだ。
いや彼女だけではない。彼女に加勢しようとした土方率いる佐学派、剣を助けようとした桂率いる討学派の生徒達も剣の反撃に驚いていた。

「……すご……」
「えーと……映画の撮影……これ？」

気まずい空気が流れる中、剣が口を開く。

「あ～、あのぉ、何でいきなり襲ってきたんですか？」

剣はなぜいきなり襲ってきたのかを女子生徒に問いだす。
だが、当の本人は相変わらずの無言。

「……」
「あ、あのぉ～もしもし？聞こえてますか？」
「……説明すんの、めんどい。」

彼女のボソッとした言葉にズルッとズッコケる剣。
どうやら彼女は話とか会話をする気がゼロのようだ。

「あ、あのねぇ……」

剣がたらりと汗を流す中、女子生徒は刀を平行に構える。

「お、おいおい。」

その行動に剣の汗が増量する。いや、それだけでは無い。
周りには、先程まで唖然としていた討・佐両派の生徒達が
刀を抜刀し剣と女子生徒を取り囲むように陣を組んでいたのだ。

「え、え～と、皆さん何をなさっていらっしゃるので？」

余りの突然の事態にやや混乱したのか、剣は妙な言葉使いをしながら問いかける。

「もちろん、剣様を佐学派から守るための陣形ですわ。」

剣の質問に対して和やかに答える桂。それに対し、土方が口を開く。

「ふん、その男が貴様らの派閥に入り士気が上がるのは目に見えてるからな。
斉藤（さいとう）に見張らせていたが、そっちがその気なら力付くでやるまでだ。」

どうやら先程の女子生徒は“斉藤（さいとう）”と言うらしく、剣が討学派に
加入しないように見張っていたらしい。

「ま、そういうわけだ。何も言わずに捕まれ。」

「ふぇ、いや、ちょっと待って……」

剣の弁護も空しく、斉藤は刀の剣先を剣に向ける。

「真選組三番隊組長(しんせんぐみさんばんたいくみちょう)“斉藤(さいとう)　初音(はつね)”、お命ちょーだい。」

「すいません、お断りします。」

「「「いや、わざわざ言わなくていいから。」」」

剣の律儀な回答に教室の全生徒がツッコミを入れる。

「えぇいっ!!構わん!!突っ込めぇ!!あの男を捕縛せよ!!抵抗するようなら、構わん!!斬り捨てろ!!」

「ふぇ〃っ!?」

土方の『斬り捨てろ』と言う言葉に汗だくになる剣。
いや、それだけではない。斉藤を筆頭に佐学派の生徒達が剣に迫る。
女性が大の苦手な剣には、まさに地獄の数歩手前状態。汗が増えるわ増えるわで。

「させません!!皆さん行きますよっ!!」

「う〃わぁ。」

さらに佐学派を止める為に桂率いる討学派の生徒達も
剣の近くに前進して来るので、剣の汗の量はさらに増加。

「くっ!!」

剣は教室から逃げ出そうとするが、目の前に斉藤が現れる。

「逃がさん。」

「くっ……」

斉藤は刀を平行に構え、剣に向かって突撃する。

「――――――っ！！」

その突きは早く、とてもではないが避けられない。

「くっ！！仕方ないっ！！」

避け切れないと悟った剣だが、彼は足を思いっきり踏み込んだ瞬間

――――――

「――――――なっ！？」

斉藤は――――――いや、そこにいた女子生徒達は我が目を疑った。

ついさっきまでそこにいた剣が、頭上高く飛び上がったのだ。

そしてそのまま天井を足台にし、剣は一気に教室の扉を目指して跳ぶ。

その素早い行動に女子生徒達全員は唖然としていた。否、全員ではなかった。

剣の行動に唯一素早く、且つ冷静に対処しようとする者がいた。土方である。

「逃がさん！！」

土方は剣が向かった扉へ誰よりも早く迫る。扉の前で剣を捕まえるつもりの様だ。

「まずいっ！！」

土方の行動に剣は現在の危険を察知する。
今の剣は空中を滑空しているような状態。止まることはできない。
このままでは、土方の刀の餌食になるのは必然である。

「貰ったぁっ！！」
「くっ！！止むを得ん！！」

土方の刀が剣に迫る瞬間、剣は懐から数本の棒手裏剣を取り出し土方に向かって投げ打つ。

「はっ！！」

棒手裏剣が土方に襲い掛かるが、
一度斉藤の時に見ていた土方は驚きもせず刀で手裏剣を薙ぎ払う。

「ふんっ！！小賢しいっ！！」

手裏剣を薙ぎ払っていく土方、だが――

「はっ！！――――――――っ！？」

土方は気づいた、棒手裏剣と共に白い野球ボールのような物が投げ

られていた事に。

だが、気づくのが遅すぎた。

ボールが土方の刀に当たった瞬間――――――――

教室内は爆音と煙で覆われた。

剣は、手裏剣を投げ打つ際に
白い野球ボールのような物――――――――煙玉を紛れ込ませていたのだ。
これにより、教室内は煙の海。教室内は混乱した。

「ゲホッ!!ゲホッ!!ゲホッ!!何だこれはっ!?煙幕か!?」
「ゴホッ!!ゴホッ!!ゴホッ!!窓を、窓を開けなさい!!」

桂の言葉に、女子生徒達が扉と窓を開け煙を逃がす。

「ケホッ!!ケホッ!!……ようやく煙が……」

煙がなくなり、教室内が落ち着きが戻る。だが、そこに剣の姿はなかった。

「っ!!剣(あいつ)はっ!?」

真っ先に気づいたのは土方だった。教室内を見渡すが、どこにも剣

の姿はない。

「……逃げられた。」

「くそっ！！」

剣を気がしたことに悔しさを隠せない土方。

「剣様、一体どこへ……」

「それにしても、まさか煙玉とはね。」

「手裏剣といい、煙玉といい、風上君てまるで、」

佐学派の生徒は一旦言葉を句切り、そして――――――

「まるで“忍者（にんじゃ）”みたい。」

「忍者……か……確かにな」

土方が、いやここにいる全員がうんうんと頷く。いや、全員ではなかった。

薄青色のツインテールをした一人の討学派生徒が何やら『う～ん』と唸っていた。

「あら？どうかしましたの“古高（ふるたか）”さん。」

「え？」

桂に古高（ふるたか）と呼ばれた生徒は、やや驚きながら桂に顔を向ける。

「あ、はい、私風上君を前にどこかで見たことあるような気がして。」
「え!?」

古高の言葉に桂、いや教室中の視線が集まる。

「ん～、さっきの『忍者』って言葉を聞いた時に、
ふっと頭に浮かんできた気が……」

古高は『う～ん、う～ん』と頭を抱え思い出そうとする。

「う～ん……風上……剣……忍者……
……
忍(しのび)……忍(にん)……」
「……（ニヤッ）」

古高が必死で思い出そうとしている所に、
先程『忍者』と言った佐学派生徒が古高に近づき、ぼそりと呟く。

「……『八忍隊(はちにんたい)』……」
「!!?」

その生徒の言葉に、古高は『はっ!!』となる。

「八忍隊……それよっ!!」
「ふ、古高さん?」
「八忍隊……だと?」

「八忍隊って……あの？」
「それって颯間の八忍隊？」
「……八忍……隊」

古高の『八忍隊』という言葉に、教室内はザワめく。

実は、佐学派・討学派と別れて戦っているのは、颯間男子学園も同じなのだ。

颯間の佐学派には、伝統と治安を重んじ真選組と同じく学園内と杏の町を見回る
遊撃風紀エリート剣客集団――――――『杏都見廻り組（きょうとみまわぐみ）』

片や颯間の討学派には、自由と女を愛し一度暴走したら決して止まらない
颯間の暴走奇抜軍団――――――『危兵隊（きへいたい）』

どちらも、独特の戦闘センスを持ち杏都の人々達に畏敬の念を持たれていたが、
その彼らですら恐れる影の軍団が颯間にいる。

それは、討・佐どちらにも付かない中立の立場でありながら
颯間最強を誇るの忍者傭兵部隊――――『颯間八忍隊（さつまはちにんたい）』

『八人隊』と呼ぶ者もいるように、構成人数は僅か8人。
だが、個々の戦闘能力・密偵能力が高く颯間最強の名を欲しい侭にしている。
全員が忍びの技を得意とし、それぞれが『忍者八門（にんじゃはちもん）』と呼ばれる

八つの術技の一つを得意としている。
その高い能力から颯間では、『八忍隊が加担した組は必ず勝利する』という
言葉が生まれたほどで、そのため討・佐両方に雇われ
八忍隊同士で戦う事も珍しくないなど、血生臭い話が絶えない軍団である。

「私、前に一度だけ八忍隊を見たことがあるの。」

「「「「「「！！」」」」」」

古高の言葉に生徒達は驚愕する。

古高が言うには、今から半年前――――丁度共学化の事で
愛津・颯間が討学派と佐学派に別れ戦い始めていたころ、
颯間を見てみたくなった古高はこっそり杏都の南西区・颯間を訪れる。
そこで古高は、土手の川原で見廻り組に雇われた八忍隊と
『私立未戸学院（しりつみとがくいん）』の不良集団『未戸天狗党（みとてんぐとう）』との戦闘に遭遇。
八忍隊が3人に対し、未戸天狗党の数は３００人。勝てるわけがない、古高はそう思った。
いや、その考えが普通なのだ。３人と３００人、その兵力比は１：１００
普通に考えて勝てるはずがない、天狗党も勝利を信じて疑わなかったであろう。
だが――――

天狗党の誤算は、彼等が普通じゃなかった事だった。
３００人を誇った天狗党は1分も経たぬ内に、僅か3人の男達によって
累々と横たわる屍となっていった。
この状況を古高はただ唖然となって見ていた。
未戸天狗党はただの不良集団ではない。『杏都四大学園』の１つ『私立未戸学院』は
愛津や颯間と同じく帯刀や武器持込を許可された『武闘派学園』で有名なのだ。
未戸天狗党は武闘派の多い未戸学院の中でも
特に武芸の強い者を集め結成された『超武闘派集団』なのだ。
その天狗党の３００人が、僅か3人の男達に敗れてしまったのだ。
これで唖然とならない方が無理であろう。
唖然としていた古高は『はっ！！』となり、その3人に目を向ける。
一人は紫色の長髪を後ろで緩く結んだ美男子。
2人目は少し伸びた黒髪に黒い槍を装備したこれまた美男子。
そして最後の一人は、白銀の長髪を後ろで束ねた、やっぱり美男子。

「か……かっこいい……」

古高は暫くの間放心状態になったという。

その後、正気を取り戻した古高は颯間の名店『寺田屋』で
颯間の生徒達に詳しい店主に先程の事を話すと、気前よく教えてくれたらしい。
店主が言うには、

―紫色の髪をした美男子は、八忍隊一の色男『藤林　魁』―

―黒い槍を装備した美男子は、八忍隊の苦労人『服部　龍牙』―

―そして、白銀の長髪を後ろで束ねた美男子は、
八忍隊の切り込み隊長『風上（かざかみ）　剣（つるぎ）』に間違いないと――――

古高の言葉に教室は沈黙が漂っていた。

「……剣様が……八忍隊の切り込み隊長……」
「……」
「……うっそーん」

だが、生徒達が唖然とする中唯一行動を起こしている生徒が一人。
やっぱりこの人、土方だ。

「何をしているっ！！いくぞっ！！」
「え、えっ！？」
「行くって、どこへ？」

土方のいきなりの使令に戸惑う佐学派生徒達。

「決まっているっ！！あの男を、風上　剣を探し出し捕縛する！！」

土方の言葉に佐学派、いや製と全員が驚く、がそれも一瞬のこと。
佐学派達はついさっきまで、剣を討学派に渡すまいと捕縛しようとしてたのだ。
本来の目的を思い出した佐学派と、それを阻止せんとする討学派。
二つの勢力が動く中、土方はあることを考えていた。

「（奴がもし本当に八忍隊の一員ならまずいっ！！討学派に付けば必ず脅威になる。何としても……殺る！！）」

土方は右手をギュッと握り締める。

「行くぞっ！！」

「行きますよ皆さん！！」

その後、図書室に行こうとしていた剣は土方達に見つかり逃げる羽目になり

さらに剣が八忍隊の１人ということが広まり、

――『彼を加入すれば戦いに勝てる』――

――『奴は後に脅威になる』――

という噂が飛びまくり、気づいた時には色んな意味で全生徒に追い掛け回される羽目となっていた。

「くっ！！何で俺が八忍隊の一員だって事がバレてるんだぁ！？」

叫びに近い声を上げて剣は廊下を走る。

「待てぇ――――――っ！！」

「剣く――――――――んっ！！」

「くっ！！ごめんなさいっ！！」

そう言い剣は懐から煙玉を取り出し、女子生徒達の方に投げる。
煙玉が床に当たった瞬間、爆音と同時に煙幕が廊下を覆う。

「ゲホッ!!ゴホッ!!またぁ!?」
「コホッ!!ケホッ!!何も見えないっ。」

煙幕は暫くして薄れてきたが、そこに剣の姿はなかった。

「いないっ!!」
「くっ!!探すのよっ!!」

一人の生徒の言葉に全員が散り散りに剣を探しに向かった。

「……行ったか……」

生徒達がいなくなった瞬間、壁がペラリとめくれると同時にそこから剣が現れる。

「“摩方流忍法・隠れ身の術”成功。」

忍者の定番の一つ、隠れ身の術で事なきを得た剣は使用した布を懐に仕舞い、再び図書室を目指し歩き出す。

「（図書室に身を隠そう、あそこあんまり人がいないみたいだしな。）」

そう考え、図書室への足を速める剣だったが。

「あ、お前っ!!」

「ふぇっ！？」

後ろからの声に剣は後ろを振り向く。
そこには、赤い長髪を左に束ね十文字槍を持った真選組隊士がいた。

「お前だなっ！！八忍隊の切り込み隊長ってのはっ！！」
「え、えと、まぁ、一様……」

剣の答えを聞くと、女子生徒は十文字槍を構える。

「だったら逃げずにあたしと勝負しろっ！！
颯間最強の忍者軍団の力、あたしに見せてみろっ！！」

そう言い十文字槍をブンブンと振り回し剣に迫る。

「真選組十番隊組長“原田紗乃”、いざ参るっ！！」

原田と名乗った生徒は、十文字槍を剣に向け攻撃してくる。

「くっ！！」

剣はそれを最低限の動きで避ける。

「（すごい……）」

剣は素直にそう思った。
自分の身の丈程もある槍は当然それ相応の重量があるはずなのだ。
だが、原田はそれを全く意に介しないように槍を振るう。

「どうしたっ！！逃げるだけかっ！？」

全く反撃してこない剣にイラ立ったのか、原田の攻撃はさらに早くなる。

「待ってください！！俺は無益な戦いは嫌い……」

「無益だぁっ！？神聖な正々堂々の戦いが無益たぁ、どういう了見だぁっ！！」

剣の弁解をバッサリ無視し槍を振るう原田。

「（駄目だ、この人勇や遊利と同じ“バトルマニア”だ）」

「おい原田！！見つけたかっ！！」

剣が颯間の悪友を思い出していると、騒ぎを聞きつけた土方達が現れる。

その出現に、剣の顔は真っ青になる。

「うわっ！！最悪にまずいっ！！」

「！！（隙ができた！！）もらったぁ――――――――――っ！！」

土方に目をやっている一瞬の隙を突き、十文字槍で剣に横薙ぎを入れようとする原田。

「っ！！」

剣は咄嗟に後退しながら跳びそれを避ける。

同時に攻撃目標を外した十文字槍が窓に直撃、粉々に壊れる。

「あっ」

窓が粉々になった事で、生徒達の間に沈黙が漂う中、原田の口が開く。

「くっ！！やるなっ！！」

「いや、俺何もしてませんよ。」

「うっうるせぇっ！！おりゃぁぁぁ――――――――――っ！！」

又も剣の弁解を無視し、再び槍で横薙ぎを入れようとする原田。

「ふっ！！」

だが剣は、あろう事かジャンプしてその槍の上に乗って見せた。

「んなぁっ！？」

そしてそのまま横薙ぎ払いの力を利用し、先程原田が壊した窓から外へ出てしまったのだ。

「「「「なっ！？」」」」

これにはその場に居合わせた生徒全員が驚いた。なぜなら。

「お、おいっ！！ここ3階だぞっ！？」

そう、実はここ校舎の3階なのだ。普通に考えて3階から落ちたら大ケガ、最悪ショック死だ。

だが剣は違っていた。剣は窓から出た後、まず近くの高い金網に掴まり

そこから一気に飛び降りたのだ。
剣はそのままグランドの方へと逃げていった。
その様子を生徒達は唖然と見ていた　が、やっぱりこの人の反応は早かった。

「（……はっ!!）い、いかん!!追うぞ!!」

土方の言葉に生徒達は『はっ!!』と我に返り、剣を追ってグランドに向かう。
その際、土方は原田に近づき耳元で口を開く。

「原田、あの男どうだった?」
「副長!!……ありゃ全部動き読まれてましたよ。」
「そうか。」

原田の答えを聞いた土方は一人考え出す。

「（相手の動きを読む洞察力、それにあの身体能力。恐らくかなりできる!!）」

この時土方は、自分の手が自然と愛刀を握り、自分の心が高ぶっている事に気づく。

「（……ふっ、男相手にここまで戦ってみたいと思えるとはな。）」

そんな事を考えながら土方は、自分をここまで高ぶらせる男を追いグランドの方へと走っていった。

その様子を、影からこっそりみる者が一人。
先程、剣の事を忍者と呼び、八忍隊と口走った佐学派生徒だ。

「くひひひひ、面白くなってきたぜぇ、クケケケケケ。」

不気味な声で笑う女子生徒。
その姿に先程の女の子らしい表情はなかった。

『～第二章～　剣、苦難の逃走・前編　《終》』

～第二章～　剣、苦難の逃走・前編（後書き）

三話目完成で～す。ここでは、原作で土方の拷問（？）を受けた哀れな討学派生徒・古高を出してみましたが、いかがだったでしょうか？

ようやく三話目が完成しましたが、ここまで来て思うことが一つ。

一部Ｒ－１８・Ｒ－１５なのにエロが殆どねぇ――――――――――っ！！

やべーよ、せめてそろそろパンチラとか胸触っちゃうとかぐらい書かないと。

現在少し焦っております。これを呼んでくださる方々、どうか長ーい目で

見守ってください。ではでは。

～第三章～　剣、苦難の逃走・中編（前書き）

前回までのあらすじ
帯刀の許された武家お嬢様学園・愛津女学園に颯間学園代表として編入した剣。
女性が苦手な彼が実は颯間最強傭兵集団・八忍隊の切り込み隊長と知った女子生徒達に
追いかけられるも、得意の忍術で切り抜けグランドへと逃げる。
そんな状況を傍観する謎の女子生徒の姿が――！？

～第三章～　剣、苦難の逃走・中編

―愛津女学園グランド―

グランドの木の上に一つの影があった。剣である。

「ふぅ、ここならしばらくはバレまい。」

剣が登った木は、葉が生い茂り人が登っているとは気づかれ難い木だ。

ここならバレないと判断した剣は、少しの間息を整える。

「ふぅ、それにしてもこの後どうしよう。」

剣は、今後どう動くかについて頭を働かせた。

「（できれば話し合いで解決したいけど、聞いてくれそうもないしなぁ。）はぁ」

剣が大きくため息をした、その時。

「……クルックー」

「ふぇ？」

剣は自分の案を却下し深くため息をついてると、

上の方からバサバサという音と共に鳩の泣き声がし、上を見上げる。

「・・・・・鳩？」

剣が上を見上げて目に映ったものは、枝に止っている鳩……らしき

鳥だった。
『らしき』と言うのも、たしかに鳩なのは間違いないのだが
この鳩、顔が妙なのだ。目は細く垂れ口は四角く開いているその顔は
まさに漢字の『谷』そのものだった。そんな顔を奇妙と言わず何と
言えよう。

「……クルックー（キラーン）」
「ふぇ？」

一瞬鳩の目が光ったような気がした剣だったが、そう思った瞬間
鳩はグランドの方へと飛んでいった。

「何だったんだろ……んっ！？」

鳩が飛んで行った方を見ていた剣は、
その鳩がグランドにいる真選組隊士達の肩に着地し
こちらを（羽で）指差している事に気づき我が目を疑う。

「まさかあの鳩、偵察方かっ！？」
「あの木の上よっ！！間違いないわっ！！」

今の鳩が佐学派の偵察方だと剣が気づいた時には、すでに佐学派の
生徒達が
剣のいる木の下まで迫っていた。

「ちぃっ！！“禽遁（きんとん）の術（じゅつ）”かっ！！」

“禽遁の術”とは、禽とは鳥のことで鳥を利用する術一切をそう呼
ぶ。
剣はすぐさま自分が今いる木から隣の木へ跳び移る、無論それだけ

では逃げ切れない。
剣は木々の間を跳び続け校舎の裏手にある林に逃げ込む。
「校舎の裏は林になってるのか……ん？」
剣は林をへだてた向こう側に純和風旅館を見つける。
「旅館……いやあれが寮かな？」
剣は寮と思われる建物の前に立ち、それを見上げる。
「ある程度予想はしてたけど、寮も和風なんだなぁ。」
そう剣が思っていたその時――――
「見つけましたよっ！！」
「っ！！」
不意に後ろから声がし、後ろを振り向く剣。後ろには――――
誰もいなかった。
「ふぇ？あれ？ん？」

否、よく見ると3m先に一人の生徒が見える。
真選組の羽織に身を包み、オレンジ色のツインテールをした小柄な生徒がいる。
真選組の羽織を着ているという事は、彼女も剣を捕縛しに来たのだろう
だがその生徒は一向に剣を捕縛しようと近づいてこない。

「（……おかしいな、なぜ迫ってこないんだ？）ん？」

剣は彼女の動きを目を凝らして見た。
体を少し震えながらも、少しずつこちらに近づいている。

「（？どうしたんだろう。風邪かな？）」

剣は震えているのは風邪で本調子がでないから接近してこないのではと考え出し、声を掛けてみる事にした。

「あのぉ、」
「はわっ！？」

剣に声を掛けられた生徒は驚いたのか、先より震えている。
いや震えてるというより緊張していると言った方があっているか。
だが剣は全く気づかない。

「あの、何だか震えてるみたいだけど風邪ですか？大丈夫ですか？」
「はわっ、あ、あのあのその、えっと、」
「？（何だか、本当にヤバそうだな。）」

本当は緊張して声がうまくでないのだが、やっぱり全く気づいてない剣。

「え、えっとえっと、　　あっ」
「あっ」

緊張していた彼女は、うっかり石につまづき転びそうになる。

「危ないっ！！」

剣は猛スピードで彼女に接近し、手で庇う様に支える。
その体勢は『お姫様抱っこ』に近い。

「大丈夫ですか」
「はわっ！？あ、だだだだ大丈夫ですっ！！」

その女子生徒は顔を赤くし何やらうつむいてしまっている。
剣は風邪が悪化したのかと思い、顔を近づける。

「あの、だいじょう……ふぇっ！？」

この時剣はある事に気づく。
自分の右手が妙に柔らかくムミュムミュしたものに触れている事に。

「（ま、まさか……）」

剣が右手に視線を向けると――――――

予想道理、剣の手は彼女の豊富な胸を掴んでいた。

「あ、あわ○＞０＜@▲□¥＆％＄〟＃▽◎％＄っ！！」

混乱した剣は妙な言葉を放ちながら女子生徒から離れ、
顔を真っ赤にしながら地面に土下座する。

「す、すみませんっ！！」

剣は精一杯の気持ちを込めて誤る。
が、誤られている当の本人からは何の言葉もない。

「（……あれ？）」

妙に思った剣が顔を上げると女子生徒は体をクネらしながら
何かをブツブツ言っていた。

「はぁ、男の人に助けられちゃいましたぁ～、これを機に二人の間は急接近して
そして……二人は……はわぁ～。」

「？（熱で、頭がおかしくなっちゃったのかな？）」

剣は恐る恐る彼女に近づき声を掛けてみることにした。

「あの～、もしもし？」

「はわぁ～……はぇっ！？」

剣の声でようやく正気に戻ったのか、驚いた表情で剣を見る。

「え、えっと……私……」

「大丈夫ですか？何か独り言を言ってたみたいだけど。」
「ふぇぇっ！！」

女子生徒は『またやっちゃった』と顔を赤くする。
どうやら今回が初めてではないらしい。

「だ、大丈夫ですよ。今日見たことは誰にも言いませんから。」

剣は必死にフォローしようとする。

「あ、あははははどうも。」
「あ、はい（フォローになった……のかな？）」

剣はますます彼女のことが分からなくなり、頭を抱える。
だが、そんな悠長なヒマは剣にはなかった。

「いたぞぉ！！あそこだ！！」
「っ！！」

剣が後ろを振り向くと土方を初めとした真選組隊士達が迫っていた。

「芹栖（せりす）、何をしているっ！！早くそいつを捕まえんかぁっ！！」
「ふぇっ！？」

どうやらこの女子生徒は“芹栖（せりす）”と言うらしく、土方の命令にビクリと驚く。

「あ、そ　そうでした……」

芹栖はやや申し訳なさそうに剣を見ながら立ち上がり、刀を抜く。

「真選組八番隊組長“藤堂芹栖”申し訳ありませんが、参りますっ！！」
「っ！！」

助けてくれた相手を捕縛することになった芹栖は、申し訳ないと思いつつも
命令には逆らえないため、恩人に刀を向ける。
助けた相手に終われる羽目になった剣は、仕方なく上に跳び木々の間を逃げる。

「くっ！！素早い奴めっ！！」
「ふわぁ～ホントーに忍者みたいですねぇ。」
「感心してる場合かっ！！追うぞっ！！」

土方に叱咤され、剣を追う真選組メンバー達。しかし、戦いを生業とする剣客と
本来戦闘よりも逃げ隠れが得意な忍者とでは脚力に差が出る。
たちまち真選組との差を広げた剣は、木によじ登り窓から学園内へと入る。

「ちっ！！奴は中だっ！！追えぇっ！！」

土方達は下駄箱の方へと向って行った。

―愛津女学園・屋上―

「ふぅ、やれやれ」

土方達の追跡を逃れた剣は屋上で少しの休息を取っていた。

「それにしても参ったなぁ、一体どこへ逃げれば……」

剣は逃げ場所を考え、頭を抱える。
だが、やっぱりそんな悠長なヒマは剣にはなかった。

「見つけたぁっ！！」
「っ！！」

屋上の出入り口から声がし、剣がその方を向く。
そこには、栗色のセミロングの髪を左右に分け
ゆるい三つ編みにした真選組隊士がいた。

「ほうほう、話には聞いてたけど中々の美男子だねぇ。」
「っ！！」

女子生徒は顔を近づけ、まじまじと剣を見る。その為剣の顔は見る
見る赤面する。

「あらら～、顔真っ赤にしちゃってぇ可愛い。」
「あ、あぅ。」

剣はどうすればいいか分からず、顔を赤面するばかり。
そんな剣の反応を見てからかう女子生徒だったが、やがてからかう
のを止める。

「まぁそんなに緊張しなくてもいいわよ、あたしとしても
あんたみたいな美男子に刀を向けるのは嫌だしねぇ、どう少し話で

もしない？」
「ふぇっ？」

彼女の言葉に耳を疑う剣。これまでの女子生徒達は皆、剣の話を聞こうとしなかったが
この女子生徒は剣にとっては始めて話を聞いてくれると言うのだ。
剣にとって、これほど嬉しい事はない。

「よかった～、話を聞いてくれる人がいて。
助かりました、えっと……お名前は？」
「ん～、よくぞ聞いてくれましたっ！！」

剣が問い出すと、女子生徒はやけにテンションを高くなる。

「あたしは“やち”、真選組二番隊組長（しんせんぐみにばんたいくみちょう）“永倉（ながくら）やち”っ！！
学園一の美人にして風流人とはあたしの事だよんっ！！」
「は、はぁ、」

やちと名乗った女子生徒のテンションに剣は着いて行けないようで、
戸惑うように返事をするだけだった。

「あんたの名前は聞いてるは、よろしくね剣。」
「あ、はい、永倉さん。」

剣の返事に、やちは『ちちちっ』と指を振る。

「そんな野暮ったい呼び方やめてよー。“やちさん”でいいよ。
あたしも剣の事呼び捨てだしね。」
「あ、分かりました、やち……さん。」
「ん、よろしい。」

剣の素直な回答にニッコリと微笑んだやちは、『よいしょ』と屋上の椅子に座る。

「んじゃぁ、早速　聞いていい剣。」

「あ、はい。」

取りあえずやちは剣に一番気になっている事を率直に聞くことにした。

「剣って、本当に颯間八忍隊の一人なの?」

「（ストレートに聞いてくるなぁ、）え、えぇそうです。」

剣の回答を聞いたやちは『うむ、』と何やら考え始め、剣に再び問いだす。

「んじゃあさ、何で逃げてんの?あたしは八忍隊ってものを見た事は無いけど
颯間最強を誇る位何だから強いんでしょ?逃げる理由無いでしょ。」

「うっ」

やちの言葉に剣はバツが悪そうな表情をし、赤面しながら目を逸らし小声でボソリと答える。

「……てだから……」

「ん?な〜に?」

剣の回答が聞こえなかったやちは、剣に顔を近づける。
剣はさらに赤面し、視線をさらに逸らす。

「……女性が……苦手だから……」
「へ？」
「女性が苦手なんですよ、俺」
「はい！？」

剣の回答にやちは少々驚く。女子校の女子と言うのは男子は皆女を求めるものと
考える者が多い。やちも『男子とはそういうもの』だと思っていたのだが、
今目の前にいる剣は『女性が苦手』と言ったのだ。
よくよく見れば、顔を真っ赤にし未だに視線を逸らしている。
どうやら嘘ではないらしい。

「嘘……じゃないみたいね、女子が苦手な男子ってあたし始めて見たわ。」
「よく言われます。」

剣の回答にやちは『ふ～ん』とまた考え始め、
しばらくして目を『キラーン』と光らせる。

「っ！？（何か、やな予感……）」
「ふふ～ん、剣って女子が苦手なのよねぇ～？」
「は、はいそうですけど……」

剣の答えを聞いたやちは、獲物を狙う雌獣のような視線を剣に向ける。

「じゃぁ、試していい？」
「ふぇ？」

やちの言葉の意味を察せれず、ポカンとする剣だったが――――――

「ほれぇ」

やちはいきなり自分のスカートをめくり、中のパンツを剣に見せ付けた。

「んが○＞０＜@▲□¥＆%$〟＃▽◎%$っ！？」

当然剣は、顔を赤面し噴火した。そして――――

「かはっ……（バタン）」

倒れた。

「あらら、気絶しちゃったよこの子。」

やちは、顔を真っ赤にし目をグルグル回す剣の表情を覗く。

「しゃーない、このやち姉さんが運んでやりますか。真選組（みんな）がいる所へ。」

やちが剣を運ぶために手を伸ばそうとした、だが――――――

「掛かれぇ――――――っ！！」

「っ！？」

いつの間にかドアの近くに潜んでいた討学派達がやちに襲い掛かる。

「ちっいつのまに！！」
「すまんのぅやちくん、おんしは完全に包囲されてるぜよ。」
やちが驚いていると、討学派達の後ろから妙な土佐弁を話す一人の女子生徒が現れる。
その生徒は茶色いボサボサの髪を後ろで無造作に一つにくくり、八重歯を覗かせた
活発そうな生徒で、刀ではなく二丁の『回転式拳銃（リボルバー）』を装備している。

「坂本（さかもと）、あんた等いつの間に。」
やちに坂本（さかもと）と呼ばれた生徒はニカッと笑いながら答える。
「おんしがそのこ彼と話をしている間にそろりとのぉ。」
「ちぃ、」
やちは即座に刀に手をやり腰を沈める、抜刀術の構えだ。
「させんぜよっ！！」
坂本は二丁のリボルバーをやちに向け撃ちだす。
「くぅっ！！」
やちは放たれた二つの弾丸の内、一つは避ける事に成功するがもう一発は避けきれず当たってしまう。
「きゃっ！！何よこれっ！？べたべたするっ！！」
「あはははは、あち特製の『トリモチ弾』ぜよっ！！」

坂本が放った『トリモチ弾』に動揺するやち。
坂本はその間に一気に片を付けるために、討学派達に指示を出そうとする。

「皆今ぜよ！！一気に畳み掛け……」

『一気に畳み掛けろ』と言おうとした坂本だったが――――

「ふぇ、ふぇくしょんっ！！」
「へ？」

坂本が指示を出そうとした瞬間、一つのくしゃみが屋上に響く。
見てみると、先程まで気絶していた剣がくしゃみと共に起き上がっていたのだ。

「くしゅん、くしゅん、何だこれ！？コショウか！？」
「ありゃりゃ、やちくんが避けた『コショウ弾』が当たってしもうたか、
すまんぜよ。」
「う……ん？」

剣は目の前の状況をすぐには察知できなかった。
やちは自分の羽織についたトリモチを取る事に必死になっており、
自分の周りにはいつの間にか討学派に囲まれている。
当然、気絶していた剣は何故こんな事になっているのかは全く分からないが、
取りあえず剣がこの状況で考える事はただ一つ。

「（お、女の子に囲まれてる……早く逃げたい……

…）」

剣は逃げるために知恵を搾り出し、一つの案を考え出す。

「（やっぱりこれしかないっ！！）はっ！！」

「「「は！？」」」

剣の行動にやちと坂本を含めた討学派メンバーは剣の行動に戸惑いを隠せなかった。

剣は、その脚力で周りの生徒達の上を飛び越え屋上のフェンスの上に乗る。

そしてそのままそこからグランドの方へ飛び降りたのだ。

「んなぁっ！？」

「嘘……」

「また飛び降りちゃった……」

「ん？また？」

一人の討学派生徒の言葉に気づいた坂本が、その生徒に『どういう事ぜよ？』と問いかける。

その生徒曰く、剣は先程も3階の窓から飛び降りたが、近くの高いフェンスを利用し無事地面に着地したらしい。

「てことは、今回も……」

「恐らく無事着地してるかと……」

「ほぅ、」

討学派の言葉に、やちも原田や土方がそんな事を言っていたのを思い出す。

「そうと分かれば、お先にっ！！」

剣を追うために、やちは全速力で階段で下へ向かう。

「あっこら！！抜け駆けいかんぜよっ！！あち達も行くぜよっ！！」

坂本の言葉に討学派メンバー達は、やちを追うように階段を下りていった。

坂本達討学派とやちが屋上を去った後――――――

「ふぅ、行ったか……」

屋上のコンクリート胸壁を登る者の姿があった。

誰であろう、先程飛び降りた剣だった。

「ふぅ、咄嗟に思いついたけど何とかなったみたいだな。」

剣は『ふぅ』と安息の息をこぼす。

実は剣は、飛び降りて屋上の人間から自分の姿が見えなくなった所で、

剣は3階の窓から飛び降りた時のように近くの高いフェンスを利用し校舎の壁に張り付いて彼女達が屋上から去るまで隠れていたのだ。

「さてと、これからどうするか考えないとな……ん？」

剣は、蒼い空を見上げながら自分がこれからすべき事は何かを考えようとしてると、
空から一つの影が降りてくるのを見つける。

「え……あれって……」

剣は、空から降りてくる一つの影から目が離せなかった……。

『～第三章～　剣、苦難の逃走・中編　《終》』

～第三章～　剣、苦難の逃走・中編（後書き）

四話目完成で～す。ようやくＲ－１８らしくパンチラや胸揉まれるというのが書けました。
ネタバレですが、一部ＳＥＸシーンを書こうと思っていますがまだまだ先になりそうです。
ま、気長に書くんでこれを呼んでくださる方々、どうか長ーい目で見守ってください。ではでは。

～第四章～　剣、苦難の逃走・後編（前書き）

前回までのあらすじ
帯刀の許された武家お嬢様学園・愛津女学園に颯間学園代表として編入した剣。
女性が苦手な彼が実は颯間最強傭兵集団・八忍隊の切り込み隊長と知った女子生徒達に
追いかけられるも、得意の忍術で切り抜け屋上で休息をとる。
そんな剣に上空より迫る影が――！？

～第四章～　剣、苦難の逃走・後編

―愛津女学園　校舎屋上―

剣は、蒼く広い空をよりやってくる一つの影を見ていた。

「あ、あれは……！！」

その影は、剣の前で空中一回転し剣の足元に着地する。その正体は、赤い瞳をした普通のものより一回り大きい一羽のカラスだった。

「じ、甚（じん）！！どうしてここに！？」

どうやらカラスの名前は甚と言うらしく、剣には面接があるらしい。そして甚は、剣に答えるかのようにクチバシを開く。

「あぁ？決まってんだろぉ、アニキが心配でやって来たんだよ。」

……『答えるかのように』所ではなく、驚くことにこの甚は喋れるのだ。

「心配してくれるのはうれしいんだけど、お前が来ると色々と不味い。
お前が“化け鴉（ばけガラス）”って事が知られてしまう。」

そう、何を隠そうこの甚は“化け鴉（ばけガラス）”と呼ばれるカラスの妖怪なのだ。
妖怪が学園にいると知られれば混乱は必至である。
だが当の甚は全く意に介しないように言い放つ。

「心配ねーと思うぞ。」
「ふぇ？」

甚の言葉にポカンとなる剣。

「幻八（げんぱち）の旦那が言ってたのよ、この学園には動物（ペット）もいりゃあ俺みたいな妖怪もいるらしいぜ。」
「……マジで？」

剣の問いに『マジだ』と答える甚。

「んで、これからどうするんすかアニキ。」
「ん？うん、取りあえず何とかして寮の部屋に行こうと思う。」

剣の言葉に『んじゃ行きやしょや。』と答えた甚は剣の肩に乗る。剣はそのまま屋上の出入り口から校舎へと入って行った。

「……アニキ……」
「……何だ？」

剣と甚は、相手の名を互いに呼び合う。

「……な～んでこんな事になってんすかね。」
「……なんで……と言われてもなぁ。」

剣と甚の現状況、それはグランドで討・佐両派の生徒達に囲まれて

いる状況だった。

2人は、生徒達に見つからないよう寮へ向かうために
取り合えず下駄箱で靴に履き替えようとしていた所、一人の真選組
隊士に見つかり
グランドに逃げたのだがそこで討学派に遭遇し挟み撃ちを食らう羽
目になったのだ。

「どうしやすか、アニキ。」
「どうするもこうするもなぁ。」

甚の言葉に悩む剣。

「（ここはもう一度煙玉で……）」

剣が懐から煙玉を出そうとした、その時――

「面白いカラス連れてますね。」
「っ！！」

懐から煙玉を出そうとした時、背後から声を掛けられ後ろを振り向
く剣。
そこには、黄色いショートヘアーをし頭の上に黒い子猫を乗せた
小柄な真選組隊士だった。

「！！キミは……」
「こいつ先の……！！」

その隊士を見て二人は驚愕の表情になる。
誰であろうその生徒は先程二人を下駄箱で発見した隊士だったのだ。

その存在に剣と甚は自然と身構えそうになるが、
その少女に戦う気がないのを察し警戒を緩める。
だが、討学派はその生徒を見て後退りする。
その姿を見た剣は『どうしたんだろう』とキョトンとなる。

「沖田……」
「くっまさか沖田が出てくるなんて……」

「「沖田？……！！」」

周りの討学派の発する『沖田』という言葉に二人は『はっ！！』と思い出す。
杏の町でも度々聞く愛津女学園最強剣士“沖田　総詩”の名を

「まさかキミは……“沖田　総詩”？」
「おやや、ボクって有名なんですねぇ～。」

剣の質問に、彼女はにこやかに答える。

「……こんなのが愛津女学園最強かよ。」
「！！こらっ甚！！」

甚の余計な一言に『ピシャリ』と叱り付ける剣。

「すみません、こいつ口が悪いもので。」

剣はすぐさま沖田に謝罪する。

「あははは、気にしてませんよ～。それにボクだって意外だな～て思ってましたし。」

「？」

沖田の言葉の意味を理解できなかった剣は頭上に？マークを浮かべる。
そんな剣に対しニコッと微笑みながら沖田は口を開く。

「えっと、風上先輩でしたよね、
八忍隊って味方同士で戦ったりする血生臭い傭兵集団って聞いてたんですけど、
風上先輩って全然そんな感じがしませんよ。」
「あ、ありがと、そう言ってくれると少し救われる。」

剣は沖田の言葉に顔を少し赤くしながら礼を言う。
が、これに対して甚は――――

「アニキ違うぜ、それは褒められてんじゃなくて武人としてバカにされてんだ。」

甚の言葉に剣は『え？そうなのか？』と言い
視線を沖田に向けるが、沖田は相も変わらず笑顔を崩さない。

「さぁ、どうでしょうねぇ～。ねぇ、“ゲンちゃん”。」
「ニャーン」

沖田はゲンちゃんと呼ぶ頭上の猫を撫でる。

「くす、（面白い人だなぁ）。あの、沖田さん」

剣は沖田に話し掛けると沖田は『何ですか？』と笑顔で答える。

「俺は寮に用意されてる部屋に行きたいんだ、できれば見逃してもらえないかな？」

剣の言葉に沖田は『う～ん』と考える。

「そうして上げてもいいんですけどねぇボク的には。」

「！！じゃぁ……」

沖田の言葉に『じゃぁ』と期待の眼差しを沖田に向けるが
沖田は『唯ですねぇ～』と言い続ける。

「ボクはともかく土方さんが何と言うか……」

「土方？」

聞き覚えのあるその名を剣は記憶の中を必死に模索する。

「たしか……黒いコートを着たポニーテールの……」

「はい～、あの人厳しいですからねぇ～連れて行かないとボクが怒られちゃうんですよ～。」

そう言うと沖田は、笑顔のまま刀を抜き剣に向ける。

「そーいう訳なので風上先輩、何も言わずに捕まってくださいね。」

沖田の行動に先程まで傍観していた他の佐学派達も刀を抜く。

「ダメか……」

「アニキ、逃げやしょうぜ……っ！？」

「！？どうした甚！！」

剣が冷や汗をかいてると甚は何かを感じたかのように動かなくなる。

「……アニキ……何か来やすぜっ！！」

甚が剣に告げた瞬間――――――――

一つの黒い影が遠吠えと共に剣達を目掛けて襲い掛かってきた。

「ワォォォォォォォォォォォォンッ！！」

「何だ犬かっ！？」

吼え声から犬と推測する剣、その目の前に現れたのは確かに犬――――

のようだった。

黒い中型犬のようだが、普通の犬からは感じられぬ並々ならぬオーラを感じる。

「こりゃぁ、妖気……っ！！」

「妖気！？」

甚の言葉に驚愕する剣。

妖気――――それは妖力を持つ者のみが出す力。

妖力を持つのは、一部の人間か妖怪である。つまりこの犬は少なくとも甚と同じく

妖怪の血筋を持つ者という事になる。

その犬の出現に佐学派にも動揺が走る。

「ありゃりゃぁ～、来ちゃいましたか……」

「くっ“信吾（しんご）”……！！」

佐学派達が発した言葉から、この黒い妖犬は“信吾（しんご）”と言うらしい。
信吾は剣を見つけると睨むように見詰める。

「ウゥゥ……（こいつか……）」
「？」

信吾に睨むような視線にキョトンとなる剣。
信吾は確かに睨むような表情をしているが、殺気がまるで無いのだ。
信吾は視線を剣から甚へ代える。

「……バウッ！！（そこの化け鴉！！その男を連れて逃げろっ！！）」
「何？」

信吾は甚にそう言う（？）と、視線を佐学派達に殺気と共に向け、威嚇する。

「ヴヴゥゥゥゥッ（こいや小娘共）！！」
「くっ……」

信吾の威嚇に後退りする佐学派達、そんな中沖田は考え事をしていた。

「う～ん、信吾君がいるって事は……」
「いけぇっ！！信吾に続けぇっ！！」

沖田が考え事をしていると、信吾に続くように討学派達が迫る。

「ありゃりゃ、考えてたら本当に来ちゃいましたよ、彼女。」

そう言った沖田の視線の先にいるのは、討学派生徒達の一人の小柄な生徒だった。
その生徒は、黒いロングヘアーを後ろで二つに結び
斉藤よりも小柄な体格、その体格に似合わない巨大な刀――――――
斬馬刀を背負うった生徒だった。

「バウッ（来たか伊織）。」

その生徒を見て吠える信吾。どうやらこの生徒の名は伊織と言うらしい。
伊織は、剣を見つけると彼を庇うように前に立つ。

「……行け」
「ふぇ？」

いきなりの伊織の言葉に戸惑う剣。

「……お前を逃がせば、“焼きそばパン”４つだ。」
「ふぇ？」

伊織の言葉の意味が理解できず剣はさらに戸惑う。
が、甚は意味を察したらしく『あぁ、』と頷く。

「要するにアニキを逃がせば焼きそばパン４つ貰える訳ね。」

甚の言葉に剣は『ああ、』と納得する中、伊織は甚をまじまじと見ている。

「……そいつ、信吾と同じ妖怪か……。」
「ふぇ？えぇ、そうですよ。」

剣の返事を聞くと、伊織は『そっか』と返事をし刀を抜き沖田に向かい合う。

「ありゃりゃ、伊織ちゃんが相手でボクも本気出さないといけませんねぇ。」

沖田も刀を抜き伊織に対して構える。
同時に討・佐両派が刀を抜き、競り合いを始める。この状況に甚は剣に叫ぶ。

「アニキッ!!今のうちに逃げやしょうぜっ!!」
「ふぇっ!?あ、あぁっ!!」

甚の言葉に、剣はその脚力で混雑する生徒達から抜け出し、校舎裏へと走って行った。

「あ、あれだ。」

剣は校舎裏の林を抜け、純和風旅館――――――もといこの学園の寮を見つける。

「何とか来れたな、甚。」
「ですねアニキ。」

何とか真選組の追跡をかわした剣と甚の二人は、
寮を見つけると玄関を開け中へと入る。

「さて、俺の部屋はどこだろ。」

剣は懐から一枚の紙を取り出す。

「アニキ、何すかその紙？」

「ふぇ？これは担任の先生からもらった地図だよ、この地図によるとこの先に俺の部屋がある。」

「そうですかい……ん？」

剣の肩に止まっていた甚は、不意に肩から降り右の方を向く。

「ふぇ？どうした甚。」

いきなり自分の肩から降りた甚に視線を向ける剣。

「ありゃあ……」

「ふぇ？」

剣は甚が向けている方へ視線を向ける。

その先に、白い子狐のような生き物が１つの扉の隙間から何かを覗いている姿が見える。

「ギュへへへへへ、相変わらずええケツしとるのう局長ハン！！おうおう、チチもまた育ったんやないか？」

その白い生き物は、下品なオヤジのような口調で直も扉の隙間から何かを覗いている。

「？何してんだありゃ？」

「……いや、アニキどう見たってあれは……」

剣の言葉に甚はやや呆れた目で剣を見る。

「（あれはどう見ても覗きだろ……ノアの旦那の件があるっていうのに
アニキは本当にこういう事に疎いというか鈍いというか……）ふぅ、」

「？甚、何故ため息をついているんだ？」

「……いやこっちの事だから……」

甚は剣には言うだけ無駄と判断し『いやこっちの事だから……』とだけ言った。
そんな甚を剣は頭上に？マークを浮かべながら見る。

「まぁそんな事よりアニキ、ありゃどう見ても妖怪っすよかなり低級だけど。」

「そうか、まぁ喋ってるもんなぁあの狐。」

甚と剣の視線の先には白い狐が相変わらず覗きを続けている。

「うほぉーーーっ！！挟まれてぇーーーっ！！あの谷間に挟まれてぇのぉっ！！」

「谷間？何だそりゃ」

白い狐の言葉に首を傾げる剣。

「アニキは知らなくていい事ですよ。」

「？」

「あん？」

甚と剣の会話に気づいた白い狐がこちらにやって来た。

「何やお前ら男やないか。こないな所まで忍び込むとは根性入ったスケベやのぉ。」

「ふぇ？」

白い狐の言葉に首を傾げる剣、そんな剣の変わりに甚が会話に入る。

「スケベはテメーだけだ弱小妖狐（じゃくしょうようこ）。」

「んな、誰が弱小妖狐やねん、誰がっ！！」

甚の『弱小妖狐』と言う言葉がかなり気に入らなかったのか白い狐は怒鳴り声を上げる。

「あんなぁっ！！ワイには“カンリュウサイ”っちゅう立派にして高潔な名前があるんやっ！！」

カンリュウサイと名乗った白い妖狐は、怒りを顕にし牙を剥く。

「はっ！！どんな名前が在ろうが、てめぇが弱小助平妖狐（じゃくしょうすけべようこ）であることに変わりはねぇっ！！」

「化け鴉風情が、調子に乗んじゃねぇっ！！」

甚とカンリュウサイの間合いが徐々に狭まって行く。

このまま行けば喧嘩になると考えた剣は仲裁に入ろうとする。

「ちょ、ちょっと待て二人共、喧嘩は待て……」

「あれ～、誰かそこにいるのぉ？」

「ふぇっ！？」「は？」「おっ！！」

不意にカンリュウサイが覗いていた部屋から声が聞こえ
その扉がガラッと開き中から一人の生徒が出てくる。

「あ、カンリュウサイに……ほえ？君は……」
「いぃっ！？」

その生徒は桃色のロングヘアーに黄色いリボンを着けた生徒で、
キョトンとした表情で剣を見るが、それに対し剣は驚きの声を上げる。
と言うのもその生徒、下着姿なのだ。
豊満なバストに綺麗なヒップを持つその体形はまさに“ボン、キュッ、ボン”
それに加え、下着は綺麗なピンク色。
普通の健全な男子が見たなら、『おぉーっ！！』とか『ラッキーッ！！』とか
思ったりするものだ。飽くまで普通の健全な男子ならの話だ

そして知っての通り、剣（こいつ）は普通ではない。

「あ、あぎ○＞0¥&%$”＃＜@▲□¥&%¥&%$”＃▽◎%$っ！？」

予想通り剣は大噴火、そして――――

「けはっ……（バタン）」

やっぱり予想通り気絶した。

「ほえ？どうしたの？大丈夫？」

女子生徒が駆け寄るが剣はピクリとも動かない。

「……」

「返事がない、ただの屍のようヤ……」

「アホォっ！！まだアニキは死んどらんわぁっ！！」

カンリュウサイの言葉に厳しいツッコミを入れる甚、とそこに――

「何事だっ！！」

「あ、歳ちゃ～ん。」

「おぉ、副長ハン。」

「誰だ？」

寮が騒がしいのでやって来た土方率いる佐学派達がやって来た。

さらに、その騒ぎを聞きつけた討学派達もやって来る。

「なっ、ちょ、近藤さんっ！！何て格好してるんですかっ！！」

土方に近藤と呼ばれた下着姿の生徒は『えへへ～』と苦笑いをする。

「部屋で着替えようと思ったら、外が騒がしくてそれで見てみたらこの子達が。」

近藤が指差す先には、空中をフワフワと浮くカンリュウサイと甚

そして赤面した状態で気絶している剣の姿がある。

「一体これは……」
「なぜ、剣様がお倒れに……」
「あぁ、それはねぇ～」

不思議がる土方・桂を初めとする生徒達に、近藤は自分が知る限りの事を説明する。
部屋で着替えようとしていたら、外が騒がしいので出て見たこと
そして自分の姿を見て剣が噴火し気絶したこと
それを聞き終わると土方は憤怒の表情となる。

「こ、この男、近藤さんのこの姿を見たというのかっ!!
許さんっ!!今すぐたたっ斬ってくれるっ!!」

土方は刀を抜き今にも剣を斬ろうとするが、その手を近藤に止められる。

「まぁまぁ歳ちゃん、この子もワザトじゃないんだから
それに見られたのは私の不注意の性だから～。」

土方は『し、しかし』と反論しようとするが他の真選組組長格達は近藤に賛成する。

「まぁまぁ土方さん、近藤さんがこう言ってるんですしいいじゃないですか。」
「あたしも、局長がいいって言ってんだしいいんじゃないの?
それに剣はかわいいし……」
「……ま、いーんじゃね?」
「副長さん、許してあげてください。」

「あ、あの、私も許してあげてほしいです。局長も許してくれてますし。」
「まぁいいんじゃねぇの？そいつも悪気はねぇみたいだしさ。」
組長格達にもここまで言われた土方は、まだ納得のいかない表情をしていたものの
『分かった』と言い刀を鞘に納める。
と同時にそれを待ってたかのように桂が前に出る。

「では、このままでは剣様が風邪をひいてしまいますから
ここは私達討学派が剣様を部屋までお連れいたしますわ。」
桂の合図に一斉に動く討学派達だが、それを簡単に許す土方では無い。
すぐさま刀に手を掛け前に出る。

「残念だがその男は我ら真選組の捕虜としてこちらが預かる。」
「あら歳緒さん、あなた一体何の権限があってそのような暴挙をなさるのかしら？」
「ふん、その言葉そのままソックリ返してくれる。」

土方と桂の間でバチバチと火花が飛び散る。
討・佐両派の生徒達も刀を抜きまさに一触即発の状態となる。
そんな中、未だ目を覚まさない剣を起こそうと剣を揺さぶる甚。

「アニキッ！！アニキッ！！気が付いてくだせぇアニキッ！！」
「……う……う～ん……ふぇ？」

甚の揺さぶりが利いたのか、剣は目を覚ます。

「気が付いたかアニキっ！！」
「……甚……俺は……たしか……っ！！」
自分が何故気絶したのかを思い出した剣は赤面し動かなくなってしまう。
「ありゃ剣君？大丈夫ぜよ？」
「動かなくなっちゃいましたね。」
剣の状況に気づいた生徒達の視線が剣に向けられ、剣の顔は益々赤面する。
「あれれ～、君大丈夫？ひょっとして私の下着姿でも思い出しちゃった？」
近藤が剣に顔を近づける。ちなみに服はちゃんと――――――
――――――着てなかった、下着姿のまんまだった。
「ふ、ふぇ@▲□¥$#¥&%◎%$っ！？……ふがっ（がくん）」
当然その姿を見た剣はまた赤面し噴火、挙句の果てにやっぱり気絶した。

「あれれ～、また気絶しちゃった～。」
「ちょ、近藤さんっ！！いつまでその格好でいるんですかっ！！早く着替えてくださいっ！！」

近藤の格好に動揺する土方だが、とうの近藤（ほんにん）は『えへへ～』と苦笑いするだけだった。

「だぁ――――――――っ！！アニキしっかりしてくだせぇ――――――っ！！
アー――――――――ニ――――――――キ――――――――っ！！」

剣を心配する甚の声が寮内に響き、それを見た生徒達が剣に視線を向ける。

「しっかし、やちの言った通りだな。」
「本当ですね～、最近の男性は皆こんなに純情何ですかね？」
「そりゃ無いと思うぜよ、剣君が特別なんじゃろぅ。」
「まぁいいんじゃない？剣のそういう所かわいく見えるし。」
「え、ええと、人間色々あるといいますし……」
「あの～、そんな事より早く部屋に運んであげた方が……」
「つん、つんつん」

斉藤に体をつんつんと突かれるが、剣は全く目を覚まさない。
が、この斉藤の行為に怒りを顕にする者がいた。甚である。

「おいこらっアニキの体つんつんすんな、このチビッ！！」
「誰がチビだこらっ」
「はいはい、喧嘩はストップだよ～。」

近藤の仲裁により、取りあえず止まる斉藤と甚。

「とりあえずえ～と……風上君……だっけ？
このままにしちゃ風邪ひいちゃうから、皆でお部屋まで運んであげよ？」

近藤の意見に、討・佐両派の生徒達（土方を除く）は剣を部屋まで運ぶ。
その際に甚が近藤に近づく。

「おい、」
「？な～に、カラスちゃん。」

甚はしばらく近藤を見て、クチバシを開く。

「アニキを部屋まで運ぶ事を提案した礼だ、アニキを気絶させた事に関しては水に流してやるぜ。」

甚の言葉を聞き終えた近藤は一瞬キョトンとしたが、すぐニコッと微笑む。

「ありがと、カラスちゃん。」
「……甚だ。」

近藤の屈託の無い返事に、ぶっきらぼうに返事する甚であった。

『～第四章～　剣、苦難の逃走・

後編　《終》」

～第四章～　剣、苦難の逃走・後編（後書き）

五話目完成で～す。いや～、何とか書けました。これでようやく、原作のキャラ
全員が揃いましたが約二名、“カンリュウサイ”と“信吾”この２名に関して何ですが
まずカンリュウサイ。
カンリュウサイは原作ではスケベロボットだったんですが、伝統を重んじる愛津
佐学派にロボはないんじゃないかと思い、急遽スケベ妖怪に変更いたしました。
また信吾は、原作では討学派は真選組（原作では新選組）と違い人間以外のキャラ
がいないので彼を考えました。
ちなみに、カンリュウサイをロボにしなかった理由はもう一つあるのですが
それはまた今度にいたしましょう。
ではまた次回に～。

～第五章～　寮内騒動　前編（前書き）

前回までのあらすじ
帯刀の許された武家お嬢様学園・愛津女学園に颯間学園代表として編入した剣。
女性が苦手な彼が実は颯間最強傭兵集団・八忍隊の切り込み隊長と知った女子生徒達に
追いかけられる中、相棒の化け鴉・甚と合流するも寮にて近藤と言う女子生徒の
下着姿を見てしまった剣は気絶してしまうのだった。

～第五章～　寮内騒動　前編

―愛津女学園　学園寮内・一番奥の一室―
ここは、編入生である剣の為に用意された部屋である。
前回の件で気絶した剣はこの部屋にて未だ気絶していた。

「……う……う～ん……」
「あ、アニキ気が付きやしたか！！」

剣はぼんやりと辺りを見回す。修学旅行に来ているかのような小部屋だ。
右隣を見ると、甚が心配そうに赤い瞳をこちらに向けている。

「……よう甚。」
「何が『よう』っすか、もうすぐ午後7時っすよ。」

甚の言葉に『ふぇっ』と目を丸くして驚き時計を見る。
確かに時計の針はもうすぐ午後7時を指そうとしており、
窓の外は赤から黒に変わりつつあった。驚いている剣に、甚は告げる。

「アニキ、さっさと私服に着替えやしょうぜ。
晩飯がもうすぐできるみたいっすから食堂に行ったほうがいいですよ。」
「ふぇ、あ、あぁ分かった。」

甚に言われ、カバンの中から私服を取り出し着替えに入る剣。

「しょ……と、こんな感じかな。」

そう言い剣は鏡の前に立つ。
青のジーンズと黒い半袖のTシャツに白い半袖の上着を着用した剣の姿が鏡に映る。

「さ、行きやしょアニキ。食堂の場所は俺が把握しときやした。」
「あぁ……と、念のために……」

剣は念のために小太刀二刀と手裏剣などの忍具を服に隠し入れる。

「さて、行くか。」

剣の言葉に甚は『へい』と答え剣の肩に乗り、それを確認した剣は部屋の扉を開け寮の廊下に出て、食堂へ向けて歩き出す。

しばらくして食堂の入り口が見えてくる。

「おっあれですぜアニキ。」
「そう……か」

甚は早く食堂に行ってメシにありつきたい思いでいっぱいだがそれに対し剣は食堂から人……もとい女性の気配が大勢する事に足取りが遅くなる。
だが、入らなければメシは食えないし今後ここで暮らしていくためにも
早く慣れる為にも行かなければならない、剣は勇気を振り絞り食堂の入り口を潜る。

そこは、どこかの和風の宴会場のように長いテーブルをいくつも並べ座布団が人数分用意された食堂だった。
食堂に入って来た剣は、当然の如く生徒達の視線の集中砲火を浴びる。

「（う、良くも悪くも視線が……）」
「アニキ、気にしちゃいけやせん。」

甚の励ましに『あ、あぁ』と力無く返事をする剣。
そんな剣に近づく人影が一つ、ピンクのロングヘアーと巨乳を揺らす近藤だ。

「やっほ～、いらっしゃい。」
「いっ！？」

近藤の登場に剣の顔は真っ赤になる。
そりゃそうである、剣は彼女の下着姿をはっきりと見てしまったのだから。
剣のような純情な男が真っ赤になるなという方が無理である。
剣のそんな気持ちを知ってか知らずか、近藤はニッコリ微笑みながら剣に近づく。

「先はごめんね～、もう熱は無い？」
「ふぇっ！？あ、いや、その……」

先程の事をストレートに言われてしまい、ますます赤面する剣。
そんな剣と近藤のやり取りを見る討・佐両派の生徒達。

「ぐぬぬおのれ風上　剣、近藤さんの下着姿を見ただけでも許しがたいというのに

近藤さんにあそこまで近づくとは許しがたき暴挙。
えぇいやはり我慢ならん、今すぐたたっ斬ってくれる!!」

剣が近藤の近くにいるのが余程気に入らないのか、土方は憤怒の表情で
今にも斬り掛からんとしている。それを止めているのは、ニコニコと笑う沖田だ。

「まぁまぁ土方さん、近藤さんが許すって言ってるんですしいいんじゃないんですか?」

沖田の言葉に『ぐっ』と悔しそうな表情をする土方。
そこへ、近藤以外に剣に近づく和服の生徒が一人、坂本だ。

「ささ近藤君、剣君を席まで案内するぜよ。」

坂本の言葉に近藤は『そうだね』と答え、坂本と共に剣の手をそれぞれ握る。
そんな彼女達の行動に、剣は『ふぇ?ふぇ?』とうろたえるばかり。

「さぁ、来るぜよ剣君。」
「私は佐学派代表として、涼(りょう)ちゃんは討学派として席まで案内するね。」

二人の屈託のない笑顔に剣はさらに赤面し、汗を雨のようにかきながらも
二人に連れられ何とか席まで誘導され座布団に座ると同時に、大きくため息をこぼす。

「ふぅ、」

「あの、大丈夫ですか?汗でびっしょりですよ。」

剣が右を向くと、隣に頼子が心配そうな表情でこちらを見ている。
頼子は剣の大量の汗を見て、ポケットからハンカチを取り出し剣に差し出す。
そんな頼子の行動に剣は『ふぇ?』と驚く。

「これで汗を拭いてください。」
「ふぇ、でも……」

頼子の親切にやや戸惑う剣、そんな剣を見兼ねた甚が剣に耳打ちする。

「アニキ、人の親切は受け取っとくもんですぜ。ましてや女からのはな。」
「そ、そういうもんか……分かった。」

甚の言葉に頷き、剣は頼子のハンカチを受け取とり、汗を拭く。

「ありがとうございます、このハンカチは洗濯してお返しします。」

だが、剣の言葉に対し頼子は『いえいえ』と横に首を振る。

「構いません差し上げます。」

頼子のこの言葉はかなり予想してなかった剣は『ふぇっ?で、でも……』と驚くが
甚の『人の親切は受け取っとくもん』と言う言葉を思い出し、
素直にハンカチをポケットに入れる。

「ありがとうございます、頼子さ……っ！？」

頼子にお礼を言おうとした剣だったが、不意に自分の食事に何かが近づくのを見た剣は咄嗟にそれを掴む。剣が掴んだもの、それは――――

原田の右手とその右手にある箸だった。

「……何してるんですか？」

剣の質問に対し、原田は『あ、あはははは』と苦笑いをする。

「いや～風上が先から頼子と話ばかりしてっから、メシ要らねぇのかな～て。」

原田の言葉に『おいおい』と呆れる剣。

「（この人　本当に勇（いさむ）に似てるな……）
そんな理由で食事を取ろうとしないでくださいよ、えっと……原田さん？」

剣の原田さんという言葉に『アハハハ』と笑う原田。

「紗乃（さの）でいいよ、皆そう呼んでるし。」
「（……何だか、気さくな所も勇そっくりだな。）はい、紗乃（さの）さん。」

剣に対してニカッと笑う紗乃の笑顔に、剣は少し心が落ち着き顔が

微笑む。
と同時に、近藤が『よしっ』と剣に接近する。

「それじゃあ～そろそろ、各自の自己紹介しよっか。」

近藤の言葉に『ふぇ？』と間の抜けた返事をしてしまう剣。
そんな剣に優しく声を掛ける生徒が一人、頼子である。

「剣さんに、早くこの学園に慣れてもらうために
まずは自分達の名前を覚えてもらおうと、局長が提案なされたんですよ。」
「え？（俺のために……？）」

剣が視線を近藤に向けるとニッコリと笑顔を向けてくれた。

「それじゃぁ～、まずは紗乃ちゃんから。」

近藤の言葉に原田は『オッケー』と返事し、剣と向き合う。

「そんじゃ改めて、あたしは原田（はらだ）紗乃（さの）”風上と同じ2年だよ。
あたしの指揮する十番隊は『突撃部隊』よーするに大暴れする華のある隊さ！
先も言ったけど、紗乃でいいから。よろしくな、風上。」

原田はニカッと笑いながら剣の肩を『バンバン』と叩く。

「あ、あははは、よろしく（豪快な所も勇そっくりだな）……」
「……」
「……丸っきり勇の旦那の女バージョンだな。」

原田を見て、同じ事を思う剣と甚であった。

「えっと、紗乃さんが十番隊なら次は九番隊かな？」

剣がそう言うと、メイド服を着た斉藤があの妙な顔のついた帽子を持って現れた。

「ん？えっと、斉藤さん……でしたよね。あなたが九番隊ですか？」

だが剣の問いに斉藤は首を横に振り、手に持っている帽子を指差す。

「初音じゃない……この“みきぽん”が『隠密部隊』である九番隊の組長。」

「ふぇ？」

斉藤の言葉に我が耳を疑う剣。

そりゃそうである、いきなり帽子が組長と言われて驚かない方が無理だ。

だが、剣の肩で先程から成り行きを見ていた甚が身を乗り出しみきぽんを見る。

「……こりゃぁ、“付喪神（つくもがみ）”か。」

「！！分かるのか？」

甚の言葉に、斉藤は驚きの声を出す。

付喪神とは日本独自の民間信仰における観念で、長い年月を経て古くなったり

長く生きた道具や自然の物に神や霊魂などが宿った者のことで

“八百万神（やおよろずのかみ）”とも呼ばれる事がある。

「てことはこの帽子……みきぽんは結構長生きしてると？」

剣の言葉にみきぽんは顔を横に振った……ように見えた。

「……みきぽんは、付喪神の中では若い方……３０歳。」

「そっか……まぁ取りあえずよろしくな、みきぽん。」

剣の言葉にみきぽんはニコッと笑って答えた……ように見えた。

「んで、順番からして次は八番隊か？」

甚の言葉に、『あ、わたしです。』と返事したのは芹栖だった。

「私“藤堂（とうどう）　芹栖（せりす）”と申します、１年生です。
『魁部隊（さきがけぶたい）』と呼ばれる八番隊を指揮しています。」

「魁部隊？」

聞き慣れない名前に、首を傾げる剣。それに対し芹栖は丁寧に教えてくれた。

魁部隊とは、戦いの際には先陣を切って飛び出していく部隊だとの事。

ちなみに、その芹栖の答えに対して甚が『ようは、鉄砲玉部隊ってわけか。』と言い

土方に睨まれたのは全くの蛇足である。

また、その際頼子が『芹栖さんは、いつでも勇猛果敢に敵に突っ込

んで行くから
“魁先生（さきがけせんせい）”の仇名を持ってるんですよ。』と教えてくれたのも全くの蛇足である。

「至らないところも度々あると思いますが、どうぞよろしくお願いします。」

そう言い芹栖はペコリと頭を下げる。

「こちらこそよろしく、藤堂さん。」

芹栖に対して頭を下げる剣。だが、紹介が終わったにも関わらず芹栖は動こうとせず、もじもじしながら何かを言おうとしている。

「あ、あの、できればその……名前で呼んでもらえたらなぁと……」

「ふぇ？」

芹栖の言葉に首を傾げる剣だったが、すぐにニッコリと微笑む。

「はい、芹栖さん。」

「！！はうっ！！」

希望通り名前で呼んだ剣だったが、当の芹栖はいきなり顔を赤くして去ってしまった。

「ふぇ？あ、あれ？」

突然去ってしまった芹栖に唖然となる剣、その隣で甚はため息をついた。

「ふぅ（また1人、アニキの笑顔にノックアウトされた女が増えたぜ。）」

そう、剣のスマイルにノックアウトされたのは芹栖が初めてではない。
今までに幾人もの美女達が剣のスマイル一つの為に目をハートにして来たのだ。
最も、剣は全く気づいていないのだが。

「どうしたんだろ？」
「……芹栖は時々あーなる。」

剣の疑問に答えたのは斉藤だった。

「……見た所、アニキと同じく赤面したりしやすいタイプかありゃ。」

甚の言葉に『そーゆーことだ』と答える斉藤。だが、剣はいまいち話が見えていない。

「？？？どういうことだ？」
「ま、アニキもいずれ知る時が来るさ。」

甚の言葉に、『ふぇ？』と首を傾げる剣であった。

「……さて、次は七番隊だな。谷さん。」

不意に土方は、指笛を吹く。と同時に、天井からバサバサバサとい

う音がする。

「ふぇ？あれは……っ！！」

天井の音の正体、それは一羽の鳩の羽ばたきだった。
谷さんと呼ばれたこの鳩、グランドの木に隠れてた剣を見つけた
漢字の『谷』のような顔をしたあの鳩だった。

「キモイ顔だなぁ～おい。」
「！！お前はまたっ！！」

剣に注意のチョップを食らい『いてっ！！』とうずくまる甚。

「すいません……えっと、谷さん？」
「クルックー（気にすんなボウズ）。」

剣の謝罪に、谷さんはニヒルに笑い許してくれた。
ちなみに、谷さんの言葉はテレパシーのように分かる……らしい。

「そういえば、谷さんの七番隊は何ていう部隊なんですか？」
「クルックー（『伝令部隊』文字通り伝令をする部隊さ。）」

剣の質問に対して谷さんは気軽に答え、『よろしくな』と言い飛び
去って行った。

「それじゃぁ、次は六番隊ですよね？」
「はいは～い、おいで～ゲンちゃん。」

剣の質問に答えた沖田は黒猫・ゲンちゃんを呼び、ゲンちゃんは沖

田の頭の上に乗る。

「鳩の次はネコか。」

「はい～、ゲンちゃんは六番隊である『猫まっしぐら部隊』の組長さんです。

ゲンちゃん、ご挨拶。」

沖田の言葉に『ニャー』と鳴くゲンちゃん。

「猫まっしぐら部隊って？」

「真選組内の大のネコ好き隊士達で構成された部隊ですよ～。」

剣の質問にのほほ～んと答える沖田。

「……強いんすかね？」

「分からんぞ、勇の例があるしな。」

剣と甚は正直その部隊が強いのか疑問に思ったが、

颯間のある男を思い出し無理やり納得した。

「取りあえず、よろしくねゲンちゃん。」

剣の微笑みに、『ニャーン』と元気よく返事するゲンちゃんであった。

「さて待ちに待ってた、ワイのターン！！」

ゲンちゃんの紹介が終わった瞬間、剣の前に弱小助平妖狐―カンリュウサイが現れる。

「何の様だ弱小助平妖狐。」
「誰が弱小や！！誰が！！」

カンリュウサイの登場に、早くも口論をする甚。
甚とカンリュウサイ、この2人同じ妖怪だが
どうやら反りが合わないらしく初対面から口論が絶えない。

「何だ？あの二人仲が悪りいな。」
「初対面からあんな感じなんです。」

原田の疑問に答える剣。

「……所で、どうしてカンリュウサイがここに……」

剣の言葉に、カンリュウサイは『良くぞ聞いてくれやしたっ！！』と
剣の前にフワフワと飛びながら移動する。

「ワテが最強部隊と噂される五番隊の組長、カンリュウサイ様や！！」
「「！？」」

カンリュウサイの言葉に、一瞬耳を疑う剣と甚。
確かに今まで、ネコに鳩に付喪神と人外の組長は出てきたが
どれも人畜無害そうな面々だった。だが、このカンリュウサイは違う。
確かに外見はかわいく見えるが、その本性は単なるスケベオヤジである事を
剣は甚から聞かされている。
そんな奴が、共学化を良しとせず治安を守ろうとする真選組の組長をしているのを

奇妙と言わず何と言えよう。
そんな二人の疑問に答えたのは、以外にも土方だった。

「……そいつが真選組の組長をしている事に関しては
私としても不本意だが、こいつを監視する理由も兼ねて真選組の組
長をさせている。
最も、隊と言ってもこいつ一人だけだ……理由は分かるな？」

たしかに、カンリュウサイの下に女性隊士をつけたら
そこはセクハラという名の叫喚地獄（きょうかんじごく）となるのは必然である。

「あ因みに、ワテの部隊の名は『助平部た……」

「「皆まで言　（わないで）（うな）。」」

大体を予想していた剣と甚は皆まで言わせなかった。

「……乃亜（のあ）だ、狐になった乃亜がいる。」
「ですね。」

剣と甚は、颯間にいる腐れ縁の男とカンリュウサイを重ね
『ふぅ』と深いため息を付いたのであった。

「えっと……次は四番隊ですよね……あ。」
そう言い、剣は思い出す。図書室で剣が始めて心から
『かわいい』と思った女性頼子のことを。
剣の隣に座っている頼子は、すぐにこちらを向く。

「それじゃぁ改めまして、援護部隊である四番隊の組長を勤めさせて

いただいております“松原（まつばら）　頼子（よりこ）”です。どうぞよろしくお願いします。」

頼子の紹介に、剣は『こちらこそ、図書室ではどうも。』とペコリと頭を下げる。

「ほほぅ（アニキが女に対して殆ど怖がってないとは……この女……）」

今まで、女子という者が苦手だった剣が
苦手意識を殆ど出していないという事に関心を示す甚。

「（……もっとも、アニキは気づいてねぇみたいだがな。）」

甚の目先には普通に頼子と接する剣の姿がある。

「『戦国放浪―風の狼』本当にありがとう。」
「いえいえ、気に入ってもらえて嬉しいです。」

剣の表情は多少緊張はあるが、穏やかな感じだ。

「（ま、この調子で女性苦手（たいしつ）を克服してくれる事を願うか。）」

そう思いながら、仲良さそうに話す剣と頼子を見守る甚であった。

「……次は、初音の番。」

頼子との会話を終え、次に出てきたのは斉藤だった。

「追撃部隊である三番隊組長“斉藤（さいとう）　初音（はつね）”……2年。……好きに呼べば。」

ぼそりと愛想のない表情で自己紹介をする斉藤。

「それじゃあ斉藤さん、よろしく。
……ところでずっと気になってたんですけど。」

剣の言葉に、『何が？』と答える斉藤。

「どうして、メイド服を着てるんですか？」

そう、剣が気になっている事とは斉藤の服だった。
確かに周りには、洋服や和服を着用している人達がいるが斉藤は（何故か）薄紫のメイド服を着用しているのだ。
その理由が分からない剣は、斉藤に尋ねてみることにしたのだ。
その返答は――――――――

「……そこにメイド服があるからさ……」

であった。
その言葉に、『彼女と解り合える日は遠そうだ』と思う剣であった。

「よ～やく、あたしの出番だねぇ。」

斉藤の紹介が終わると同時に、一際目立つ淡紅色の着物を身にまとったやちが現れる。

「防衛部隊である二番隊を指揮する“永倉（ながくら）　やち”３年。風流を愛でる、学園一の通人とはあたしの事だよ。改めてよろしくね剣。」

やちの紹介に、『こちらこそ』と返す剣。

「時に剣？」

不意にやちは、男を魅了するような目付きで剣に接近する。
そんなやちに対し、『何ですか？』と答える剣。

「ん～女ってのは、男に見られて綺麗になるって言うじゃない？」

やちの言葉に、女に対する知識の薄いためか『ふぇ？は、はぁ。』と答える剣。

「それでね、あたしの服装について剣の意見を聞きたいんだけど。どう？このやちさんの服装は？」

そう言いやちは、艶のあるポーズをとって見せる。
と同時に、剣の顔は赤面し視線を逸らそうとするも
服装の意見を言わないといけないため、逸らすに逸らせれない。

「え、えっと、その……き、綺麗……いや、その、あれだ、……つ、艶があるなぁと……」

「……。」

剣の言葉を聞いたやちは不意に顔を逸らし、プルプルと震え出した。

「ふぇ？あ、あの、やちさん大丈――――――」

「さっすが剣！！分かってるうぅ！！」

「ふぇっ！？」

突然やちは剣の頭を引き寄せて、豪快に抱き付いて来た。

「ふぇ@#▽◎%$¥&”▲□っ！？」

剣は、やちの突然の行動に思考が追い付かず、赤面し混乱した。

「『可愛い』とか『綺麗』とかじゃなくて『艶がある』だなんてこの子ったらもう！剣ってば見る目あるぅ！！」

やちは剣を抱きしめる腕の力を強める。

「おいやち。いつまでそいつを抱いてるつもりだ？いい加減に離せ、妊娠するぞ。」

「バーカ、んなんで妊娠するか。」

土方の言葉に小馬鹿にするようなツッコミを入れる甚。

すぐさま土方にギロッと睨まれるも涼しい顔をし、やちの方を向く。

「おい、そこの自称・通人女。」

「ちょ、誰が自称よ誰が！！」

甚の言葉に激怒するやちだが、『んなこたぁどうでもいいんだよ』と軽くあしらわれる。

「いい加減その手を離せ、アニキが死んじまうだろうが！！」

甚の言葉に『え？』と首を傾げるやち。見ると、赤面し白目をむいた剣の姿があった。

「あ、あれ？……そ、そういえば剣って上がり易いんだっけ？」

「分かってんなら早く離せ、このアホッ！！」

「誰がアホよ誰が！！」

甚の言葉に激怒し、口論になる二人。

そこに、仁義も艶も無かった――――――――――

ちなみに、剣はその後大きな氷を頭に乗せた約5分後に意識を取り戻したという。

『～第五章～　寮内騒動　前編　《終》』

～第五章～　寮内騒動　前編（後書き）

六話目完成で～す。今回は、寮内で行なわれた自己紹介をとりあえず真選組二番隊のやちまで書きましたが如何だったでしょうか？

ところで真選組と言えば、原作では『新選組』でしたが今作では『真選組』にしました（銀魂と同じ）。

真選組にした訳は、今作は原作と違い新選組主体ではないからです。なので、徒沙班などのように名前を少し変えようとしまして『真選組』にしました。

真選組の『真』は《まこと》とも読みますから『誠』に合わせた意味も含めています。

真選組と言えば“みきぽん”さすがに帽子をそのまま組長にするのはどうかと思い

付喪神という事にしました。

次回は、自己紹介の続きとなるでしょう。それではまた次回で～。

～第六章～　寮内騒動　中編（前書き）

前回までのあらすじ
帯刀の許された武家お嬢様学園・愛津女学園に颯間学園代表として編入した剣は
女性が苦手な颯間最強傭兵集団・八忍隊の切り込み隊長。
途中相棒の化け鴉・甚と出会い、寮内で何とか落ち着いた剣は皆の自己紹介を
受けるが、やちの突然の行動にまた赤面し気絶するのであった。

～第六章～　寮内騒動　中編

―愛津女学園　学園寮内・食堂―

前回の件で気絶した剣は、何とか目を覚ますが未だにボ～としていた。

「うぅ～ん」

「ごめんね、剣。このやち姉さんとした事がちょっと調子に乗っちゃった。」

剣に素直に謝罪するやちに、剣は『いえいえ』とニッコリ微笑んで見せる。

だが、剣を気絶させた事に未だ腹を立てているのか、甚はやちを睨みっぱなしだった。

「甚、やちさんもワザとやった訳じゃないじゃないと思うから、許してあげよ、な？」

剣はニッコリとしたスマイルで甚を説得するが

『アニキは甘いんすよ』と甚に言い返されてしまう。

「それとアニキ、そのスマイルは禁止っつったでしょ。」

「ふぇ？何で？」

甚の言葉にキョトンとなる剣。それを見た甚は、『はぁぁ』と深いため息と共に頭を抱えた。

「（アニキのスマイルは艶があり過ぎんだよなぁ。お陰で周りは……）」

甚が周りを見渡して見ると、周りの殆どの女子達の目がハート状態になっていた。

「はわぁ？」

「くっはぁ……す、すごくいい……？」

「い、いいわぁ……やっぱああいうのを彼氏にしたい……？」

「……い、いい……あの笑顔だけで、私……イキそう……？」

「あぁ、剣さまぁ……？」

桂を筆頭に討学派の面々は剣のスマイルにメロメロだった。

そしてそれは、討学派だけではなかった。

「うぅ……／／／／／」

「ふ、不覚にも……ドキリとしちゃった……／／／／／」

「はわあぁぁぁ……風上先輩……かっこいいなぁ／／／／／／／／」

「……これが剣の笑顔の力……」

「……ふっ　このやち姉さん、思わずトキめいちゃったわ」

何と佐学派、しかも真選組幹部ですら剣のスマイルに討学派程メロメロではないが、トキめいてしまっている。

この状況に、甚はますます頭を抱えた。

「（……またアニキの犠牲者が増えたか……）はぁ。」

「？どうしたんだ甚、またため息なんかついて。」

甚のため息に、剣は心配そうに甚の顔を覗き込む。

「ま、アニキもいずれ気づくさ。」

甚の言葉に、『ふぇ？』と首を傾げる剣であった。

「ん……それじゃあ改めまして、次はボクの番かな？」

皆が落ち着きを取り戻し始めたのを見て頃合と判断した沖田は、剣に接近する。

「遊撃部隊の任を持つ一番隊組長、１年の“沖田（おきた）　総詩（そうし）”です。総詩、と呼んでくれて結構ですので、よろしくお願いしますねぇ」

沖田の言葉に『こちらこそよろしく、総詩さん』と返す剣。

「ちなみに趣味はゲンちゃんと遊ぶことと、土方さんで遊ぶことです。あの人面白いですよぉ、からかいがいがあって。」

「何だと、私の何処が面白いと言うんだっ！！余計な事言うのはこの口かっ！！」

沖田の言葉に土方は、沖田の口の両端をおもいっ切り引っ張り出す。

沖田は『ああう～』と半泣きのような声を上げる。

これを見た剣は、『止めなくていいんですか？』と隣にいる頼子に尋ねる。

これに対し頼子は、『えぇ、まぁ、いつものことですから』と苦笑いしながら答えてくれた。

「まよーするに、『喧嘩するほど仲がいい』てことっすよアニキ。」

「そういうもんか？」

甚の言葉に、苦笑する剣であった。

「はぁ、はぁ……まったく総詩ときたら……コホン、では次は私だな。」

総詩に対する仕置きが清んだ土方が名乗りを上げる。

「真選組副長“土方（ひじかた）　歳緒（としお）”２年生。
真選組の頂点は局長だが、実際の指揮命令は私が行なっている。」

土方の言葉に『つまり、指令官なんですか？』と質問する剣に『まあな』と満更でもない表情で答える土方。

「えっと、それじゃあ“土方さん”でいいですか？」

「断る」

「「即答　（かよ）っ！？」」

土方の２秒と掛からぬ即答に、思わずツッコミを入れる剣と甚。

「男に名を呼ばれる筋合いは無い。」

土方の取り付く島もない言葉に、タラリと一滴の汗を垂らす剣。

「……な、何でこんなに嫌われてるんだろ？」
「簡単なことヤ」
剣の疑問に答えたのは、以外にもカンリュウサイだった。
「副長ハンはな“鬼の副長”と仇名される厳し――――いお方なんヤ。
そして筋金入りの『男嫌い』なんヤ。」
カンリュウサイの言葉に、剣は『ふぇ！？』と驚くが
甚は『あぁ、なるほど』となぜか妙に納得していた。
「女子校に入る理由が『男嫌いだから』という女は意外といるらしいからな。」
甚の言葉に『そうなのか？』と益々驚く剣。そんな剣に接近する影が一つ、沖田だ。
「まあまあ風上先輩、あんなおっかない『妖怪ラディッシュポニー』のことなんて気にしないでくださいねぇ。」
「ラ、ラディッシュポニー？」
「誰がラディッシュポニーだっ！！訂正しろ総詩っ！！」
沖田の言葉に怒った土方は沖田に迫るが、沖田は剣の後ろに隠れる。
「わーい風上先輩、助けてくださいよぉ。」
沖田のいきなりの行動に『ふぇっ？ふぇっ！？』と動揺する剣。
そんな剣を無視し、沖田を捕まえようとする土方。

「えぇい、そこをどけ風上っ！！さもなくばたたっ斬るぞっ！！」
「ふぇっ！？ちょ……ちょっと待ってください、その……
副長……さん？」

剣の『副長さん』という言葉に、『むっ』と顔を少し緩める土方。

「えっと……副長さん……もダメです……か？」

剣の言葉に、土方は『うむ』とやや考え再び口を開く。

「……いいだろう、副長と呼ぶのは許してやる。」

土方の言葉に『あ……』と少し緊張がほぐれる剣だったが、
すぐさま土方の表情に殺気が宿る。

「だが、それとこれとは話が別だ。さっさと総詩を渡せ……
え？」

不意に土方の表情が変わり、剣は『ふぇ？』とキョトンとなり後ろを振り向く。
そこには、ニコニコ笑う近藤と近藤の背後から
ひょっこりと顔を出す沖田の姿があった。

「ふぇっ！？こ、近藤先輩っ！？いつの間にっ！？」
「近藤さん、どうしてそこに」

驚く剣と土方の言葉に『えへへ～』と苦笑する近藤。

「うんとねぇ～、先まで寝てたんだけど頼子ちゃんに起こされてねぇ

『二人を止めてください』って頼まれたの。それでテーブルの下を通って来たの。」

「いや～ボクも近藤さんがテーブルの下から出てきた時は驚きましたよ～。」

近藤と沖田は悪気も無さそうにニコやかに笑う。

それに対し剣と土方は、どこからツッコムべきか迷い一筋の汗を垂らした。

「あの近藤さん、よくテーブルの下を通ってこれましたね。」

土方の言葉に『それほどでも～』と微笑む近藤。褒めたわけではないのだが。

「まぁともかく歳ちゃん、喧嘩はそこまでにしようね～。」

近藤の言葉に『いや、しかし』と反論しようとする土方だったが近藤の笑顔には逆らえず、沖田の悪口はうやむやとなった。

「（近藤先輩、副長さん、総詩さん……まるで仲のいい姉妹みたいだな。）」

そんな三人のやり取りを見て、剣は人知れず『クスッ』と笑うのであった。

「それじゃぁ～、最後は私だね。」

土方との話が終わった近藤が、剣の方を向き口を開く。

「真選組局長“近藤（こんどう）　イサミ”です。3年生で～す。

歳ちゃんや皆に支えられて、何とか局長やって行けてま～す。
これからこの学園でよろしくね“ツルくん”。」
「ツ、ツルくん？」

近藤の妙な呼び方に目が点になる剣。そんな剣に対して近藤は
『剣だからツルくん、ダメ？』と聞いてくる。
それに対し甚がため息をつき剣に向き直る。

「アニキ、正直に言ってやれ。ネーミングセンス最悪だって。」
「ふぇ？いや、そこまで嫌な訳じゃ……唯あんまりそういう
呼び方されたこと無かったから……」

剣の言葉に『そりゃそうだろ』とツッコむ甚。
また、周りに耳を澄ませば『局長ネーミングセンス微妙だからなぁ』
という
声も聞こえるが、当の近藤は自分がつけたネーミングが剣に気に入
られた
と思い込みかなり嬉しそうだ。

「えへへ～、それじゃぁ改めてよろしくねツルくん。」
「あ、はい、こちらこそよろしくお願いします。」

近藤と剣はお互いにニッコリと微笑みながら頭を下げたのであった。
「これで、全員の自己紹介が終わりましたね。」
そう言い剣は、自己紹介の終えた皆を見回す。だが、剣はある事を
忘れていた。

自己紹介を終えたのは真選組組長格の者達だけということに――
――

「ちくっと待っっとうせ。おんしらだけ自己紹介するのはどーかと思うぜよ。
あち達にもさせてもらおうかのぅ。」
「ふぇ？（土佐弁？）」

奇妙な土佐弁が背後から聞こえた剣は、後ろを振り向く。
そこには坂本、桂、伊織、信吾の討学派の代表メンバー達がいた。
彼女達の存在に気づいた土方が真っ先に立ち上がる。

「坂本……貴様ら我々真選組に何の用だ？放課後の続きでもしようというのか？」

土方の接近に他の討学派の生徒達が立ち上がり、
それを受けて佐学派の生徒達が一斉に立ち上がる。

「（い、いきなり一触即発の状況に……）」

この状況に剣は冷や汗をかくばかりだが、
それに対し坂本は相も変わらず飄々としている。

「別に真選組に用はないぜよ。あち達は剣君に用があるぜよ。」

そう言い坂本はチラッと剣に視線を送るが、剣は坂本と視線が合った瞬間
赤面してうつむいてしまった。さらに、坂本に続いて桂が口を開く。

「歳緒さん、規律にうるさい貴女がお忘れかしら？
寮内では佐学・討学共に一切の争いは禁じられていますわよ？」
「……」

桂の言葉に沈黙する土方。

「まぁあれじゃきに、あち達は剣君に自己紹介したいだけがやきかまわんじゃろ?なぁイサミ君。」

坂本は土方ではなく近藤に話を振る。
頭の固い土方より、大らか近藤の方が話が分かると考えたのだろう。

「うん、自己紹介ならいいよぉ～。」

案の定、近藤はあっさり承諾する。近藤が了承したのでは仕方が無いと
土方は『ふん』と鼻を鳴らし腰を下ろした。
それを見て、討・佐学両派の生徒達も腰を下ろして食事を続ける。

「（ふぅ、良かった何事もなく収まって。）」

剣はホッと胸を撫で下ろし、討学派の代表メンバー達に視線を向ける。

「（……心さんに、グランドで会った、たしか伊織さんと信吾それに屋上で見た人だ。）あ……」

剣の視線に気づいた坂本達が剣に接近する。

「んと、始めまして……になるのかのぅ。屋上では自己紹介できんかったきに。」

坂本はニカッと笑いながら話し掛けて来た。

「改めて紹介させてもらうぜよ。あちは討学派　徒沙班筆頭の“坂本　涼華”3年生ぜよ。共学化を目指す者としてよろしくのぅ剣君。」

そう言い坂本はニカッと人懐っこい笑顔を浮かべた。

「あ、はい……こちらこそよろしくお願いします。坂本先輩。」

剣も、坂本に対してニッコリとしたスマイルをする。
そのスマイルに坂本の顔が少し赤面する。

「おぉ……何じゃ、何でこんなに先輩って言われるのが嬉しいんじゃ……
た、頼む剣君もう1回言ってくれんかのぅ。」

坂本の言葉に『ふぇ？』とキョトンとなる剣だったが、
すぐにまたニッコリとしたスマイルをする。

「はい、坂本先輩♪」
「お……おぉぉ」

剣のニッコリスマイルと『坂本先輩』と言う言葉に、
坂本は顔を赤面し嬉しそうな声を出す。

「ま……まじで、ドキリとした……ぜよ。」

その後暫くの間、坂本が放心状態だったのは全くの蛇足である。
また、剣のニッコリスマイルにより殆どの女子生徒達の目がハートマークとなったのも全くの蛇足である。

「それでは、次は私が。」

坂本が正気を取り戻し自己紹介を終えたのを確認した
黒いシックなドレスに身を包むんだ桂が剣の前へ出る。

「改めまして剣様、討学派　超秀班筆頭の“桂　心”2年生です。
よろしくお願いしますね、剣様。」

桂はペコリとスカートを持ちながらお辞儀する。
それに対し剣は『こ、こちらこそ、心さん』と慌てて頭を下げる。

「ところで、剣様。」

桂の言葉に『はい？』と返す剣に、桂はすすすっと擦り寄って来た。

「お聞きしましたわよ？剣様、女性が苦手で上がり易いだそうとか
……」

桂の言葉に『ふぇっ！？』と驚く剣。同時に自分が女性が苦手なのを
知っている人物を検索し出す。
甚はまずこんな事をあっさり言うような奴ではない。となると他に
この事を
知っている人物と言えば一人だ。
剣はその人物―やちに視線を向けるとやちは『ごめ～ん』と言わん
ばかりに
両手を合わせていた。

「ふふ、剣様。この　桂　心　ふつつか者ではありますが

剣様の体質を治すため、協力させていただきますわ？」

そう言い桂は剣の腕に擦り寄りだす。
その桂の行動に、剣は『オ、オ手柔ラカニオ願イシマス』とロボットのような口調で答えるのであった。

「うぅ……えっと、それじゃあ次は……」

あれから落ち着きを取り戻した剣は、次の自己紹介相手―伊織に視線を向ける。

「もぐもぐ、むしゃむしゃ……ん？何か用か？」

伊織の言葉に、剣は少しズッコケる。
先程から焼きそばパンを一心不乱に食べていたためか、全く気づいてなかったらしい。
坂本に『おまんの番ぜよ』と言われ、剣の前に進み出る。

「もぐもぐ……ごっくん。
徒沙班の“徒沙勤能党（とさきんのうとう）”筆頭の“岡田（おかだ）　伊織（いおり）”１年。
焼きそばパンくれるならよろしくしてやらんでもない。」

伊織の言葉に『はい、こちらこそ伊織さん』と挨拶する剣。
と同時に、剣と伊織の間に割って入るように信吾がやって来た。

「おぉ、お前の紹介もしとかないとな」

伊織の言葉に『バウッ』と一吠えする信吾。

「……剣、紹介する。伊織の相棒にして徒沙勤能党副隊長の“信吾（しんご）”だ。」
「バウッ（よろしくな小僧。）」
伊織の信吾の紹介に対し『よろしく、グランドではありがと』と礼を言う剣。
それを聞き終えた信吾は、チラッと視線を甚に変えたがすぐに戻した。
その後すぐに、自己紹介が終わったのを確認した坂本が前に出てくる。
「さて、ほいじゃおっかない副長さん睨んでるからあち達はこれで退散するきに。
ま、これからも仲良くしようぜよ、剣君。」
そう言って坂本が笑い、桂が優雅に会釈し、伊織は新たな焼きそばパンを頬張りだし、
信吾が一吠えして四人（三人と一匹）が去ろうとした時だった。
「待って」
いきなり待ったを掛けた人が一人いた、近藤だ。
近藤の待ったに一同はキョトンとなり、坂本が『なんぜよ、イサミ君？』と聞き出す。
「まだ二人……ツル君と甚君の自己紹介が済んでないよ？」
近藤の言葉に『ふぇ？』とキョトンとなる剣と『は？』とポカンとなる甚。
「お、俺達も……ですか？」

剣の言葉に『うん』と笑顔で答える近藤。これに続くかのように他の生徒たちも口々に言い始めた。

「そうですね～ボク達が自己紹介したのに、風上先輩達だけしないのはズルイですよね～。」

「そうだね～。と言う訳で剣、やち姉さんにだけでも教えてくれないかい？」

「……ま、乗り的に言っとけや。」

「えっと、取りあえず軽くでいいのでしてもらえますか？」

「え、えぇと、その、わ、私も先輩の自己紹介聞きたいなぁて……

……

で、でも無理にとはその……」

「あたしとしては、自己紹介ついでに本当に八忍隊なのか聞きてぇな。」

「そ～じゃのう、あちも剣君の自己紹介が聞きたいぜよ。」

「剣様、是非お願いいたしますわ。」

「もぐもぐ、むしゃむしゃ……勝手にすれば。」

「……まぁ、そういう訳だ風上。私としてはどうでもいいが近藤さんの名でもある。さっさと自己紹介をしろ。」

土方の止めの言葉を食らった剣は『は、はぁ』と力なく返事をし姿勢正しく正座する。

「えっと、それじゃあ改めまして。」

剣は一旦言葉をきり、再び口を開いた。

「颯間八忍隊（さつまはちにんたい）・遊撃方（ゆうげきがた）を勤めています、“風上（かざかみ）　剣（つるぎ）”２年生です。」

剣は礼儀正しくハキハキと自己紹介を始めた。

「女性には不慣れで、色々ご迷惑をお掛けするかもしれませんがどうぞよろしくお願いします。」

剣はペコリと頭を下げ、それに対し生徒全員が拍手で迎えてくれた（土方を除く）。

「甚、お前も。」

剣の言葉に『へいへい』とめんどくさそうに甚は前に出る。

「“甚三郎（じんざぶろう）”だ。アニキの相方やってる。まぁ、甚と呼んでくれりゃあそれでいい。ま、ボチボチ宜しくな。」

無愛想に自己紹介を終えた甚。

こうして、本当の意味での全員の自己紹介が終わり皆食事に集中するのであった。

―愛津女学園　学園寮内・剣の部屋―

「ふぅ。」

食事の後、剣は部屋に戻り一息ついていた。

「しっかし、騒がしい連中でしたねアニキ。」

甚は早速先程の皆の事を愚痴り出す。

「アハハハ、でも俺は少し安心したな。」

剣の言葉に『何が？』と返す甚。それに対し剣は少し窓の外を見ながら口を開く。

「似てるからさ、あーゆう所が颯間の皆にさ。」

剣の一言に『あ～』と納得する甚。

剣は、窓を開け南西の方角に視線を向ける。

「ふぅ（……まさか俺が女子校に来ることになるなんて……思いもしなかったな～……）」

「……アニキ、もうホームシックですかい？」

「いや、そういう訳じゃないけど……ん？」

不意に剣は扉に視線を向ける。とほぼ同時に『コンコン』と扉がノックされる音がする。

「誰だろ？」

剣は、扉の取っ手に手を掛け扉を開ける。

そこにいたのは、信吾にまたがってやって来た伊織だった。

「伊織さん、それに信吾も、どうしたの？」

「……剣、ちょっと来い。涼華達がこれからお前の歓迎会をするらしい。

ご馳走いっぱいだ。焼きそばパンもあるぞ。」

伊織の言葉に『ふぇ？』とキョトンとなる剣と

『焼きそばパンって、ご馳走の内に入るのか？』疑問に思う甚。
だが、伊織はそんな事お構いなしにとばかりに剣の腕を掴み引っ張り出す。

「ふぇっ！？ちょ、ちょっと……」

剣はいきなり腕を掴まれたため、顔を赤面させる。
剣と伊織なら、体格差的に剣が逆に引っ張ってもおかしくないのだが伊織は自分よりも巨大な刀を振り回す程の力の持ち主なのだ、それに加えて
剣が女性が苦手ということもあり一方的に引っ張られてしまう。
だが、それを黙って見てない者が一人いる―甚である。

「おいっ！！待てやチビ助……っ！！」

甚は伊織を止めようとするが、信吾がそれを阻める。

「……どけよ」
「バウッ（どかぬよ、ワシも伊織（あいつ）の相棒なんでな）」

甚と信吾は、そのまま膠着状態となる。
その間に伊織は、剣を連れて行こうとしている。
だが、部屋を出た所で丁度近くを通り過ぎようとしていた芹栖と斉藤に遭遇する。

「あっ！伊織さん、風上先輩をどこへ連れて行かれるつもりですか！？」
「こいつは、焼きそばパンの為に連れて行く。その後たぶん、討学派の皆に色々されるんだろう。」

伊織の言葉に剣は『色々？』と頭の上にたくさんの？マークを浮かべる。
とそれとは逆に芹栖は『えぇっ！？』と驚愕の声を上げる。

「い、色々っ！？色々って何ですかっ！何かすごく気になる響きじゃないですかっ！！
まだ１０時前なのにそんな事していいと思ってるんですかっ！？」
「……芹栖、落ち着け。１０時過ぎてもダメだから。」

芹栖の暴走に冷ややかにツッコミを入れる斉藤。
一方剣は、未だに？マークを浮かべる。

「（俺って一体何されるんだろ……？）ん？」

剣が悩んでいると、騒ぎを聞きつけた討・佐両派の生徒たちが集まってきた。
剣を間に置いて、両陣営がにらみ合う。

「ふぇ！？あ、あの……寮内どの争いごとは禁止のはずでは？」
「……これは争いじゃない。ちょっとしたスキンシップ。暴力的な意味で。」
剣の疑問にサラッと答える斉藤。と同時に、伊織が前に出る。
「……焼きそばパンの為だ。皆、行け！！」

「かかれ――――――――っ！！」

「向かい撃てぇ――――――――っ！！」

伊織の指示で一斉に佐学派に襲い掛かる討学派。負けじと佐学派もこれに対抗。

「ふぇぇっ！！やっぱりこうなるのっ！？」

剣が半泣き状態で愕然としていると、『アニキーっ！！』と甚の声が聞こえる。

「甚！？」

「逃げてくだせぇっ！！」

甚の声と共に、一つの黒いボールが投げられる。

「！！そういう事かいっ！！」

剣は咄嗟に、伊織の手を振り切り走り出す。

「あ、待て逃げるな！！お前を連れて行けば焼きそばパン5個なんだぞっ！！」

必死に追いかけようとする伊織だが、同時に甚が投げ込んだボールが破裂した――――――

「キャッ！！何っ！？」

「また煙玉……ケホッケホッ」

「何この紫の煙！！目に沁みるぅ～！！」

「く、くそ……」

そう、甚が投げたのは唯の煙玉ではない。この煙玉の煙には目を短時間の間、沁みらせる効力があるのだ。

それは、例えかなりの剣士である斉藤、芹栖、伊織とて同じだ。

「ケホッケホッ……あのカラスめ……」
「ケホッケホッ、ふぇ～ん、酷いですよ甚さ～ん！！」
「く、くそ、待て！逃げるな焼きそばパン！」

この三人もこの煙には悪戦苦闘だ。そして、人より嗅覚の効く信吾もまた叱り。

「バッックシュンッ！！バウゥ（へくしゅん！！くそ、あの化け鴉が……）」

その後、煙が晴れるまでここにいた生徒全員が暫くの間涙が止まらなかったらしい……

「……ふぅ、これで良かったのかな？」

先程の場から逃げ切った剣と甚は、廊下の途中で少しの休息をとっていた。

「……皆に、悪いことしちゃったな……」

先程の煙玉の事を悔やんでいるのか（実際にやったのは甚だが）剣の表情には後悔の念がある。

「しゃーないっすよアニキ、あの場合は。」

甚は剣の悩みをあっさり否定した。
甚はそう割り切っているが、剣は甚ほど簡単に割り切ることはできない。

「（ま、そーゆー所がアニキらしいけどな）アニキ……げっ！！」
「ふぇっ！？」
いきなり声を荒げた甚に驚く剣。剣は甚の視線の先に目を向けて見る。
そこには、討・佐両派の生徒達が追いかけてくる姿があった。
「ま、まずいっ！！」
「逃げやしょアニキっ！！」
剣と甚は一目散に駆け出す。
「（うぅ、俺に安息の地は無いの～？）」
心の中で、そう思わずにはいられない剣なのであった。
『～第六章～　寮内騒動　中編《終》』

～第六章～　寮内騒動　中編（後書き）

七話目完成で～す。台詞の前に名前を付けづに書くのは始めてだったのですが
読者の皆様、如何だったでしょうか？今後とも『学園☆幕末伝　八忍隊』を
よろしくお願いします。ではまた次回に～。

～第七章～　寮内騒動　後編（前書き）

前回までのあらすじ
帯刀の許された武家お嬢様学園・愛津女学園に颯間学園代表として編入した剣は
女性が苦手な颯間最強傭兵集団・八忍隊の切り込み隊長。
途中相棒の化け鴉・甚と出会い、寮内での自己紹介を終え部屋で休息をとっていたが
討・佐両派の『剣争奪戦』に巻き込まれ逃走するのであった。

～第七章～　寮内騒動　後編

―愛津女学園　学園寮内・廊下―

剣は、討・佐両派の勢力から逃げるため走りまくっていた。

だが、所詮は寮内。すぐに見つかってしまう。

「くっ！！」

「ともかく走りやしょうアニキ！！」

剣と甚は寮内を走りまくった。

忍術の鍛錬で鍛え上げられた剣の脚力と体力は、並みの者では追いつけはしない。

だが、いかんせん逃げれる場所が限られている上に、相手は数が多すぎる。

逃げ切るのはほぼ不可能だ。

「くそっ！！一体どこに逃げればいいんだ！？」

「ちぃ……ん？」

不意に甚は前方にフワフワ浮かぶ白い物体に目を止める。

カンリュウサイだ。

「お、見つけたデ！！」

カンリュウサイも剣と甚に気づき、尻尾を高く上げ出す。

「どけ助平妖怪！！」

「どくわけないやろ！！テメーらを討学派に渡したら、士気が上がってワテらが

不利になるやないか！！それにテメーらを捕縛したら、局長ハンに頭ナデナデしてもらえるんや～、デヘ、デヘヘヘヘヘ。」

カンリュウサイの言葉に『明らかに後者が目的だろ』とツッコむ甚。

「どっちでもエエやろ！！ともかくさっさと捕まれヤ！！食らえ“狐火（きつねび）”！！」

カンリュウサイは問答無用で、口から青白く光る炎を吹き出す。

「！！」「あらよっと！！」

剣と甚はそれをサッと避け、再び走り出す。

「コラ待てヤ！！」

カンリュウサイは火を噴きながら追いかけて来る。

「くっ！！全速力で振りきって……」

「いや待てアニキ。」

全速力で振りきろうとする剣を制した甚は、カンリュウサイに視線を向ける。

「（奴は言わば、狐になった乃亞（ノア）の旦那だ。だとしたら……）」

「くらえヤ！！」

カンリュウサイが最大パワーで狐火を出そうとした瞬間

甚は出る限りの大声を上げた。

「あ――――っ!!近藤が素っ裸で歩いてる――――――っ!!」

「ぬわんやとぉぉぉぉぉぉぉっ!?」

甚の言葉にカンリュウサイは急遽火の噴射をキャンセルし、辺りを見回し始める。

「どこヤどこヤ!!局長ハンの乳はっ!!尻はっ!!」

カンリュウサイは躍起になって局長を探し始める。いるはずが無いのに。

「よっしゃ、思った通りだ。」

「お前よく、そんな嘘を咄嗟に言えるな……」

ガッツをとる甚に剣は苦笑いしながら甚に話しかける。

「な~に、対処法は乃亞の旦那と同じってことですよ。」

甚の言葉に『は、はぁ』と微妙に納得する剣はこのまま走り去って逃げようと考え、足に力を入れたが。

「何をやっとるカンリュウサイっ!!」

不意に後ろから声がし、振り向いてみると憤怒の表情をした土方がいた。

「いやぁ、局長ハンの裸姿が見れるって聞いて……」

「死ね」

有無言わさず土方は刀をカンリュウサイに振り下ろす。

「あんぎゃあぁぁぁぁぁっ！！」

カンリュウサイは絶句し、廊下にゴロンと横たわった。

「ふぇっ!?カンリュウサイが、死んだ!?」

驚く剣に、『大丈夫ですよ』と答える甚。

「あんな弱小でも妖怪だ。妖怪は死なない。
“法力（ほうりき）”や“破魔刀（はまとう）”でも使わない限りはな。」

つまり、妖怪は普通の刀では死なないということだ。精々気絶する程度らしい。

「もっとも、先の攻撃はかなり痛そうだがな。」

「あ、あははは、そうだな……」

甚の言葉に乾いた声で苦笑いをする剣。

とそこに、カンリュウサイを潰した土方が剣を睨みつけて来る。

「え……え～と」

「……アニキ……やっぱここは……」

甚の言葉に『あぁ』と返す剣。

「「逃げるが勝ちだ！！」」

二人は回れ右をし、全速力で逃走。
一瞬呆気に取られた土方だったが、すぐに追いかけ始める。

「待てぇっ！！」
「待てませぇんっ！！」
「待てる訳ねぇだろぉがオニ女っ！！」

剣と甚は必死で廊下を走りまくった。

「お、お願いします副長さん！！見逃してぇっ！！」
「そうはいかん！！貴様を討学派に渡しては、こちらが不利になる！！
我ら真選組の為に死ね！！」

土方の言葉に『横暴だぁーっ！！』と涙目で叫ぶ剣。

「くそっ！！アニキ、これをっ！！」

このままでは逃げ切れないと判断した甚は剣に黒いゴーグルを渡す。

「ふぇ？甚これって……」
「いいから早く！！」

甚に言われ、剣は焦りながらもゴーグルをする。
それを確認した甚は懐から一つの黒いボールを取り出し
土方に向かって力いっぱい投げた。

「また煙玉かっ！！」

一度教室で煙玉を味わっている土方は、『バッ』と身構える。

とほぼ同時に、ボールが土方の腕に当たった瞬間――――――――

――――――廊下は爆音と光で覆われた。

「ぐ、ぐわぁっ!?」

「けっバーカ!!それは『煙玉』じゃなくて『閃光弾（せんこうだん）』だっ!!」

土方の目が眩んだのを見たゴーグルを掛けた甚がニヤリと笑う。

煙玉が爆音で相手を怯ませ煙幕をはるのに対し、

閃光弾は爆音で相手を怯ませるのは同じだが、煙幕ではなく眩い光で一時的に視覚を奪うものだ。しばらく視覚が効かないのを考えるとある意味、煙玉より厄介な代物である。

「アニキ、今のうちに!!」

甚の言葉に、『あ、あぁ』と返す剣は、後ろで目を眩ましている土方に申し訳なさそうな視線を向け、走り去っていった。

「おっ!!アニキ、あそこ!!」

不意に声を上げた甚に『ふぇ?』と返した剣が、甚が指差す方を見ると

1つの扉が見えた。

「しばらくあの中に隠れて、ほとぼりが冷めるのを待ちやしょ。」

甚の案に賛同した剣は、扉を開けた瞬間――――――――

――――剣は、開けた事をものすんごく後悔した。

なぜならそこは、風呂の更衣室だったからだ。
最も幸いに着替えをしている生徒はいない。
ただ、全員服を洗濯しに来たらしく下着などを持った生徒達がいる。
普通の男子なら下着ぐらいで後悔したりはしないはずだ。
むしろ『ラッキー』ぐらい思うだろうが、剣の場合はそうはいかない。
生徒達の洗濯物（主に下着）が目に入った剣はあっという間に赤面した。

「ひ、ひつ▲□¥$#¥&%れ、失礼しましたぁっ！！」

剣は叫びに近い声でそう言い、更衣室から出ようとしたのだがいきなり腕を誰かに掴まれてしまった。
『ふぇっ！？』と驚く剣が振り向くと、桂だった。

「あ、あの、心……さん？」
「ふふふ、剣様。せっかく来てくださったのにいきなり去られてしまっては、私達寂しいですわ。」

そう言い桂は剣の腕を掴む手に力を入れる。
そんな桂の行動に剣が赤面しないわけが無く、剣はあっという間に茹蛸となった。

「うう、」
「あはは、風上くんってば顔赤くしてかっわいぃ～。良かったら私の下着見せてあげよっか？風上くんだけは特別だよ？」
「あ、それじゃ私もー。風上先輩はどんな下着が好みなんですかぁ？かわいい系？それともセクシー系ですかぁ？」

桂と共に洗濯に来ていた討学派生徒達が、剣の腕をとってくる。
当然、剣は益々赤面していく。

「う、うぅぅっ！！（うぅ、こ、ここから早く出たい……）」
「おい女共、アニキを灼熱地獄に落とす気かこら。とっとと離れろ。」

剣の状況を見兼ねた甚が、女子生徒を剣から引き離そうとする。
とそこに、脱衣所から1つの声が上がる。

「それじゃぁ、あたしの下着も見せたげようか？もっとも着物の下に何かをつけるなんて無粋だから、今のあたしは穿いてないけどね。」
「……っ！？」

その声に、剣は完璧に硬直した。

「……ハ、ハイテ無イ……ト？」

剣はギリギリと機械のようにガクガクと首を動かし

声の主―やちに視線を向ける。

「真選組二番隊組長・永倉　やち、参上!!
剣!悪いけどあんたを討学派に渡すわけには
いかないから、覚悟してもらうわよ!!」

やちがビシッとポーズと台詞を決めると、その横にいる原田も前に出る。

「同じく原田　紗乃、参上!!
そういう訳だ風上、覚悟しろよ!!
あたしまだお前とまともに戦ってないんだからな!!」

原田は未だ剣に勝負してもらえないことに不満があるのか腕をポキポキ鳴らしている。
が、それを見たやちがペチンと原田の手を扇子で叩いた。

「いってぇ!?何すんだよやち!!」

原田の文句に、やちは『ふぅ』とため息をつく。

「紗乃あんたねぇ、そうやって手をポキポキ鳴らすなって言ってるでしょ!?少しは女らしくしなさいよ!!」

二人の会話は掛け合い漫才となっていく。
これを機に、狭い更衣室が騒がしくなっていく。

「また邪魔が入りましたわね……。
行きますわよ皆さん、剣様を確保するのですわ!!」

桂の掛け声に討学派が一斉に佐学派に迫る、これを見た佐学派も交戦しだす。
これを見ていた甚は『しめた！！』と考え、剣の肩に乗り思いっきり剣の頭を突きだす。

「起きろアニキっ！！お――――き――――ろ――――っ！！」
「……い、いでででででっ！？」

先程のやちのセリフに硬直していた剣は、甚の突きによってようやく意識を取り戻し、更衣室の状況に？マークを頭に浮かべた。

「ふぇ？甚……これは……一体……」
「いいから逃げやしょうぜ！！」

いまいち状況が飲み込めない剣だったが、甚が服を引っ張るので取りあえずここから出ることにし、出口に向かうがそれを逃すほど桂は甘くなかった。桂はすでに出口の前に陣取っていたのだ。

「うふふ、逃がしませんわよ剣様。」

桂の姿を確認した剣は『ぐっ』と後退りするが、甚の方は全く慌てず剣の懐に潜り込む。

「ふぇ！？お、おい、甚！？」

いきなり潜り込んで来た甚に驚く剣。

「アニキ、これ使うんすよっ！！」

甚は剣の懐から文字のようなものが書かれた一枚の白い紙を取り出す。
その紙を見た剣は『ふぇっ!?』と驚く。
「だけどそれは……」
「逃げねぇと、女共に捕まっちまいますよ。」
甚の言葉に『うっ』と表情を強張らしながら、回りを見る。
前からはこちらに笑顔で迫る桂、後ろからは戦いながら迫るやちと原田。
切羽詰った剣は『仕方ない』と言い、甚から紙を受け取ると同時に、紙が少し輝きだす。
「な!?剣様それは。」
「何!?」
「風上、お前それって……」
それを見た討・佐亮派の生徒達は何事かと驚く。
「皆さん、ごめん!!」
そう言い剣が紙――札を投げ打った瞬間――――――――
――――――更衣室に電撃が走った。
「きゃぁっ!!」

「こ、これって……！！」
「うわぁっ！？」

電撃が生徒達を襲い、身動きをとれなくする。
その隙に、剣と甚は一気に更衣室から出た。

「ぐっ皆さん、ホントすみません！！」
「んなこと言わんでいいんすよ！！早く逃げやしょ！！」

甚に言われ、剣は申し訳ないと思いながらもその場を後にした。

「うぅ、一体どこに行けばいいんだ……」

更衣室から脱出したはよかったのだが、逃げ場所がないため剣は困り果てていた。

「アニキ、いっその事外に逃げるってのはどうですか？」
「ダメだ、俺は任務以外で門限は破らん。」

剣の言葉に、甚は『はぁ』とため息をついた。

「（アニキは変な所で生真面目だからなぁ。）んじゃぁ、どうするんすか？」

剣と甚が再び頭を抱えてると、廊下の向こうから1人の女子生徒がやって来た。頼子だ。

「あ、剣さん。よかった～見つかって。」
頼子の姿を確認した剣は、少し驚いたがすぐに表情を和らげる。
「頼子さん……」
「剣さん、今少しよろしいですか？」
そう言い剣に接近する頼子だが『ちょっと待てや』と二人の間に甚が割り込む。
「どうした甚。」
「アニキ、あんた少しは頼子(このおんな)を疑えよ。他の真選組達と同じようにアニキを捕縛しようとしてるかもしれませんよ。」
甚の言葉に『んなアホな』と呆れるが、
それを聞いていた頼子は少し申し訳なさそうな表情で口を開く。
「あ、あの、剣さん。甚さんが言っていること、実はあながち間違っていないんです。」
頼子の言葉に『ふぇ!?』と驚く剣。驚く剣に頼子は事情を説明する。
頼子が言うには、討学派は剣の歓迎会を開きそのまま剣を
討学派に取り込もうとしているらしく、それを事前に察知した真選組は
剣が討学派に組する事で討学派の士気が上がるのを阻止するために
剣を捕縛するよう土方が指示したらしい。
とここで、頼子の言葉に『ちょっと待てや』と甚が口を挟む。

「その話聞くとよぉ、その指示ってのは殆どその土方の独断みてぇじゃねぇか。」

甚の言葉に剣は『あ、言われてみれば』と気づき
頼子も『えぇ』と申し訳なさそうにコクリと頷き、『でも』と再び口を開く。

「私は局長さんからの指示で剣さんを探しに来ました。」

頼子の言葉に『ふぇ?近藤先輩に?』と剣はキョトンとなった。

頼子が言うには、討学派の歓迎会をたまたま見つけた近藤は
歓迎会の食事に釣れられ、自分も参加するのを条件に剣の捕縛を取りやめさせる
と言ったらしく、たまたまそこにいた頼子に剣を見つけてくるように指示したらしい。
頼子の言葉に『おいおい』と呆れる甚。

「真選組の局長ともあろう者が食いモンのために動くってどうなのよ。」

と呆れまくる甚だったが、剣は『そうかな?』と甚に返す。

「どういう事っすかアニキ。」
「近藤先輩は、俺がこの学園になれて貰うために
皆に自己紹介をするように指示した人だ。
今回の指示にだって、ちゃんとした理由があるのかもしれないよ。」

剣の言葉に『あ、あのね』と剣のあまりの人の良さに呆れる。

「（何をどうやったらここまで人を信用できるんだ、この人は。）

んじゃ

どうするんすかアニキ。」

甚の言葉に剣は『ともかく、行ってみよ』と言い頼子に視線を向ける。

「頼子さん、案内お願いします。」

剣の言葉に『はい、お任せあれ～』と笑顔で答えた頼子は

剣と甚を歓迎会の場所へと案内していくが、その後ろで甚は相変わらず

ため息をついていた。

「（アニキは人を信じやすいからなぁ～。ちったぁ疑ってほしいぜ。

ま、それがアニキのいいとこではあるけど。）しゃーねぇ、俺も行くか。」

そう言い甚は、剣と頼子の後を追って行った。

「おー、ようやく来たがか。遅かったのう剣君。

待ちくたびれてしまったぜよ～。」

剣達が歓迎会の場所―食堂に着いたとき真っ先に迎えてくれたのは

坂本だった。坂本の言葉に、食堂にいた討学派及び近と沖田が拍手

で迎えた。

「やっほ～ツルく～ん。頼子ちゃんもご苦労さま～。」
「風上先輩、やっと来ましたね～。待ちくたびれちゃいましたよ～。」

近藤と沖田の言葉に『あ、すみません』とペコリと頭を下げる剣。
その剣にくすっと微笑む頼子。

「（剣さんって、本当に律儀ですね～。）」
「アニキ、一々謝らんでもいいんすよ。」

甚の言葉に『いや、でも』と言いかける剣だったが、
それよりも早く討学派の生徒達が剣の腕を引っ張る。

「さあさあ風上先輩、こちらに座ってください。
私達、先輩のために腕によりをかけてお料理作ったんですよ♪」

自分達の作った料理を指差す討学派の生徒達だが、
当の剣は腕を握られたことで赤面しそれどころではなかった。

「うぅ……（ま、また手を……）」
「さてと、それじゃあ主役も来た事じゃし、カンパイするぜよ。」

剣が席に着いたのを確認した坂本は、ジュースの入ったグラスを剣に渡し
自分もグラスを持って立ち上がった。

「それでは、剣君の愛津女学園の編入を祝って……カンパーイ！」

「「「カンパーイ！」」」
「か、カンパーイ……」

坂本の声にその場にいた生徒全員が乾杯をし、
剣も遅れて乾杯をしグラスの中のジュースを一気に飲み干す。
とここで、早速食事にありつこうと近藤が動く。

「えへへ～、それじゃぁ早速……いただきまーす♪」

と手を伸ばす近藤だったが、その手を頼子が止める。

「局長さんこういう時、最初は主役の剣さんからですよ。」

頼子の言葉に『えぇ～』と不服そうに顔を膨らます近藤。
それを見ていた甚は『ぷっフグみてぇな顔だ。』と笑い、剣にでこピン食らったのは全くの蛇足である。

「と、とりあえず俺が食わないことには進まないようなので、いただきま～す。」

剣は手近にあった料理を口に運ぶ。

「うん、おいしい。」
「そうじゃろ？ここにある料理は、全て剣君の事を思いながら作ったものやき。
それが美味しくない筈はないぜよ？」

そう言い坂本は、すすすっと剣に擦り寄って来た。
この行動に剣は『ふぇ？』とキョトンとなる。

「剣君、共学化を目指す者同士、
今日から討学派メンバーとして共に頑張ろうぜよ。」

『ニカッ』と愛想の良さそうな笑顔で、坂本は剣に話しかけるが
当の剣は、申し訳なさそうに視線を落とす。
その剣の姿勢に気づいた頼子は『大丈夫ですか?』と心配そうに接近する。

「あぁ、大丈夫。」

剣はそう力なく言い、視線を坂本に向け口を開く。

「坂本先輩、申し訳ありませんが、それはお断りします。」

剣の言葉に『んなっ!?』と驚愕する坂本。いや、坂本だけではない。
周りにいた他の討学派生徒達や近藤・沖田・頼子も同様だ。
全員が剣は討学派に回るだろうと思っていたのだが、剣それを拒否したのだ。
坂本は『な、何でじゃ!?』と問いかける。剣は少し困ったような表情で口を開く。

「俺が、八忍隊の一人なのはご存知ですよね?」

剣の言葉に全員が頷く。

「俺は、この学園でも傭兵……つまりは、中立の立場でいたいんです。」

剣の言葉に『え?』と目を丸くする生徒達。そんな中、近藤が剣の

前に出る。

「理由を聞かせてくれる？」

「……理由は色々ありますが、爺ちゃん……理事長に言われたんです。

『お前を編入させるのは共学化のためではなく、共学化が必要か否かをお前なりに見極めてほしい』と、他にも理由はありますが

今はこれだけにしてもらえませんか？」

剣の理由を聞いていた近藤と坂本は、少し考える姿勢をとった後２人は口を開く。

「分かったわ。」

「了承ぜよ。」

二人の言葉に、討学派生徒たちは驚き沖田も『いいんだすか？』と近藤に尋ねる。

「ん～、ツルちゃんにもそれなりの事情があるみたいだし。」

「それに傭兵っちゅーことは、伊織みたいに雇えればいっしょに戦えるしのぅ。」

近藤と坂本はそれぞれ『ニコッ』『ニカッ』と微笑み剣に視線を向けた。

その視線に対し剣は『ありがとうございます』と深く頭を下げた。

「では、俺は今後も八忍隊の傭兵として……」

「ちょ――――――――――っと待った――――――――――っ！！」

剣が傭兵として改めて挨拶をしようとした時、入り口の方から声が上がる。
声に驚いた面々が入り口に視線を向けると、そこには土方・原田・やち・芹栖・斉藤・桂・伊織といった、先程まで剣の件で
戦ったり追いかけたりしていたメンバーが揃っていた。

「近藤さん、そんな男を傭兵として野放しにしておくなど言語道断!!!
真選組の名の下に即刻捕縛、いや処刑すべきです!!」

来て早々に、土方は剣が傭兵となることに異議を唱える。
この土方の異議に対し、桂は口を挟む。

「歳緒さん、剣様を処刑にするなどと、あなた一体何様のつもりですか!!」

土方と桂の間でバチバチと火花が飛び散る。
その一方、他の到着したメンバーはヤンヤヤンヤと騒いでいた。

「ん?何だ風上、お前傭兵になんのか?んな事しなくてもあたしはいつでもお前と戦ってやるぞ?」
「あ、あんたねぇ何聞いてたの……」

原田の的外れな言葉に呆れるやち。

「え、えぇっ!?か、風上先輩を傭兵として雇う!?じゃ、じゃあこれから毎日、私と先輩が一緒に見廻りをしたりできるって事ですか!?

で、でもそんな、私、心の準備が……」
「……芹栖、落ち着け。誰もそんなこと言ってない。」
芹栖の暴走に冷ややかにツッコミを入れる斉藤。
「もぐもぐ、むしゃむしゃ……」
皆の会話に興味がなく、大量の焼きそばパンを食べている伊織。
「しゅ、収拾がつかない……」
この混乱ともいえる状況に、ため息を漏らす剣なのであった。

その後、食堂内はようやく落ち着きを取り戻した。
最後まで剣が傭兵とするのを反対していた土方も、近藤の笑顔と他の皆の多数決により、沈黙するほか無かった。

「それじゃあ～、ツル君が颯間の時と同じように傭兵課業を行なうのを許可します。皆いいね?」
近藤が周りを見渡し、全員が同意する。とここで、
沖田が『近藤さん、少しいいですか?』と声を上げる。

「ボクとしては、風上先輩が傭兵となるのは構いませんけど、一つ気になることがあるんです。」
そう言い、沖田は剣に視線を向け口を開いた。

「風上先輩って、雇われるほど強いんですか？」

「ふぇ？」

沖田の言葉にキョトンとなる剣だったが、周りの者達は『あぁ、なるほど』と妙に納得していた。

「んたしかに、剣が戦ってる所あたし達は見てないしねぇ。」

「……と言うより、本当に強いの？」

「さ、斉藤さん、ダメですよそんな事言っちゃあ……」

皆は口々に剣が強いのかを言い出す。だがそれは仕方ないことだ。事実、剣はこの学園に来て一度も戦ったことが無いのだから皆が疑うのも仕方ない。

とここで、近藤が『はい、それまで』と皆を止めた後　剣に向かって口を開く。

「ツル君、申し訳ないけど私と勝負してくれない？」

近藤の言葉に『ふぇ！？』と驚く剣。

いや驚いたのは周りの者達も同じだったが、近藤は気にせず話を進める。

「私としてもね、ツル君が傭兵に似合う実力者かどうかを確かめておきたいから。」

近藤の言葉に『は、はぁ』と微妙に納得する剣。

だが、ここでやっぱり声を上げる土方。

「近藤さん、そういう事でしたらこの私がやります！

ついでにこの男に身の程知らずと言う事を教えてやります!!」

土方はニヤッと笑いながら目を光らせる。がさらに原田も声を上げた。

「ちょっと待てよ副長!!あたしだって風上と戦ってみてぇよ!!」

「はいはい、あんたは少し落ち着きなさいよ。」

興奮する原田を宥めたやちは『で、どうするんですか局長』と近藤に視線を向ける。

「う〜ん、歳ちゃんと紗乃ちゃんが戦りたいって言うんなら私は構わないよ〜。ツル君もそれでいい?」

近藤の言葉に『ふぇ!?』と動揺する剣に、甚は『やりやしょうよ』と語りかける。

「アニキ、ここは一回戦ってアニキの実力を教えてやった方が、後々が特ですよ。」

甚の言葉に『そ、そういうもんか?』と返した剣は、近藤に視線を向ける。

「分かりました。」

剣の言葉に、近藤はニコッと微笑む。

その一方で桂や坂本は少し心配そうな顔をしていた。

「いいのか剣君。あちはおんしが弱いとは思わんが、色々と危ないぜよ。」

「そうですわ剣様、やはり傭兵などやらずに我が超秀班に……」

剣は、心配する坂本と桂にニッコリとしたスマイルで『大丈夫です』と返し
近藤に視線を向ける。

「それで、どこでやるんですか？」

「んとね～、この寮には道場があるから、そこに行こっか。」

そう言った近藤以下真選組メンバーと討学派メンバーに連れられ、
剣は道場へ向う。

「（……戦い……か、覚悟はしてたけど女の子と戦(や)ることになっちゃうとはなぁ～。）」

そう思いながらも、道場へと剣は歩いていった。

『～第七章～　寮内騒動　後編　《終》』

～第七章～　寮内騒動　後編（後書き）

八話目完成で～す。いや～自分でも時々思うんですけど妖怪に帯刀と、ホント無茶苦茶ですねぇ～（元ネタがネタだけに）。ま、それでも好きですけどね『学園☆新選組』。

さてさて、次回はいよいよ剣の力が見られる……かもしれない。

では、次話でお会いしましょ～う。

～第八章～　対決！！剣ＶＳ原田（前書き）

前回までのあらすじ
帯刀の許された武家お嬢様学園・愛津女学園に颯間学園代表として編入した剣は
女性が苦手な颯間最強傭兵集団・八忍隊の切り込み隊長。
寮内で『この学園でも傭兵として過ごす』条件として、道場で戦うことになった。

～第八章～　対決！！剣ＶＳ原田

―愛津女学園　学園寮内・道場―

ここに、剣及び真選組・討学派の生徒達が集まっていた。

「それじゃあ～歳ちゃん紗乃ちゃん、二人ともくじを引いて。」

近藤の言葉に『くじ？』と返す土方と原田は、
竹筒に入れられた２本の割り箸に目をやる。

「んとね、頼子ちゃんが割り箸で作ってくれたの。
当たりを引いた方がツル君と対戦できるんだよ～。」

近藤の言葉に『なるほど』と納得した二人は、それぞれの割り箸に手を伸ばす。

「いざっ」
「勝負っ！！」

そう意気込んだ２人が、一斉に割り箸を抜く。当たったのは――――

――――――原田だった。

「よっしゃぁぁぁぁぁぁっ！！」
「ちぃっ」

当たったことに喜びを隠さない原田に対し、やや悔しそうな表情をする土方だったが、すぐに原田に向き会い口を開く。

「原田、戦(や)るからにはあの男を徹底的に潰せ。」

「へ？んなこと言われなくても、全力でやるよ。」

原田はニカッと笑いながら返した。その一方、対戦する剣は軽く準備運動をしていた。

「ふぅ、面倒な事になっちゃったな～。」

「大丈夫っすよアニキ。アニキが本気出せば、あんな奴ら瞬殺っすよ。」

戦う事に悩む剣に、励ましの言葉を送る甚。

そんな甚の言葉に『ありがと』と返す剣。

「それじゃぁ～、そろそろ始めよっか～。」

近藤の言葉に、剣と原田は道場の中心位置に移動する。

それを確認した土方が2人の間に立つ。

「ではこれより、“真選組御前試合(しんせんぐみごぜんじあい)”を行なう!!

ルールは一つ!!どちらかが降参するか、戦闘不能になるかまで戦う事!!

なお、これは実戦を予想としたものだ!!よって、本来試合では禁止されている事も

急所への攻撃以外は認めるものとする!!」

土方の言葉が終わり、原田は十文字槍を構える。

「騒々院流!!“原田紗乃”参る!!」

原田の言葉に剣は改めて、この者が女である以上に
1人の武人なのだという事を再認識し、剣もそれに答える。

「摩方流、“風上剣”。これでお相手します。」

そう言い剣は、懐から小太刀を抜刀し構える。
それを見た原田は『はぁっ?』と首を傾げる。

「お前、それであたしの槍と戦うきかよ!?」

原田の言葉に『はい』と全く意に介しないように返した。
原田がそう言うのも無理は無い。元来、槍は刀よりも攻撃力・守備力・間合い
あらゆる点で勝っているのだ。ましてや原田の持つ十文字槍は
『突けば槍・払えば薙刀・引けば鎌』と称される変幻自在の武器である。
それに対し小太刀は、刃渡りが短いために攻撃力の面では刀に劣るが
軽く小回りが効くので、敵の攻撃を捌く守備力の機能は刀以上と言われてるが
如何せん間合いの差があり過ぎる。
唯でさえ刀では不利な槍に、さらに短い小太刀で挑もうというのだから
これを無謀と言わず何と言えよう。だが、剣の目は真剣だ。

「……へ、だったらその小太刀で、どう戦うのか見せてもらうぜ!!」

原田は改めて十文字槍を構え、剣に向かい合う。

その様子を、周りのギャラリー達は様々な思いで見つめていた。

「さてと、紗乃ちゃん相手にどう出るのかな、ツル君。」

「颯間最強傭兵部隊ですか、どれほど強いんですかね～。」

「紗乃って手加減知らないからなぁ～。剣、死ななきゃいいけど。」

「……みきぽん、どっちに賭ける？」

「あう～神様仏様、剣さんも紗乃さんも怪我がありませんように～。」

「こ、この場合私は、どちらの応援をすればいいのでしょう！？」

「うむ、剣君のお手並み拝見じゃのぅ。」

「剣様……」

「もぐもぐ、むしゃむしゃ。」

「（ふふ、私自らの手でやれないのは残念だが、これで颯間最強など愛津には遠く及ばないことを知らしめれる。）では――――」

土方は2人から少し離れ合図を送った。

「――――始め！！」

「うぉりやゃぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

土方の開始の合図と同時に、原田は十文字槍を横に薙ぎ払う。

そのスピードは速く、周りのギャラリー達の殆どが『こりゃ瞬殺だな』と

原田の圧倒的勝利を確信した。だが、次の瞬間その確信は裏切られる。

原田の槍による横薙ぎが、剣に当たると思われた瞬間――――

「――――――――――なっ！？」

原田は我が目を疑った。薙ぎ払った先にいるはずの剣の姿が一瞬の内に消えたのだ。
と同時に、原田は払った十文字槍に妙な重みを感じる。

「（ま、まさか……）」

ありえない事を思いつつも、原田は払った十文字槍に視線を向ける。
そこには――――

原田の持つ槍の先に乗る剣の姿があった。

「なっ！？」
「（もらった！！）せやぁぁっ！！」

剣はあろう事か原田の十文字槍の上を駆け抜け、原田に斬り掛かる。

「く、くおおぉぉっ！！」

原田は咄嗟に、槍を振り下ろし剣のバランスを崩す。だが剣も咄嗟に槍から飛び降り
床を蹴り一気に原田に接近し、刀を振る。

「ぜやぁっ！！」
「どらぁぁっ！！」

それに対し原田も十文字槍で応戦し、刀を十文字槍で受け止める。

だが――――

「っ！！？」

剣は刀を持ってないもう片方の腕で殴りかかる。

「くそっ！！」

原田は十文字槍を引くと同時に体を下げ、剣の拳をギリギリ避ける。
と同時に
原田が引いた十文字槍の十字刃が後ろから剣に迫るが、剣はそれを跳躍してかわす。
そしてお互いに、武器を構え視線を向き合う。

「……よく俺の拳がかわせましたね。」

「へ、刀と一緒に鉄拳かます戦い方か。あいにく、副長達の使う“天然無心流（てんねんむしんりゅう）”で慣れてるんだよ。」

「なるほど。」

剣と原田は、互いにニッと微笑み合った。

「……な……に……」

土方は……いや、周りのギャラリーの殆どが、現状況を把握しきれず唖然としていた。

「……速さだわ。」

「速さ……ですか？」

近藤の言葉に芹栖がポカンとした表情で返す。

「たしかに、ツル君の小太刀じゃ紗乃ちゃんの槍にはは不利よ。
でも、距離を一気に積めて小太刀の間合いで戦えば、逆に槍のほうが不利になるわ。」

近藤の言う通りである。確かに槍は、極めれば『遠・中・近』全ての距離において
変幻自在に攻撃が可能な武器だ。だが、小太刀のように小回りの効く武器と
『超近距離』で戦われては、長い間合いが仇となり懐に僅かな死角ができ
逆に不利となるのだ。だが、それは口で言うほど簡単なことではない。

「で、でも、原田さんの槍を相手に接近するなんて……そんな事出来るんですか？」

芹栖の言い分は当たっている。前述にも述べた通り十文字槍は、槍の中でも
変幻自在な攻撃が出来る武器だ。ましてや原田のそれは、自分の身の丈程もあるのだ。
それを全く意に介しないように振り回す原田の腕力は尋常ではない。
そんなパワーと
リーチを持つ相手に、急接近するなど普通の者では無理だ。
だが剣には、それを可能にするモノがあった。それが――――――

「それを可能にするのが、風上先輩の“速さ”って訳ですか。」

沖田の言葉に、近藤はコクリと頷く。
そう、剣には原田を上回る“速さ”があったのだ。
『剣を振る速さ』・『身のこなしの速さ』・『相手の動きを読む速さ』
ありとあらゆる速さで死角をつき、小太刀で相手の武器を封じ拳で攻撃するのだ。

「なるほど。それで、どうするんですか土方さん。風上先輩が勝ったら
傭兵として過ごす事を認めることになっちゃいますよ～。」

沖田の言葉に土方は『くっ』と歯軋りをした。

「（まずい、もし紗乃が負けでもしたら、討学派の士気を砕く所か上げてしまう。）」

この時土方は、自分の目論見が外れるかも知れないことに焦っていた。
ここで颯間最強と謳われる集団の一人を真選組が倒してしまえば討学派の士気は下がり、逆に佐学派の士気が上がると考えていたのだ。
だが、土方の予想に反し剣は原田と互角以上の戦いをしている。このままでは、
土方の目論見は破れてしまう。土方は、チラッと横目で討学派達を見る。

「おぉすごいのぅ！！あの紗乃くんを相手にあそこまで戦えるとはのぅ！！」
「風上せんぱ――――――――い！！」

「がんばってくださ――――――――い！！」
「剣様ぁ――――――――！！」
「……っ！！」

討学派達は、愛津最強と称される真選組幹部と互角以上の戦いをしている剣の姿の
虜となり熱狂を上げている。それは、先程まで興味無さげに焼きそばパンを
食べていた伊織も同様だった。

「（……伊織の奴が沖田以外で興味をひく奴が現れるとはな。）」

そう信吾は思いながら、視線を剣に戻していた。
そんな討学派達の反応を見ていた土方は、『ちっ』と舌打ちする。

「（くっ。だがそれ以上にまずいのが……）」

土方は、チラッと今度は佐学派の隊士達を見る。

「あの原田先輩を……」
「意外とやるわね。」
「う～ん、男子って助平な奴ばっかだと思ってたけど、
風上君みたいに強くて優しくてウブな子もいるんだね。」

と士気が下がるような事を言う者もいれば、剣を認める者もいる。
土方にとっては討学派の士気が上がる以上に、
味方から剣を認め離反者が出る事の方が致命的だった。

「（くそっ！！）」

土方は悔しそうに苦悶の表情を浮かべていた。

ギャラリー達が様々な思いを交錯する中、剣と原田の戦いは続いていた。

「どりゃぁぁっ！！」

「ふっ！！」

だが、剣の死角を狙った戦法に原田は悪戦苦闘だった。

原田がいくら果敢に攻めても、剣のスピードの前には全くの無力だった。

「（くそっ！！こうなりゃ距離をとって……）」

「逃がさない！！」

距離をとろうとする原田の動きに即座に反応する剣。間合いをつめ一気に原田に攻撃を仕掛けた。

「たぁっ！！」

「くそっ！！」

剣の小太刀を槍で防ぐ原田。だが、剣は蹴りを咬まして来た。

「ぐっ！！」

原田は何とか腕で防御するが、剣の速く、そして重い蹴りにふらつ

く。
それを見過ごすほど、剣も甘い男ではない。
仮にも颯間最強を誇る部隊の切り込み隊長である。やる時はやる。

「もらった！！」

剣は即座に拳を叩き込む。だが――――――

「ひゃっ！？」

「……ふぇ？」

剣の拳は、原田の豊満な胸に当たっていた。

「て、てめ……」

「あ、あわ○＞０＜@▲□¥＆％＄〝＃▽◎％＄っ！！」

先程まで超接近していた剣は、顔を真っ赤にし一瞬の内に原田から３ｍ以上まで離れた。

「「「「「「はやっ！！」」」」」」

剣の色んな意味での速さに、全員がツッコむ。
と同時に、剣は胸を触ったことに対して顔を赤くしながら謝罪する。

「す、すすすす、すみません！！い、今いまいまいま、今のはその間違えたと言うか、うっかりと言うか……その……」

「お、おいおい。」

剣のあまりにもウブな反応に、原田は怒る気力も失せてしまった。
だが同時に原田は好機を見出す。

「まぁ～あれだ、いいよ許してやる。」

原田の言葉に『そ、そうですか』とどこかギコチない返事をする剣。
だ
が、同時に原田の目にキラーンと光る。

「ただしだ。」
「？」

「あたしに勝てたらなぁ――――――――っ！！」

そう言い原田は剣に向かって突撃してくる。この時、原田には勝算があった。
それは、剣との３ｍ以上離れた距離だった。

「（胸に触れられたおかげで、奴との距離がとれた。
後は十文字槍で奴の足を狙って行けば……！！）」

そう、原田の胸に触れてしまったショックで原田から距離をとってしまった事は、剣にとって不運だった。せっかく距離をつめていたのに
その距離をとってしまったのだから。さらに足を狙う攻撃はまずい。
刀剣のように、間合いが短い上にろくな防御術を持たぬ武器を使う者にとって

槍のように、間合いが長い武器に狙われたら防御しきれない所
それが足を含めた下段なのだ。
原田は、自分の間合いに入ったのを確認し槍を剣の足目掛けて横になぎっ払った。
だが――――――

「いっ！？」

剣は体を右に捻って原田の槍をスレスレで避け、その勢いのまま攻めに転じて小太刀を原田の首に突きつけたのだ。
その速さに原田は付いていく事ができなかった。

「……」
「……」

「はい、そこまで。」

周りのギャラリー達をも静まり返る中で、近藤は呑気そうな声で二人の間に入った。

「決着は付いたわ。勝者はツル君。よって今後、ツル君は八忍隊の傭兵として
愛津で過ごす。いいわね？歳ちゃん。」

近藤の言葉に土方は悔しそうな表情のまま、無言で頷く。と同時に剣は小太刀を鞘に納刀し、原田は『くっそー負けたぁ！！』とやや悔しそうに床に座った。

「風上、お前って意外と強いんだな。」
「あ、ど、どうも……ふぇっ！？」

原田と話していた剣の体が、突如右に傾く。見てみると、剣に桂が抱きついてきたのだ。桂の行動に、剣はあっという間に赤面した。

「あ、あわ¥＆％＄”＃▽◎％こ、心さん！？」

「剣様、勇ましかったですわ。さあ、私の体で疲れを癒してくださいまし。」

そう言い桂は、剣を抱きしめる腕に力を込める。心の柔らかい胸が当たり

剣の赤面はさらに増す。とそこに、助け舟を出す黒い影が１つ。甚である。

「おい、それはアニキにとっては癒し所か体力消耗もいい所だ。離れろ離れろ。」

甚の言葉に、渋々ながら離れる桂。同時に、剣はペタンと腰を抜かした。

「アニキ、ご無事で？」

「な、何とか……」

剣の言葉に『ふぅ』と軽くため息をついた甚は、道場の出入り口へ向かう。

「さぁアニキ、風呂にでも入って体を癒しやしょう。」

甚の言葉に『あ、あぁ』と返した剣は、他の皆に一礼し道場を後にした。

「……ねぇ紗乃ちゃん。」

剣が去った後の道場で、近藤は唐突に原田に尋ねる。

「どうだった？」

「へ？どうって？」

近藤の言葉にポカンとなる原田。

「だから、ツル君と戦ってみてどうだった？」

近藤の言葉に『う～ん』としばらく唸った原田は口を開けた。

「まぁ、強かったぜ。次やる時はあたしが勝つけど。」

「いやあんたねぇ、局長はそういう事を聞きたいんじゃないと思うわよ。」

原田の、あまりにも戦闘脳的（バトルのうてき）な返答にツッコむやち。

「まぁとりあえずこれで、風上先輩が雇われる程の実力者ということは
分かりましたねぇ。」

「ふん、まだ雇うと決まった訳ではない。」

沖田の言葉に土方は不機嫌そうな表情で返す。それを見ていた桂が口を開く。

「ふふふ、剣様は私達が雇ってさし上げますわ。あなた方には無縁の話です。」

「まぁのう。剣君がアレだけ強いなら、こちらとしても頼もしいぜよ。」

桂の言葉に、ニカッと微笑む坂本。そんな坂本達を睨む土方だったがそんな中、坂本の服をグイグイ引っ張る小柄な影が一つ。伊織だった。

「ん？何じゃ伊織。」
「……剣（あいつ）を雇うのか？」
「バウ（伊織）？」

伊織の言葉にキョトンとなる信吾。
坂本は伊織に対して『あぁ、そのつもりぜよ』と返す。
その言葉に伊織は口を開いた。

「んじゃぁ、何を報酬に出すんだ？」

「「「「「「「「「「あっ」」」」」」」」」」

伊織の言葉にポカンとなる一同。そう、同じ傭兵だから伊織は気づいたのだ。
傭兵とはその名の通り『雇傭される兵』なのだ。なら当然、伊織が焼きそばパンを
報酬として貰うように、剣にも報酬を支払う必要があるのだ。
だが、そのことを一同はすっかり忘れていたのだ。

「お前ら頭悪いだろ。あいつが何を報酬に貰うのか、ちゃんと聞いて来い。」

そう言い伊織は、焼きそばパンを頬張りながら信吾と共に道場を後にした。

一方その頃、剣はというと――

「ふぅ、極楽だなぁ～」

剣は1人、露天風呂で一息入れていた。ちなみに甚は、女子達が入ってこないように出入り口で見張っている。剣は、岩場に寄りかかり満天の星を眺める。

「（……じいちゃんの指名でここに来ちゃったけど、結局やることは颯間の時と変わらないか……）はぁ……ん？」

不意に剣は、出入り口の方が騒がしいことに気づく。『ギャーギャー』と叫ぶ甚の声や、女子達の声が聞こえてくる。

「？何だろ……」

「だぁ――――っ！！勝手に行くんじゃねぇっ！！」

突然響く甚の声に『ふぇっ!?』と驚く剣。と同時に、ガラガラと

風呂の扉が開き
中から討・佐両派の幹部達が現れる。

「やっほ～ツルく～ん♪」
「ふえぇっ!?」

突然の訪問者に、剣は顔を赤くして驚き風呂の奥のほうに引っ込んでしまった。

「な、なななな、何でここに!?というか甚は!?」
「……あのカラスなら、信吾が相手してる。」

剣の疑問に答えたのは、伊織だった。さらに沖田が口を開きだす。

「どうも～風上先輩。いやですね～伊織ちゃんに指摘されて、風上先輩を雇う報酬を聞きに来ました～。」

沖田の言葉に『ふえぇ!?』と驚く……と言うより若干呆れたような声で返す剣。

「そんな事なら、明日話しますよ!!」
「あ、いえ、その、それだけじゃないんです。」

剣の言葉に返す頼子の言葉に『ふぇ?』とキョトンとなる剣。
そこに後ろから桂が前に出る。

「剣様、今日はお疲れになられたでしょうから、
私達がお背中を流してさしあげようと思いまして、馳せ参じました。
」

桂の言葉に『ふぇ!?え、いや、その……』と慌てる剣だが、
それを遮るように
坂本が口を開ける。

「遠慮せんでええんぜよ剣君。あち等が洗っちゃるから、隅々までのぅ♪」

坂本の『隅々まで』という言葉に後退りする剣。

「おっ!風上っ、お前結構いい身体してるじゃないか。
よーし、今日あたしに勝った褒美だ。あたしが背中流してやるよ。」
「紗乃が背中流したら、背中の皮が剥けちゃうじゃないの。剣、ここはこの
やちさんに任せなよ。天国に連れてってあげるからさ?」
「ええっ!?そ、それじゃ私が風上先輩の前を流すってことでいいんですか!?
で、でも私、そんな……望むところです!!」
「……芹栖、誰もそんな事言ってない。
で、このタワシで思うさま擦ってもいいの?」

皆の言葉に『はぁ』とため息をつく剣。
どうやら全員、剣の背を洗う気満々のようだ……約1名を除いては。

「まったく……何で私までこんな事をしなければならんのだ!
風上、この疫病神めぇ……必ず追い出してやるからなっ!!」

皆の後ろで睨んでくる土方の言葉に『は、ははは……』と苦笑いをする剣。

「(俺に安息の地は無いのか……うぅ、やっぱり来るんじゃな

かった
颯間に帰りたいよぉ……）」

そう思わずにはいられない剣なのであった。

所変わって、ここは愛津校舎の屋上。ここに、一人の女子生徒が双眼鏡で愛津の寮を見ていた。

「くひひひひ、やっぱりこうなったか。剣（やっ）は昔から女にモテたからなぁ。」

不気味に笑う生徒は、昼に剣の事を忍者だと口走った生徒だった。その生徒は双眼鏡を仕舞うと、自分の顔をベリッと剥がす様に引っ張る。

するとそこには、女子の制服を脱ぎ捨てた、一人の男がいた。

黒いボサボサした髪に魔物のように尖った耳、

裂けたように大きな口元からは鋭い牙が覗きギラリとした目をしているその男は、

漆黒の服を身にまとい屋上から飛び降り電信柱の上を跳んで行く。

「クケケケケケ、ま、精々がんばれよ、剣。」

そう言い男は、夜の暗闇へと消えていった。

『～第八章～　対決

！！剣ＶＳ原田　《終》」

～第八章～　対決！！剣ＶＳ原田（後書き）

九話目完成です。怪しい男の登場ですが、はたして奴の正体は！？
とは言え、現在私はこの小説を含んで二つの小説を書いていますが、やっぱ
二つをやるのは結構疲れます。けど、やっぱり楽しいです。今後は他の小説も
一緒に書くので、やや遅れますががんばります！！
それでは、また次話で～。

オリキャラ紹介　～現在判明編～（前書き）

今回は、『学園☆新選組』にはないオリジナルキャラ達を5人ほど紹介しようと思いま～す。

オリキャラ紹介　～現在判明編～

名前：風上（かざかみ）　剣（つるぎ）

身体：１７８ｃｍ

血液型：Ａ型

誕生日：１１月２９日（いて座）

所属校：私立颯間男子学院（しりつさつまだんしがくいん）　２年

流派：摩方流（まがたりゅう）

佩刀：小太刀（無銘）、その他摩方流忍具

趣味：読書、笛吹き

八門十段階評価

骨：８　気：９　剣：１０　槍：６　手：８　火：５　遊：８　教：８

雇い料

戦闘：５００円　密偵：１５００円　情報収集：１０００円　その他：内容による

この物語の主人公で、颯間八忍隊（さつまはちにんたい）・遊撃方（ゆうげきがた）を勤めている切り込み隊

長。
なのだが、その性格はいたって温厚な平和主義で普段はどこかぬけてる
傭兵とは無縁の天然な性格。
かなりの美男子の上に成績優秀な優等生だが、恋路に対してだけは鈍感の上に『大人のキスの意味も知らないほど知識に疎い』など年頃の男子とは思えないほどウブで天然の上に赤面しやすい癖に、天然で女子を引き寄せる才があり
（甚曰く『アニキ一人の為に３００人以上の女子が泣かされた』らしい）、
祖父である隼人に深い恩を感じており、絆や家族愛を大切にしている。
その為、学友や家族を侮辱されるとキレる
（甚曰く『アニキがキレると恐ろしい事になる』らしい）。
戦闘時には小太刀による剣術と『摩方流骨法術』を組み合わせた戦闘を得意としてる。
また、本気を出す時は小太刀二刀流と、生まれ持った超神速の移動術『縮地』を使い
相手を切り裂く事から『迅風（じんぷう）の夜叉（やしゃ）』と恐れられている。
彼の勤める遊撃方は、戦いにおいて真っ先に切り込んでいく切り込み隊長的存在。
問題児揃いの兄弟を抑止する為に八忍隊に入っているが、心の底では討学にも佐学にもつかない自分の優柔不断にコンプレックスを抱えている。
口癖は『ふぇ（？）』。

名前の由来は戦国時代、関東の覇者『北条氏』を裏で支えた忍者軍団風魔衆の頭領“風魔（ふうま）小太郎（こたろう）”。
戦闘方法のモデルは『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の“風魔　小太郎”

さらに、小太刀二刀流と格闘術と言うことで
『るろうに剣心』の“四乃森　蒼紫”
さらに速さと言うことで“瀬田　宗次郎”などをモデルとしている。

名前：甚三郎（じんざぶろう）

身体：４０ｃｍ

血液型：黒型

誕生日：４月３日（おひつじ座）

流派：摩方流（まがたりゅう）

佩刀：摩方流忍具

趣味：天空散歩

八門十段階評価
骨：６　気：６　剣：３　槍：２　手：９　火：８　遊：９　教：５

剣の相棒の“化け鴉”で通称：甚。
４年前剣の家に迷い込み、危うく退治されそうな所を剣に助けられ以来剣の事をアニキと呼び慕っている。
化け鴉の特性として、『言葉が話せる』『野良烏達を操れる』など

があり
その能力により、剣をサポートしている。
剣が苦手とする女子が剣に近づくのを避けさせる一方で、剣が女子に慣れる事を
誰よりも願っている。
同じ妖怪同士の信吾とは仲がいいが、エロい事にしか興味の無いカンリュウサイとは
非常に仲が悪い。
戦闘時には、翼の羽毛の中から忍具を出したり烏を操ってして戦う。
また
意外とパワーがあり、人間一人くらいなら持ち上げて飛べる。

名前の由来は幕末に黒船に侵入した伊賀の忍“沢村甚三郎(さわむらじんざぶろう)”

名前：松原(まつばら)　頼子(よりこ)

身体：１５４ｃｍ／Ｂ８５（Ｄ）　Ｗ５６　Ｈ８２

血液型：Ｏ型

誕生日：１０月２０日（てんびん座）

所属校：私立愛津女学園(しりつあいづじょがくえん)　２年

流派：関口神甲流柔術(せきぐちしんこうりゅうじゅつ)・薙刀術(なぎなたじゅつ)

佩刀：小薙刀（無銘）

趣味：読書

真選組四番隊組長（しんせんぐみよんばんたいくみちょう）。
曲者の多い真選組幹部の中で一番のまともで優しい人。
ただ、その優しさ故に戦いにおいても後ろのほうで援護に回りやすい性格。
頼子率いる四番隊は援護部隊と言われ戦闘よりもバックアップが主な仕事。
その優しい性格から真選組のオアシスとまで言われ、仲間はおろか敵の討学派からも慕われている。
実家がお寺であり巫女としての能力も高く、相手の気を読んだり気功によって傷を癒すこともできる。ただ、その清らかな気を持つ故に妖怪類のトラブル、特にカンリュウサイのセクハラを一番に受けやすい。
佐学派に属しているが、共学化に否定的ではない。
また、図書委員を務めているため剣とのかかわりが一番多い。

名前の由来はもちろん新選組四番隊組長“松原（まつばら）　忠司（ちゅうじ）”
容姿及び性格は『Ｆａｉｒｌｙ Ｌｉｆｅ』のコピー機の擬人化“頼子”。
頼子にした理由は、“松原　忠司”は“山南（やまなみ）　敬助（けいすけ）”と並び『新選組の良心』と言われるほど温厚な人柄で知られているのを知り、
その後たまたま手に入れた『Ｆａｉｒｌｙ Ｌｉｆｅ』のキャラに山南と言う者がいたので
何となくこの作品から選ぼうと思いました。そしてその中で一番温

厚な人柄と
自分的に思ったのが『頼子』だったからです。
また武器を薙刀にした理由は、“松原　忠司”は八月十八日の政変で
坊主頭に白い鉢巻を巻き、更に脇には大薙刀を携えるという姿から
『今弁慶』の
異名をとったのを元ネタにしました。
お寺で巫女と言うのも弁慶を元に女だから巫女と言うことにしまし
た。

名前：信吾（しんご）

身体：６０ｃｍ

血液型：牙型

誕生日：１１月１１日（さそり座）

流派：木野葉一刀流（このはいっとうりゅう）

佩刀：愛牙・無銘

趣味：歯磨き

伊織の相棒の妖犬。
無口な伊織の言葉や気持ちを一瞬で把握するなどかなり有能。
同じ妖怪同士、そして手間のかかる人間のパートナーを持つ者同士

として
甚とは仲が良いが、甚程ではないがカンリュウサイのことは好きではない。
戦闘時には持ち前の俊敏な動きと牙で襲い掛かる。

名前の由来は天誅組に組した土佐藩士“那須（なす）　信吾（しんご）”
容姿は遊戯王Ｒ３巻の『特別決闘　冥王、召喚』で遊戯が出したモンスター
“黒犬獣　バウ”

名前：カンリュウサイ
身体：４０ｃｍ
血液型：白型
誕生日：７月２３日（かに座）
流派：妖狐色軍学（ようこしきぐんがく）
佩刀：愛尾・無銘
趣味：覗き・セクハラ
真選組五番隊組長（しんせんぐみごばんたいくみちょう）。

数年前に学園に紛れ込んできた妖狐。当初は容姿のかわいさからマスコット的な扱いを受けていたが、そのスケベな本性がバレてからは
愛津の厄介者とされている。
女子生徒にセクハラする事に命を懸けてるが
いつも失敗し、大抵土方に斬られて終わっている。
しかし、妖怪故に普通に斬られても痛いだけで死なず、数分で復活する。
五番隊を率いていると言うが、実際はカンリュウサイ一人しかいない。
妖怪なので相手の気に敏感。
戦闘時は、口や尻尾から狐火を放つが威力は低く脅かしたりする程度。

名前の由来は新選組五番隊組長の“武田（たけだ）観柳斎（かんりゅうさい）”
容姿は『姉、ちゃんとしようよっ！』の“マル”
ちなみに、なぜ原作のロボットにしなかったのかは
伝統を守ろうとする佐学派の代表格の真選組に機械系ってどうなの？
と思ったからです。

オリキャラ紹介　～現在判明編～（後書き）

以上が現在判明しているオリキャラです。
ここでは書けなかった設定なども今後発表していくのでどうぞよろしく～。

～第九章～　愛津の風に流れる笛の音色

―愛津女学園　学園寮内・剣の部屋―
早朝４時、剣は目を覚ました。

「ふぅ～、朝か……。」

剣は時間が午前４時なのを確認すると、布団を畳みジャージに着替えだす。
その音が聞こえた甚も目を覚ました。

「おやアニキ。いつものジョギングですかい？」

甚の言葉に『うん、まあね』と返す剣。
軽く会話をしながらジャージに着替えた剣は部屋の出入り口へ向かう。

「それじゃ、行って来るね。」
「へいへい、朝風呂の方は俺が何とかしやすよ。」

甚の言葉に『うん、ありがと』と返した剣は、朝のジョギングへと向かって行った。

～2時間後～

「ふぅ。やっぱり朝のジョギングは気持ちいいな。」

寮の玄関前まで戻ってきた剣はそう言いながら、
玄関を開け寮内へと戻り風呂場へ向かう。
しばらくして見えてきた風呂の入り口には、
甚の他にゲンちゃん・谷さん、それに信吾がいた。

「あれ？ゲンちゃんに谷さん、それに信吾さんも。どうかしたの？」

剣の疑問に『いやそれがですね』と甚が説明する。

甚が言うには、この時間は彼らが朝風呂に入る時間帯らしいのだ。
そこで甚は剣も入っていいよう3人と交渉をしていたらしい。

「クルックー（交渉っつっても、こいつが一方的に『アニキを優先しろ！！』って
怒鳴ってるだけだがな。）」

谷さんの言葉に『うんうん』と頷くゲンちゃんと信吾。

「んだとテメェらぁ！！」
「こら。」

剣は甚の怒鳴りを諫め、コツンと甚の頭を叩きゲンちゃん達に視線を向ける。

「甚がすまないことをした。皆様がよろしかったら、
いっしょに一風呂浴びたいのですが……」

「クルックー（構わないぜ）」
「ニャー（うん♪）」
「バウ（俺も構わねぇ）」

剣の頼みに、三人はあっさりＯＫを出した。
だがそれを見て納得しない者がいた。甚である。

「おい待てこらぁ！俺の時は全く聞く耳持たない態度してたくせに
何でアニキの時はあっさりＯＫ出すんだよ！！」

甚の言葉に、剣を含んだ四人は口々に言い放つ。

「甚、それはお前の言い方が悪いからだと思うよ。」
「クルックー（まったくだ）」
「ニャー（うんうん）」
「バウ（その口の悪さ、直したほうがいいと思うぜ？）」

四人の言い分が図星のため、言い返せずに『ぐぬぅ』と唸る甚。

「まぁとりあえず、入りましょっか。」

剣の言葉にコクリと頷く三人は、剣と共に更衣室へと入って行った。

その後、風呂から上がった剣は制服に着替え
甚・ゲンちゃん・谷さん・信吾と共に食堂を訪れ、自分の席に座る。
甚は剣の近くに座り、他の３人もそれぞれの席に座る。

「おはようございます、剣さん。」

剣の隣に座る頼子が笑顔で挨拶してくる。
それに応じて剣も『おはようございます』と頭を下げる。

すると頼子は、何かに気づいたようにキョトンとした表情で剣の顔……というより剣の髪に自分の顔を近づける。

「ふぇ!?あ、あの、頼子さん?」

「クン……クンクン……剣さんひょっとして、朝お風呂に入りました?」

頼子の言葉に『分かります?』と返す剣。

「はい、剣さんの髪からシャンプーの香りがしましたから。」

頼子の言葉に『え、そうですか?』と自分の髪に視線を向ける剣。とそこに、ある人の声が鳴り響く。

「風上貴様!この寮に置いてもらっている分際で朝風呂を浴びたのか!!
朝風呂は谷さん達の特権だぞ!!」

土方である。規律に厳しい彼女だ、谷さん達の特権である“朝風呂”に
男の剣が入浴したのが気に入らないらしい。土方の言葉にやや後退りする剣。
とここで、助け舟を出してくれる者が1人(?)いた。

「クルックー(まぁまぁ副長。俺達三人が許したことなんだ。ボウズは
朝4時に行なったジョギングで汗を流してたんだ、少しぐらいいいと思うぜ。)」

谷さんだ。それに続くように、ゲンちゃんや甚も口を開く。

「ニャー（そうだよー。ボク体ゴシゴシ洗ってもらったよー。）」
「全くだぜ！アニキは2時間も汗流したんだ、汗流すぐらいいいじゃねぇかよ！！」

ゲンちゃんや甚の言葉に『ぐっ』と悔しそうな表情をする土方。
とそこにさらに追い討ちを掛ける様に、信吾が口を開く。

「バウ（テメェにこいつの事をとやかく言う権利があんのか？）」

信吾の言葉に『なにぃ』と睨みつける土方だったが、
更なる追い討ちを掛ける者が1人。

「歳ちゃん、谷さんもゲンちゃんも信吾くんも許可したことなんだし、
いいんじゃないかなぁ～。」

近藤である。“鬼の副長”と称される土方も、近藤の前では
その威厳も力も無に等しくなる。土方は『い、いやしかし』と意見しようとするが
近藤の笑顔の前に『ぐっ』と観念してしまう。

「分かりました……今回だけは特別に目を瞑りましょう。」

土方の言葉に『よかったね、ツルくん♪』と笑顔を剣に向ける近藤。
その笑顔に剣は『あ、は、はい』と顔を赤面しながら返す。
その状況に『ギリギリ』と歯軋りをする土方。
とそこに、剣の髪に顔を近づける桂がいた。

「ふぇっ！？あ、あの、心さん！？」

「クンクン……はぁ～、剣様って、い・い・か・お・り♪」

桂の言葉にさらに赤面する剣。そんな剣の反応を知ってか知らずか桂はさらに顔を……いや、体を剣にくっつける。剣の赤面化はさらに進行していった。

「――――――――っ！！」

「こりゃイカン！！こら離れろ女！！アニキしっかりしてくだせぇ！！」

剣から桂を引き離した甚は、大量の氷を剣の顔にぶっ掛ける。が、その氷はあっという間に剣の体温で『シュー』という音と湯気と共に溶けた。

「おぉ、すげぇー。」

「わぁー、ツル君“人間焜炉（にんげんコンロ）”みたい。」

「……剣、お前の体温で朝食の魚、焼き直してみていい？」

そう言い斉藤は魚を剣に近づけるが、当然の如く『何しとんじゃい、おのれわぁ！！』と甚に阻止されたの言うまでもない。

そしてその後、剣が学園に行くのがギリギリになったのも言うまでもない。

その後は順調に授業を終えた剣は、昼休みになり屋上で甚と共に昼食をとっていた。

「ふぅ、さてと。」

剣は屋上のフェンスの上に乗り、懐から一本の竹で出来た横笛を取り出す。

「おぉ、それは名笛“飛鳥風（あすかかぜ）”っすね！」

「あぁ、この笛は読書と並ぶ俺の大事なモノだからな。」

甚の言葉にニコッと返した剣は、飛鳥風を吹きだした――――――

「《♪～?:～♪～?:～♪～?:～?:》」

飛鳥風の音色が風に乗って学園、いや杏の町へと流れていく。

「ん～、さすがアニキ。いい音色出しやすね～。」

そう言い甚は剣の横で音色を聞き続けた。

「え?」

一方こちら、校舎内の廊下で見廻りをしていた頼子は不意に聞こえてきた音色に耳を傾けていた。いや、頼子だけではない。

廊下・グランド、さらには杏の町にいた生徒達もその音色を聞いていた。

「え?なに?」

「笛の音かしら?」

「何だか心安らぐわぁ～♪」

その音色に、全員が酔いしれていた。

「はぁ、心安らぐ音色……でもこの音色は一体……？」

その音色に誘われるかのように、頼子は音色のする方へと歩いていく。

とその途中の階段で局長や他の幹部達と会った。

「あ、頼子ちゃん。」

「あ、局長さん。それに皆さんも。」

その姿を確認した頼子は丁重に挨拶し口を開きだす。

「あの、ひょっとして皆さんも？」

頼子の言葉に『まぁねぇ～』と返す面々。

「だって気になっちゃうしねぇ、この音色。」

「ホントですね～、ボク聞いてる内に眠くなっちゃいましたよ～。」

「ニャー（ボクもー。）」

「そうだね～私も聞いてたら、何だか眠くなって来ちゃった……ょ……ぐうぐう……」

そう呟きながら近藤は器用に立ったまま眠りだした。

その状況に一筋の汗を流しながら少々呆れる土方。

「と、ともかく、この音色の正体はこの上、屋上にいるのは間違いない。

この学園の秩序を守る真選組として、それを確認しに行くぞ！」

土方の言葉に『おぉー』と掛け声を上げる真選組メンバー。

「ほほ～う、それは奇遇じゃのう歳緒くん。」

不意にそんな声が聞こえ振り返る真選組メンバー。
そこには、予想通りというか討学派の主要メンバー
坂本・桂・岡田、さらには信吾がいた。
その姿を確認した土方はギロリと睨みつける。

「……貴様ら……何のようだ！」

土方の言葉に『おうおう、殺気立っとるのぅ』と飄々と返す坂本。
さらにそこへ桂が前に進み出て口を開く。

「ふふ、私達もこの笛の音色の主を探りたいだけですわ。何か問題でも？」

桂の言葉に『ないよ～』とあっさり返す近藤。
無論、土方は反論しようとしたが近藤が決定しては何も言えない。

こうして、真選組組長格及び討学派幹部メンバーは共に屋上に向かう。

「音色が近くなってきたね。」

近藤の言葉に全員が頷き、土方がドアノブに手を掛ける。

「開けるぞ。」

土方の言葉に全員が頷き、土方はドアノブを回しドアを開ける。

まず目に映ったのは、屋上のベンチで佇むカラス――甚だ。
さらに目を向ければ、フェンスの上で竹の横笛を吹く男子――剣の姿があった。

「（……風だ、そよ風のような音色だ……やっぱりこの笛はすごい。）」

剣は、笛を吹きながら自分自身も笛の音に酔っていた。
その音色は、“飛鳥風”という名の如く風のようだ。そよ風のように流れていく
音色は、丸で極楽浄土の如し。剣は自分がこんなに良い笛を吹いてよいのだろうかと
つくづく思っていた。だが、剣本人は気づいていない。
どんな名笛も使い手によって笛の音がことなることを、この音色は剣だから
出せるということに。

「《♪～?～♪～?～?～♪～?～?……》ふぅ。」

曲が終わり、剣は笛を懐に戻そうとする。
がここで、後方より『パチパチ』と拍手の音がし、
ここで剣は初めて後ろに甚以外の誰かが大勢いることに気づく。
剣が振り向くと、討・佐両派の幹部達が拍手を送っている。
その姿を目視した剣は目を丸くする。

「ふぇ!?み、皆様、いつからそこに!?」

剣の質問にそれぞれ答える面々。

「んとね～、少し前からいたよ～。」

「いや～風上先輩にこんな特技があったんですね～。」

「うんうん、このやちさん思わず聞き惚れちゃったよ～♪

剣、もう1回やってくれない？」

「アンコール……アンコール……」

「とっても素敵でした。剣さん、また聞かせてもらってもいいですか？」

「風上先輩……そんな……私のために愛の曲を吹いてくれるなんて……

ああ、だめですそこは～……　／／／／／／」

「へへ、結構うまいんだな風上。」

「中々粋な趣味じゃのう剣君。」

「素敵でしたわよ、剣様？」

「もぐもぐ、むしゃむしゃ……お前の笛の音は焼きそばパンの肴にちょうどいい。」

全員、剣の笛の音に讃称する（約数名は微妙だが）……いや、正確には

全員ではない。やっぱり約1名、面白くなさそうにこちらを見る土方がいた。

「？あの、どうかしました？」

土方の視線に気づいた剣が問いかけるが、土方は『ギロッ』と睨んで来るだけだった。

「え、えっと、俺何かまずい事でも……」

剣の言葉に『気にしないでいいですよ～』と返したのは沖田だった。

「土方さんは焼餅焼きですからね～。
近藤さんや皆さんが風上先輩の笛の音色を認めてるのが気に入らないんですよ～。」

沖田の言葉に『は、はぁ』と返す剣。

「誰が焼餅焼きだ!!余計なことを言うのはこの口かぁ!!?」

沖田の言葉に土方は、沖田の口の両端をおもいっ切り引っ張り出す。
沖田は『ああう～』と半泣きのような声を上げる。その状況に剣は『あ、あはははは…』と苦笑いをこぼした。とそこへ、近藤が剣に接近する。

「ねぇツル君、今吹いてた笛見てもいい?」

近藤の言葉に『えぇ、いいですよ』と返した剣は、飛鳥風を渡す。
蒼く彩られどこか気品を感じさせるその笛を手に取った近藤はじっとその笛を見つめる。

「わぁ～、ちょっと変わったデザインだね。」
「祖父の家に伝わる名笛“飛鳥風(あすかかぜ)”です。」

剣は少し誇らしげに笛の名を教える。その名を聞いた近藤は悲願するような上目使いで剣に視線を向ける。
その視線に『あ、あの何か』と顔を赤くしながら返す剣。

「ねぇツル君、もう1回吹いてもらっていい?」

近藤の言葉に『ふぇ？』とキョトンとなる剣だったが、唯でさえ女子に弱い剣がさらに土方ですら逆らえない近藤の上目使いのお願い攻撃の前に剣はあっさり白旗を上げる。

「……わ、分かりました、もう一曲だけなら……」

剣の言葉に『わーい』と喜ぶ近藤。いや近藤だけではない、剣のアンコールに他の者達もまた聞けると分かり拍手を送る。とここで、甚がある事に気づく。

「ア、アニキ、下見てくだせぇ！」

甚の言葉に『下？』とキョトンとなった剣は、フェンスに乗り校舎の下に視線を向ける。そこには、剣の笛の音を聞き付けたのか愛津の生徒から教師まで集まっていた。その状況に驚く剣に声を掛けたのは、以外にも斉藤だった。

「……先初音が携帯で電話した。剣が吹いてた笛の音がもう一回聞けるって。」

斉藤の言葉に『あ、さいですか』と苦笑いをこぼす剣と『勝手なことを…』と愚痴る甚だったが、剣は気を取り直して笛を構える。

「それでは……」

剣はそう呟く。同時に学園内から騒がしい声の一切が消える。そして――――

「《♪～♪～♪～♪～♪》」

飛鳥風の音色が再び風に乗って学園と杏の町へと流れていく。
文字通り風のような音色に、全生徒及び全教師が聞き惚れだす。
先程まで殺気立っていた土方ですらその音色を聞いたとたん、
殺気は無くなりその音色に聞き惚れている。

こうして、この日の昼休憩は剣の音色により争いも全く起きず平和に終わった。
また、今回の音色で元々評価の良かった剣に対する愛津の者達への評価は
さらに上がったのは全くの蛇足である。

その日の放課後、剣は自分に構ってくれる女子生徒達を避けながら図書室に来ていた。
やはり屋上よりも、ここの方が静かで落ち着くからだ。

「（ふ～ん、これも結構おもしろいな）」

適当に選んだ本を読みながらそう思っていた剣。
とその時、後ろの方からバタバタと音がし、剣は後ろを振り返る。
そこには本の束を机から落としてしまった頼子の姿があった。

「あぅ～、またやっちゃいました……」

そう呟きながら頼子は、落としてしまった本を拾い出す。
それを見ていた剣は読んでいた本を甚に預ける。

「ちょっと行って来る。」
「へいへい、いってらっしゃいアニキ。」

甚はさも当然のように本を受け取っり、それを確認した剣は頼子の下へ接近する。

「大丈夫ですか頼子さん?」

剣の声に『え?』と少し驚く頼子。

「手伝いますよ。」
「え?で、でもこれは私が……」

頼子は自分に責任を感じいるのだが『いいからいいから』と剣は散らばった本を集めだす。そんな剣に『すみません』と少し悲しげに謝る頼子。

「気にしないでください。この前の恩返しと思ってください。」

剣の言葉に『え?』とキョトンとなる頼子。
そんな頼子に対して剣はニコッと微笑みながら口を開く。

「俺に『戦国放浪―風の狼』を貸してくれたお礼ですよ。」
「え?でもあれは、友達だから貸した物で私は別にお礼して欲しかった訳では……」
「友達だからこそ、お礼をしたいんですよ。」

ニコッとしながら答える剣に『はぅ』と顔を赤くする頼子。

「（剣さんて、こういう言葉をサラッと口にしやすい人なのかな…
……）／／／／／／」

そう思いながら顔を赤めていく頼子であった。

「（あーあ、アニキの奴またやっちゃったよ）」

そんな剣と頼子の状況をため息をつきながら見ている甚の姿があった。

「（アニキは昔っからああいうセリフをポンと言える人だからなぁ、
その度に何人の女が虜になって行ったか分からんぜ）はぁ。」

何度そんな事があったのかを思い出しながら、甚は大きなため息をついた。

「そういえば頼子さん、この本達はどうするんです？やっぱり本棚に？」

本の片付けが大体終えた剣は、頼子にそう尋ねる。
それに対し頼子は『あ、はい』と返し説明を始める。

「これらは他の学園へ貸すための物なんです。
だからこれらは全て、職員室に運ぶんです。」

頼子の言葉に『これ全部？』と聞き返す剣。本といっても結構な量だ

頼子1人で運べるとは思えない。

「他に図書委員の人はいないんですか？」

剣の言葉に頼子は少し表情を曇らせながら口を開く。

「……いますよ、私以外にも図書委員は」

頼子の言葉に『だったら…』と口を開く剣だったが、さらに口を開いた
頼子の言葉に阻まれる。

「今の学園のこの状況で図書室に来る人なんて、殆どいませんよ。」

「！！」

頼子の言葉に剣は驚きながらも納得した。
この学園は今、剣（けん）の力で学園の未来を決めようとしているのだ。
こんな状況で図書室に来る者や係りで来る者など殆どいないだろう。
剣のいた颯間でも、図書室に来るのは剣を含め数名程度だったのだ、当然と言えば当然である。それを察した剣は、その本達を両手に抱えだす。

「え？あ、あの、剣さん？」

剣の行動に戸惑いを隠せない頼子だが、剣は微笑みながら答える。

「俺も颯間で似たような境遇だったから分かるんですよ。」

剣の言葉に頼子は『はっ』と気づく。

確かに剣は颯間最強傭兵部隊の一員で実力も紗乃に引けを取らない程だ、
だが彼自身はあまり戦いなどを望んでいないのは彼の行動や言動で理解できる。
彼もまた、颯間では自分と似たような境遇だったのだ。
だから自分の苦労を察知して手伝ってくれるのだ。

「そういう訳で、さぁ行きましょ。」

そう微笑む剣の笑顔に頼子は圧倒されてしまう。

「……剣さん……ずるいです……／／／／／／」
「ふぇ？何か言いました？」

頼子の声が良く聞こえなかった剣は頼子に尋ねるが『な、何でもありません！！』と
頼子は顔を赤くし否定しながら本を抱え図書室を出て行き、剣も慌てて後を追う。
それを見ていた甚は『またか』とため息をついた後、剣達の後を追って行った。

その後２人は、職員室まで本を運んだ後も一緒にいたのを
見廻りをしていた真選組メンバーに見つかり、
頼子は冷かしを受け剣は土方に追いかけ回されたのは全くの蛇足である。
また、その後２人は顔を見合わせる度に顔を赤め、
まともに顔を見れなかったのだがこれもまた全くの蛇足である。

笛の音色　《終》』

『～第九章～　愛津の風に流れる

～第九章～　愛津の風に流れる笛の音色（後書き）

十話目完成です。
色々アイディアで悩んでいて、少し遅れました。
どういう風に剣と愛津の生徒が恋に落ちるかが思いつかず、悪戦苦闘中です。
また、自分的にはＳＥＸシーンも入れてみようかどうか悩み中です。
読者の皆様はどっちがいいと思いますか?色々悩みながらがんばっていきま～す。
それでは、また次話で～。

～第十章～　近藤のダイエットと沖田の才能

―愛津女学園　校舎内・廊下―

剣が編入してから数日の月日が流れたある日、剣と甚が適当に廊下を歩いていると

保健室から近藤が出てくるのを見つける。良く見ると、近藤の顔色が悪い。

「近藤先輩、どうかしたんですか？顔色が悪いですけど……」

心配になった剣は近藤に話しかける。すると近藤は力なく剣の方を振り向く。

「……増えてる……」

「はい？」

「また増えてるのよぉ――――――っ体重がぁ――――――っ！！！

うぅちょっとおかしいわよあの体重計！！あいつ空気読めなさすぎよ！！！」

「た、体重……」

近藤の言葉に大事ではなく良かったと心の中でほっとすると同時にどこからツッコめばいいのか悩む剣。

「はっ！そうか分かったわ、これってドッキリよね！？

体重計の針をいじってそれに驚いた子の姿を見て笑う企画なのね！？

な～んだ、カメラどこ？」

「……アニキ、この女とうとう現実逃避しやしたぜ。」
近藤の現実逃避に呆れる甚。とそこに、近藤の声を聞きつけたのか土方が現れる。
「何だ、何をしている風上。
まさか貴様、近藤さんに何か良からぬ事をしたのではあるまいな？」
「あ、副長さん。」
「ちげーよ、おたくん所の局長さんが、体重と言う名の現実から逃げてんだよ。」
甚の言葉に『またか……』とため息をつく土方。
どうやらこれが初めてではないらしい。とここで近藤は土方の存在にようやく気づく。
「あっ、歳ちゃ～ん。歳ちゃんも一緒にカメラ探して～、あの体重計の針　絶対おかしいんだから～。」
「いや、おかしいのはテメェの脳ミソだろ……いってぇ！？」
余計な事を言う甚に剣は即座に鉄拳制裁をお見舞いする。
と同時に土方は懐から筆と短冊を取り出す。
「……ここで一句。」
「「へ？」」
剣と甚は『なぜここで一句？』と首を傾げるが、土方は気にせず筆を進める。
「体重計　『針がおかしい』　それおかしい」

「ぐさぁっ！！？」

土方の一句は近藤の心に強く突き刺さった。

「ふむ……いつもながら良い出来だ。風上、特別にお前にやる。家宝にしろ。」

土方に短冊を突き付けられ『は、はぁ』と剣は恐る恐る取ろうとするが、
いち早く甚がそれを取り、何処からとも無く出したライターで燃やしてしまった。

「あぁ！！貴様なんて事を！！！」
「うるせぇよ！テメェのボヤキ川柳なんざいらねぇんだよ！！！」
「何だと貴様ぁ――――っ！！！」

土方と甚が口争いする中、剣は近藤の慰めに翻弄していた。

「ううぅ……歳ちゃん厳しいわぁ～……私が必死に現実から目を背けていたのに～……」
「いや、現実は直視しましょうね？
大丈夫ですよ、運動していれば体重は自然と減りますよきっと。」

剣の言葉に『本当？』と涙目になりながら尋ねる近藤。

「はい。」

そんな近藤に、剣は精一杯の笑顔で答える。

その笑顔に涙を止めた近藤は『よぉ～し！』と拳をギュッと握り締める。

「それじゃあ運動とダイエットも兼ねて今日の見廻りは外を主体にやるわよ！

……という訳でツル君、５００円で一緒に見廻りに行こ～う。」

「あぁ、見廻りでしたら雇い代はいいですよ。」

剣の言葉に『そう～？』と呟いた近藤と共に、剣は外へと向かう。

「っておいアニキ！！俺を置いて行くな――――――――っ！！」

それを見た甚も急いで後を追って行った。

杏の町中を歩く近藤・剣、それに甚。運動を兼ねての見廻りのはずなのだが……

「あら～、あんな所に新しいケーキ屋さんが出来てたのね～♪

ちょっと行ってみましょう～、ふらふら～。」

「いやいやいや！ダメですよ近藤先輩！言ってるそばから食べようとしちゃあ！！」

「アニキ、これで５回目ですぜ。」

ケーキ屋に行こうとする近藤を止める剣に甚は呆れながら言い放つ。

そう、甚の言う通り近藤は先程から飲食店を見つけては

あっちへフラフラ、こっちへフラフラと

引き寄せられるように歩く事これで５回目なのだ。

いい加減つき合わされてるこっちの身にもなってほしいと甚も呆れ

てくる。

「え〜、だってツルく〜ん、あのケーキあんなにおいしそうなのよ〜？
そもそもなんであたしがダイエットなんかしなくちゃなんないの〜？」
「先と言ってることが違いますよ。もっと意志をお強く。」

剣の言葉に『ぶーぶー』と文句を垂らす近藤。

「こんなのが真選組の局長（トップ）ってどうなの？」

甚の言葉に『こら』と叱る剣。
その間にも近藤は目に映る飲食店に引き寄せられるように向かう。

「あっ、あそこのたい焼き屋さん美味しそう〜、あらあら向こうのアイスクリーム屋さんも私を呼んでるわぁ〜♪ふらふら〜。」
「「あぁっ!!いつの間に!?」」

その状況を見た剣と甚は即座に近藤の服を掴んで止める。

「先輩、落ち着いてください!」
「テメェには堪え性ってもんがネェのかよ!!」

剣と甚の言葉に『え〜』と不服気に返す近藤。
とその時、剣は道の反対側から歩いてきた伊織と信吾を近藤が見つけ、
アイスクリーム屋に入るのを見かける。

「あぁぁ、見て見てツル君、伊織ちゃんたら私の目の前でアイス買

ってるわぁ～。
ああぁっ、しかも私の大好きなチョコチップをを～。」
それを見た近藤はかなり動揺した。その姿に剣と甚は一滴の汗を流すが
近藤の動揺はそれだけでは終わらなかった。
「え、ダブル…？えええぇっ、トリプル！？チョコチップにプレミアストロベリーにスカッシュレモン！？あああそんな、そんなあぁぁぁぁ～！！！」
近藤は血の涙を流さんばかりにハンカチをかじりだす。
その光景に剣と甚の汗はさらに増える。
「女性は悔しがるとハンカチを噛むって本当だったんだ。」
「いやアニキ、注目するのはそこか！？」
甚の言葉に『え、違うの？』と返す剣。
とそこへ、声を聞きつけた信吾が剣達に近づいてくる。
「バウ（よぉ小僧に化け鴉。何してるんだ？）」
「やぁ信吾さん、いま近藤先輩と見廻りを……あれ？」
後ろを振り向いた剣は言葉を失う。
なぜなら、つい先程までいた近藤の姿が消えていたのだ。
驚く剣に言葉をかけたのは甚だった。
「アニキ、あそこ。」
「ふぇ？」

甚の指差す（？）方を見ると、伊織の前で彼女の持っているアイスを『じ――――』と物凄く見ている近藤がいた。

「……ん？何だ、ほしいのか？」

伊織の言葉に、コクコク頷く近藤。そんな近藤に伊織はたった一言だけ言い放つ。

「やらん。」

それだけ言った伊織は、近藤の目の前で焼きそばパンとアイスを交互に食べだす。
それを見た近藤は体をプルプル震わせながら刀を抜く。

「いやいやいやいや！近藤さんダメですよ抜いちゃあ！！
『アイスくれなかったから斬った』はさすがにマズイですよ！！」

剣は即座に近藤を抑えようとする。とそこに、今度はクレープを持った桂が現れる。

「あら、剣様ではありませんか。こんな所でお会い出来るなんて、奇遇ですわね。」
「ふぇ？あ、心さん。」

桂の存在に気づいた剣はペコリと頭を下げる。と同時に、近藤はまたしても
今度は桂の持っているクレープを『じ――――』と物凄く見ている。

「あら?近藤先輩、もしかして欲しいのですか?私のクレープ。」
桂の言葉にブンブンと近藤は首がもげそうなくらいの勢い頷く。
が、剣は近藤の服を掴んでそれを止めさせる。
「近藤先輩、ダイエットはどうしたんですか?」
剣の言葉に近藤はたった一言だけ言い放つ。
「あーうん、明日からにする~。」
「「意志よわっ!!!」」
近藤の言葉にツッコミを入れる剣&甚と、その光景に一滴の汗を流す桂・伊織・信吾の討学派3人(2人と1匹)。
その後結局クレープを貰えなかった近藤は、自払いでクレープを食べたのであった。
その帰り道、近藤はトリプルアイスを食べながら学園への道を歩いていた。
「えへへ~、おいし~い♪」
「近藤先輩、凄くご機嫌ですね。」
引きつった表情の剣の言葉に『ありがと~』と返す近藤。
その近藤言葉に対して『いや、褒めてねぇよ。』と即座にツッコむ

甚。

そんな言葉を気にせず近藤はペロリと完食し、学園へ帰宅しようとしていた時
近藤の目にあるものが映る。それは、1人愛津の生徒が2人の男子学生に
ナンパされている光景だった。

「あの、通してください。」
「まぁまぁ。ちょっとだけでいいからさ。」
「今ヒマなんだよね～、だから俺らとどう？いい店知ってるんだよ。」

何とも古典的なナンパをする学生を見た近藤と剣は、互いにコクリと頷きあい
その者達の所へ向かう。近藤は正面から、剣は気づかれないように背後から接近する。
近藤の接近に2人の男子学生が気づく。

「…その羽織……真選組だな！」
「そうだよ～、申し訳ないけど　うちの生徒をナンパするのはやめてね～。」

近藤は相変わらずのほほ～んとしながら言うが、こんな態度では当然なめられる。
2人の男子学生は近藤の態度に完全に油断しへらへらと答える。

「まぁまぁ。君もどう？俺らと一緒に夜景でも……！！？」

へらへらしていた男子の表情が強張る。

なぜなら、近藤が先までののほほ～んとした表情から真面目な顔つきになり、
さらに刀も抜いたのだ。

「こ、こいつ……」
「けっ！ちょっとかわいいからって付け上がりやがってよぉ！！！」

近藤の抜刀に、２人の男子学生も１人は腰の刀を抜き
もう１人はバックの中から二つの小型の斧を取り出し構える。

「刀と斧……武器を持てる身分でその黄緑色の制服
……あなた達“未戸学院”の生徒ね！？」

近藤の言葉に『だったら何だ』と返した２人の男子は同時に近藤に斬り掛かる。
刀を持った男子は低い体勢で近藤の足の脛を狙い斬り掛かる“脛斬り”
もう１人の斧を持った男子は上段から斬り掛かる。
その間に、剣はナンパされていた生徒を救出する。

「さ、こっちへ。」
「あ、はい……」

救出に成功した剣は、即座に懐から棒手裏剣を取り出し
刀を振るう男子の手元向けて投げ打つ。

「んなっ！！」

手裏剣は手元にかすっただけだが、手元を狂わせるには十分だった。
彼の振るう刀は威力とコントロールを失い、近藤が避ける隙が出来

る。
そしてもう1人の男子生徒の斧が近藤に迫るその瞬間――――

「はぁぁぁっ！！！」

近藤の刀は男子の斧をかわし、一刀の下に斬り捨てた……と言っても死んではない。
ほんの一瞬の間に刀身を逆にした事で峰打ちとなったのだ。

「がはぁっ！！？」

断末魔と共にその男子生徒は沈んだ。

「次は……！！」

そう言い近藤はもう1人の男子に目をやるが、
近藤の目に映ったのは白目をむいて倒れている男子の姿だった。
その光景に『ほえ？』と首を傾げる近藤。その近藤に剣は接近する。

「軽く殴ったら、気絶しましたよ、この人。」

剣の軽い説明に『そっか』とあっさり納得する近藤だった。
その近藤を見ながら剣は心の中で思う。

「（あれほど早い剣撃を繰り出せるなんて、真選組局長の名は伊達じゃないな。）」

真選組局長の片鱗を見た気がする剣であった。

とその一方で、近藤も近藤で剣の事で心の中で思っている事があった。

「（あたしが気づかない間に、仕留めるなんて。ツル君の速さは私以上なの？）」

そう疑問に思いつつも近藤はそれを表情に出さず、助けた生徒が愛津へ戻っていくのを確認し、自分も剣と甚と共に愛津へと帰還しようとした時だった近藤は道端を歩く沖田とゲンちゃんを見かける。

「あ、総ちゃ～ん、ゲンちゃ～ん。」

近藤の言葉に沖田とゲンちゃんは振り返り、笑顔で寄って来る。

「近藤さん、風上先輩、それに甚くんもお疲れ様で～す。」

「ニャー（ヤッホー）。」

2人の言葉に『おつかれ～』と返す近藤。剣もペコリと頭を下げる、とその時ゲンちゃんが『ニ”ャ！』と鳴きながら、愛津の方へと走って行ったのだ。

その出来事に、剣は『な、何だ!?』と驚く。

「“ゲンちゃんレーダー”に反応が有ったみたいですね。しょうがないな～。」

そう言い沖田はゲンちゃんの後を追って行き、近藤もその後を追う。

残された剣はポカンとしていたが、

『アニキ!!』という甚の呼びかけに正気に返り甚からある事を聞く。

甚が言うには、ゲンちゃんには愛津で起きた騒動を察知できる“ゲンちゃんレーダー”なる能力があり、それがゲンちゃんを六番隊である『猫まっしぐら部隊』の組長にしている所以らしい。

「でも何で甚がその事を知ってるんだ？」

「少し前に本人から聞いたんすよ。」

甚の言葉に『なるほど』と納得した剣は、現状況を確認する。

「（“ゲンちゃんレーダー”の効果が本物なら、愛津で何か起きたって事だよな……俺も行ってみよ！）」

そう考え、剣は先程の2人を追うように走って行った。

―愛津女学園　グランド―

剣が愛津の校門を越え、グランドに来て見ると討学派と佐学派の戦闘が繰り広げられていた。

「たぁぁぁっ！！」

「ちぇりゃぁぁぁっ！！」

「……ゲンちゃんが察知したのはこれか……」

騒動を見て剣が第一に思ったのはそれだった。

ふと、視線を横にずらすと先程　駆け抜けて行った近藤・沖田・ゲンちゃんがいた。

「皆さんは参加しないんですか？」

剣の言葉に振り向く3人。

「あの状況から見ると佐学派が押しているようだからね～、
それに私達がここにいるだけで、討学派達に対してそこそこ牽制になるのよぉ～。」

近藤の言葉に『そういうものですか？』と首を傾げる剣だったが、
その隣にいる沖田が目を丸くしているのに気づく。
その視線の先には、1人の討学派生徒がその戦闘に参戦していた。
小柄な体に似合わない斬馬刀を振り回す生徒
それは――――――

「あれは、伊織さん。それに……」

剣は伊織の後ろにいる黒い犬―信吾の姿を確認する。
信吾は伊織を援護するように動き、敵に牙を突き立てていく。

「やれやれ、信吾くんまで出てきちゃいましたか。
あんまりやりたくないんですけど、しょうがないですね～。」

そう言い沖田は『行ってきま～す』と、戦闘の中へと入って行く。

「はいはい、そこまでですよぉ。これ以上はボクが相手しますからぁ～。」

沖田の登場に、伊織は今までにないほど強く反応し斬馬刀を構える。
それを見た信吾は攻撃をやめ、後ろへと下がる。

「何だ？あの岡田って奴、先と剣気がまるで違うぜ？」

「無理もない。」

甚の疑問に答えたのは、いつの間にか後ろにいた土方であった。

「どういうことですか、副長さん。」

「あいつはな、入学してからずっと総詩ばかり狙って来たんだ。」

土方の言葉に『それは、なぜ?』と返す剣。

「多分、剣士の誇りだと思うわ。」

それに答えたのは近藤だった。近藤の言葉に『剣士の誇り』と呟く剣。

「なるほどね、体は小さくとも誇りはデケェって事か。」

甚の言葉に『あぁ』と返す土方。

そんな会話が流れる中、沖田と伊織はそれぞれ刀を構え対峙する。
沖田は刀を突き出すように構え、
伊織は低い体勢で斬り付けるような構えで対峙していたが
伊織が踏み込み横薙ぎをした瞬間――――――

――ガガガギィィンッ!

という鉄と鉄がぶつかり合う鈍い音と共に伊織の斬馬刀が宙を舞った。

「んなぁっ！！？」

突然の出来事に、甚はあんぐりとクチバシを開けたまま固まった。
そりゃそうである沖田は、“たった一回突きをしただけ”なのだ。
たったそれだけの筈なのにあの巨大な斬馬刀が吹き飛んだのだ、
驚かない方がおかしい。
だが、甚の主である剣は確かに驚いているのだが、同時に何かを考えている。

「（たった一回の突き？いや、あの音はどう聞いても一回の突きで出る音ではない。
そう、まるであれは……）」

考えが纏まった剣は、土方と近藤に鎌をかけることにした。

「近藤先輩、副長さん。お聞きしたい事があります。」

剣の言葉に？マークを出す近藤と土方に、剣は口を開く――――――

「総詩さんは、あの一瞬の間に何回突いたんですか？」

「「！！」」

剣の言葉に近藤と土方は目を丸くする。
その隣で、甚は『どういうことっすか？』と剣に尋ねる。

「音だよ。」
「音？」

剣の言葉にキョトンとなる甚。

「俺は忍びの訓練を受けて、五感が常人の数倍は効く。
確かに俺には総詩さんの突きは一回突いたようにしか見えなかった。
」

剣は『だが』と一旦言葉をきり、近藤と土方に視線を向ける。

「あの音はどう聞いても一回の突きで出る音じゃない。例えるなら、
まるで1人の剣士が1本の刀で数人の剣撃を同時に受けたような音
だった。」

剣の言葉に『それって……』と、甚は剣の考えに気づく。

「これが意味をするのは唯1つ
総詩さんの突きは一回のように見えただけで、
本当はあの一瞬の間に大体3~4回は突きを繰り出している。」

そう言い剣は『違いますか?』と近藤と土方に尋ねるが、
当の2人は驚いた表情をしている。それがすでに答えを表していた。

「ありゃりゃ、ボク“三段突き”見破ちゃったんですか。」

驚く2人に代わり答えたのは総詩だった。

「三段突き……じゃぁやっぱり。」
「えぇ、でもすごいですね風上先輩。この技を見抜けた人は今まで
いなかったけど
音でそれを判断した人は初めてですよ~。」

「え？あー、まぁ、普通はそうでしょうね。」

そう言い剣は苦笑いをした。その一方で近藤と土方、
それに表には出していないが沖田も剣の察知力に驚いていた。

「（先、私が気づかない内に未戸の生徒を倒した時もそうだったけどひょっとしてツル君は、まだ一度も全力で出したことが無いのかも……）」

「（まさかボクの三段突きを初見で見抜いちゃう人が現れちゃうとは思いもしませんでしたね～）」

「（こいつ、底が知れん奴……）」

3人がそれぞれ思いに耽っている中、伊織が再び斬馬刀を構える。

「伊織さん？」

「伊織は総詩を倒す。剣に懸けてきたのは、お前だけじゃない。」

その姿を見た土方は総詩に言い放つ。

「総詩、分かっているな？」

「敵前逃亡は士道不覚悟。やれやれ忘れやしませよ。」

めんどくさそうに答えた総詩は、再び剣を構える。
お互いが対峙し、すぐにまた伊織が踏み込む。
総詩の刀―菊文と伊織の斬馬刀―忠吉がぶつかり合いそうになった、
その瞬間――――――

「そこまで！！」

そのぶつかり合いを止める者がいた。
それは小太刀で総詩の菊文を受け止め、裏拳で伊織の忠吉を殴り返す剣だった。
その電光石火の動きに、剣の隣にいた近藤と土方はもちろんの事誰も反応する事が出来なかった。

「伊織さん、あなたが剣に懸けて来たのはよくわかります。
ですが、先程の総詩さんの剣撃を受けて分かったはずです。
今のままでは勝てないと。」

剣の言葉に『むぅ』と言葉を失う伊織。
そう、強者であればこそ相手との実力差も分かってしまうのだ。

「相手との実力差を理解し、あえて引くのも剣客として大事な事だと思います。
それと、引いて頂けるなら焼きそばパンを奢ります。どうです？」
「！！」

剣の言葉に終始無言だった伊織が、焼きそばパンという言葉に反応する。

「……いくつだ？」
「ふむ、５個でどうでしょう？」

剣の言葉に伊織は潔く斬馬刀を引き、それを見た総詩も剣を納める。
その光景に周りにいた一同の緊張が解け、『ふぅ』と息を漏らす。
……約１名を除いては。

「ちっ！風上め、余計なことを。」

やっぱりこの人、土方である。

「まぁまぁ歳ちゃん、平和的に解決するのに越した事はないんだから。」

「そうですよ～、風上先輩はどこぞのオニのよーな副長さんと違って優しいんですよ～。」

「ニャー（そうそう）。」

近藤・沖田・ゲンちゃんに口々にそう言われて体をプルプル震わせる土方。

その状況を、甚はケラケラ笑いながら見ていた。

その一方で剣は、伊織に腕を引っ張られていた。

「さぁ、約束だ剣。購買部へ行くぞ。

今すぐに、間を置かず、風の様に、さあさあさあ！」

購買部で焼きそばパンが食える事に胸を膨らます伊織に、剣はニッコリと微笑みながら『はい』と返す。

「信吾さんもどうでかす？」

「バウッ（わしは焼きそばパンよりホットドッグの方が良い）。」

信吾の言葉に『そうですか』と返した剣は、不意に引っ張られる力が弱まってる事に気づく。妙に思った剣が視線を伊織に向けると伊織は剣に視線を向けたまま、顔を赤くしていた。

「？伊織さん、顔が赤いですよ。熱でもあるんじゃぁ……」

「！！」

心配した剣が顔を近づけると、伊織は顔を逸らしこちらを見ようとしなくなる。

「伊織さん？」

「……何でもない、気にするな。」

伊織の言葉に『そうですか？』とキョトンとなる剣。

その近くで甚と信吾はヒソヒソと会話をしていた。

「あちゃぁ、まさか無表情な伊織までアニキの笑顔にやられたか。」

「バウ（まぁ、伊織も女って事だ）。」

信吾の言葉に『そういうもんか』と返し、ため息をつく甚。

くどい様だが、剣の笑顔は本人に自覚がない分、その威力もかなり高い。

いかに伊織が剣一筋に生きてきたとは言え、やっぱり女子だ。

剣の笑顔で落ちない女子など殆どいないだろう。

もちろん剣はそんな事に気づいておらず、そのまま購買部へと向かう。

その動きに付いて行こうとする者が1人、近藤だ。

「あ、待ってツルく～ん、私も食べる～。」

そう言い剣達の後を追う近藤。

「そえじゃあボクも行きますか、体動かしたらお腹減っちゃいましたし。」

「あの程度が動いた内に入るか！」

沖田の言葉にツッコミを入れる土方。
その後、結局近藤に続き土方と沖田も購買部へと向かい、全員で色々食べたという。

―愛津女学園　学園寮内・屯所―
あの後、購買部から帰って来た剣達は寮内での真選組の集合場所、“屯所（とんしょ）”で
未戸の学生達の事を説明していた。

「なるほど、最近未戸の連中による被害が相次いでいるからな。
我ら真選組のいるこの地域でナンパするとは、これだから男は！！」

土方は吐き捨てるように言い『今後はもっと見廻りを厳重にせねば』と
拳を握り締めながら近藤の方を向くが、そこにいるはずの近藤がいなかった。

「って、あれ？近藤……さん？」
「土方さん、近藤さんならあっちですよ～。」

沖田の指差すほうを見る土方。そこには、剣に話しかける近藤の姿があった。

「何してるのツル君？」
「あ、いえ、アレを見ていたんです。」

剣が指差して方には、『局中法度』と書かれた紙の入った1つの額

縁があった。

「これは、“局中法度（きょくちゅうはっと）”って読むんですか？」

「つーか何だよそれ？」

剣と甚の言葉に、『あ～それはね～』と答えていく近藤。

近藤が言うには、『局中法度』とは真選組における鉄の掟であり、ここにある五箇条は例え局長や副長であっても破ってはならないらしい。

その五箇条はそれぞれ

一、士道に背きまじきこと（士道に背いてはならない）

一、局を脱するを許さず（真選組からの脱走を禁ずる）

一、勝手に金策いたすべからず（私的な金策は禁止）

一、勝手に訴訟を取り扱うべからず（勝手な訴訟の禁止）

一、私の闘争を許さず（私闘の禁止）

右の条々に背候者は切腹申付べく候也（右の掟を破った者は切腹すべし）

である。

「ちょっと待てや、『掟を破った者は切腹』って何よ？」

甚の言葉に『あぁ』と返す近藤。

「切腹と言っても、別に『腹を切る』って事じゃないの。

ただ、組長格の皆に『自腹を切る』、つまり奢るって事なの。」

近藤の言葉に『なるほどな』と返す甚。

「そうか、それじゃあ総詩さんが言ってた『敵前逃亡は士道不覚悟。』って……」

「敵を前にして逃げるのは士道不覚悟として切腹です、さすがに近藤さんや原田さんに奢ったらお財布が空っぽになっちゃいますからね～。」

総詩の言葉に『なるほど』と納得する剣。

とそこに『あ、そうだ！』と何かを思い出したように近藤が剣にあるものを渡す。

「近藤先輩、これは……？」

剣が近藤に手渡されたもの、それは金色に輝く５００円玉だった。

「ツル君、不逞生徒倒してくれたでしょ？それに伊織ちゃんを止めてくれた、だからそれは戦闘の雇い代♪」

近藤の言葉に『なるほどな』と返す甚。だが剣はその５００円玉を近藤の手へと返す。

「ほえ？ツル君？」

「折角ですけど、そのお金は受け取れません。」

剣の言葉に、近藤と甚を含めた面々は驚く。

「き、貴様！近藤さんが折角お前のような奴に金を払ってやるというのに！！」

怒鳴る土方に『ですが』と淡々と返す剣。

「実質俺は、見廻りの際にたまたま戦闘しただけです。
別に誰かに雇われたわけでもなく自分の意思で戦闘したのにお金を貰うというのは
少し筋が通らない気がしますよ。」

剣の説明に『なるほど』と納得する面々。

「それにしても、風上先輩って本当に律儀ですねぇ～。ちょっと惚れちゃいますぅ。」
「ニャー（うんうん）」
「今時いないよー、そんな事言う男子。剣、あんたってば良い子だね～。」
「……欲とかないの？」
「あたしだったら絶対貰ってメシ代にしてるぜ？」
「風上先輩、優しすぎます」
「剣さん、感謝の証として受け取っては貰えませんか？」
「クルックー（そうだぜボウズ）」

皆が口々に言うが剣は遠慮ばかりする。

「いいですよ、お礼でしたら今度　缶ジュースでもおごって下さい。」
「せやせや、お礼やったら風っつぁん代わりにワイがもろうて……」
「お前は黙ってろ！」

カンリュウサイの余計な言葉に速攻で斬る土方。『あぎゃぁ――――！』と
カンリュウサイの断末魔（？）が響く中『う～ん』と何やら考えて

いる近藤は
何かを閃いたように剣の手を取る。

「ふぇ！あ、あの、近藤、先輩？」

近藤の行動に驚く面々。特に手を握られた剣は顔を赤くし焦る焦る。
だが、近藤は全く気にせず剣の手を握ったまましゃがむ。

「お金は受け取らなくていいから、気持ちと言う名のお礼は受け取ってね♪」
「ふぇ？」

近藤の言葉が理解できずキョトンとなる剣だったが、
近藤の口を剣の手に近づける行動に体が震える。

「（や、やばい！俺の第六感がそう言ってる！）」

そう思った剣だったが、近藤はそんな剣の心理を察する事など出来るはずもなく
剣の手に、軽くキスをした。
その行動に剣は赤面し、他の者達も唖然となった。

「えへへ～、男の子ってこうされると嬉しいって聞いたから～。
でも口付けやほっぺにするのは恥ずかしかったから手にしたの、いけなかった？」

無邪気に聞いてくる近藤だったが、当の剣は赤面したまま全く動かなかった。
否、動けなかった。近藤のあまりに無防備な行動と自分の色恋や女に対する体質から

赤面したまま石化したように固まってしまったのだ。
周りにいた者達も唖然としていたが、ここで真っ先に動いたのがやっぱりこの人、土方であった。

「風かみいいいいいいいっ貴さまあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
「…ふえぇぇ……？」

土方の殺気と言葉に意識を取り戻した剣は、鬼の形相でこちらを睨んでくる
土方の存在に気づく。

「ふぇぇっ！ちょ、ちょっとお待ちを副長さん、話せば分かる！」
「何をどう分かれと言うんだぁぁぁっ！！！」

問答無用で斬り掛かる土方に対し、剣は速攻で屯所から逃げ出して行った。

―愛津女学園　グランド―
「ふぅ～、酷い目にあった……」

夜の校庭で、剣はそう呟く。
あの後、何とか逃げ切り近藤の仲介もあった事で事無きを得たのだが、
その後も食堂などで常に睨んでくる土方の視線がとても痛かった。
そこで気を紛らわすために外に出た剣だったが、そこで思わぬ人物を見つける。

「（近藤先輩？）」

そこには、私服に着替えた近藤の姿があった。
近藤は剣の接近にも気づかず、星空を見上げている。

「近藤先輩。」

剣の呼び掛けに、ようやく剣の存在に気づいた近藤は目を丸くしたがすぐにいつもの笑顔に戻る。

「ツル君も、星空を見に来たの？」
「えぇ、まぁそんな所です。」

そう言い剣と近藤の２人は夜空を見上げる。

「（お、蠍座に琴座だ。もうすっかり夏だな。）」
「……ねぇ、ツル君。」

星座に見入ってると、近藤が剣に話し掛けて来た。
剣はニッコリと『何ですか？』と返す。

「……ツル君は、共学化を進める為にこの愛津女学園に来たんだよね？」

近藤の言葉に『え？』とキョトンとなる剣。

「えぇ、まぁ一様そうですけど（あんまり乗り気じゃないけど）。」
「そうだよね、でも……」

近藤はそこで一旦言葉を区切り、空を見上げながら言い放つ。

「ごめんねツル君、それだけは認めてあげる訳にはいかないんだ～。」

そう言う近藤の表情はいつも通りの柔和な笑顔。
だが、その瞳の奥に信念とも言える光が見え気がした剣。
剣は思い切って聞くことにした。

「近藤先輩。あなたは何故、共学化に反対なんですか？」
「……」

剣の言葉に対し、近藤は剣を見据える。その態度で剣は瞬時に理解した。
『今はまだ話せない』と。それを理解した剣は、これ以上　問うのを止めた。

「さ、それじゃ～ツル君、そろそろ寮に帰ろっか。」

近藤の言葉に剣はコクリと頷き、近藤と並んで寮へと帰って行った。

所変わって、ここは愛津校舎の屋上。ここに、不気味に笑うあの男がいた。

「くひひひひ、今日も特に変わりなしか。
剣の奴、相変わらず女とのトラブルに巻き込まれやすいな。」

悪魔のような顔をした男は、ポケットから携帯を取り出し電話を掛ける。

「あーじじい、俺だ。……あぁいつも通りだよ、やはり奴の体質はそう簡単には変わらんようだ。……あぁ、もうしばらくな、じゃあな。」

会話が終わり携帯をしまった男は、再び暗闇へと消えて行った。

『～第十章～　近藤のダイエットと沖田の才能　《終》』

～第十章～　近藤のダイエットと沖田の才能（後書き）

十一話目完成です。またも登場、謎の男。本当に何者なのか。
とまぁそれはさて置き、今回は近藤と沖田の物語を書いた為いつもより長めになりました。
今後もしばらくはこの位になるでしょうが、がんばりマース！
ではでは、また次回に～。

～第十一章～　やちと原田、凸凹コンビの悩み

―杏の町・愛津駅付近―
今日もまた、生徒達による内戦が勃発していた。

「たあぁぁっ！！」
「せやぁぁっ！！」

剣劇の音と剣士達の声が木霊する中、段違いの強さを見せる2人の女子生徒がいた。

「はあぁぁっ！」

1人は、真選組の羽織を着用し栗色のセミロングの髪を揺らす抜刀術使い、
真選組二番隊組長　“永倉　やち”。

「おらおらぁっ！！」

もう1人は、同じく真選組の羽織を着用し赤い長髪を揺らす十文字槍使い、
真選組十番隊組長　“原田　紗乃”。
この2人の猛攻に討学派達は圧されていた。

「くっ！！仕方ないわ、ここは一旦……ん？」

退却しようとした1人の討学派生徒が、1人の男子生徒がやって来るのを見つける。
颯間の紺色の学ランに身を包み、白銀の髪と肩にカラスを止めてい

る姿から、
討学派生徒はその学生が誰なのかを把握し、駆け足でその学生に接近する。

「風上くん！！」

討学派生徒に風上と呼ばれた学生―剣は『ふぇ？』と振り返る。

「風上くん！突然で申し訳ないけど、今すぐ私に雇われてもらえない！？
今、私達の形勢が不利なの！！」

女子生徒の接近に当初は驚いていた剣だったが、事情を察知し懐から白い字で『討学』と書かれた黒いリストバンドを取り出し、右腕に装着する。
これは、どちらに雇われているのかを区別するためのバンドであり、『討学』なら黒の『佐学』なら青のリストバンドを装着するようにしているらしい。
剣はリストバンドを装着した後、今度は紐の付いた苦無（クナイ）を取り出し原田の手元を目掛けて投げ打つ。

「っ！！」

その攻撃に気づいた原田は、咄嗟に身を引いてかわす。
それを見た剣は苦無の紐を引っ張り苦無を手元に戻し、今度は小太刀を抜き構える。

「へへ、来てたのかよ風上。」

剣の出現に原田は、まるでおいしい獲物を見つけたかのように微笑

む。というのも、
剣が来たあの日、真選組御前試合で剣に負けて以来リベンジを狙っているのだ。

「えっと、随分、嬉しそうですね……」
「へへ、当ったり前よ！お前にリベンジできるのかと思うと嬉しくてよ！」

剣の言葉にニヤッと笑いながら答える原田。
その原田に『アニキが負けるわけねぇのに』と皮肉をこめて返す甚。
だが、原田は甚の言葉に全く意に介さず剣に突撃していく。

「……何と言うか、ワンパターンだなおい。」

甚の言葉に苦笑する剣。なぜなら、原田の攻撃パターンは殆ど同じで『相手の動きを読む速さ』を備える剣には、何度やっても負ける気がしないのだ。

「まぁ、とりあえず雇われた以上はやるよ。それと甚…」

剣の言葉に『言われなくとも』と返した甚はどこかへと飛び去って行った。
それを確認した剣は突撃してきた原田の槍を小太刀で受け止め、そのまま槍を蹴り上げる。

「あぐっ！」

そのまま剣は原田を押しのけて、今度はやちと対峙する。

「へぇ～、紗乃をあっさり打ち負かすなんてねぇ～。さすがね剣！」

やちの言葉に『あ、どうも』と返す剣。

だが、話し終えたやちの顔から笑顔が消え、その目には殺気が篭る。

「でも、あたし達　真選組の敵になるってんなら容赦しないわ。」

そう言いやちは、腰を落とし体を横向きにするように構える。

その構えから剣はやちの行動を読み取る。

「……抜刀術、ですか。」

剣の言葉に『ふふ』と不敵に笑うやち。

「ご名答。もっとも、あたしの“龍飛剣（りゅうひけん）”を防げるかは疑問だけどね？」

そう言いとやちは一直線に剣に向かって駆け出し愛刀―氏重を抜き放った――――

「はあぁぁぁっ！！」

やちは低い体勢から上に向けて刀を抜き放った。

その太刀筋は、まさにその名の如く天へ飛び立つ龍。普通の者ならその速さについて行けずやられていただろう。だが、やちの不運は相手が普通じゃなかったという事だ。

「――――――なっ！？」

やちは我が目を疑った。
斬り付ける相手の剣は、やちが斬り上げた刀の柄頭を踏みつけ高く跳び上がったのだ。

「――――――ふっ！」

その高さを利用し、剣は懐から取り出した手裏剣を投げ打つ。それはまさに、鉄の雨。

「うそぉっ！！マジでっ！？」

その攻撃を何とか地面を転がりながら避けたやちは、何とか体勢を立て直すが
地面を転がり、視線を剣から逸らした僅かな一瞬が命取りとなった。

「！！（剣がいない！？）」

やちが視線を上空に向けた時、そこに剣の姿は無かった。

「（くっどこに……）！！」

そして、気づいた時には手遅れだった。
やちが後ろを向いた時、すでに剣が小太刀をやちの首筋に向けていたのだ。

「（は、速い……）」
「……俺の勝ちです、引いて下さいやちさん。」

剣の言葉に『やれやれ』と手を上げたやちは降参した。

「くっそー！やちまでやられたのかよぉー！！」

やちの敗北に悔しそうに吼える原田。それを見た討学派は、一気に攻めようとする。

「よしっ！今がチャンスよ！一気に攻めて……」

「そりゃ無理だぜ！」

不意に上空からそんな声が聞こえ、一同は視線を上に上げる。

そこには、上空に静止している甚がいた。

「アニキに言われてちょっと見てきたんだが、来てるぜ！真選組の援軍が！！」

甚の言葉に『なにっ！？』と動揺する討学派。

「やっぱりな。大方そんな気はしてた。」

討学派達が動揺する中、1人援軍を予想していた剣は落ち着いて討学派のリーダー格の生徒に呼びかける。

「宮部（みやべ）さん、でしたよね？さすがに援軍が来るとこちらが圧倒的に不利です。

ここは一旦引いた方がよろしいかと。」

剣の言葉に『仕方ですね…』と冷静に状況を把握した宮部は、討学派メンバーに撤退命令を下す。ここで剣は、さらに言葉をつける。

「俺は万が一に備えて、ここで殿（しんがり）をします。」

殿…即ち、撤退で最後尾を勤める危険な役だ。
剣の申し出に宮部はコクリと頷き、剣の手を握った。

「風上君、殿は危険だけど、がんばってね！」

宮部の行動にポカンとしていた剣だったが、
宮部が自分の事を心配してくれてるのを理解し、ニコッと微笑み返す。

「ありがとう宮部さん、心配してくれるんですね。俺は大丈夫ですから。」

剣の優しい言葉と笑顔に、顔を真っ赤にさせる宮部。
その光景を、甚は討学派メンバー達と共に見ていた。

「またアニキの笑顔の犠牲者が……」
「宮部さんいいなぁ～。」
「はぁぁ、私も言ってもらいたいなぁ～。」

討学派達が羨ましそうに見つめる中、原田が槍を構えていた。

「へへ、お前が殿ならまだ戦えるって事だよなぁっ！」

剣とまだ戦える事に原田は嬉しそうに槍を振り回す。
その原田の行動に、甚は『おいおい』と呆れ気味に見つめるが、
剣は『好都合だ』と呟く。

「紗乃さんの目的が今も尚俺へのリベンジならば、
尚更　俺が殿をした方が都合がいい。」

剣の言葉に『そうですかい』と返した甚は
羽毛から棒手裏剣を取り出すが剣に止められる。

「お前は討学派の皆さんの撤退が成功した事を俺に伝える伝令になってくれ。」
「なるほど、さすがはアニキ。」

そう言い甚は撤退していく討学派の後を追いかけて行き、
それを確認した剣は、原田とやちに向き合い小太刀を構える。

「そういう訳ですので、お相手します。」
「へへ、上等だ！うおりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

原田は嬉しそうに槍を振り回し突撃して行くが、剣は『さっ』とかわす。

「紗乃！あんたの攻撃はワンパターンすぎるのよ！ここはあたしがやるよ！」

そう言い放ち、やちは剣に向かって斬り込むがこれもあっさりとかわされる。

「くっ！」
「うおぉぉぉぉっ！」

その後も2人は剣に攻撃をして行くが、どれも全てかわされて行く。

「（よし、行ける！）」

剣は心の中でそう呟いた。

剣には策があった。紗乃とやちは剣を倒そうと全力で攻撃して来るが剣はそれを最小限の動きで避けている。そうなれば、全力を出している2人の方が
剣よりも体力の消耗が激しくなる。こうなると、剣が圧倒的に有利だ。
いかに鍛えられた剣客と言っても、相手は所詮は非力な女子だ。
男である剣の方が体力はある上に、剣は最小限の動きしかしていないから
体力の消耗も少ない。紗乃とやちは、完全に剣の術中にはまった。

「くぅっ！」
「くそぉっ！」

2人の体力消耗は、誰の目から見ても明らかだった。とその時――

「杏都守護職（きょうとしゅごしょく）・愛津園長御預（あいづえんちょうおんあず）かりっ！真選組（しんせんぐみ）っ！！」

「「副長！！」」

高々な声と共に、“鬼の副長”こと土方率いる援軍が駆けつけてきた。

「副長さんが率いてきた援軍……副長さんを含めて、大体18人くらいか……」

剣がそう呟く中、土方は討学派の主要メンバーがすでに撤退し

剣が殿をしているのを原田とやちから聞き、すぐさま剣を取り囲む陣形を取る。

「……真選組十八番の“群狼殺法”ですか……」

そう言い剣は小太刀を構える。

群狼殺法とは、その名の通り“群を組んだ狼”のように相手を取り囲む

真選組の十八番戦術である。これが、彼女達が“蒼の狼”と呼ばれる所以でもある。

「ここは私達と原田がやる。やち、お前は隊の半分を率いて討学派を追え！」

土方の言葉に『了解！！』と返した2人は、それぞれ原田は陣形に参戦し

やちは剣の横を通って行こうとする。

が、剣も雇われた以上は任務を遂行する男。そう簡単には行かせない。

「させるかっ！！」

剣は跳び上がる事で陣形から抜け出し、やち達の部隊に1枚の札を投げ打つ。

「え！？」

「げっ！それって……」

「貴様それは……」

それを見た面々が驚きの表情を上げる中、札が光だした。

「“摩方流護符術（まがたりゅうごふじゅつ）・結界札（けっかいふだ）”発動！！」

剣の言葉と共に札の輝き、道の前に薄い壁のようなモノが出来た。

「これって……」

「頼子のと同じ、結界じゃねぇか！？」

やちと原田の言葉に『え？』とキョトンとなる剣。

今の言葉からすると、頼子もこの結界がはれるという事になる。

「（どういう事だ？頼子さんもこの札を持っているのか？）」

剣はやや考えていたが、考えても分からないと判断し結界の前に立つ。

「この結界がある限り、ここは通れませんよ。」

剣の言葉に『ふん』と鼻を鳴らす土方。

「貴様がなぜ頼子の札を持っているかは知らんが
その結界に貼られている札を剥がせば、結界は消えるはずだ！全員、奴を取り囲め！」

土方の指示と共に、佐学派メンバーが剣を取り囲もうとするが
剣はいち早く懐から煙玉を取り出し、佐学派メンバー達に投げつける。

「ゲホッ!!ゴホッゴホッ!?」
「コホッ!!ケホッ!!何も見えないっ。」
「ゲホッゲホッ!くっそー!!」

佐学派達が煙幕に悪戦苦闘する中、唯1人土方だけが冷静に行動をしていた。

「（ふん、毎回毎回煙玉とは芸のない奴め。）」

ハンカチをマスク代わりにして煙幕から抜け出た土方は、結界の札に視線を向ける。

「あれさえ剥がせば…!!」
「そうは行きません!」

結界の札に手を伸ばす土方だったが、剣が投げた手裏剣がそれを阻む。

「ちぃっ!」
「たぁぁっ!!」

手裏剣を避けた隙を狙い、剣は土方に斬り掛かったが
土方もまた愛刀―兼定で受け止める。2人は、硬直状態となった。

「……なぜだ…」
「？」
「なぜ貴様が頼子と同じ札を持っている!?」

土方の言葉に『頼子さんと同じ?』とキョトンとなる剣。

「この札は、“摩方流（まがたりゅう）”に伝わる札です。頼子さんのモノではない！」

剣の言葉に『なにっ！？』と返す土方。その目は、信じていないという目だった。

「信じてはもらえません…かっと！！」

「ぐっ！！」

剣は小太刀に勢いをつけ土方を押し返し、
その勢いを利用し跳び上がり電信柱の天辺へと上り詰める。

「くっ！猿か貴様！！」

「まぁ、忍びですので。」

そう剣が返した時、『アニキー！！』と言う声がし
剣が声のした方へ視線を向けると、学園の方から甚が飛んで来た。

「甚！」

「アニキ！討学派メンバーの撤退、完了いたしやしたぁっ！！」

甚の言葉に『そうか！』と返した剣は、結界札に向けて手裏剣を投げ打つ。
手裏剣は札を貫き、札が結界から剥がれると同時に結界が消えていく。

「では、自分はこれにて！」

そう言い剣は、電信柱から家の屋根から屋根へと跳んで行った。
それを呆然と見つめていた土方は『くっ』と歯軋りを立てる。

その後、煙幕がはれ全員の無事を確認した佐学派メンバーは愛津へ帰還した。

―愛津女学園　校舎・生徒会室―

その日の放課後、真選組幹部メンバーは今日の昼休憩に起きたことで話し合っていた。

「あらあら、それじゃあ歳ちゃん達の帰りが遅かったのはツル君に苦戦したからなの？」

近藤の言葉に『苦戦してない！』と言いたかった土方だったが、生真面目な彼女がそんな事を言えるはずも無く、ただ悔しそうに歯軋りをした。

「にしても、土方さん達の話を聞く限りじゃあ確かにおかしいですね。」

「そうですね。どうして風上先輩は松原先輩と同じ御札を持ってたんでしょう？」

沖田と芹栖の言葉に全員が頷く。

そう、ここにいる誰もが疑問に思ってる事がそれだった。

実を言うと頼子の実家は代々続く寺であり、頼子はそこの巫女として薙刀以上に

法術や護符術などを得意としているのだ。

その為、度々頼子は札を使い真選組を援護しているのだ。

その頼子のモノと同じ札を、なぜ忍者である剣が持っているのかが謎なのだ。

「……頼子、お前奴に札を渡したのか？」

土方の言葉に左右に首を振る頼子。

「んじゃあ、一体どうして……」

「……奴は確か『“摩方流”に伝わる札だ』と言っていたが……」

「え？」

土方の言葉に、頼子は目を丸くする。

「副長さん、今なんて……」

「ん？」

頼子の言葉にキョトンとなる土方。他の面々も、普段は余り意見を言わない頼子が
身を乗り出して土方に聞こうとしている姿に驚く。

「ですから、今、剣さんがなんて言ったんですか？」

「あ、あぁ、だから『“摩方流”に伝わる札だ』と言ってたが……」

「！！」

土方の言葉を再確認した頼子は『やっぱり…』と呟く。その姿を確認した近藤は頼子に語りかける。

「頼子ちゃん、何か知ってるの？」

近藤の言葉に『…はい』と静かに返す頼子。

「摩方流……昔、その名を父から聞いたことがあります。」

頼子は、静かに語りだした。

頼子の話によれば摩方流（まがたりゅう）は、戦国時代の破戒僧が作り上げた忍術流派らしい。
その破戒僧のもつ陰陽術や法力・護符術に忍者の身体能力などを組み合わせた異形の流派であり、その異端の能力ゆえ常に裏に徹したと言われており
その能力から期待を集めた他、破戒僧が作った流派だけに寺などでも活躍したらしいが
創設者が破戒僧だけに寺の者からは忌み嫌われていたらしい。

「……なるほどな、その流派なら確かに札を持っていてもおかしくない。」

頼子の説明に、土方を始めに真選組メンバーは納得しコクリと頷く。

「しっかし、参ったわねー。剣ってば腕っ節だけじゃなくそんなモノまで使えるなんて、どうするんです副長。」

やちの言葉に『ふむ』と唸る土方だったが、『大丈夫よ～』と近藤がのほほんと返す。

「ツル君はあくまでも傭兵として戦ってるだけだから、今度は大丈夫だよ～♪」

近藤の言葉の意味がいまいち理解できない面々は頭上に？マークを浮かべる。
とそこへ――――

「すみませーん。」

軽いノック音と共に、生徒会室の扉の向こうから声が聞こえる。

「あ、来た来た！うん、どうぞー。」

近藤の言葉の後に『失礼します』と声が聞こえ扉が開く。
そこには、先程の話に上がっていた剣と甚がいた。

「なっ！？」
「あ、どうも。」

驚く土方に剣はペコリと頭を下げる。

「こ、近藤さん！これは一体……」

驚く土方に『んとね～』と説明をしていく近藤。

近藤が言うには、昼休憩の終わり頃に剣とバッタリ出会った近藤は先程討学派に雇われたことを聞き『それじゃあ放課後は佐学(こっち)派に雇われてね♪』
と剣にお願いした所『ふぇ？』とキョトンとしていた剣だったが、結局承諾したらしいのだ。

「一体何をどうやったらそういう事になるのか、イマイチ俺には分からねえけどな。」

甚の言葉に、近藤と剣を除く面々が『うんうん』と頷き同意する。

「まあまあ、とりあえず放課後はツル君がこっちの味方になってく

れるんだし
今日はもう大丈夫でしょ～？」
「こ、近藤さん。先程の言い分はそういう意味ですか。」

近藤の考えを理解した土方は一筋の汗を垂れ流す。
つまり近藤は、討学派が雇うからこちらが不利になるなら、
向こうよりも先にこちらが雇えばいいという考えなのだ。

「なるほど、風上先輩は人がいいですからね。
ボク的には雇っても問題ないと思いますよ。その分ボクがサボれる
訳ですしね～。」
「サボるなっ！！」

沖田の言葉に即ツッコミを入れる土方。だが、他の面々も剣を雇う
のに賛成のようだ。

「そうですね、剣さん頼りになりますし。」
「ん～。リベンジするのもいいけど、こいつと一緒に戦ってみるの
も面白そうだな。」
「あんたはそれしか考えないのかい？剣、ここはこのやちさんと一
緒に見回りしよ？
いい男に育ててあげるからさぁ♪」
「えぇっ！？じゃ、じゃあ、明日は私が風上先輩と一緒に見廻りを
してもいいんですか！？
そしてそのままラブホテに行き、２人は１つになるんですね！！？」
「…落ち着け、誰もそんな事言ってない。」

皆、言ってることは色々あれど、とにかく剣は
真選組に雇われる事となったのであった。

「んで、何で俺達ここにいるんすかねアニキ。」
「さぁ？」

甚の言葉に対しそう返す剣。というのも、剣達がいあるのが商店街の花屋だからだ。
さらに隣には、やちと原田がいる。

「さぁ、この花を見て女らしい事を言ってみなさいよ紗乃。」
「うへぇ～。」

やちの言葉に不服そうに返す原田。

なぜ、こんな状況になっているのか。それは今をさかのぼる事２０分前、
生徒会室にて誰と一緒に行くかを迷った剣は、
八忍隊の仲間の１人に似てるという理由で原田を選ぶが、
それに不服なやちが同行して見廻りを開始した。
その最中に、原田が桂を見て『女らしい』と呟いたのをキッカケに、
やちによる『原田乙女化計画』が実行されたのだ。それでまず、
花屋の花での女らしさを探る事となったのだ。

「大体ね、紗乃はガサツ過ぎるんだよ。もう少し雅な女になる努力をしなきゃ。
そう、このあたしのようにね！」
「風上ー、なんか食いモンねぇー？」
「紗乃さん、先ハンバーガー食べたばかりでは……」
「こりゃ完璧、女になった勇（イサム）の旦那だなおい。」

原田はやちの言葉を全く耳に入れず、剣に食事を要求していた。

「て聞け――――っ！！」

やちの怒鳴り声に『うへぇ～』と不服そうに返す原田。

「剣も言ってやってよ！そのガサツな性格を、やちさん見たいな雅で女らしい
性格にしたほうが良いって！」

「ふぇっ！？」

不意にそんな話をふられ、この手の話が苦手な剣は回答に困り果てる。

「ん～……、確かにやちさんが言う事には一理あると思います。でも……」

一旦区切った剣に『でも？』と首を傾げるやち。

「でも、紗乃さんはそのままでも良いと思うんです。」

「え？」

剣の言葉の意味が理解できず、頭上に？マークを浮かべる原田とやち。

「俺は女らしさとかはよく分からないんですけど、
大事なのはその人の個性だと思うんです。やちさんが雅を愛でるように、
紗乃さんは戦う事と食べる事を愛でる。

どちらも個性でありどちらの個性も長所と短所がある
それを理解し受け入れる事も大事だと思うんです。」

剣の言葉に原田は『なるほど』と納得するが、
やちは『ふーん』と何やら思いついたような目付きで剣に近づく。

「んじゃあ、剣は紗乃のガサツな性格の何処が長所だと思うの？」

突然のやちの質問に『ふぇ？』とキョトンとなる剣。

「んだってね～、そこまで言うなら剣はちゃんと長所とか理解してるんでしょ？」

やちの言葉に『は、はぁ』と力なく返した剣は
原田に視線を向けしばらく考え出し、やがて口を開きだす。

「…そうですね……紗乃さんの長所は、頼りがいがある所、ですかね。」
「頼りがい、か？」

原田の言葉に『はい』と返す剣。

「この前も見たんですが、紗乃さん下級生に救援をよく頼まれますよね？」

剣の言葉に『あぁ』と返す原田。

「それって、紗乃さんが頼りがいがある証拠だと思うんです。
自分に素直でいつだって全力で行動する。誰の頼みでもあっさりと聞いてくれて

だから皆が頼ってしまう。こういうのを何て言うんだろう……そう、姉貴肌って言うのかな？紗乃さんはきっと、そういう所が魅力なんだと思います。」

「「……」」

剣のあるがままの言葉を聞いていたやちと原田はそれぞれ、やちはポカンとなった表情で原田は顔を若干赤面し聞いていた。

「…？あの、２人共？」

そんな反応の２人に、剣は自分の言葉がいけなかったのではと思い声を掛ける。

すると、ここで言葉を発したのはやちだった。

「……剣、あんた言ってて恥ずかしくないの？」

「ふぇ？何がです？」

やちの言葉に対し剣はキョトンとなり、その反応にやちは一筋の汗を流した。

その一方、原田は顔を赤めて剣を見つめていた。

「……な、なぁ風上。」

「ふぇ？何ですか？」

声を掛けられた剣は原田に向き直る。

「あ、あのさ。あたしってそんなに頼りがいが、あるのかな？」

原田の言葉にキョトンとなる剣だったが、すぐにニコッと微笑み口を開く。

「俺は自分の意見を率直に言っただけです。後は、紗乃さんしだいだと思いますよ。」
「！！」

この時、剣の笑顔は原田には太陽のように輝いて見えていた。
その為　原田はますます顔を赤めていく。

「？紗乃さん？どうかしました？」
「！！べ、別に、何でもねぇよ！！」

そう言い原田は、自分の顔を隠すようにどこかへ走り去って行った。

「ふぇ！？ちょ、紗乃さん！？」

原田の突然の行動に剣が驚く中、甚は『はぁ』とため息をついた。

「アニキの笑顔の犠牲者がどんどん増えて行くぜ。」
「……剣って、意外と罪深いのかもね。」

やちの言葉に『かもな』と力なく返す甚。

その後、『原田は気が変わって1人で見廻りに行った』というやちと甚に説得に剣は何とか納得し、見廻りを再開する中剣は、やちの視線が街中を歩く者達に向けられている事に気づく。気になった剣は、話しかけてみる事にした。

「やちさん、どうかしました？」
「ん～？いや、あのねー。あのカップル楽しそうに歩いてるなぁと

思ってさ。
ちょっと気になったのよ。」

やちの言葉に『ふぇ？』とキョトンとなった剣は、やちの視線を追って見る。
そこには、確かに他校のカップルが仲睦まじく歩いている。
いや、周辺を良く見渡してみると他にもアベックが多い。

「……そんなにいいモノなのかなぁ……恋愛って……」
「ふぇ？」

不意にそう呟いたやちにキョトンとなる剣。

「だってさ～、周りを歩くカップルみんなが幸せそうにしてるじゃない？
そんなに楽しいもんなのかしらね。」

やちの言葉に『う～ん』と少し考えた剣は口を開く。

「俺は恋愛とかはよく分かりませんが、
一緒にいて楽しいからカップルになったんでしょうね。」

剣の言葉に『それもそーかぁ…』と呟いたやちは、難しい顔をして腕を組む。
剣はどう対応すればいいか分からずおろおろするが、ここで助け舟を出すのが甚だ。

「何だ永倉、オメェ恋愛してみてぇのか？」

甚の言葉に『ふぇ？そうなんですか？』と尋ねる剣に、

やちは『んー』と唸りながら口を開く。

「恋愛したいって言うか、それがどれだけ雅なモノなのか知りたい訳よ。
通人を目指すやちさんとしては、世間の物事に疎いのは問題があるとゆーか。」

「そんなもんかい。」

「そんなもんなのよ。風流を愛でるあたしとしてはね、
世の中にある『粋』なものを1つも逃したくないの。
恋愛はもしかしたらそれに足りるものかもしれないでしょ？」

熱弁するやちに『なるほど』と納得すると同時に
前に一緒に見廻りをした時の事を思い出す剣。

以前、剣がやちと見廻りを行なった時にやちは自分が通人……すなわち
風流を愛でる心を持った“粋”な人を目指している事を教えてくれた。
そんなやちにとって恋愛も粋の対象なのかもしれない。
だが剣には、1つ気になることがあった。それは、やちが恋愛を
粋の対象として見ているからこそできる、1つの矛盾だった。

「あの、やちさん。恋愛に興味があるなら、
どうして共学化反対の佐学派に所属しているんですか？」

剣の言葉に『確かにな』と呟く甚。
そうである、恋愛に興味があるなら当然、討学派に所属するはずである。
だが、やちは恋愛や共学に否定的な佐学派

それもその代表格とも言える真選組の組長格になっているのだ。
これに対しやちは『んーとね』と語りだす。

「共学先の颯間学院はさ、確かに伝統と最先端を両立させるいい所って聞いてるけど
同時に黒い噂もあるからさぁ。『颯間には“杏都四大人斬り(きょうとよんだいひとき)”の内2人がいる』とか
『颯間には“神(かみ)”を名乗る超問題児がいる』とか
“寺田屋事件(てらだやじけん)”や“鬼(おに)の巣(す)”の事とかね。」

やちの言葉を聞いた剣は『ははは……』と乾いた笑い声を上げる。

「…まぁ、あながち間違っちゃいねぇよなぁ……」
「それだけに、否定できないね……」

そう言い甚と剣が『はぁ』と深いため息をつく中、
『でもねぇ～』とやちが言葉を続ける。

「颯間にも剣みたいな良い子もいる訳だしねぇ。う～ん、恋愛かぁ……
ちょっとやってみたいかもぉ～。」

やちの言葉に『ふぇ？』とキョトンとなる剣。

「…なぁ甚。今のやちさんの言った意味って……」

剣の言葉に『はぁ…』とため息をつく甚。

「な、なんでため息つくんだよ！」
「……アニキ、永倉の言葉の意味は、言葉通りの意味っすよ。」

甚の言葉に『ふぇ？』と首を傾げる剣。どうやら全く理解していないらしい。
その剣の状況に、甚はまた『はぁ』と大きなため息をつく。

「（長年相方してるけど、アニキのこの鈍感っぷりには毎回呆れるぜぇ。
こんなんで女に慣れる日は来るのかねぇ～。）ふぅ。」

再びため息をつく甚。とここで、『ふむ』と唸るやちに気づく。

「……そうよね、剣なら及第点は超えてるし……
擬似的でもいいか……うん。よし、これだわ！」

不意にそう言ったやちは、いきなり剣に接近し『するり』と腕を組んできた。
そのやちの行動に『ふぇっ！？』と顔を赤面し驚く剣。

「や、やちさん、何を……！？」

剣の問いにやちはニカッと微笑みながら答える。

「剣、今からあたしとあんたは恋人同士よ。カップルでステディーでラバーなの。
剣もあたしの彼らしく、雅にキメなさいよね♪」

「ふえぇぇぇぇぇぇぇっ！！？」

やちの言葉に驚愕する剣。そんな剣に対しやちは呑気そうな表情で口を開く。

「そんなに驚かなくてもいいでしょ？あくまで擬似的によ。何て言うか、
恋人お試し期間みたいな？いいじゃない、あたしの為に協力してよ、剣。」

「でで、でも…」

そう剣に言い聞かせるやちだが、何しろ相手はあの剣である。
今やちに腕を組まれてるだけでも赤面し、今にも気絶しそうな状態なのに、
擬似的とはいえ恋人となるのだから剣が動揺するのも無理は無い。
そんな剣の反応にやちは少しだけ不安そうな表情をする。

「……それとも、嫌なの？相手役があたしじゃあ……。」

そんなやちの表情に剣は『うっ』と表情を崩す。
女は苦手だが優しい心を持つ剣は、『どうしよう』という視線を甚に向けるが
返って来た視線は『覚悟を決めろ』だった。

「……分かりました、お受けします……。」

その剣の言葉にやちの表情は『パッ』と輝く。

「ふふふっそう来なくっちゃねー！
それじゃあ行くわよ剣、恋愛という名の雅を求めて！！」

やちの掛け声と共に『はい』と緊張しながら返す剣。

今、剣とやちと言う名の今世紀最大のインスタントカップルの恋愛体験が幕を開ける！！

―愛津女学園　学園内・廊下―

一方、剣の言葉が恥ずかしくて逃げ出した原田は、廊下で出会った“鬼の副長”こと土方に事情を話していた。

「…それで、恥ずかしくなって逃げてきたのか……」

「だ、誰にも言わないでくださいよ副長！」

顔を未だに赤くしている原田がそう言い『分かった分かった』と返す土方。

「しかし、まさか女心など皆無だと思っていた原田をたぶらかすとは。

風上　剣、やはり奴は生かしておけん。」

そう言い放つ土方だったが、その隣で原田は不服そうな表情をしていた。

「ちょっと副長、女心が皆無ってなんすか皆無って！あたしだって一様女ですよ！？」

原田の怒りに土方はやや驚きながら『え？あ、いや、すまん…』と返す。

「…結局、あたしを女として見てるのって、風上だけなのかな……

ん？」

そう呟いた矢先、原田はこちらに向かって全速力で飛んでくる白い物体を目撃する。
それは、白く輝く弱小助平妖怪狐こと、カンリュウサイだった。

「副長ハン副長ハン副長ハ――――――――――ンッ！！
タイヘンでっせヘンタイでっせ――――――――――っ！！」
「だれが変態だっ！！お前にだけは言われたくないわっ！！」

土方の言葉と共に、彼女は愛刀―兼定を振りかざしカンリュウサイを一刀両断した。

「あぎょ――――――――っ！！」

だが一刀両断と言っても、カンリュウサイは妖怪だ。普通の刀では死なない。
すぐ復活したカンリュウサイは何やら慌てて口を開く。

「って殺れた場合じゃないんや副長ハンに原田ハン！ワイ見たんや！風っつあんやちハンがアイスクリームでキャッキャウフフーでストロベリーなんや！！」
「「はぁ？」」

カンリュウサイの言葉の意味が分からない土方と原田は首を傾げ、ともかくカンリュウサイを落ち着かせもう1度説明させた。

カンリュウサイが言うには、街中をブラブラしている時に偶然通りかかったアイスクリーム屋から剣とやちが出て来るのを見

つけたのだ。
ただ出て来るだけなら気にも留めなかったのだが、その2人が互いのアイスを
食べ合っていたのを見たのだ（無論、剣は顔を赤めながら）。
それはまるで、恋人同士のように。

「あれはどう見ても見廻りやないで！デートやでデート！！」
「ぬうぅぅぅぅっ！風上め、とうとう本性を現したな！！
やはり男など、女をたぶらかす害虫だぁっ！！」

カンリュウサイは羨ましさから、土方は怒りにより声を震わせる中
原田は1人冷静に何かを思い出そうとしていた。

「…そういやぁ、やちの奴言ってたな。『恋愛って雅かも』って。」

原田の言葉に『なにっ！？』と驚愕する土方だったが、その表情は
すぐに怒りに変わる。

「そうか、風上め。恋愛に興味のあるやちをたぶらかしたのだなぁっ！！
許さん！！おいカンリュウサイ今すぐ2人の所へ案内しろ！！」
「合点や！そしてやちハンを救出したワイとやちハンは布団で1つに……」

「なるわけあるかぁぁぁぁぁっ！！！」

カンリュウサイの余計な言葉に速攻で斬る土方。『あぎゃぁ――――！』と

カンリュウサイの断末魔（？）が廊下響いていった……。

「まぁ。では永倉先輩、討学派に入っていただけるのですね？」

杏の町のある店で、桂は目を輝かせてやちに言うが、
やちは『違う違う』と首を横に振る。

「あくまでお試しよ、お・た・め・し。だから討学派には入る気は無いわね～♪」

そう言いニカッと微笑むやち。
あれから剣とやちは、アイスクリーム屋で恋人っぽい事をした後、
やちの提案である店に入る事となったのが、そこに桂達討学派メンバーと遭遇する。
だが、さすがに店の中で剣劇を繰り広げるわけにもいかないので、
とりあえずなぜ剣と共にこの店に来たのかを説明し、それを聞いた討学派メンバーが
やちが討学派に入るのでは期待したのだが、体よく断られたのであった。

「……ところで永倉先輩。」

とここで、桂が口を開きやちに問い掛ける。

「先程から気になっていたのですけど。……剣様、大丈夫なのですか？」

桂の言葉に『あ～』と呟き、剣の方を振り向くやち。
そこには、顔を真っ赤にしてロボットのようにカクカク歩く剣がいた。

「…え～と、つれて来といてなんだけど。剣、大丈夫？」
「……ダ、ダイジョーブジャ……ナイＤＥＡＴＨ（デス）……」
「「……」」

剣のロボットのような喋り方に一筋の汗を流す、やち及び討学派の面々。
その隣で甚は『はぁ』とため息をついた。

「やっぱアニキには、“ランジェリーショップ”は早すぎたな。」

そう言いもう１つため息をつく甚。
そう、ここはランジェリーショップ。すなわち女物の下着の店なのだ。
あっちを見てもこっちを見ても、あるのは女物の下着。
いるのは独り身の女性か、カップルのみ。
こんな店で剣が無事でいられる筈も無く、案の定　茹蛸状態となっていた。

「ん～、かわいそうではあるけどもうちょっと我慢してね剣。恋愛を理解する為に！」

やちの言葉に『は、はぁ』と力なく返す剣。
その周りで、討学派や他校の生徒達の視線が剣に突き刺さる（？）。

「永倉さんいいなぁ～。」
「私も剣くんとデートしたいなぁ～。」

「ねぇねぇ、彼……」
「うわぁ～、すっごい美形。隣の人彼女かなぁ。いいなぁ～。」
そんな周りの反応に剣は『うぅ…』と顔を下に向け唸り、
やちは『ふふ～ん』と微笑む。
「ふむ、剣みたいな子が彼氏だと思われるのは思いのほか楽しいわねぇ♪」
超ご機嫌のやちであった。
その隣で、桂を始めとする討学派は必死に携帯をいじっていた。
「『剣様と永倉先輩が、仮デートを進行中です。』と。
後は写真と共に送って……皆さん、やってますか？」
「もちろんですよ桂さん！」
「そうですよ～。こんなおもしろい事、他の皆にも伝えなきゃ！！」
そう言い桂を始めとする討学派達は、剣とやちがデートしていることを広めて行った。
―愛津女学園　学園内・生徒会室―
一方、ここ愛津女学園の生徒会室では近藤と沖田が見廻りを終え一休みをしていた所に、ゲンちゃんがやって来ていた。
「ニャーン（ねぇねぇ）」
「あれ、ゲンちゃんどうしたんですかぁ？そんなに慌てて。

もしかしてまた土方さんが面白かっこいい事しでかしたんですか？」

沖田の言葉にゲンちゃんはフルフルと首を横に振る。

「ニャーン（あのねー……）」

ゲンちゃんは自分が街中で見た事を沖田に説明する。
それは、剣とやちがランジェリーショップから腕を組んで出てくる所だった。

「ニャーン（まるでデートみたいだったよ。）」

ゲンちゃんの言葉に『あの2人が…？』とキョトンとなった沖田は、近くにいる近藤にこの事を伝える。

「近藤さん、なんでも風上先輩と永倉先輩がランジェリーショップでデートのような事をしていたそうですよ。」

沖田の言葉に、『えぇっ！？』と目を丸くする近藤。それに対し沖田は
いつもの近藤ならそんなに驚かない筈ではとキョトンとなる中、
近藤が口を開いた――――

「ツル君とやっちゃんの2人がラズベリーショップでイートっ！！？
ズルいわそんなのぉ～、私だって食べたい～！！
うぅぅ、行くわよ総ちゃん！私達も食べにいきましょ～！！！」

そう言い近藤はドタバタと生徒会室から出て行った。

「やれやれ、近藤さんまるで話を聞いてませんねぇ。」

そう言い沖田は『ふぅ』とため息をつくが、
すぐにゲンちゃんと共に近藤の後を追う。

「それにしても、あの風上先輩がデートするなんて
どういう風の吹き回しなんですかねぇ～。」

「ニャーン（さぁ？）」

沖田とゲンちゃんはそれぞれ微笑み合いながら、近藤の後を追って
行った。

「うぅ～……」

「ゴメンね剣。やちさんとした事が、ちょっと調子に乗り過ぎたよ。
」

顔を赤くして唸ってる剣に、やちは苦笑いしながら謝る。

「（んふふ、でも剣ってホントかわいい～。
こうゆう男子の後輩持つのも悪くないわね～♪）あっ」

気が付くと2人は、最初にデートを始めようとした場所に戻って来
ていた。

「戻って来ちゃいましたね、どうします？」

剣の言葉に『そうねぇ』とやや考えるやち。

「結構歩いたし、そこのベンチに座って休もっか。」

やちの言葉に『はい』と返す剣。やちは早速座ろうとするがなぜか剣に止められる。

剣は、『ちょっと待ってくださいね』と言いベンチのホコリを払いそこに新品のハンカチを敷いた。

「えっと、女の子はこうするといいと聞いたんですけど……」

剣の行動と言葉にポカンとしていたやちだったが、すぐにその表情を笑顔に変える。

「ふふっ、ありがと剣。ちょっとオーバーだけど嬉しいわ。」

「あ、ありがとうございます／／／／／／。」

やちの言葉に顔を赤く染める剣。その状況を甚は少し離れた所で見ていた。

「う～ん、アニキも少しは慣れた……かな？」

そう呟いた時、甚は不意に何かが飛び立つ羽の音を聞いた。

甚が視線を上に上げた時、空には1羽の鳩が飛んでいった。

「…谷…？」

その甚の呟きを、聞こえた者はいなかった。

―愛津女学園　校門・通称：蛤御門（はまぐりごもん）―

ここに、1羽の鳩が舞い降りていた。真選組七番隊組長・谷さんである。

その存在に真っ先に気づいたのは、たまたま見廻りから帰って来た斉藤・頼子・芹栖の3人だった。

「……あ、谷さん。そんなに急いでどうしたの？」

斉藤の言葉に谷さんは視線を斉藤達に向ける。

「クルックー（いや、実はな……。告げ口する様で何なんだが、ちょいと気になるものを見ちまってな……）」

そう言い谷さんは、町で度々目にしたものを語っていく。

谷さんが度々町で目にしたもの、それは剣とやちがまるで恋人同士のように
寄り添いながら見廻りをしている姿だった。
その谷さんの言葉に真っ先に反応したのが、暴走妄想突撃少女こと芹栖だった。

「えええぇぇぇぇぇぇっ！！？か、風上先輩と永倉先輩が、まるで変人同士のようにデートと言う名の見廻りをしていたあぁぁ――――っ！！？」

谷さんの言葉に妄想を爆発させた芹栖に、頼子はアタフタと止めようとする。

「せ、芹栖さん落ち着いてください。変人同士じゃなくて恋人同士

ですよ！
……でも、あの剣さんがデートですか…？」

そう言い頼子はやや考える。図書室で剣との交流の多い頼子は
佐学派メンバーの中では1番剣の体質の事なども理解していた。
そんな頼子だけに、剣がやちとデートをしている事が不思議なのだ。

「クルックー（よければ案内するぜ。
出歯亀が反対ってんなら無理強いはしないが。）」

その谷さんの言葉に真っ先に反応したのが、やっぱりこの子　芹栖
だった。

「行きましょう！！そんな、お二人だけでそんな……ズルいですぅ
っ！！
見廻りを称してデートだなんてぇぇっ！！ズルい！うらまやしい！
異議ありっ！！」
「……落ち着け。まだ慌てるような時間じゃない。」

興奮し涙を流す芹栖に、軽いツッコミを入れる斉藤であった。

「……とまあそんな感じで、八忍隊の皆や颯間の皆が何かやらかす
度に
俺が謝りに行ったり、佐々木先輩と龍牙が胃を痛めてましたねぇ。」
「あっははははは、ソレ面白すぎ！颯間の連中も結構ムチャしてた
のねぇー、
あははははっ……ち、ちょっと待って、お腹痛い……。」

剣の話に、腹を抱えて大笑いするやち。

あの後、剣とやちはベンチでそれぞれの学園で何をしていたのかを話したり、
普段の私生活などを語り合っていた。

「はふー、苦しかった……。あれ？もうこんな時間なのね。気付かなかった。」

時計を見てそう言うやちに、剣も時計を確認し『ホントですね』と答えた。

「……剣、今日はありがとね。」
「…ふぇ？」

不意に言われたやちの礼の言葉にキョトンとなる剣。

「あたしね、今日こうして剣と恋人ごっこしてみて　なんか目から鱗が落ちた感じ。」

やちの言葉に『と言うと？』と返す剣。それに対しやちは顔を上に上げて口を開く。

「あたしって通人や風流を愛でる女を目指してる割には、
男子の事とか全然分かってなかったんだなあって。」

やちは、やや情けなさそうな表情でそう言い再び笑顔で口を開く。

「颯間学院の生徒達の事も、先入観だけで見ていたんじゃないかっ

て。
剣の話を聞いてたら楽しそうな人達ばかりだしね。」
やちの言葉に『えぇ』と笑顔で返す剣。
「剣と恋人ごっこしてだけでこんなに楽しいんだもん。
本当の恋愛をしたらもっと楽しくてドキドキするって事よね？」
そのやちの言葉に『ふぇ？』とキョトンとなる剣。
「そ、それは……そう、だと思いますけど……。」
何分この手の話が苦手な剣は回答にやや時間が掛かってしまった。
だが、剣の言葉にやちは『じー』と剣を見つめて来る。
「…あ、あの、やちさん？」
見つめて来るやちの視線に顔を赤く染めていく剣。
やちはゆっくりと唇を動かしていく。
「…ねぇ、剣。剣は恋愛をする気はあるの？」
「ふぇっ！？」
やちの言葉に心臓がドクンと跳ね上がる剣。
「え、あの……」
「逃げないで。」
やちの視線から逃れようとした剣だが、
やちに顔を両手で掴まれ強制的に視線を合わせられる剣。

その剣を見つめるやちの目はいつものような悪戯っぽい瞳ではなく、真剣に剣を見つめていた。

「答えて。」

「あ、あの……俺は……／／／／／／／／／」

やちの問いに剣は何とか口を動かそうとするが、緊張の余りまともに動かせない。

「（ど、どうしよう。俺としては恋愛とかする気は無いんだけど、やちさんのこの目を見てると、なぜか言ってはいけない気がする……）」

剣はなんと答えるべきか悩みに悩みまくった。

「（ううぅ…し、心臓の鼓動が止まらない。まるで地面が揺れてるみたいだ……）ん？」

不意に剣はキョトンと目を丸くする。

「ん？どしたの剣。」

剣の異変に気づいたやちが尋ねて来る。

「…あの、やちさん。なんか、地面揺れてません？」

剣の言葉に『え？』とキョトンとなるやち。

「……地面が揺れてるというより、これって地鳴り？」

「ですね。一体何が……ん？」

ふと、剣が視線を道路に移すと向こう側から大勢のダンダラ模様がこちらに向かって駆け抜けて来ていた。
その正体は――――――――

「あああぁぁっ!!?風上っ貴様あぁっ、やちに顔を近づけて何をしている!!?
やはり本性を現したな、この場でたたっ斬ってくれるわあぁぁぁ――――――っ!!!」

カンリュウサイの案内により、原田と共にやって来た土方。

「あ～ん!ツル君とやっちゃんだけで美味しいもの食べるなんてズルいわよぉ～っ!!
私の分は～?私の分はあるのぉぉ～っ!!?」

ゲンちゃんの案内により、沖田と共にやって来た近藤。

「おっ、お二人共そんなに顔を近づけて何をなっさてるんですかぁっ!!?
うっ、うらやまずるい!!
邪魔はしませんから、せめてアリーナ席で見せてくださあぁぁ～いっ!!!」

そして谷さんの案内により斉藤と頼子と共にやって来た芹栖。
すなわち、真選組主要メンバー達だった。
それに気付いた剣は、瞬時に身の危険を察知する。

「ふぇっ!?あ、いや、これには訳が……」

「問答無用っ！！！」

剣の言い分も、怒り狂った土方が聞く耳持つ訳も無く
無慈悲に愛刀―兼定を振り下ろす。
剣はそれを自慢の俊足の動きで避けようとするが、それよりも早く
やちが前に飛び出し愛刀―氏重を抜き放ち、土方の攻撃を受け止める。
その行動に、土方は目を丸くした。

「やち！なぜ邪魔をする！…もしやお前、そこまで風上にたぶらかされたのか！？」

土方の言葉に『はい？』と機微をかしげるやち。

「何言ってるんですか副長！これはあたしが剣に頼んだことですよ！！」

やちの言葉に『なに！？』と目を丸くする土方。とそこに、また地鳴りが響きだす。

「こ、今度は何だっ！？」

驚く剣が視線に捕らえたもの、それは道路の向こう側から駆け抜けて来る
１つの集団だった。その者達はある者は白い、ある者は赤いマントを
肩に備え、帯刀をしている愛津の生徒達―討学派の生徒達であった。

「おー居るぜよ居るぜよっ！剣くんとやちくん擬似デート……って、なんじゃ
他の真選組の者も居るぜよ。」

「もぐもぐ……」
「バウ（伊織、いつまで食ってるんだ）」
「どうやら、邪魔者が数名いるようですわね。
せっかく剣様と永倉先輩の恋人ごっこを皆で見学しようと思いましたのに……」

討学派がやって来た事で、さらに収拾がつかなくなった。

「なぜ貴様らがここにいる！」
「あら、私達は剣様と永倉先輩の恋人ごっこを見学しようと思っただけですわ。」
「せやせや、あち達恋愛に憧れる討学派としては、ほっとけんぜよ！」
「えぇっ！？じゃ、じゃあ、風上先輩と永倉先輩は正式にお付き合いしてるって事ですかっ！？そ、そんな、ズルいです～私に内緒で～！！」
「……落ち着け、誰もそんなこと言ってない。」
「ねぇねぇ、私の分の美味しい物は～？」
「そんな物最初っからありませんよ近藤さん。代わりにボクの豆大福あげますから。」
「もぐもぐ……むしゃむしゃ……」
「……なぁ、あたし達って何しに来たんだっけ？」
「さ、さぁ…？」

収拾がつかなくなり、皆がギャーギャーと騒ぐ中
やちは剣の手をとり走り出そうとした。

「ふぇ？あ、あの、やちさん？」

やちの行動に驚きを隠せない剣に、やちは耳打ちをする。

「逃げるわよ剣。皆がいちゃあ恋人ごっこが出来やしないわ。それに……」

やちは一旦そこで言葉を区切り、再び口を開く。

「皆から2人で逃げるのって、駆け落ちしてるみたいで面白そうでしょ？」

やちの『駆け落ち』という言葉に『ふぇ！？』とドキリとする剣。

「ってそこーっ！風上貴様、やちに何をしているっ！！」

とここで、やちとヒソヒソ話をしていたのが土方にバレてしまった。やちは、剣の腕を思いっきり掴むと『ぐいっ』と引っ張り剣の耳元でささやく。

「どうするの剣。恋人ごっこ続けて駆け落ちする？それとも、ここで止める？」

そう呟くやちの目を剣は見た。それは、『ここでやめてほしくない』と

悲願するような瞳だった。それを確信した剣は思い切った行動に出る。

「……分かりました、失礼しますっ！」

「えっ？き、きゃっ！」

不意にやちの体が傾き、宙に浮いたような感覚が起こる。それは、剣がやちを両腕で抱える、いわゆる“お姫様抱っこ”をしたのだ。

剣の予想外の行動に、抱えられたやちはもちろんの事　周りの面々も唖然となった。
その周りの反応に対し、剣は顔を赤めながらやちに対して口を開く。

「えっと…女の子は、こうされると嬉しいって聞いたんですけど、いけませんでしたか？」
「剣……／／／／／／／」

剣が顔を赤めてまで、女の子が憧れるお姫様抱っこをしてくれた事にやちは顔を赤めながら微笑み、両腕を剣の首へと回す。

「そんな事無いよ剣、すっごく嬉しい。」

やちの言葉に、剣は恥ずかしながら微笑む。
が、それを簡単に許すはずの無い者が１人。土方である。

「風上～貴様あぁぁぁっ！今ここで死ね！！」

そう言い斬りかかって来る土方だが、剣はそれを驚異的な跳躍力で避け、
そのまま近くの民家の屋根に着地する。

「申し訳ありませんが、まだ恋人ごっこの続きですので、失礼！」

そう言い剣は民家の屋根から屋根へ跳んで行く。
それを見た面々は追いかけるが、その距離は一向に縮まらなかった。

「くっ！ヒト１人抱えてるというのに、何なんだあのでたらめな身体能力はっ！！？」

悔しそうに歯軋りを立てる土方。

「よし、このまま愛津まで逃げ切りましょう！」

そう言い剣がスピードをあげる中、やちは『くすくす』と笑っていた。

それに気づいた剣は『どうしたんですか？』と尋ねてみた。

「ふふふっ、何だかすっごく嬉しくてね。男の子にお姫様抱っこされるのが
ここまで嬉しいことだったなんて知らなかった。剣、やっぱり恋愛って
すっごく良いものかもしれないよね！」

そう言い微笑んでくるやちの笑顔に、剣は顔を赤めながら返す。

「そ、そうかもしれませんね……あっ」

とこの時、剣は自分のある事に気づく。

「（そういえば俺、やちさんを抱えているのに
あんまり顔が熱くないや……なんでだろ？）」

そう思い、頭上に？マークを浮かべる剣であった。

「やれやれ、アニキも結構慣れて来てんじゃん。」

高いビルの上から状況を見ていた甚はそう呟く。

そこへ、1人の愛津の生徒がやって来る。それを見た甚は、『ふぅ』とため息をつく。

「いつまでその姿なんだ？幻八（げんぱち）の旦那。」

幻八と呼ばれた生徒は『くひひひひ』と笑い出す。

「なんだ分かってたんならそう言えよ。」

そう言い生徒は、自分の顔をベリッと剥がす様に引っ張る。するとそこには、
女子の制服を脱ぎ捨て、不気味に笑うあの男がいた。

「くひひひひ、しかし剣のバカも少しは女に慣れて来たみたいだな。」

「まあね。」

そう言い甚は視線を屋根の上を跳ぶ剣に向けた後、再びその男―幻八に視線を向ける。

「あんた、いつから愛津に潜入してたんだ？」

甚の言葉に『くひひひひひ』と笑う幻八。

「去年からさ。度々潜入してたよ。だが愛津の連中もバカばかりだ。俺の変装1つ見破れないとはな。」

「ま、普通に考えて女子に変装して学園に潜入する男なんて普通いないからなぁ～。」

甚の言葉に『ちげえねぇ』と微笑む幻八。

「さて、俺はそろそろ帰るぜ。ま、精々　八忍隊（うち）の切り込み隊長さんをよろしくな。」

幻八の言葉に『ああ』と返す甚。それを聞いた幻八は去って行った。

「……たく、つくづく訳のわからん奴だぜ。」

幻八が去った後、そう呟く甚。

「颯間八忍隊（さつまはちにんたい）・密偵方（みっていがた）“楯岡（たておか）　幻八（げんぱち）”。一体何を考えているのやら。」

そう呟いた甚は、剣達が向かったであろう愛津へと飛び立って行った。

『～第十一章～　やちと原田、凸凹コンビの悩み　《終》』

～第十一章～　やちと原田、凸凹コンビの悩み（後書き）

十二話目完成です。
ついに分かった謎の男の正体、幻八。奴は一体何を考えているのかは後においといて。
今回のお話は、原田の乙女化計画とやちの恋人ごっこでした。
この話により、原田は剣に対して顔を赤めるというフラグ率をアップさせ
やちも恋愛の素晴らしさを少しずつ知っていく予定です。
また、今回出た剣の流派、摩方流という流派は
幕末に薩摩藩の影で暗躍した「真方衆」をモデルとしたモノで
戦国時代に暗躍した謎の怪僧を創設者とする流派だったそうです。
元々、忍者と僧や宗教と言うモノは繋がりが深く、こういう忍術流派は
意外とあったらしいです。
それと、真選組が使った群狼殺法は、
忠実の新選組が集団戦法を得意としたことから、
作者である自分が勝手に設定した原作には無いモノです。
今回の話は長くなりましたが、今後もこれ位になるか否かは
自分の気まぐれしだいです。
今後とも、よろしくお願いしま～す。

～第十二章～　芹栖の暴走。剣、斉藤と密偵する

―愛津女学園　学園寮内・食堂―

朝のジョギングと朝風呂を終えた剣は、
甚・ゲンちゃん・谷さん・信吾と共に食堂を訪れ、自分の席に座る。
と同時に、やちが剣に視線を送りウインクをして来る。
それに気づいた剣は、顔を赤くしうつむいてしまった。

「あの、剣さん顔が赤いですよ、大丈夫ですか？」

それに気づいた頼子が剣に近づき心配をする中、
やちは『ニマァ』と微笑みながら口を開く。

「んふふ～、剣ってば昨日の事でも思い出した？」
「――――――――っ！！」

やちの言葉に益々顔を赤く染める剣。

昨日のやちとの恋人ごっこ。
皆に追っかけ回される羽目になり、剣はやちをお姫様抱っこの体勢で逃げまくった。
その後、学園でやちが皆に説明し何とか事なきを得たのだ。
そう、このまま終われば。
寮に戻る前に、やちは剣に対して

「ありがと剣。またやろうね♪」

そう言いやちは、大胆にも皆の前で剣の頬にキスをしたのだ。

やちの行動に、剣は顔を真っ赤に染め上げ皆は唖然となった。
そして、いち早く正気に戻った土方と剣による追いかけっこが、
夕食が始まるまで続いたのだ。まさに剣にとっては、悪夢に近い出
来事だった。

「うぅ……」

その事を完全に思い出してしまった剣は、顔をうつむいたままだ。
また、やちの言葉に他の生徒達も昨日の事を思い出し、
様々な眼差しを剣とやちに向けた。

「永倉さんいいなぁ～。」
「私も、風上くん誘ってみよっかな。」
「あたしも風上先輩とデートしたいなぁ～。」
「あぁ、剣様とデート……ポッ」

討学派達は、自分達も剣とデートしてみたいと話し始め、

「永倉先輩、勇気あるよね……」
「あたしだったら、いきなり男子とデートしたりキスなんてできな
いな～。」
「でも、風上くんなら優しそうだよね……」
「う～ん、やっぱり恋愛っていいものなのかな?」

佐学派達は、恋愛のとは何たるかを話し始めた。
その状況に対し、『ギギギギ』と歯軋りを立てる者が1人。土方で
ある。

「ぐぬぬぬぬぬぅ～おのれ風上　剣、やちをたぶらかすと同時に

佐学派達の心まで犯すとはぁ？？っ！はやり今ここでたたっ斬るくれるっ！！」

今にも斬り掛からんとする勢いの土方。
だが、そんな土方の方を『ポン』と叩く者が1人。近藤である。

「まあまあ歳ちゃん。ツル君はやっちゃんに付き合っただけでしょ？だったら何も悪くないよぉ～。」

近藤の言葉に対し『しかし…』と何かを言い返そうとする土方だが、近藤の笑顔にだけは逆らえない。渋々と刀から手を引く。
それを見て少し安心した剣は、取り合えず自分の食事に手を伸ばす。
が、ここで自分の食事に何者かの箸が伸びていることに気づき
それに対して手でガードする剣。
そして視線を箸の持ち主に向けると、その正体は原田だった。

「…またですか……」

剣の呆れたといった表情に対し『あはははは』と笑う原田。

「だってお前、顔うつむいて食欲　無さそうだったから貰っていいかなぁ～と思ってさ。」

原田の言葉に『前も似たような事を』と呟く剣。

「だってよぉ～、風上　お前の食事だけあたし等より少しばかり多いじゃねぇか。」

そう言い剣の食事に視線を向ける原田。
確かに、剣の食事は他の生徒達に比べてやや多い。

その疑問に答えたのは、甚だった。

「そりゃアニキはお前らよりガタイがいいし男だからなぁ。
お前らより食う量も多くて当然だろうがよ。」

そうなのだ、剣の身長は１８０近くあり体も意外と引き締まっているのだ。
最も、それを知っているのは剣と風呂に入る極一部の者達のみだが。
だが、その横で剣は首を傾げていた。

「俺の食事量、そんなに多いか？一様　腹八分目のつもりなんだけど……」

そう言い自分の食事に視線を送る剣。それを見た甚は『あ～』とクチバシを開けた。

「ま、アニキも男ってこった。」

そう言い甚は視線を原田に向ける。

「そういう訳だから、オメェの場合　他人の食事量をゴチャゴチャ言う前に
オメェ自身の食事量を減らせ。太ってもいいんなら止めんが。」

甚の嫌味に対し、原田は『ケロッ』と返す。

「別に大丈夫だよ、いつもこれ位食べてるし。それにあたしって
食った分の肉がつく所って決まってるから。」

原田の言葉に首を傾げる甚と剣。

妙に思った剣は、思い切って聞いてみる事にした。

「肉がつく所が決まってるて……一体どこに？」

剣の疑問に、原田は自分の体のある部分を指差しながら言った――

――――――

「胸」

とたった一言。

その回答を聞いた剣は一気に赤面し、周りでは『がくっ』と膝をつく者達がいた。

「…くっそうか…原田さんはたくさん食べるから胸が大きくなるのか……」

「くそぉ…私だって…私だって今日からたくさん食べてやるぅ……！！」

「す、すいませーん！私もおかわりお願いしますっ！

大盛り……いえ、超盛りで！いやさ！絶盛りでえぇぇっ！！」

「もぐもぐがふがふ……おう足りないぞ、炊飯器ごと持って来い…。」

ある者は豊胸を誓い、ある者はやけ食いに近い行動を起こしていた。

「…え、え～と……」

その状況に剣は言葉が出なかった。

「…まぁあれだアニキ、女ってのは胸の大きさとかに誇りを賭けてるんすよ。」

甚の言葉に『そういうモンなの？』と剣が首を傾げる中、原田と近藤のおかわりがやって来た。

「わ～い来た来た～♪おかわりいっただきま～す♪」

やって来たおかわりに、ものすんごく嬉しそうに手をつける近藤。そんな近藤を見て、『幸せそうだな～』と感心する剣の近くで、原田が口を開く。

「あれ、局長。そんなに食べて大丈夫ですか？最近の局長、また太りましたよね？」

――――――――ガラガラピシャアアアアアアアッ！！！

原田の言葉と同時に、近藤のバックに雷が落ちたように剣には見えた。

「……じ、甚。今、雷が……」

「…奇遇ですねアニキ。俺にも見えやしたよ……」

そう言い剣と甚が状況を見守る中、真っ先に土方がフォローに回る。

「そっそんな事は無いだろう!?
近藤さんは至って標準体型だ、いやむしろちょっとやせ気味かなっ!?
……ほら、総詩も何か言えっ!」

土方は、近藤の隣にいる沖田に救援を求める。

「……すやすや…」

が、当の沖田は朝食を食べ終わりムニャムニャと眠っていた。

「こらぁーっ!貴様は1日何回眠れば気が済むんだぁーっ!!」

土方が怒鳴り声を上げる中、『もういい』と呟きだす近藤。

「もういい……、どうせ私なんてブクブク太ってでっぷりと太ったブタになっちゃうんだもん……。飛べないブタはただのブタだもん……。」

どこかで聞いた事あるような言葉と共に、
近藤はゴロンとその場に横になってしまった。

「ちょっと紗乃！あんた空気ってモンを読めないのっ！？」
「へ？何言ってんだよ、空気は読むモンじゃなくて吸うモンだろ？」
その原田の言葉に『あんた本物のバカ？』と呆れるやち。
そんな中、剣は落ち込む近藤を何とか立ち直らせようと、近藤に接近していた。

「近藤先輩。」

取り合えず声を掛けてみたが反応は無い。
なので剣は、言葉ではなく行動をとる事にした。
剣は近藤の頭にそっと自分の右手を置き、ゆっくり頭を撫で始める。
それに対し近藤は『ほえ？』と反応を示した。

「先輩、元気出してください。
俺は女の子のスタイルの良さとかはよく分かりませんが、少なくとも近藤先輩が
太ってるようには見えません。だから自身持ってください、ね？」

そう言い剣は笑顔を向けてくる。
いつものスマイルというより、自愛に満ちた母のような笑顔だった。
その笑顔に近藤は、まるで心癒されたような笑顔を剣に向ける。

「えへへ、ありがとツル君。少し元気が出たよ～♪」

そう言い起き上がった近藤の笑顔を見た剣は少し『ホッ』とする。

「……ねぇ、ツル君。」

不意に近藤に呼ばれ、剣は『何ですか？』と返す。

「また今みたいな事が有ったら、また撫でて貰ってもいい？」

近藤の言葉に一瞬キョトンとなった剣だったが、すぐに笑顔を返す。

「えぇ、こんな事でよろしかったらいつでも。」

その言葉に近藤は『ありがと～♪』と、かなりご機嫌になると同時に、

お返しとばかりに剣の頭を撫でる。

その近藤の行動に、剣は『ふぇっ！？』と驚きながら顔を赤くする。

周りからは『おぉ～』だの『きゃー』だの声援が上がる。

剣は顔を真っ赤にしながら、撫でられ続けた。

…ちなみに、こういう時に真っ先に声を上げそうな土方は、

沖田とやちに押さえつけられていたのは、全くの蛇足である。

―愛津女学園　学園内・屋上―

昼休憩になり、手作りの弁当をカバンから取り出した剣は甚と共に屋上に来ていた。

屋上で弁当を食べるのは、颯間の時から変わらない剣と甚の日課のようなものだ。

「アニキ～、今日の弁当は何すか？」

「卵焼きにきんぴらごぼう、つくね串にキュウリの酢の物、肉じゃが、

メインには鯖の焼き物。そしていつものおにぎりだよ。」

それを聞いた甚は、『うまそー』と返す。
剣も弁当箱を開け、早速食べようとした時だった。
不意に、『ギィィィ』と屋上への出入り口の扉が開く音がする。
その音に気になった剣と甚が後ろを振り向き目に映ったモノ、
それは真選組の羽織を羽織ったオレンジ色のツインテールが
トレードマークの生徒、芹栖だった。手には、かわいらしい弁当箱
を持っている。
芹栖も剣達に気づいたのか、目を丸くしている。

「かかか、風上先輩っ!?どどどどど、どうしてここにっ!?」

驚く芹栖に対し『いや、どうしてと言われても…』と剣も困惑して
いた。

「どうしても何も、俺達はここで昼食取るのが日課なんだよ。」

困惑する剣に変わって口を開いたのは甚だった。
甚の言葉に対し『そ、そうでしたか』と返す芹栖。

「でででで、では、しししししつしつしつ失礼しましたあぁぁぁっ!!」

そう言い屋上からダッシュで去ろうとする芹栖だったが。

「きゃあぁっ!」

屋上の入り口には段差があり、その段差に足をつまずき転びそうに
なる。
それを見た剣は、得意の俊足で芹栖を支える。

その体勢は『お姫様抱っこ』に近い。

「大丈夫ですか？」

「はわあぁっ！？あ、だだだだ大丈夫ですっ！！」

心配する剣に対しそう言った芹栖は顔を赤くしうつむいてしまった。

「……えっと……」

「……あうぅ……」

しばらくの間　沈黙が流れる中、剣はゆっくりと口を開く。

「あの、芹栖さん。」

「は、はははははいいいいぃっ！？なななななななんなんなん何でしょうっ！！？」

剣の言葉に対し動揺しまくる芹栖。

その芹栖の反応に対し、剣は首を傾げながらも口を開く。

「芹栖さん、弁当食べに来たんですよね？

俺らに遠慮なんかしないで、よかったら一緒に食べませんか？」

「ふえええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

剣の提案に大声を出して驚く芹栖。その声に、剣と甚は思わず耳を塞ぐ。

「ふわぁっ！？」

「な、何だいきなりっ！？」

剣達が耳を塞ぐ中、芹栖は未だ驚いたように口を開く。

「い、いいいいい良いんですかっ!?私なんかがその、お、おおおお男の人とお弁当なんて、そんなストロベリーな事しちゃってっ!?」

芹栖の言葉に『ふぇ?』と首を傾げる剣。

「ストロベリー?イチゴのことですか?」

その剣の言葉に『おいおい』と甚は頭を抱えながらもクチバシを開く。

「おい、芹栖っつたか?アニキがいいって言ってんだ、遠慮すんじゃねぇよ。」

甚の言葉に『は、はい』と返した芹栖は、まるでロボットのようにカクカクと動き出し、剣の座るベンチの隣にやってくる。

「そ、そそそそそ、それでは、ししし失礼します。」

そう言いながら芹栖はベンチに座る、剣と距離を置いて。
そのまま芹栖は弁当箱を開く。
中身は女の子らしくかわいい内容だった。
それを見た剣の『かわいいお弁当ですね』と言う言葉と笑顔に芹栖は『はぅ』と顔を赤めてしまった。

「よかったら、俺の弁当も見ますか?」

そう言い剣は開けていた自分の弁当を見せる。

その中身をオズオズと見た芹栖は目を丸くした。

「…ふわぁ、風上先輩のお弁当すごい……。これ全部、先輩が作ったんですか？」

芹栖の言葉に『えぇ、まあ』とややテレながら返す剣。

「よかったら、食べてみますか？」

剣の言葉に芹栖は『えええぇぇぇっ！？』と益々目を丸くする。

「い、いいいいい良いんですかっ！？私ごときが先輩のお弁当食べても！？」

驚く芹栖に対し、剣は笑顔で返す。

「私ごときなんて言わないでください。
俺は基本的に人に自分の料理を食べてもらうのは好きですから。」

そう言い剣は自分の弁当を差し出す。

「そ、それではその……い、いただきます……」

そういいオズオズと芹栖は、卵焼きに手を伸ばしそれを口へと放り込む。
と同時に、芹栖は今までに無いくらい目を丸くした。

「す、すごいです。口の中でフワァと溶けてくみたいです！」

芹栖の言葉に『ニコッ』と剣は微笑む。

「気に入ってもらえてよかったです。」

その剣の笑顔に、芹栖は再びうつむいてしまいながらも
オズオズと自分の弁当箱を差し出す。

「ふぇ？」

「あ、あああああのあのあのあの、よよ良かったら
私のお弁当、食べていただけますか？」

芹栖の言葉にキョトンとなっていた剣だったが、
先程の卵焼きの礼だと考え素直に笑顔を向ける。

「そうですか。ではお一つ。」

そう言い芹栖の弁当箱の中から1つ、肉団子を口へと運ぶ。
それを芹栖は『じっ』と見つめていた。

「……あ、あの、芹栖さん？」

「は、はいっ！何でしょう？」

剣の言葉に芹栖はやや緊張気味に返す。

「あ、もしかして。その肉団子から変な匂いでもしましたか！？」

そんな事を言う芹栖に対し『いえ、そうではなく』と返す剣。

「そんなに見つめられると、ちょっと食べ辛いと言うか
恥ずかしいというか……。」

そう言う剣の顔は、やや赤くなっていた。芹栖の視線を感じてしまったらしい。
それに気づいた芹栖は『すす、すみません』と即座に視線をズラす。

「じゃぁ、改めて……」

剣は改めて肉団子を口の中へと放り込む。

「…もぐもぐ……」
「どどどうでしょう!?ままマズかったらペッて吐いちゃってくださいっ!!」

そう心配そうに見つめる芹栖だが、剣は吐き出す事無くニコッと微笑む。

「吐いたりしませんよ。芹栖さん、料理上手なんですね。」
「はははいいぃっ!ありがとうございますっ!!」

剣の言葉に芹栖は『ペコペコペコ』とこれでもかと言うほどに頭を下げた。

「やれやれ、何やってんだか。」

その状況を、剣達から少し離れたフェンスの上で眺めていた甚が言い寄ってくる。

「アニキも相変わらずだが、オメェも一々頭下げ……ん?」

甚が言葉を言う中、不意に3人の頭上に1つの影が陰る。
剣達がが上を向くとそこには、1羽の鳩―谷さんが舞い降りて来た。

「クルックー（よぉ、騒がしいと思ったらお前らだったのか。）」
「あ、谷さんどうも。」
「よぉ、谷のオヤジ。」
「た、谷さん。ご苦労様です。」

谷さんの出現にそれぞれの反応を見せる剣達。

「クルックー（ほぅ、スゲェなボウズ。それお前が作ったのか？）」
谷さんは、自らの羽毛の中から大豆を数粒だしてクチバシへ運びながら
剣の弁当へ視線を向ける。

「よかったら、谷さんもどうですか？」

そう言い剣は笑顔を向けるが、谷さんは首を横に振る。

「クルックー（いや、遠慮しとくよ。俺が食っちゃあお前さんや甚の分が無くなっちまうだろ？）」

谷さんの言葉に『そういやまだ食ってねぇな』と返した甚は
剣の弁当に食らいついた。

こうして、やや騒がしくも食事を終えた剣達はそれぞれの弁当を仕舞う。

「さてと…」

剣は甚と共にその場を去ろうとする。だが、それを見た芹栖が声を

上げる。

「あ、あああああのあのあのあの、かかか風上先輩っ！！」

芹栖の声にキョトンとしながら視線を芹栖に向ける剣。

「何ですか？」

「え、えとえとえとえと、そ、その……」

言葉を途切れ途切れにさせながら、芹栖は何とか口を開いていく。

「ご、ご迷惑でなければ……その……、わ……たしと……りを……」

「あん？」

芹栖の言葉が小さくて聞き取れない甚は首を傾げるが、

その隣で剣は『ニコッ』と微笑む。

「分かりました、見廻りに付き合えば良いんですね？」

「え？」

「へ？」

「クルックー（何？）」

剣の言葉に芹栖・甚・谷さんはそれぞれ驚いたように反応する。

そりゃそうである。アレだけ小さい声を聞き取るなんて普通無理だ。

だが剣には聞こえたのだ。

「クルックー（ボウズ、お前よく聞こえたな。）」

谷さんの言葉に『えぇ、まぁ』と返した剣は説明を始める。

「忍びは常人より五感が優れるように訓練されてますからね。
だから聴覚も常人より利くんですよ。」

剣の言葉に『なる程な』と返す谷さん。

「まぁ、時々聞こえすぎるて辛い時もありますけど……」

テレながら言う剣に対し『あの女の叫び声とか?』と返す甚に
『ア、アハハハハハ』と苦笑いをする剣。

「す、すみません……」

それを聞いた芹栖は『しゅん…』と表情が暗くなる。

「気にしないでください。それじゃ…」

そう言い剣は手を差し伸べる。
それを見た芹栖は『ふえ!?』と顔を赤めながら首を傾げる。

「やちさんから、女の子は手を差し伸べられると
喜ぶものって聞いたんですけど嫌ですか?」
「い、いえいえいえいえいえいえっ!!そんな事無いですっ!
!」

そう言い芹栖は勢いに任して剣の手を握るが、握った瞬間やけにおとなしくなった。

「?芹栖さん?」

心配した剣が尋ねるが、芹栖はうつむいたままだった。

「…そんな、ダメですよ先輩……」

「ふぇ？」

不意にブツブツと何かを呟きだす芹栖にキョトンと首を傾げる剣。

その横で甚と谷さんは『まさか』と身構える。

「おい、谷のオヤジ。こりゃぁ……」

「…クルックー（あぁ、入っちまったみたいだな。）」

2人（2羽）の予想は、見事に的中する。

「…そんな先輩、私にはまだラブホテは早すぎますよ？？。」

「ふぇ？」

キョトンとする剣を尻目に、芹栖は体をクネクネさせながらさらに呟きを

……と言うか呟きを通り越しすでに普通に喋ってた。

「で、でも私、先輩がそこまで言うなら、

わ、私の始めてを捧げても……はわわぁ～ん？」

「えぇ…と、これって……」

芹栖の言葉に剣は視線を甚や谷さんへと向ける。

その視線に、2羽は『コクリ』と頷く。

その2羽の反応に、『ア、アハハハハ』と剣は苦笑いをする。

と言うのも、剣と甚はこの愛津に来てからというもの

何度かこの状況に出くわしているのだ。
その際に聞いた所、芹栖には妄想癖があるらしい。
しかもその妄想は恋愛類のものばかりで、それこそ純粋な妄想から不純なものまで
様々なバリエーションがあるらしい。
最も、甚はともかく恋愛事の知識がほぼ皆無の剣には意味が余り理解できていないが
この妄想世界に入った芹栖が現世に復活するには、
相当時間が必要なのは理解している。

「あ～、相変わらずどんな妄想してるのか良くわからないな……」
「それはあんた位だよアニキ。」
「クルックー（全くだぜ。）」

剣の言葉にささやかにツッコミを入れる甚と谷さん。

「しっかしあの女、見た所　恋愛に憧れてるふちがあるな。」
「クルックー（まぁな。）」

甚と谷さんの会話に『ふぇ？そうなの？』と首を傾げる剣。

「でも、だったらどうして芹栖さんは恋愛反対の佐学派に？」

剣はそんな疑問を谷さんに放つ。
やちの時もそうだったが、剣は真選組の面々がなぜ共学化に反対なのかを知らない。
ましてや、やちや芹栖は恋愛に憧れてるにも関わらず、真選組に組してるのだ。
その剣の疑問に、『あぁ』と返した谷さんはクチバシを開ける。

「クルックー（あの子は1年生ながらに生徒会に選ばれてるだろ？
それは、譲ちゃんが優秀だからなんだ。確かに彼女は恋愛に憧れちゃあいるが
同時に自分を認めてくれた副長達に憧れてるんだよ。
だから、真選組に入ったんだ。）」

谷さんの言葉に『そうだったのか』と返す剣。
恋愛はしたい、けど自分を認めてくれた副長達を裏切りたくは無い。
そんな芯の強さが彼女にはあるのだ。

「……少し、羨ましいな……」

剣はそう呟き、広い空に視線を向けていた。

―愛津女学園　学園内・廊下―

アレから数分後、何とか正気を取り戻した芹栖は
顔を赤めながらも剣と見廻りを開始した。
見廻りと言っても、見廻りは放課後がメインで昼休憩は時間が短いので
見廻りは軽くやる程度でよいらしいのだ。だが、気を抜いてはいけない。
なにせ見廻りをしているのが、1人は女が絡むとろくな目にあわない剣。
片や恋愛に憧れながらも、男子がいると緊張しまくる芹栖である。
そんな2人が共に見廻りをしてるのだから、何もおきないはずは無いと
2人を見守る甚と谷さんは予感した。

「…谷のオヤジよ、どう思う？」
「クルックー（どうもこうも、嫌な予感しかしねぇな。）」

甚の言葉にそう返す谷さん。
そして、この2羽の予想は当たってしまうのだ。しかも何度も。

たとえば――――――――

「せ、芹栖さんっ！？そっちは階段が……」
「はえ？はわあぁぁぁぁっ！！？」

緊張のあまり前を見てなかった芹栖が階段で扱けてしまい、
その時にスカートがめくれて剣は芹栖のパンツを見てしまい、
顔を赤めて爆発し

「えぇっ！そ、そんな、そんな展開にっ！？はわわっそ、そんな激しく……」
「せ、芹栖さん？……っ！！？」

討学派から没収したＢＬ本の展開に興奮し、剣はその内容を見てしまい
またもや顔を赤めて爆発し

「芹栖さん危ないっ！」
「はえ？はわあぁぁぁぁっ！！？」

下駄箱の近くの段差に扱けそうになった芹栖を、剣は間一髪で支え

るが
その際に芹栖の胸に触れてしまい、やっぱり顔を赤めて爆発した。
その後も剣と芹栖は様々なトラブルに巻き込まれ、酷い目にあった。
「…俺って、何か今日　爆発しかしてない気がする……」
「気のせいだアニキ。」
「クルックー（そうだぜボウズ。）」
剣の言葉に即座にツッコミを入れる甚と谷さん。
その後ろで、『どよ～ん』と暗い表情の芹栖がいた。
「うぅ…すみません先輩。私ってドジでオッチョコチョイだから…
…」
そう言い芹栖はますます落ち込んでしまった。
「そんなに落ち込まないでください。芹栖さんはがんばってるじゃ
ないですか。」
落ち込む芹栖を何とか励まそうとする剣だが、依然として芹栖の表
情は暗いままだ。
とその時――――――
「あ、いたぁっ！魁先生（さきがけせんせい）!!」
不意にそんな声が聞こえ、一同が振り向くとそこには
やや息切れをした佐学派の生徒がいた。
ちなみに、魁先生とは戦いで真っ先に先陣をきる芹栖の仇名である。

「何かあったんですかっ！？」
「は、はい。実は討学派と戦闘が起こって、応援をお願いしたいんです！！」
それを聞いた芹栖は、先程までの暗い表情はどこへやら
『わかりましたっ！！』とすぐさま飛び出して行った。

「意外と早いな、芹栖さんは。」
「確かに魁先生の名は伊達じゃねぇな。」
「クルックー（で、俺らはどうする？）」
芹栖の素早さに感心する剣と甚の横で、谷さんが尋ねる。
「そうですね、俺らは一様見廻りという任務を受けた身だからな、芹栖さんについてってみるよ。」
剣の言葉に頷いた甚と共に、剣は芹栖の後を追う。
それを見た谷さんも『面白そうだな』とついて行った。

―愛津女学園　グランド―
そこで、討学派と佐学派の生徒達が交戦をしていた。

「たあぁぁっ！」
「せやあぁぁっ！！」

戦いは、数の多い討学派の方が有利のようだ。
討学派はこのまま勢いに乗って、一気に倒そうとする。

だが、そこに1人の生徒の声が響く。

「真選組八番隊組長、藤堂　芹栖!!参りますっ!!」

応援に駆けつけてきた芹栖だ。

「くっ!魁の藤堂だわっ!!」

「組長格!」

「藤堂さんだわっ!」

「魁先生っ!!」

芹栖の出現に、討学派は浮き立ち佐学派の士気は大いに上がった。

「参りますっ!やあぁぁぁぁぁっ!!」

芹栖は愛刀—兼重を抜き放ち、討学派達へと突っ込む。
その真っ直ぐな太刀筋は、実に美しくそして強かった。

「くうぅっ!!」

「くっあぁぁっ!!」

その剣技に、討学派達は押されていく。
それを見た佐学派達も芹栖に続いて、討学派を押そうとする。
だが、世の中そんなに甘くは無かった。

「スキありっ!!」

「はえ?」

余りに突進を続けていた為に、芹栖は背後からの攻撃に気づけなかった。

「たあぁぁっ！！」
「！！」
芹栖は咄嗟に刀で受け止めようとするが、間に合わない。
「（やった！）」
この時、芹栖に斬り掛かった生徒はやったと思った。
だが、彼女には１つのミスがあった。それは――
――――颯間最強と謳われる集団の１人を雇っていた事だ。
「ふっ！！」
芹栖に刀が振られる瞬間、その場に強引に入ってきた１人の影―剣がその攻撃を小太刀で受け止めた。
「なっ！？」
「か、風上先輩！？」
剣の登場に、芹栖や他の生徒達は目を丸くする。
この乱戦の中に、いつの間にか入り込んでいたのだ。
「か、風上先輩！いつの間に！？」

「たった今来ました。雇われた身ゆえ、助太刀させていただきます。」

そう言い討学派剣士の刀を弾き返した剣は、小太刀を構え直す。
剣に後ろを任せた芹栖は、やや困惑しながらも再び討学派達へ突っこんで行く。
その勢いに、討学派は完全に呑まれ後退していく。

「くっ！仕方ないわ、撤収――――――っ！！」

勢いに押された討学派は、やむ終えず撤収して行った。
それを見た佐学派のメンバーは、勝利の喜びを浮かべる。

「さてと、」

剣も小太刀を納刀し、芹栖に接近する。

「芹栖さん。」

剣の呼び掛けに振り向く芹栖に、剣は自分のハンカチを渡す。
その剣の行動に、芹栖はキョトンと首を傾げる。

「お疲れ様です、これで汗を拭いて下さい。」

剣の言葉に、剣の意思を理解した芹栖は顔を赤める。

「い、いえいえいえっ！わわ私なんかが風上先輩のハンカチを使うなんて
そんな恐れ多いですっ！！」
「ふぇ？」

何が恐れ多いのかよく分からない剣だったが、取り合えずハンカチを芹栖に渡す。

「何が恐れ多いのかよく分からりませんが、使って下さい。女の子が汗臭いといけないでしょ？（たしかそう梭が言ってたよな…）」

そう言い剣は笑顔を向けながらハンカチを芹栖に渡した、その時――

――キーンコーンカーンコーン

「あっ」

剣がハンカチを渡し終えたと同時に、昼休憩終了のチャイムが鳴り響く。

「アニキ、次って確か体育じゃなかったすか？」

「あ、ヤバイッ！！」

甚の言葉に急いで着替えないといけない事に気づいた剣はダッシュで教室へ戻ろうとするが、『とその前に』と芹栖に対して口を開く。

「ハンカチはいつ返してもらってもいいですから。それじゃっ！」

そう言い剣はダッシュで教室へ戻って行った。

「は、早い……」
「すごいダッシュ力……」

その場に残された佐学派のメンバーは、その早さに唖然としていた。

「…取り合えず、私達も戻ろっか。」

1人の生徒の言葉に、その場の全員が頷いた……否、全員ではない。
1人、芹栖だけが頷かず剣のハンカチに視線を向けていた。

「?藤堂さん、どうかしたの?」

気になった生徒が、芹栖に語りかけてみる。

「……これが風上先輩のハンカチ……。は、はしたないとは思いますが……
くんくん……ふあああぁ、先輩の匂いが……幸せ?????????……」

「「「……」」」
「クルックー（また暴走したか……）」

芹栖の暴走に唖然となる谷さんと佐学派のメンバー達。

その後、芹栖は何とか正気を取り戻し
ギリギリ次の授業に間に合ったのは全くの蛇足である。

―愛津女学園　学園寮前―

「ふぅ、今日は疲れたなぁ。」

放課後になり、剣は寮の前へとやって来ていた。
その理由は主に、昼休憩の件で色々と疲れた事だ。心身共に。
なので今日は早めに部屋に戻り、少し休息をとろうと考えたのだ。

「ま、昼間が散々でしたからね、色んな意味で。」

「…そうだな…」

甚の言葉にややヘコみながらも、剣は寮内へと入っていく。

「さてと……ん？」

剣は自分の部屋へ向かう最中、奇妙な人影を見つける。
その人影は、妙に大きい帽子を被り戸に張り付いているような体勢だった。

「（あの後姿……ひょっとして……）」

その後姿に見覚えのあった剣は、その人影に接近してみる。

「…フッ！！」

「ふぇ？」

剣が近づいた瞬間、人影は不意に剣の方を振り向き
剣に向かって何かを打ち出した。

「ふぇ　ぇっ！？」

剣はそれを咄嗟に、手で掴み取る。
それは、かなり小さな針のようなものだった。

「これは……吹き矢の矢？」

そう言い剣は吹き矢を放った人影―斉藤に視線を向ける。

「いきなり何するんですか。」
「……不審者かと思った。」

斉藤の言葉に、『ズルッ』とズッコケる剣。

「…それで、斉藤さんは何をなさってるんですか？」
「……密偵。」

剣の言葉に対し、ややぶっきら棒に返す斉藤。
その斉藤の言葉に『あぁ、そういう事ですか』と納得する剣。
忍者である剣も、斉藤の密偵と言う言葉を聞き全てを把握する。
恐らく斉藤は、部屋の戸の隙間から部屋の中の様子を探っていたのだろう。
そこに剣が近づいて来た為、吹き矢を放ってしまったのだ。

「…すみません。」
「…いや、なぜ謝る？」

いきなり謝りだした剣に、即座にかつささやかにツッコミを入れる斉藤。

「いえ、俺が話しかけたせいで密偵の邪魔をしてしまって……ホントすみません。」

剣の素直で率直な理由に、斉藤は目を丸くする。

「……おい、化け烏。」

斉藤の言葉に『何だよ』と返す甚。

「……こいつって……バカ？」

「……そうだな、アニキはバカだよ……『超お人好し』と言う名の大バカだ。」

甚の言葉に『ちげーねぇ』と返す斉藤。
剣はその会話の意味が分からずキョトンとしていた。

「…えっと……2人共、何の話を……っ！！」

キョトンとしていた剣だが、不意に何かに気づいたような堅い表情になる。
そしていきなり、斉藤を抱えたかと思うと跳んで天井に張り付いた。
それを見た甚も、飛んで天井に張り付く。

「っ！？お前何を……」

「しっ！」

喋ろうとする斉藤の口を塞ぎ声を押し殺す剣。
とその時、斉藤が除いていた戸が開き中から1人の女子生徒が出てきた。
肩に白いマントを着用してる所を見ると、討学派の生徒のようだ。

「…変ね、確かに微かな話し声がした様な気がしたんだけど……空

耳かしら。」

そう言い生徒は再び部屋に入り、戸を閉めた。

「……よし…」

それを見た剣は、斉藤を抱えたまま音もなく廊下に跳び下りる。

「……すみません斉藤さん、大丈夫ですか？」

そう言い斉藤を放す剣。だが斉藤は、うつむいたままこちらを見ようとしない。

「斉藤さん？」

心配になった剣は、斉藤の顔を覗いて見る。その斉藤の顔は、ほんのりと赤かった。

「…斉藤さん……ひょっとして熱でも……」

「…違う…何でも無い……」

剣に対し、『プイッ』と視線を逸らす斉藤。

その斉藤の行動に、甚は『はは～ん』と察知する。

「（あの女、さてはアニキに抱き抱えられて赤面したな。）」

甚はこれまでの経験から、そのことを即座に察知した。

剣はかなりの美形だ。それに加えてかなり優しい、強い、笑顔が美しい。

これだけの素材が揃っているのだ。そんな男子に抱き抱えられて

赤面しない女子はまず居ないだろう。
それが、普段無表情で無愛想な斉藤であったとしても。

「……剣って、罪深い……／／／／／／／／」
「ふぇ？」

斉藤の言葉の意味が理解不能の剣は首を傾げるだけだった。

「……取り合えず、初音は密偵を再開する。」

そう言い密偵を再開しようとする斉藤に、剣は口を開く。

「俺が話しかけたせいで、邪魔しちゃいましたからね。お詫びに手伝いますよ。」
「……勝手にすれば。」

剣の申し出に、斉藤は顔を赤めながらぶっきら棒に返す。

「それなら早速…甚。」
「分かってやすよ。」

剣の言葉に、甚は『やれやれ』と言いながらも飛び立ち天井の一部を外し、屋根裏へと入り込む。

「カンリュウサイが部屋を覗き見する時に使う秘密の通路でさぁ。さ、アニキこっちへ。」
「ＯＫ。」

甚の言葉に、剣は屋根裏に行こうとするが　その足を一旦止め、斉藤を再び抱かかえる。

「少し我慢してくださいね。」
「……勝手にすれば／／／／／／／／／／」
斉藤の言葉に『はい、勝手にします』と返した剣は、
甚が開けた屋根裏への穴へと跳び立つ。

屋根裏は、微かな光が差し込む程度で中はかなり暗い。
故に、斉藤には殆ど良くわからない世界だった。

「……暗い……」
「斉藤さん、こっち。ここの光を見て…」

暗闇に慣れていない斉藤に、剣は懐から小型懐中電灯を取り出し
それを口に加え、体操座りの状態で自分の両手を足の下に付けたま
ま歩き出す。

「……何やってんの？」
「これは“深草兎歩（しんそうとほ）”と言って、屋根裏などで足音を立てずに歩く
術です。」

剣の言葉に『へー』と返した斉藤は、自分もその術をやりながら剣
に接近。

「それにしても意外だなぁ。斉藤さんが密偵って。」
「…そう？」

剣の言葉に首を傾げる斉藤。

「だって、斉藤さんって追撃部隊の三番隊の組長さん何ですよね？
追撃部隊の組長さんが密偵て、ちょっと意外ですね。」
「……九番隊が隠密部隊。でも、みきぽんには足が無い。」
斉藤の言葉に『ふぇ？』と首を傾げる剣だったが、
確かに九番隊が隠密部隊だと言っていたのを思い出す。
「なるほど、だから斉藤さんがみきぽんの足となってる訳ですね。」
剣の言葉に『ブイッ』と左手でピースをする。
「あ、斉藤さんて左利きなんですね。」
「…うん。」
剣の言葉に、斉藤の表情が少し沈んだように見えた。
「？（俺、また何か余計な事言っちゃったのかな……）」
剣がそんな事を考える中、甚が剣の頭上に乗る。
「しっかしみきぽんよ、お前さんにはなんか能力は無いのか？」
「……」
甚の言葉に対し、みきぽんは目を細めただけのように剣には見えた。
「…えっと…みきぽんは喋ってるのか？」
剣の言葉に、斉藤は目を丸くした。
「…剣、お前みきぽんの声が聞こえるの？」

斉藤の言葉に対し、剣は首を横に振る。

「いえ、ただそんな気がして……」

「アニキ、その勘は合ってるぜい。」

剣の言葉に対し、甚はそう言いみきぽんを指差す。

「どうやらこいつの声は、妖怪である俺や付き合いの長い斉藤にしか分からなねぇらしい。後こいつには他人の独り言とかを聞きだす能力があるらしい。」

「ほう、確かにそれは隠密には持って来いの能力だな。すごいね、みきぽん。」

剣の言葉に『ニコッ』と微笑むみきぽん。

そんなかんなで、剣は斉藤が覗いていた部屋の上へと誘導する。

「甚、アレを。」

「あいさー。」

剣の言葉に、甚は小さなナイフを取り出したかと思うといきなり、天井に小さな切れ目を2つ入れた。

「さ、ここから除きましょう。」

「おー」

斉藤は、剣と甚の密偵としての技術に感心しながらその隙間から部屋を覗く。

―愛津女学園　学園寮・一室―

ここに、数人の討学派の生徒達が何やら会話をしていた。

「では、作戦実行の日は近いのね？」

「そのようですわ。」

「この作戦は、坂本先輩が考え出した完璧な作戦よ。」

「これが成せば、流れは一気に私達討学派に傾くわ！」

「今度こそ、我ら討学派に勝利を！」

そう言い、討学派の生徒達は互いに刀を向け合い誓いを立てる。

「作戦？」

屋根裏で、討学派の生徒達の会話を聞いていた剣はそう呟く。

「……近々、何らかの作戦を実行する気かも…」

そう呟く斉藤の表情は、剣が今まで見た斉藤とは思え無い真剣な表情だった。

「おい、アニキ。誰か来やしたぜ。」

甚の言葉に、剣は再び視線を部屋へと向ける。

戸が開き、部屋に入って来た生徒は桂だった。

「桂さん！」

「ふぅ。皆さん、今回の策に力が入るのは無理もありませんが、
こんな所でその事を話してはいけませんわ。
九番隊が耳を立てているかもしれません。」

桂の言葉に、討学派の生徒達は『バッ』と辺りを見回る。

「ふふふ。ですが、もし耳を立てているのが
忍びの技で侵入している剣様なら私は全く構いませんが。」

そう言い桂は『チラッ』と天井に視線を向ける。

「…気づかれた!?」

桂の視線が自分達のいる所に向けられ、斉藤はやや動揺する。

「いや、そんなはずは……」

そう言う剣にも、少なからず動揺があった。
屋根裏に入る際に剣は周りを確認したが、誰もいなかったはずだ。
自分達がここにいる事など、知られているはずが無い。
剣は再び、視線を部屋の中へ戻す。

「あ、あの、桂さん?まさか、風上先輩がこの上に……?」

桂が上を向いた事を不思議がった1人の討学派の生徒の言葉に、
桂は不敵に笑いながら口を開く。

「ふふ。いえ、剣様は忍びですからいてもおかしくない様な気がし

ただけですわ。」
「そ、そうですか……」
「ふふふ、ですけど……」

そう呟き、桂は自分の後ろに視線を向ける。
そこには、いつもは伊織と一緒にいる妖犬・信吾がいた。

「……どうですか？」

桂の言葉に、信吾は無言で天井に視線を向け、鼻と耳をピクピク動かす。

「……バウ（微かだが物音がする……それに加えて……）」

そう言い（？）信吾は、体を身構えた。

「バウッ！！（微かだが斉藤がいつも行く蕎麦屋の匂いと、剣がいつも使うシャンプーの匂いがするっ！！）」

「「「「「「！！」」」」」」

信吾の言葉に、討学派達は武器を構えだす。

「信吾さん！」
「バウッ！（報酬は！）」
「ホットドック５つでっ！」
「バウッ！（了承っ！）」

桂の言葉に、信吾は天井に向かって跳び立ち、その勢いのまま天井をぶち抜いた。
そしてそこには当然、信吾の予想通り剣と斉藤に加え甚がいた。

「……っ！まさか蕎麦の匂いを当てるとは……」
「いや、斉藤さん。そんな事言ってる場合ですか今。」
「いやアニキ！あんたも十分落ち着きすぎだからっ！！
さっさと逃げやしょうぜっ！！」

斉藤と剣にツッコミを入れながら、甚はここから逃げようと進言する。
が、それを簡単にに許す信吾ではない。

「バウッ！（逃がすかぁっ！）」

信吾は牙をつきたて一気に迫る。

「……っ！」

斉藤は内心焦っていた。ここは屋根裏、普段自分達が刀を振るう教室や廊下とは比べ物にならないほど狭い空間だ。
これだけ狭い空間では、いつもの様に刀が振る事ができない。
それに対し信吾は、斉藤や剣に比べてこういう狭い場所でも動ける体格だ。
それに彼の武器は刀ではなく自らの牙や爪だ。
そこまで振り回す必要は無い為、こういう狭い場所での戦闘では有利だ。
さらに、いかに暗い所である奥へ逃げようとも
信吾にはそれらを察知する耳と鼻がある。
信吾は、距離を一気に積め牙を突き立てる。

「ガオオオオオォォォォォォンッ！！」
「――――――っ！！」

刀を抜く暇もなかった斉藤は、敗北を覚悟した。
この狭い空間では、正規戦闘では到底　斉藤に勝ち目は無い。
だが、斉藤も信吾も桂達討学派達もある事を忘れていた。
それは――――――

――――斉藤には、不正規戦闘を専門とする最強の忍者がいる事を。

「斉藤さん！失礼っ！！」
「っ！？」

剣は咄嗟いに斉藤の目を手で塞ぎ、懐から黒いボールを取り出し
信吾に向かって投げ付ける。

「バゥッ！？（げっ！？それは……）」

信吾は以前やられた煙玉の事を思い出した
その瞬間――――――

――――――屋根裏は爆音と光で覆われた。

「バッックシュンッ!!バウゥ（へくしゅん!!くそ、またこれか……）」

信吾の脳裏に、以前の出来事が蘇る。
あの時やられた煙玉の煙には、目や鼻を短時間の間沁みらせる効力があった。
鼻が効く信吾にとっては、アレは悪夢だった。
しかも今回のには、光で目を眩まし音で耳を眩ます効果までである。

「信吾さんっご無事ですかっ!?」

桂の呼びかけに、信吾は仕方なく撤退し部屋へと戻る。

「バウッ（くそ、完全に逃げられた）。」
「そうですか……」

信吾の言葉に、桂は残念そうに天井に開いた穴を見つめていた。

―愛津女学園　学園寮付近の林―
「…ふぅ、何とか逃げてこれたね……」

屋根裏から脱出した剣達は、寮の近くの林に身を潜めていた。

「……おい。」
「ふぇ?」

不意に、今まで黙っていた斉藤が口を開く。

「……お前、いつまで初音を抱いてんだ。」

「ふぇ？……あっ！」

斉藤の言葉に、顔を赤くしていく剣。

実は、屋根裏から脱出する際に剣は斉藤が煙玉の光で目がやられるのを避ける為

自分の手で斉藤の目を塞いだ後、そのまま斉藤を抱かかえて脱出したのだ。

それが、斉藤が指摘するまで剣はうっかり忘れていたのだ。

「す、すみません……」

そう言い斉藤を放す剣だったが、斉藤は未だに『じー』と視線を剣に向ける。

「あ、あの、斉藤……さん？」

「……剣、今日は助かった。」

「ふぇ？」

斉藤の言葉に、剣は首を傾げる。

「……お前が屋根裏を手配してくれなかったら、

あそこまで確実な情報は手に入らなかった。」

「いえ、そんな事……」

「お礼に蕎麦を奢ってやる。初音の常連の店だ、着いて来い。」

そう言いズカズカと歩いて行く斉藤。その斉藤の行動について行け

ない剣。

「え、え～と……」

剣は『どうしよう』という視線を甚に向ける。

「ま、女の誘い断ると梭の旦那に何言われるか分かりやせんからねぇ～。」

「そ、そうだな……」

甚の言葉に、剣は斉藤の後をついて行った。

―杏の町　商店街―

「ふぅ、おいしかった。」

「…だろ？」

斉藤に案内された蕎麦屋で、剣は斉藤の蕎麦講座を聞きながら蕎麦の味を堪能した。

どうやら斉藤は大の蕎麦好きらしく、

その為あれやこれやと蕎麦の何たるかを教えてくれた。

剣はそれを面白そうに聞いていたが、

甚は余り興味なさそうに蕎麦のうまさに夢中だった。

「ま、テメェの蕎麦講座はともかく蕎麦はうまかったな。」

「そう言うこと言うんじゃない。」

そう言い剣は、コツンと甚を軽く叩いた後、斉藤と並んで蕎麦屋を後にする。

「……剣。」
「ふぇ？何ですか？」
不意に声を掛けてくる斉藤に、笑顔で返す剣。
「……手、繋いでいい？」
「ふぇ？」
斉藤の予想外のお願いに、キョトンとなる剣だったが
身長の低い斉藤の、おねだりするような上目使いに『うっ』と顔を
赤くしていく。
「…わ、分かりました。」
そう言い剣は、オズオズと手を差し伸べる。
その手を斉藤は『ギュッ』と握り締め、2人は歩き出す。
「……剣の手、あったかい……」
「そ、それは、どどどうも……／／／／／／／／／／」
剣は『チラッ』と視線を斉藤に向ける。
その視線に気づいた斉藤は、満足そうに『ニコッ』と微笑を見せる。
その笑顔に、剣の顔は益々赤くなりつい視線を逸らしてしまう。
さらに、五感のいい剣は周りから聞こえる声が良く聞こえてくる。
「おい、あの子。」
「うひょー、かわいいじゃん！」
「ねぇねぇ、あの彼けっこうイケてない？」
「うわぁ、美男美女カップル！？いいなぁ～。」

そんな声と視線が、剣と斉藤に向けられる中
剣と斉藤は、学園に着くまでその手を離さなかったという。

「おーおー、手を繋ぐとは奴も結構成長したか？」

高いビルの上から状況を見ていた幻八はそう呟く。そこに、甚が飛んで来る。

「また覗き見かい、幻八の旦那。」
「よぉ甚。ま、あんなヘタレ野郎の成長を見守りたくてねぇ～。」
「ホントかよ……」

そう言い『ふぅ』とため息をつく陣であった。

ちなみにその後、２人は手を繋いでいる所を討・佐両派に目撃され斉藤は質問攻めに、剣は土方に追い掛け回されたのだがこれらは全くの蛇足である。

『～第十二章～　芹栖の暴走。剣、斉藤と密偵する　《終》』

～第十二章～　芹栖の暴走。剣、斉藤と密偵する（後書き）

十三話目完成です。
今回のお話は、よく一緒にいる芹栖と斉藤コンビにいたしました。
この話により、斉藤は剣を少しずつ掘れて行き、
芹栖も憧れる恋愛へのめり込んで行く予定です。
正直、芹栖は簡単に設定などを考え出しましたが、
斉藤が中々思いつきませんでした。
そこで、斉藤がみきぽんの足として隠密をしている所に目をつけました。
忍びである剣と接点を強めるなら、隠密系をネタにした方がいいと考えました。
その結果、今回のお話のようになったのですが
原作で斉藤は気が付くと好きになってた感があるので、
多少強引になったかもしれませんが、どうだったでしょう？
今後とも、よろしくお願いしま～す。

～第十三章～　涼華のお願い。伊織との対決！

―愛津女学園　学園内・廊下―
「ふぅ、そろそろ戻ろっかな……」
「ですね、腹減りやしたし……」

夕日が差し掛かる放課後の愛津女学園の廊下で、剣と甚はそんな会話をしていた。
剣は今日、特に雇われることも無く平和に1日を過ごすことが出来た為か、
その顔にはどこか安心しきった表情が満ち溢れていた。

「さてと、そんじゃ戻ろ……あれ？」

寮に行こうとした剣だったが、偶然通りかかった3年生の教室に見知った人を見つける。

「あれって……坂本先輩……だよな…」
「お、ですね。」

剣が見掛けた教室の中に、後姿だが間違うことの無い1人の生徒、討学派　徒沙班筆頭の“坂本　涼華”だった。だが、見た所様子がおかしい。
『ぼー』と窓の外を眺め、何か物思いにふけってるように見える。

「どうしたんだろう坂本先輩、ぼーとして…。」

妙に気になった剣は、教室に入り坂本に話しかけてみる事にした。

「坂本先輩。」

剣の呼び掛けに気づいた坂本は後ろを振り向き、
やや目を丸くしたがすぐにいつものような人懐っこい笑顔を向ける。

「よぉ、剣くん。今から寮へ帰るのかの？」
「えぇ、まぁ。坂本先輩は、そこで何をなさってるんですか？」

剣の言葉に、坂本は視線を再び窓の外へと向ける。

「あちはのぅ、ぼけっとここから眺めを見ちょったぜよ。」

その坂本の視線が気になり、剣は窓の外に視線を向ける。
そこには、寮へと戻る生徒達の姿があった。
別に何の事は無い、いつも通りの景色だった。

「……毎日見てて思んじゃが、この光景あちにはとても不自然に思えるがよ。」
「ふぇ？不自然ですか？」

坂本の言葉の意味がイマイチ察知できない剣が首を傾げると、
坂本は苦笑いをしながら言い返す。

「男子校、女子校……それが悪いとは言わん。
けんど、やっぱり男子と女子が一緒に居てこそ学園っちゅーもんは調和が取れるもんじゃとあちは思うとる。」
「調和、ですか……」

坂本の言葉に、剣は自分が愛津に来てからの出来事を振り返った。
最初は戸惑いもしたし赤面しまくりだった。

おまけに土方のような男嫌いの生徒に目をつけられたりと、
まさに悪夢に近かったが同時に楽しい出来事もあった。
一緒に本を読んだり、弁当食べたり、一緒に密偵などもした事で
剣も以前よりは女子に苦手意識を見せる事は無くなった。
同時に、女子と共に過ごす事で新しい発見などもあった。
坂本の言う通り、男子と女子が共に居る事で調和が取れるのではと
剣はそんな事を考える。

「あちはのう剣くん、この愛津女学園に共学化の話が出た時、そりゃあ喜んだがよ。
ようやく男女揃っての生活する事の楽しさが味わえる、そう思ったがやき。」

そこまで言い坂本は、『けんど』と一旦言葉を区切り再び口を開く。

「この学園の全生徒が同じ喜びを感じちょる……
てっきりそう思うちょったんじゃが、あちは考えが甘かったやきね。」

そう言い坂本は『タハハ』と笑いながら、頬をポリポリとかいた。
そんな坂本を、剣は『先輩……』と心配そうに見つめる。

「これだけの生徒が居れば、それと同じだけの受け取り方や思想がある。
あちはそれをよく分かっとらんかったんじゃのぅ。
お陰でこの学園は共学化の賛成派と反対派で真っ二つに別れちょる。
……あちがもっと上手くやっとりゃ、こんな事にはなりゃせんかった筈なのにのぅ。」

そう言い坂本は再び視線を窓の外に向け、ほんの少し唇を噛み締め

た。

「以外っすねアニキ。この飄々とした坂本にも、悩みはあったんすね。」

「お前はまた！」

甚の言葉に『ピシャッ』と叱咤を入れる剣。その声に、坂本は『はっ』と我に戻る。

「す、すまんの剣くん。君に愚痴をこぼしてしもうたきに。まっあちにもこうしてアンニュイになる日があるっちゅーことやね、ははは。」

そう言い無理に笑顔を作っているのが、ニブチンの剣にも理解できた。

「坂本先輩…」

無理をしている坂本に、剣は何かしてやりたくなった。そして考えた末に、剣は坂本に接近しその頭を撫でた。

「なっ！？つ、剣くんっ！！？」

剣の行動に、坂本は顔を赤くしかなり動揺していた。

「…坂本先輩は、凄いですね。」

「えっ？」

驚く坂本に、剣は優しく語り掛ける。

「こういった大きな出来事には、どうしても意見が分かれるものだと思うんです。
たとえ坂本先輩以上の人が居たとしても、
一発で全員の同意なんて得られないと思います。」

そう言い剣は自分の足を曲げ、目線を坂本と同じにする。

「先輩、言いましたよね？『自分の思った通りには行かなかった』って。
でも、先輩は途中で投げ出しませんでしたよね。
今もその目標の為に頑張ってますし、主張を引っ込める気もない。
あの、愛津最強の剣客集団　真選組を相手に一歩も引く事も無く。
……俺、尊敬しますよ先輩の事。」

そう言い優しい笑顔を向ける剣。

「剣くん……おんしゃあ……」

その剣の言葉と笑顔に、坂本は顔を益々赤くしうつむく。
と同時に、剣は自分が未だに坂本の頭を撫でる続けている事に気づき慌てて手を引っ込める。

「す、すみません……」

そう言い申し訳なさそうな表情をする剣だが、坂本はそんな事気にしていなかった。

「い、いや、べつに、あちは気にしてないぜよ。
ただその、あちはこの歳で頭を撫でてもらった事が、無かったからのぅ……

この身長じゃし……。」

そう言い顔を赤めて、剣から視線をズラす坂本。
確かに、坂本の身長は１７０と普通の女子に比べて背が高い。
そんな彼女を撫でる者など、そうは居ないのだろう。

「ますます意外だな。こんな事で顔赤めるようなキャラかお前？」
「甚！」

甚の言葉に、再び『ピシャッ』と叱咤を入れる剣。

「……剣くんが最初からこの愛津女学園におってくれりゃあ、ここまでややこしい事態にはなってなかったかもしれんのぅ……。」
「ふぇ？」

不意にそう呟いた坂本に、剣はキョトンと首を傾げた。

「俺なんかがいても何の役にも立たないと思いますけど……」

剣の言葉に、坂本は『うんにゃ』と言い返す。

「剣くんほど話が分かる奴が佐学派におれば、こうはならんかったぜよ。
連中、頼子くんを除いて腕は立つが頭の固い奴ばっかでのぅ……特に歳緒くんは。」
「ハハハハハハッ、ちげーねぇなそりゃ。あの女の脳ミソぜってーセメントだぜ。」
「甚、それは言いすぎ。」

そんな会話で、3人は『ははは』と笑い合った。

「ははは、剣くん達と話すのは楽しいのぅ。
佐学派の連中も、こうして男女で語り合う楽しさを
知ってくれりゃあええんじゃがの。」
「そうですね。」

そう言い剣は、視線を窓の外上空へと向ける。

「でも先輩、俺が佐学派にいるってことは無いと思いますよ。」
「？」

剣の言葉に首を傾げる坂本。

「俺は所詮　颯間八忍隊の一員。討学にも佐学にもつかない半端者です。
たとえ俺が愛津の生徒だったとしても、真選組には入らなかったと思いますよ。」

そう言う剣の瞳は、どこか寂しげと言うか
何かに対する情けなさを見てるようだった。

「剣くん？」
「…っ！！そ、そろそろ戻りませんか？」

剣は急に話題を変えるように声をあげ、坂本に視線を向ける。

「ん～、その前に剣くん。1つ、あちのお願いを聞いてくれんかのぅ？」

少し考えた後、坂本はそんな事を言い、その言葉に剣は首を傾げる。

「何ですか？俺に出来る事だったら何なりと……」

「ほ、ほうか？」

剣の笑顔にやや顔を赤くしながら、坂本は口を開く。

「これは、剣くんにしか頼めん事ぜよ。あのな……」

そこまで言い坂本は一旦言葉を区切り、意を決して口を開く――――

「あ、明日のう、あちと……デ、デートしてくれんかのぅ……？」

「ふぇ？あぁ、そんな事でいいなら……ん？」

坂本の言葉に、剣はキョトンと首を傾げる。

「…デート…？」

尋ねるように聞く剣に、坂本は『コクリ』と頷いた。

「ふえぇぇぇぇっ！！？」

坂本の言葉の意味を理解した剣の大声が、教室に木霊する。

「で、でも、どうして急に！？」

剣の質問に、坂本は頬をポリポリかきながら口を開く。

「…実はのぅ、討学派の生徒達はやっぱり恋愛事に興味がある訳なんぜよ。」

そう言い坂本は、理由を説明しだした。

坂本の話では、討学派の生徒達は恋愛事に興味はあるが経験が無く筆頭である坂本によく相談を持ち掛けて来るのだが、坂本　本人も恋愛経験など無く
どう答えればいいのか分からないらしい。
そこで坂本は、以前やちと剣のデートの事を思い出し自分も剣とデートしてみれば
何か分かるかも知れないという考えらしい。

「共学を推進するあちが、そういう経験をまるでしてないのもどうかと思うしのぅ……だからの剣くん、協力してもらえんじゃろうか？」
「は、はぁ……」

坂本の頼みに、剣は『どうしたものか』と悩みだす。

「……もちろん、剣くんにも選ぶ権利はあるぜよ？
ほれ、あちは桂と違って艶も無いしこの喋りじゃあ色気も出ないしのぅ。」
「……そんな事ありませんよ。」

自身なさそうに呟く坂本に、剣は坂本の手を握り自分の頬に当てる。

「っ！？つ、剣くん！？」

その剣の行動に、坂本は顔を赤める。

「…坂本先輩、分かりますか？俺の顔の体温が高いのを、顔が赤いのを。」

「え？……あ、あぁ……」

剣の言葉に顔を赤めながらも答える坂本。確かに、剣の顔は赤くなり温度も熱い。

「俺の顔が赤くて熱いのは、坂本先輩が魅力ある女の子だからですよ。
だから魅力が無い何て言わないでください、ね？」

「剣くん……おんしゃあ……」

そう言い優しい笑顔を向ける剣に、坂本は顔を真っ赤に染めた。

「そ……それじゃ、その……デートの件は……ＯＫってこと……かのう？」

「ふぇ？」

坂本の言葉に、また顔を赤めた剣は一瞬目を丸くするがゆっくりとではあるが頷いた。

「お、俺で、いいんですね？」

「…剣くんじゃなきゃ、頼まんぜよ……」

そう言いお互いに顔を赤めていく剣と坂本。

「そ、それじゃあ剣くん。詳しい事は後でメールするきに、メアド教えてくれんかのう？」
「あ、はいっ！」

そう言いお互いに携帯を出し合う2人の横で、甚は『ふぅ』とため息をついていた。

「（やれやれ、アニキの奴何をするかと思やぁ、相変わらず天然故の大胆な行動とるよなぁ。だから女事になると碌な目に合わないんだろうけど。）」

そう思いながら、甚はメアドを交換し合う剣と坂本を眺めていた。

―愛津女学園　学園寮内・剣の部屋―

夕飯を済ませた剣は、自分の携帯にメールが届いているのを確認していた。
その内容は、明日の午前九時半に学校の正門前で待ち合わせしようという内容だった。

「とは言ったものの、どうしよう。」

一様承諾したものの、デートの経験などやちとの恋人ごっこ位しかない剣は
困り果てていた。そんな剣に助言をするのが、甚の役目だ。

「アニキ、ここは魁（かい）の旦那に聞いてみたらどうです？
あの人ならこういった事に詳しいはずですぜ。」

「う～ん、それしかないか……」

甚の言葉を承諾した剣は携帯を手に取る。
ちなみに魁とは、剣と同じ颯間の2年に在籍する親友である。
剣同様かなりの美形で女にモテるが、鈍感な剣と違い女心に鋭く何回か女子とのデート経験もある。
彼なら、剣の相談相手に持って来いと甚は判断したのだ。
剣は携帯をいじり、梭に連絡をする。

ピリリリリリ…ピリリリリリ……ガチャッ

「《もしもし、剣か？》」
「魁、久しぶり。」
「《久しぶりって、お前が愛津に行ってからまだ一月しか経ってないぞ。》」
「俺にとってはもう一月も経ってるだよ。」

剣の言葉に『ははは』と笑う魁。

「《それでどうしたんだ？》」
「あ、うん…ちょっと相談があってさ……」

剣の言葉に『はは～ん』と何かを察したように呟く魁。

「《お前が俺に相談する事と言えば、大概　女性絡みだ。何があった？》」
「ははは、鋭いね。実は……」

剣は、今日の出来事を梭に打ち明ける。

「《……なるほどな、しかし剣。》」
「なに？」

魁の言葉に首を傾げる剣。

「《幻八から聞いたぞ、お前佐学派の女子とデートしたらしいじゃないか。》」
「ふぇっ！？」

魁の言葉に目を丸くし転びそうになる剣。

「な、なななななななな！？」
「《落ち着け剣。日本語を話せ。》」
「ふぇ、は、はい……」

魁の言葉に何とか冷静になった剣は、改めて魁に問い掛ける。

「…なんで知ってるの？」
「《言っただろ、幻八から聞いたって。あいつ普通に潜入してるぞ、愛津学園に。》」
「……うん、幻八なら普通に想像出来る。」

剣の言葉に『そう言うことだ』と頷く魁。

「でも魁、俺がやったデートって殆ど相手の人、やちさんっていう人が
進めてくれた気がするんだ。本来デートって男の方が進めるんだろ？
今の俺じゃ、坂本先輩をがっかりさせるんじゃないかって思ってさ。」
「《問題ない。》」

「即答！？」

あっさりと答えを出された事に、剣はズッコケた。

そんな剣に、魁は言葉を続ける。

「《剣、お前にはノアも認める女性を落とす天然の才能がある。お前は普通に行動するだけで女性を満足させれる。断言しよう。》」

「なんだか、断言されても微妙に嬉しくないような……」

「《そんな事言う奴は世界広しと言えど、お前と極一部の男子だけだよ。》」

魁の言葉に『そうなの？』と首を傾げる剣。

「《まぁそういう訳だから、自身を持て剣。お前ならやれる♪》」

「いや、やれると言われても……」

「《自身持てよ、その坂本先輩は、お前を信じてデートしてほしいと頼んだんだろ？

だったら自身を持て。お前を信じてくれた女性に失礼だぞ。》」

「う……うん……」

「《よろしい、頑張れよ剣。》」

そう言い魁との電話がきれる。とりあえず剣は、明日着ていく服を決める事にした。

その様子を、こっそり見ている者がいるとも知らずに。

―愛津女学園　校門・通称：蛤御門（はまぐりごもん）―

何やかんやで翌日、青のジーンズに白い半袖のTシャツ、

その上に水色と蒼のチェック柄が入った半袖の上着を着用した剣は、

待ち合わせ場所である門の前にいた。
……待ち合わせ時間より1時間も早く。

「（“ノア式デート大原則”第一条「地の巻」第一項ケッヘル番号011
『男は女子を待たせてはいけない、デートの時は1時間前行動をとるべし。』
……だったよな、ノアが言うには。）」

そう考えながら剣は、腕時計を見ながら坂本を待つ。
実は剣は、昨晩　梭と電話した後　念の為に女事に関しては梭並に詳しい
ノアという男からデート大原則を教えられていたのだ。

「（ま、1時間前ならゆっくり待てばいいか……）」

そう考えていた剣だったが、それは次の瞬間裏切られる。

「つ、剣くん!?」
「ふぇ？」

不意に声が聞こえた剣は、声のした方を向く。
そこには、私服の和服に身を包んだ坂本がいた。

「さ、坂本先輩!?」

その姿に、剣は目を丸くしながら腕時計を確認する。

「え、え～と……坂本先輩、まだ、時間には余裕が……ありすぎますよね？」
「あ、あぁ、そうじゃのぅ。剣くん、やけに早いのぅ…」
「えっと……デ、デートの待ち合わせは、男は女の子を待たせない為に
１時間前行動すべし、って友人が言ってたので……坂本先輩も、随分お早いんですね。」
「あ、あははは……。いや、のぅ……デ、デートするのは初めてじゃきに
昨夜は緊張して眠れなかったんぜよ。だから早く起きてしもうて……」
「そ、そうなんですか……」

そこまで言い、剣と坂本の間に沈黙が漂う。
……その状況を、面白そうに眺めている者がいるとも知らずに。

「クケケケケケ、相変わらずの反応だなぁおい。」

剣と坂本のいる門から離れた学園の校舎の屋上に、不気味に笑う１人の女子生徒。
その肩には、『はぁ』とため息をつく甚の姿があった。

「幻八の旦那、頼むから変装といてくだせーよ。
女の顔でその笑い方不気味すぎやすぜ。」

甚の言葉に『そうか？』と返した女子生徒、
幻八は自分の顔をベリッと剥がし悪魔のような素顔を現す。

「くひひひひひ、貴様もいい加減慣れろよ。」

「無理っすよ、アニキ達ですら慣れねえのに俺に慣れろって…」
「ひははは、そりゃそうだ。」

甚のツッコミに不気味に笑う幻八。
知っての通り、彼は剣と同じ八忍隊の一員だ。
特技である『変装術』を用いて去年からこの愛津女学園に潜入している。
その中で、度々剣の状況を見ている。
そんな彼が、剣のデートの話を聞いて黙っているはず無く
甚と共にこうして偵察しているのだ。

「さてさて、奴めどうするかな？キヒヒヒヒヒヒヒ…」

笑いながら幻八は、今だ沈黙が流れる剣達へと視線を向ける。

「……／／／／／」
「……え、えっと……先輩。」

沈黙がなれる中、剣は坂本に手を差し伸べる。

「え…」
「（“ノア式デート大原則”第二条「水の巻」第一項ケッヘル番号253
『デートの時は男が女子をリードすべし』だったよな…）
その……そろそろ行きませんか？」

そう言い剣は再び手を差し伸べる。

「剣くん……／／／／／」

その剣の行動に、坂本は顔を赤めながらも剣の手を握る。
その手の温もりに、坂本はもちろん手を差し伸べた剣も顔を赤くする。

「で、では、行きましょうか。」
「…あぁ、そうじゃのう！」

剣の言葉に『ニコッ』と微笑む坂本。
その笑顔に、剣は再び顔を赤めながらも坂本の手をしっかり握り歩き出した。
……その状況を、こっそり見ている者がいるとも知らずに。

「……情報は間違ってなかった。」

木の陰から、ひょっこりと顔を出すのは私服のメイド服を着た斉藤だ。
いや、斉藤だけではない。
よく見ると他の真選組メンバー達の姿があった。

「うわぁ～、ツルくん本当に涼ちゃんとデートするんだねぇ～。」

剣と坂本の姿を微笑ましく見つめる近藤。
そんな中、他のメンバーも視線を剣達に向けている。

「剣先輩もやりますねぇ～。永倉先輩に続いて坂本先輩ともデートするとは、
中々すみにおけませんねぇ～。」
「あたしに続いて涼華ともデートかぁ……剣ってばやるわねぇ。」

「あぁ、いいなぁ～。私も風上先輩と……はわぁ～、ダメですよ先輩……」
「…芹栖、落ち着け。……でも、初音も剣と食事ぐらいならしたい……」
「へっ!?あいつら一緒にメシ食いに行くのかよ?いいなぁ～、当然　剣のおごりなんだろうなぁ～……。」
「えぇと……私達、覗き見なんてしちゃって良いんでしょうか……」

皆が盛り上がる中、ただ1人申し訳なさそうに呟く頼子に『不要の心配だ』と妙にニヤついている土方が語りかける。

「これは覗きではない、監視だ。奴がデートと称して破廉恥な行為を起こしたらその場でたたっ斬る為にな……」

そう言い『ニヤリ』と微笑む土方に、頼子は『ゾクッ』と背筋が凍った。

「で、でも、剣さんそんな事する方じゃないと思いますけど……」
「……剣の場合、“しない”じゃなくて“出来ない”……」

頼子の言葉にささやかにツッコむ斉藤。そんな中、近藤は土方に接近し口を開く。

「それより歳ちゃん、乱暴はダメだよ?」
「えぇ、奴が破廉恥な行為をしなければですが。」

そう言い土方は他のメンバーに視線を向ける。

「よしっ！ともかく奴らを追うぞ。」

土方の言葉に、他のメンバーは頷き剣達の後を追おうとする。
が、その時――――――

「クケケケケ、貴様らでは役不足だ、やめておけ。」

「「「「「「「「「！！！？？」」」」」」」」」

不意に背後からそんな声が聞こえたメンバーは驚き、一同は振り向く。
そこには、黒ずくめの服を着た悪魔のような顔の男がいた。
その存在に驚くメンバーだったが、そんな暇も無くその男は行動を起こす。

「かあぁっ！！」

信じられない事にその男は、メンバーに向けて口から紫色の煙を吹き出したのだ。

「きゃっ！？」
「な、何これっ！？」

不意をつかれたメンバー達は、その煙をまともに受けてしまう。

「ケホッケホッ、何、この煙……」
「コホッコホッ、……変な、匂い……」
「ぐっ……い、意識が……」

煙の中で、メンバー全員がバタバタと倒れていった。

「……ありゃりゃ、旦那～あんた何やってんすか。」

木の上でその状況を見ていた甚は、煙を吹き出した幻八に視線を向ける。

その視線に、幻八は『ヒヒヒヒヒッ』と笑いながら言い返す。

「知れた事、追跡力や隠密能力の低いこいつらでは偵察の邪魔になる。

真選組には隠密部隊もいるみてぇだが、所詮俺ら忍びに比べれば偵察能力など高が知れる。だから眠らしたのさ、かなり強力な“催眠ガス”で。」

「……理由は分かりやしたけど、何でわざわざ口に含んで吐くんすか。」

「その方が俺には似合うだろ?」

「……まぁ、確かに……」

幻八の言葉に、『もう言うだけ無駄』と判断した甚はクチバシを閉じる。

「さて、邪魔者は消えた。さっさと追うぞ糞烏(くそカラス)っ！」

「へいへい。」

幻八の言葉に、甚は力なく答えるのであった。

―杏の町　商店街の店・近江屋（おうみや）―
杏の町の商店街の飲食店・近江屋。
愛津女学園　討学派メンバーがよく利用する店に、剣と坂本はいた。

「（“ノア式デート大原則”第三条「火の巻」第一項ケッヘル番号３６７
『デートする場所の基本は喫茶店及び飲食店が良い』
……だったよな、ノアが言うには。けどここからどうしよう……）」

ノアのアドバイス通り飲食店である近江屋にやって来たのだが、
その後の事を考えてなかったので、どうしたものかと考え込む剣。

「（…とりあえず、飲食店だから何か頼もうかな……）」
「……のぅ、剣くん。」
「ふぇ？」

悩んでる剣に声を掛ける坂本。

「あ、あちな、ここのスペシャルメニューを頼もうかと思っちょるんじゃが……」
「ふぇ？あ、はいもちろん俺が奢りますよ（“ノア式デート大原則”第四条「風の巻」第一項ケッヘル番号４２９
『デートでの買い物や飲食は、男が奢るべし』だったよな……）」

坂本の言葉に答えながらノアのアドバイスを剣が思い出す中、
坂本はスペシャルメニューをウェイターに注文する。

しばらくしてウェイターが持ってきたスペシャルメニュー、それは
――――――

「……えっと……坂本先輩…？」
「ん？」
「これって…一体……」

そう呟く剣の目の前に置いてある物、それは大き目のグラスに入ったトロピカルジュースだった。しかも、ストローが2本入っている。

「（こ、これは、もしかして、ノアが言っていたデートの定番、『1つトロピカルジュースを2本のストローで恋人同士で飲みあう』なのか……
え、えぇっと、この場合どうすれば……）／／／／／／／／」
「……迷惑じゃったかのぅ？」
「ふぇ？」

剣がノアのアドバイスを思い出す中、坂本はどこか申し訳なさそうに呟く。

「あちな……いつか、彼氏が出来たらこれを頼みたかったんぜよ。……この店のスペシャルメニュー、恋人限定のトロピカルジュースを……」
「ふぇ？で、でも俺は……」
「判っちょるきに。あちは剣くんの正式な彼女じゃない。」

そう言い坂本は視線を下に向けていたが、再び剣に視線を向ける。

「……それでも、剣くんとしたかったんぜよ。たとえ本当の彼氏じゃなくても……」

「ふぇ？」

坂本の言葉の意味がイマイチ理解できない剣。無理もない。
彼が女心に対するニブチンなのは周知の事実。
だが、剣はニブチンだがとても優しい心の持ち主である。
坂本がいかなる理由で自分をデートの相手に選び、擬似的にもかかわらず
一緒にジュースを飲もうとしてくれてるのかは分からないが、
選んでくれた以上しっかりやるのが剣である。
剣は、トロピカルジュースに刺さる2本のストローの内1本に手を伸ばす。

「剣くん？」
「飲みましょう先輩。こんな俺とで良ければ。」
「剣くん……／／／／／／／／／／」

そう言い『ニコッ』と笑顔を向けてくる剣に、坂本は顔を赤く染めた。

「（優しすぎるぜよ、剣くん……）そ、それじゃ、一緒に……／／／／／／／／／／」
「あ、はい……／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

お互いに顔を赤めながらも、剣と坂本はストローに口をつけジュースを飲んで行く。
そしてその姿を見た他の客から冷やかしを受けたのは全くの蛇足である。
そして、その中に1人の男がいるのも……

「クヒヒヒヒヒヒ、奴めやるじゃねぇか。」

剣と坂本に冷やかしが飛ぶ中、１人の男が客に混じり2人をカメラに収めていた。
その男は普通のTシャツに黒髪のショートヘアー、いわゆる普通の男で
特に特徴はないこの男。分かる方には分かるだろう。
そう、この男　変装した幻八である。
得意の『変装術』でごく普通の男に変装し剣と坂本のデートを観察し、
手に隠し持っているカメラで写真を取っているのだ。
その幻八の足元のカバンから、甚も顔を出す。

「旦那、写真取ってどうするんすか。」
「ん？依頼だ。」
「依頼？」

甚の言葉に『そうだ』とニヤつきながら答える幻八。

「愛津および颯間の討学派共に雇われたんだよ。
依頼内容は『剣と坂本のデートの追跡および撮影』。
これだけで愛津・颯間それぞれから４０００、計８０００ゲットだぜ！
クヒヒヒヒヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャッ！」

「…二股かけたのかよ……ま、いつもの事か。」

幻八の言葉にため息をする甚。
そう、この幻八。傭兵課業を営む八忍隊の中でも、特に金に対する執着心が強く

よく二股かけてより多くの金を稼ぐのを得意としているのだ。

「やれやれ……ん？」

カバンから顔を出していた甚は、不意に幻八がそのカバンを持ち上げることに驚く。

「どうしたんすか旦那。」

「貴様と話してる内に、奴らが食事を終えて店を出ようとしている。とっとと追うぞ。」

「へ？」

幻八の言葉に、甚は視線を剣達に向ける。

確かに2人はあの大きなトロピカルジュースを飲み干し店を出ようとしていた。

「さて、追うぞ。さっさとカバンの中に戻れ！」

「うげぇっ！」

幻八にカバンの中に押し込められ、苦しそうに悶える甚であった。

―杏の町　商店街―

近江屋を出た剣と坂本は、商店街の街中を歩いていた……もちろん手を繋いで。

「……の、のぅ、剣くん。次は、何処に行く？」

「お、俺は……先輩の行きたい所なら、何処でも……」

「ほ、ほうか……あっ」

イマイチ会話が進まない2人であったが、不意に坂本の目が一点に止まる。
その視線を剣が追って見ると、そこにはゲームセンターがあった。
それに気づいた剣は、坂本に視線を向け口を開く。

「あそこに行きたいんですか？」
「え？」

剣の言葉に驚く坂本だったが、すぐに否定するように首を振る。

「いんや。あそこはあちがよく利用する場所じゃき、目が行っただけぜよ。」
「はぁ……」

坂本はそう言うが、その目は明らかに行きたいという目をしていた。
何となくそんな気がした剣は、坂本の手を引く。

「先輩、次に行く場所をリクエストしてもいいですか？」
「ん？おぉ、いいぜよ。」
「では。」

そう言い剣は坂本の手を引きゲームセンターへと進んで行く。
それに気づいた坂本は目を丸くする。

「え！？お、おぉい、剣くん！？」
「俺のリクエストとして、ゲームセンターに行きましょう。ね♪」
「剣くん……／／／／／／」

剣の気遣い（天然による）に坂本は顔を赤めた。

「ほぅ、次はゲーセンか。」

ゲームセンターに入って行く剣達の姿を確認する男、もちろん変装した幻八である。

「ゲーセンかぁ……アニキにしちゃ以外な場所を選んだな。」

幻八の持つカバンから、甚も顔を出す。

「いや、奴らの動きを見た所　剣が誘ったというより、あの坂本とかいう女の意思を奴が天然で読み取ったの方が正しいな。」

「なるほど、アニキは知らず知らずの内に他人の心中を察しちまうからなぁ。」

「ま、そういうこった。」

そう言い幻八と甚は、2人を追ってゲームセンターへと足を運んだ。

「ゲームセンターか、久しいな。」

ゲームセンターに入って剣の発した言葉はそれだった。

剣もよく、八忍隊の仲間や颯間の友人達と付き合いでゲームセンターには何度か足を運んだ事があるのだ。

「坂本先輩は、どれをよくやるんですか?」

「ん?もちろん、あれじゃきに!」

そう言い坂本が指を指したのは、銃を使ったシューティングゲームだった。

「あぁ、アレなら俺もよく遊利や蛮作に誘われて良くやりますよ。やりますか？」

「お、えぇのか？あちは剣より銃の方が強いぜよ！」

剣の言葉に強気な言葉を発する坂本。

「えぇ、構いません。」

剣の返事に、『よっしゃ！』と返した坂本は早速コインを入れようとするが、

不意にその手を剣に掴まれる。

「なっ、つ、剣くん！？／／／／／／／／」

「先輩、ここは男の俺が払いますよ。」

そう言い笑顔を向けて来る剣。その笑顔に、坂本の顔は益々赤くなって行く。

「？先輩、どうかしましたか？？」

「あ、あののぅ、剣くん……／／／／／／／／」

「はい？」

坂本が顔を赤くした理由を未だに理解できない剣に、

坂本はゆっくりと口を開く。

「あの……手……／／／／」

「ふぇ、手？」

坂本の言葉に、剣は自分の手に視線を向けた。

―今尚　坂本の手を握っている自分の手を―

「あっ！／／／／／／／／」

それに気づいた剣は即座に坂本の手を放す。

「す、すみません……」

「いや、そんな、嫌じゃなかったぜよ……／／／／／／／／／／」

そこまで言い、２人の間に再び沈黙が流れる。

「や～れやれ、初々しいねぇ～。」

沈黙が流れる剣達の状況を、少し離れた所で見ていた幻八は２人の初々しさに『ククク』と笑っていた。

……カメラで剣達を取りながら。

「旦那ってホント他人の秘密バラすの好きですよね～。」

「ん？別に好きなのではない、これはあくまで依頼だ。」

幻八の言葉に『へいへい』と返しため息をつく甚。

「おい、君。」

「ん？」

そんな会話をしていると、幻八に1人の警備員が近づいて来た。
その姿に甚はカバンの中へと戻り、
幻八は変装している男子を演じるために作り笑顔を作る。

「何ですか警備員さん。」
「君、こんな所でコソコソとなぜ写真を取ってるんだい？」

どうやらカメラでコソコソと写真を取るのを不審に思われたらしい。
だが、幻八は全く動じず口を開く。

「いえ、ちょっと事情がありまして……ここでは話せないので、
場所を変えてもらってもいいでしょうか？」
「ふむ……」

気弱な態度の幻八の演技に、警備員は警戒を解きとりあえず幻八を
人の少ない店の裏へと連れて行く。……それが、最悪の判断とも
知らずに。

「それで、何で写真なんか取ってたんだ？しかもコソコソと……
ん？」

店の裏で事情を聞こうとした警備員だったが、
幻八が不意にニヤニヤと笑い出した事に再び警戒心をあらわにする
が、
警戒するのが遅すぎた。

「クケケケケケッ、テメェは俺の任務の邪魔だ。
任務の邪魔者は削除するのが忍者のあり方、よって死ねぇっ！」
「ひっ……ぎやあああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

……その後、その警備員の姿を見た者は居たとか居なかったとか…
……

―杏の町・愛津駅付近―
「ふぅ、坂本先輩強いですねぇ。」
「あはは、でも剣くんも中々だったぜよ。」

駅の近くのベンチで、剣と坂本の2人は楽しそうに会話をしていた。

アレから沈黙していた2人は、何とかゲームで対戦をした。
対戦していく内に2人の緊張を解けて行き、現状況に至る。
ちなみに、対戦の結果は僅かな差で坂本の勝利で終わった。

「さて、次はどうします先輩？」
「そおじゃのぉ……ん？」

次に何処へ行くかを悩んでいると、不意に坂本は視線に捕らえた者に目を向ける。

「あれは……伊織？」
「ふぇ？」

坂本の言葉に、剣も坂本の視線を追う。
そこには、私服に着替えながらも斬馬刀―忠吉を背負った伊織が数人の男達に囲まれていた。その近くに、信吾の姿もある。

「あれは……」

「あぁ、あれはいつもの事ぜよ。」
「ふぇ？」

坂本の言葉に、剣は首をかしげ坂本はどういう事なのかを説明する。

坂本が言うには、伊織は“杏都四大人斬り（きょうとよんだいひとき）”の紅一点であり
その名は杏都中に広まっているのだ。
その為、伊織を倒して名を上げようとする颯間や未戸などの武闘家達は多く、
休日になるとよく伊織との勝負を求める者が多いらしい。

「颯間では、そういった事はないのかのぅ？
剣くんとか真っ先に狙われそうじゃけど……」

坂本の言葉に、剣は『あははは……』と苦笑いをする。

「1年の時は結構あったんですけど、そのたびに返り討ちにしましたから……
それに八忍隊は良くも悪くも噂になってますので、
今では殆ど俺達に挑む奴なんて居ませんよ。」
「ほうなのか……おっ始まるぜよ。」

坂本の言葉に、剣は視線を伊織と信吾へと向け直す。

「覚悟しろ人斬り伊織！」
「御首頂戴！」
「でりゃあぁぁぁっ！！」

数人の男達が、伊織に向かって斬り込んで行く。手に持つ武器は様々だ。
日本刀に槍、梢子棍（フレイル）に旋棍（トンファー）、さらにはククリ刀など
様々な武器で挑んでいく。
だが、伊織は全く動じず愛刀―忠吉を横に薙ぎ払う。
その横薙ぎで日本刀を砕き、フレイルの鎖を斬り裂き、ククリ刀を折った。
そこから伊織は、その小柄な体格からは想像も出来ない程の速さで体勢を立て直し
上段構えから一気に刀を振り下ろし、槍を真っ二つにした。

「……残るはお前だけだ。」

そう言い伊織は、残ったトンファー使いの男に視線を向ける。

「へへへ、あんた強いな。ま、強くなくちゃ困るけどさ。
あんたを倒した後は、他の四大人斬りをぶっ潰すんだからなぁ。」

「……！！」

その言葉に、伊織は一瞬目を丸くしたがすぐに表情を戻す。

「……お前が終兵（しゅうへい）や謙一（けんいち）を……進（しん）を倒す？
無理だな。お前は今ここで伊織に負ける！」

「なにぃ？」

伊織の言葉に睨みつける男子だったが、
伊織は全く気にせず腰を下ろし刀を低く男子に突き出すように構える。

「（？何だこの構えは、突く事がバレバレじゃねぇか。）」

その構えに対して、男は一気に間合いをつめる。

「（突きだと分かってるなら簡単だ！奴が突いて来たなら片方のトンファーで受け流し
そこからもう一方のトンファーで奴を潰せばそれで終わりだ！）」

そう考えて行動する男子だったが、その予想は外れる事になる。

「――――――っ！！」

伊織は無言で低い体勢から予想通り突きを繰り出してきた。
だが、男子には2つの誤算があった。
1つはその突きの早さだった。伊織の愛刀―忠吉は普通の刀では無い。
武将を馬ごと斬る為に開発された超重量武器“斬馬刀”は、
その重量から使いこなせた者は限られて来た刀である。
仮に使えたとしてもその重量が負担になり、
どうしても使用者のスピードが落ちてしまうのだ。
だが、伊織の突きにそんな負担は感じさせない素早い突きを繰り出している。
もう1つは、突きを繰り出す低さだった。唯でさえ身長の低い伊織は、
刀を低く構えた状態から突き出している。その突きは男子のほぼ足元を狙っている。
トンファーで受け流すつもりだった男子にとって、この早さと低さは予想外だったのだ。

「ちぃっ！！」

何とかかわそうと右に避ける男子だったが、
その予想外の早さにより完全には避ける事は出来ず、脛に掠ってしまう。

「ぐっ！くそおぉっ！」

男子は揺らつきながらも利き腕側のトンファーで伊織に攻撃を仕掛ける。

「ふっ！」

だが、脛を痛めた為に威力が乗らずスピードも遅い。
そんな攻撃、伊織には難なく避けられてしまう。

「くぅっ！！」

攻撃を避けられさらに脛の痛みでよろけてしまう。

「――――ふっ！！」

そこを見逃す伊織ではない。体勢を立て直し、一気に横薙ぎを振るう。

「ぐげぇっ！？」

伊織の一刀の下に、男子は斬り捨てられた……と言ってももちろん死んではない。
刀身を逆にし、峰打ちによって男子は気絶。勝負ありである。

「……その程度の腕じゃ、進に、四大人斬りには勝てない。」

そう言い伊織は、忠吉を背負い直す。
と同時に、近くに剣と坂本がいる事に気づく。

「あっ、お前らいたのか……」
「よぉ伊織。」
「こんにちは伊織さん、それに信吾。」
「バゥ（よぉ。）」

3人と1匹はそれぞれ軽く挨拶をしあう。

「……んで、お前ら噂通りデートか？」
「ふぇっ？え、えぇ、まぁ……」
「おう、この通りじゃ！」

そう言い剣の腕に絡むように掴んでくる坂本。
その坂本の行為にやっぱり顔を赤くする剣。

「うむ、カップルみたいだな。」
「バウ（確かにな。）」
「あ、あうぅ……／／／／／／」

伊織と信吾の冷やかし（？）に顔をさらに赤くする剣。

「まあまあ、とりあえずあち達はこれで……」

坂本の誘導でここを去ろうとする坂本と剣。だが――――

「――――っ！！危ないっ！！」

「なっ！？」

「っ！！？」

「バウッ！！（ちっ、しまった！！）」

不意に声を上げた剣に坂本達が驚く中、剣は素早く坂本達を庇うように前に出る。

そこには、先程伊織に倒された男子の１人が短い棒を鎖で繋いだ武器“ヌンチャク”を振るい攻撃してきた。

「おらおらぁっ！！まだこの武器が残ってんだよぉっ！！」

坂本達の油断を狙った攻撃。ましてやヌンチャクは棒を鎖で繋いでいるので
鞭のようなしなやかさで攻撃が読み辛い。この武器での奇襲は成功するかに見えた。
だが、彼には１つのミスがあった。
それは――――

――――颯間最強と謳われる集団の１人がいた事だ。

「はっ！！」

剣はヌンチャクを振る一瞬の隙を突き、鉄拳を顔面に食らわす。

「ぶぉっ！！？」

その一撃で、男子は沈んだ。

「おぉっ！！」
「……っ！」
「バウッ（うむ、やるな。）」

剣の素早い対応に関心を示す面々。
その言葉に剣は『どうも』ペコリと頭を下げるのであった。

「さてと、それじゃあち達はそろそろ行くぜよ。」
「それじゃあ伊織さん、信吾。」

男子達を撃退した剣の手を絡むように掴んでくる坂本に引っ張られるように、
剣と坂本は商店街の方へ歩いて行く。

「……信吾。」
「バウ（どうした伊織）。」

不意に話しかける伊織に首を傾げる信吾。

「……あいつの……剣の戦い方、どう思う？」
「……バウ（強い、ただどこか力を抑えている、そんな感じがする）。」
「だな。」

信吾の言葉にコクリと頷く伊織。
伊織と信吾は、この杏都と学園で何度か剣の戦いを見て来た。

確かに剣は強い。だが同時に、その戦い方に感じる妙な感覚。
まるで力を抑えているかのような、早いけどどこかドンくさい感じがするのだ。

「あいつ、本気で戦った事ないのか？」
「バウ（あるいは本気で戦えない理由があるのか……）」

「クヒヒヒヒヒ、その疑問の答え　教えてやろうか？」

「「っ！！？」」

不意に後ろから声を掛けられ、驚く伊織と信吾は後ろを振り向く。
そこには、漆黒の服に身を包んだ悪魔のような顔の男が立っていた。

「……！？（俺が気配はおろか匂いすら感じなかっただと！？）」
「っ！？お前、誰だ！？」

信吾は自分が気配１つ感じれなかった事に、伊織はその男の不気味さに驚く中
男は『ニヤッ』と不気味に笑いながら口を開く。

「俺は幻八。颯間１の情報通にしてお前らの疑問の答えを知る者だ。お前らの知りたい疑問の答え、教えてやるぜ“人斬り伊織”。」

そう言いながら男、幻八は再び不気味に微笑んだ。

―愛津女学園　学園寮前―
「ふぅ、今日は楽しかったぜよ剣くん。」
「喜んでいただけて何よりです。」
坂本の言葉に剣は『ニコッ』と微笑む。

あれから2人は商店街をブラつき、
空が暗くなり始めたころに寮の前にに帰って来ていた。

「（良かった、坂本先輩　満足してくれたみたいだ。）」

坂本の様子に『ホッ』とする剣。
実の所、剣はこのデートでドキドキしまくりだった。
普段は自分に何気なく話し掛けてくれる飄々とした坂本が、
今日はめかし込んでかわいらしい一面なども見せてくれた。
その普段とのギャップに、剣は今回のデートに満足してくれたのか
不安だったが
無邪気に喜ぶ坂本の姿に剣は心の底から安心するのだった。

「（後で梭やノアに電話しとこ……）」

そんな事を思いながら、剣は寮の玄関を開けた瞬間――――――――
――――剣は顔を真っ青にした。

なぜならそこには、明らかに機嫌の悪そうな表情の土方が居たからだ。

「……え、え～と……副長さん？」

「……なんだ……っ！？」

剣の言葉に、土方は『ギロッ』と睨んでくる。

その殺気に剣は『ビクッ』と怯むが、とりあえず聞いてみる事にした。

「あ、あの、どうかしたんですか？やけに怒ってるようですが……」

「……そう見えるか…っ！？」

「…え、えぇ……まぁ……」

静かだが明らかに不機嫌なオーラを出す土方にビクつく剣。

「……あの男、見つけ次第　八つ裂きにしてくれるっ！！」

「あの男？」

土方の言葉に首を傾げる剣。

「何か、あったのかのぅ……ん？」

「あれ？」

剣の後ろにいた坂本も首を傾げる中、剣と坂本の2人に手を振る者がいた。

頼子である。

「御二人とも、こっちへ。」
「「？？」」
頼子の言葉に首を傾げながらも、剣と坂本は怒れる土方を避けて頼子に接近する。
「一体何があったんですか？」
「歳緒くんがあそこまで怒っとるのを見るのは初めてぜよ。」
「実は……」
首を傾げる2人に、頼子は今朝の出来事を説明する。
「……ふむ、話をまとめると。あち達のデートを追跡しようと思ったら
謎の男に眠らされたってことかのぅ？」
「……はい。」
デートの追跡という痛い所を言われてしまった頼子は、
どこか申し訳なさそうに返す。その隣で、剣は体中から汗を流していた。
「（紫色の眠りの煙、まさか……）」
剣の脳内に、不気味に笑う悪魔の男の顔が浮かび上がる。
とそこへ、甚が飛んで来て剣の肩に止まり耳元でささやく。
「アニキ、想像通りですぜ。
幻八の旦那、桂達に雇われてアニキ達のデートの状況を撮影してやした。」

「ふえ゛っ！？」

甚の言葉に、剣の体からさらに大量の汗が流れ出てくる。

「幻八の旦那にバレるという事は、全世界にバレるようなもんすからねぇ。」

「あうぅ……／／／／／／」

甚の言葉に、『ガクリ』と肩を落とす剣であった。

―愛津女学園　学園寮内・剣の部屋―

「ふぅ、疲れた……」

アレから夕食を終え、自分の部屋に戻った剣は全ての力を使い果たしたかの用に座り込んだ。

「お疲れさんでした、ほいアニキ。」

疲れていた剣に、甚がお茶の入った湯呑みを出す。

「サンキュー。」

甚の用意した湯呑みを手にした剣は、中身のお茶を飲んでいく。

とそんな時、剣の部屋の扉を『コンコン』と扉がノックされる音がする。

「ん？はーい。」

剣は扉の取っ手に手を掛け扉を開けてみる。そこにいたのは、信吾だった。

「信吾。」

「なに？何でお前が？」

「……バウ（伊織がお前に用事がある。武器を持って付いて来い。）」

「ふぇ？」

信吾の唐突な言葉にキョトンとなる剣。首を傾げる剣に代わり甚が声を上げる。

「おいおい意味が分かんねーぞ信吾！？何なんだいきなりよぉ！」

「バウッ（悪いが、何も聞かずに来て貰う。いいな風上。）」

「あぁ、わかった。」

「いやアニキもアニキであっさりと！！？」

剣の行動にツッコミをいれる甚だったが、剣は笑いながら返す。

「まぁ、とりあえず行ってみるよ。呼ばれてるのに行かないのは失礼だし。」

「おいおい（岡田とは、駅前で幻八の旦那が何か喋ってたみたいだし、不安だぜ）」

駅での事を思い出し、嫌な予感がしてたまらない甚なのであった。

剣と甚が信吾に案内されたのは、愛津女学園のグランドだった。

そこには、私服姿だが愛刀―忠吉を持った伊織がいた。

「来たか……」
「バウ（あぁ…）」

剣達を察知した伊織は、信吾を下がらせる。

「あの、伊織さん。それで俺に用って……っ!?」

不意に剣は、伊織から放たれる視線の強さに気づく。
この、相手を睨み殺すような視線は、間違いなく殺気だった。

「ア、アニキ……」
「甚、下がってろ。」

剣の言葉に、甚は飛び立ち近くの木の上に止まる。
それを確認した剣は、伊織に視線を戻し口を開く。

「……俺を、ここに呼んだ理由は?」
「……伊織は、駅前でお前と涼華と別れた後、幻八とかいう男と出会った。」
「!!」
「（げげ、やっぱその事か……）」

伊織の言葉に驚く剣と、予想道理の展開に頭を抱える甚。

「あいつが言うには、お前は進が認めた唯一の男。
伊織は、愛津最強の沖田を倒したい。
同じ杏都四大人斬り（きょうとよんだいひとき）の1人として、進にリベンジしたい。そして――――」

そう言い伊織は、斬馬刀を剣に向ける。

「その進が認めた、颯間最強集団　八忍隊の切り込み隊長である、お前を倒したい！1人の剣士としてっ！！」

「伊織さん……」

普段あまり喋らない伊織が、ここまで感情的に喋る事から伊織のやる気が本物な事を理解する剣。だが同時に、剣には1つ気になる事があった。

伊織が先程言った『同じ杏都四大人斬りとして、進にリベンジ』。

「（一体どういう事なんだ。進、一体伊織さんに何をしたんだ…）」

そんな考えが、剣の脳内に浮かぶ。

ここで、この物語で度々出てくる『杏都四大人斬り』について少々説明しておこう。

人斬りとは文字通り人を斬る刺客の事だ。この杏都には帯刀という独自の校風を持つ

４つの学園がある事から、剣客から武道家、人斬りなども多く存在するが

所詮人斬りは刺客や暗殺者の事なので、その名を持つ者の多くはだまし討ちや背後からの攻撃を得意とする者などばかりで、

剣の腕も並みの剣客に毛が生えたようなものであった。

だが、そんな人斬り達の中に正々堂々の勝負を好みむ者、

圧倒的な武力で人斬りを行う者の４人の人斬り達がいた。

愛津女学園の“岡田　伊織”、未戸学院の“河上　謙一”、

颯間男子学院の“霧隠　進次郎”と“田中　終兵”の４人である。

その名は、真選組や八忍隊にも匹敵する名として杏の町で知らぬ者はいない。

「（進と伊織さん、２人の間に一体何があったんだ？）」

「さぁ、刀を抜け剣！進が認める程の男なら強い筈だっ！伊織と戦えっ！！」

考え込む剣だったが、伊織はそんな事お構い無しに刀を向けて来る。

「まいったなぁ……」

困った剣は、悲願するように甚に視線を向ける。

が、甚からかえって来た反応は首を横にフルフルと振るだった。

つまり『諦めろ』という事だ。

「やるしかないのか……」

気の乗らない剣だったが、仕方なく鍔のついた小太刀を抜き放つ。

「それでいい、伊織にお前の力を見せてみろっ！」

そう言い伊織は、即座に駆け出し斬馬刀―忠吉を横薙ぎに振るう。

「――ふっ！！」

「っ！」

だが、剣は素早い動きでその攻撃を即座によけ伊織の横を取る。

「（多少気は引けるけど…）はっ！」

そこから剣は正拳突きを放つ。

「――っ！」

だが、伊織はその攻撃を姿勢を下げることで避ける。
そこから伊織は、剣に対して突きを放つ。

「くっ！」

剣はその突きを自慢の足による跳躍により避ける。

「（くっ、何て低い体勢からの攻撃だっ！！）」

剣のは、予想を上回る攻撃に若干焦っていた。
そう、伊織の強さは斬馬刀とは不似合いのその小柄な体系にあった。
巨大な斬馬刀を操れるはずの無い小柄な体から放たれる巨大な攻撃と、
小柄を生かした低い体勢からの攻撃は、回避しづらくおまけに一撃が重い。
その攻撃の仕方が、伊織が人斬りと恐れられる所以だった。

「どうした、そんなものなのか！？」

攻撃を避けるばかりの剣に吼える伊織は、突きを繰り出す。

「（と言われても、あの斬馬刀をこの小太刀で受け止めるなんて不可能。
避けるしかない。が、攻撃をしない訳でも――――――）」

剣は小太刀で斬馬刀の突きを受け流す。

「（ないっ！！）」

そしてそこから、再び正拳突きを放つ。

「っ！！」

伊織はその攻撃をギリギリで避ける。と同時に、剣の正拳突きでかすった
伊織の髪の毛が数本舞い散る。

「（早い…っ！！）」
「（やっぱり強い。だが…）」

伊織は、剣の強さを実感するその一方で物足りなさを感じていた。

「……なぜ本気を出さない！？」
「っ！！？」

伊織の言葉に、剣は目を丸くする。

「幻八とかいう男が言っていた。お前が武器が小太刀一刀の場合、それは手を抜いている証拠だとっ！」
「――っ！！」

伊織の言葉に、剣は気まずそうに視線を伊織から逸らしてしまう。

「っ！！」

その隙を伊織が見逃す筈も無く、即座に横薙ぎで攻撃して来る。

「くっ！」

剣はその攻撃を跳躍でかわす。だが、伊織の攻撃は続いく。

伊織は横薙ぎの後すぐに体勢を立て直し、
跳躍した事で無防備になった剣に突きを打ち出す。

「うわっ！」

剣はその攻撃を小太刀を使いギリギリで受け流し、伊織から距離をとる。

「くっ……」

「…そんなものなのか？進が認めたほどの男が、伊織を失望させるな。」

あくまで本気を見せない剣に、イラ立ちを見せる伊織。とそこへ――

「アニキッ！！」

剣と伊織の戦いを見守っていた甚が、不意に声を上げた。

「甚？」

「よく聞いてくだせぇアニキッ！これは決闘ですぜっ！
決闘で本気を出さないのは相手を怒らせるだけでさぁっ！！
本気を出して、一気に勝負を決めてくだせえアニキッ！！」

甚の言葉に、剣は考え込む。
今ここで本気を出さなかったら、
伊織の剣客としてのプライドを酷く傷つけてしまうだろう。
だが、剣はどうしても本気を出せない理由があった。

「（これは決闘なんだから、本気を出さなくちゃいけない……けど、俺の本気を出したらいくら伊織さんでも……）」

剣は、悲願するように甚に視線を向ける。

「……」

すると甚は、翼を動かし何やら剣に伝えようとする。

「（！！あれは手話！）」

そう、甚がやっているのは手話だった。
忍者は他人に秘密がバレないように、
手や体などを使い秘密の暗号で会話した言われている。
甚がやっているのは、まさにそれだった。

「（アニキ、本気出すのが怖いなら、武器だけでも本気にしてくだせい。）」

「（！！そうかっ！）」

甚の手話の意味を読み取った剣は、伊織に視線を戻す。

「…本気を出す気になったか？」

「……」

伊織の言葉に対し剣は無言で、懐に隠していた鍔のないもう1本の小太刀を抜き放つ。
それを見た伊織は、幻八の言葉を思い出す。

『奴が小太刀一刀流の場合は、手加減している証拠だ。
奴の本来の得物は、小太刀二刀流よ。』

「（小太刀二刀流、ようやく本気になったかっ！）」

そう判断した伊織は、忠吉を構え攻撃態勢に入る。

「……――――っ！！」

伊織は素早く刀を上段の構えから振り下ろす。

「――――はっ！」

その攻撃に対し、剣は左手の鍔のない小太刀で受け流し、すかさず右手の鍔のついた小太刀で斬り掛かった。

「っ！？」

伊織はその攻撃を紙一重で避ける。

「（二刀流になって、動きが変わった……っ！！）」

その攻撃の鋭さに、伊織は息を呑む。
そう、二刀流の肝は鉄壁の防御技にある。
一方の剣で敵の攻撃を受け止める、または受け流しすかさずもう一方の剣で攻撃を行う。
この“攻防一体”が完成した時、二刀流は一刀流を長さによっては槍をも上回る武器となる。

「（摩方流剣術の基本技、“双月刃”。
いかに破壊力のある斬馬刀であろうと、一刀流ではほぼ破れはしない！）」

剣は、伊織から距離をとり完全な防御体勢で構える。

「（二刀流か。…伊織も何度か二刀流使いと戦った事はあるけど、
早さ、技のキレ、
そして完璧な防御技。こいつ今までの二刀流使いとは次元が違う！）」

伊織はそう考えながらも腰を下ろし、刀を低く剣に突き出すように構える。

「（だが、伊織は負けないっ！）」

伊織は一気に駆け込み、剣の下段を狙い斬り込む。

「バウッ（うまいっ！剣や刀は基本的に下段の攻撃に弱い！
奴の小太刀なら尚更だっ！）」

伊織の攻撃に目を見開く信吾。
そう、信吾の言う通り基本的剣や刀は下段からの攻撃に弱い。
なぜなら、剣や刀は基本的に斬り合いを前提と考えた技が殆どであり、
リーチの短い剣や刀で下段を防御する術を殆ど無いのだ。
それが、剣の持つ小太刀の様に短い武器なら尚更だ。

「そいつぁーどうかな？」

信吾の隣で、甚は不敵に微笑む。

「バウ（どういう意味だ？）」

「あぁいう意味だ。」

甚が翼で指差す方に視線を向ける信吾。そこには――――――

伊織の下段からの攻撃を小太刀二刀で受け流す剣の姿があった。

「っ！！？」

「無駄です、俺の防御は下段にも対応できます！」

剣は伊織の攻撃を受け流しつつ、すぐさま距離を積めて攻撃を仕掛ける。

「――くっ！！」

伊織はその攻撃を避け様と下がろうとする。

「くっ！」

それを見た剣は伊織の後を追おうとするが、不意にその動きを止める。

「（ダメだ、どんなに追っても伊織さんにはすぐにかわされてしまう！）」

剣はこれまでの経験から、伊織に攻撃してもすぐ避けられる事を理解していた。
その主な原因は、伊織の体格にあった。
伊織のかなり低い体格は攻撃が届き難く、その体格にも関わらずリーチのある斬馬刀をまるで自分の手足のように操るものだから、近寄ってもすぐに逃げられてしまう。

「（ここは手裏剣を使うか…！？いやダメだ。剣と剣の真剣勝負に手裏剣を使ったら、伊織さんきっと機嫌を悪くする。となると……）行くしかないか。」

剣は再び、伊織に向かって斬り込んで行く。

「――っ！！」

伊織はその攻撃を受け止める体勢で構える。

「（――――ここだっ！）」

それを見た剣は、足に力を入れ伊織の忠吉に蹴りをかます。

「っ！！？」

その勢いを利用し剣は伊織から距離をとり、
鍔のついた方の小太刀を伊織に向かって投げ打つ。

「なっ！！？」

さすがにその攻撃は予想していなかった伊織は、
咄嗟に忠吉で飛んで来た小太刀を薙ぎ払う。

「くっ！危な――――っ！？」

小太刀を薙ぎ払った伊織だったが、次の瞬間その表情に衝撃が走る。
なぜなら、薙ぎ払った小太刀のすぐ後ろの死角からもう1本の小太刀が飛んで来たのだ。
そう、剣が最初に投げた小太刀の鍔が死角になり
後ろから飛んで来た鍔の無い小太刀が飛んで来た事に気づけなかったのだ。

「くっ！！」

伊織は体制を低くする事で何とかかわす。

「くぅ、何て攻撃……っ！！？」

予想外の攻撃を避けた伊織だったが、その目に再び衝撃が走る。

「いない！？」

そう、小太刀を避けている内にそこにいた筈の剣の姿が消えたのだ。

「くっ！一体どこに……っ！？」

そして伊織は見た。月の光によって自分の後ろに動く人影に。
そして振り向くとそこには――――

伊織の首にクナイを構える剣の姿があった。

「摩方流剣術・飛刀術、“双燕翔刃”による奇襲成功。俺の勝ちです、伊織さん。」

「……っ！！」

伊織は気づいた、あの小太刀を飛ばす飛刀術に気を取られている内に、

剣は自慢の脚力で自分の後ろに周り込んだのだ。

「（なんて早さだっ！これが進が認めた男の実力……っ！）負けた……」

伊織は素直に自分の負けを認めた。

それを聞いた剣はクナイを納め、先程投げた小太刀二刀を鞘に戻す。

「伊織さん、１つ聞いていいですか？」

「……敗者は勝者に従う、言える限りは答える。」

剣の言葉に、ぶっきら棒に返す伊織。

「……先言ってた、進へのリベンジっていうのは……」

「……」

剣の質問に伊織は視線をずらし、沈黙が流れる。

「……」

「えっと、言いたくないなら別に……」

「昔、杏都四大人斬り達で戦い合った事があった。」
「え？」
ボソボソと呟くように、伊織は話し始めた。
伊織の話によると、昔“杏都四大人斬り”のメンバーで誰が1番強いのかを競う為にトーナメント製で戦いをした事があったのだが、その際　伊織は進と戦い徹底的に打ちのめされるてしまったらしいのだ。
「…以来　伊織は、“杏都四大人斬り”の紅一点にして“杏都四大人斬り”最弱の剣客の烙印を押されてしまったんだ。」
「伊織さん……」
悔しそうに唇を噛む伊織に、剣は心配そうな目付きで伊織に視線を向ける。
「だから伊織はもっともっと強くなりたい。総詩にも、進にも負けないくらいにっ！」
そこまで言い、伊織は剣に視線を戻す。
「だからこそ、お前と勝負したかった。進がライバルと認めたお前に勝ちたかった……」
「伊織さん……」
伊織の言葉に、剣は胸が熱くなった。
伊織はここまでの覚悟と夢を持って刀を振るっているのだ。

1人の剣客として、絶対曲げることの無い信念と共に。
そう思った剣は自然に体が動き、気が付くと伊織の頭を撫でていた。

「おまっ！？何を……／／／／／／」

その剣の行動に、伊織は目を丸くし顔を赤く染めた。

「伊織さんは、強いですね。」
「？」
「小柄なのに、身体能力は並の大人よりも強く、
何より決して自分の信念を曲げない、強い精神力を持ってますよ。
……伊織さんは、本当に強いですよ。」
「お前……／／／／／／／／」

剣の言葉に、再び顔を赤める伊織。

「……お前は剣は強いけど、女心には弱い。」
「ふぇ？」

伊織の呟きに首を傾げる剣だったが、
伊織は『何でも無い』と視線を逸らしてしまった。
そして、不意に剣の腕をつかみ歩き出す。

「ふぇ！？あ、あの、伊織さん！？」
「うるさい、寮に戻る。」

そう言い剣を引っ張って行く伊織の姿を、やや離れた場所で見ていた甚は、
隣にいた信吾に視線を移す。

「おい、岡田の奴　本格的にアニキに……」
「バウ（まぁ、伊織も女って事だ）」
そう言い2匹（1匹と1羽）は伊織と剣の後を追って行った。

「クケケケケケ、相変わらずの鈍感だなぁおい。」
剣達のいる場所から離れた学園の校舎の屋上に、不気味に笑う幻八の姿があった。
「さてと、奴らが寝静まったらこれを張り出すとするか。クヒヒヒヒヒヒ！」
夜の校庭に、幻八の笑い声が木霊して行った――――――

翌日、学園の校舎の掲示板にあるものが掲載されていた。
それは、昨日の剣と坂本のデートしている写真と
昨晩の剣と伊織の戦いと剣が伊織の頭をなでなでしている写真だった。
そしてその写真の上には、こう書かれていた。
『超モテ男、風上　剣！1日で討学派の主要人物2人のハートをゲットだぜっ！！』
「何だよこれはっ！！？」

その写真を見て剣が発した言葉はそれだった。

「（幻八の旦那……）」

その隣で甚は頭を抱えていた。

その後、坂本と伊織は女子達に昨日の事についてを詰め寄られ、剣はやっぱりと言うか当然と言うか、土方に追い掛け回されるのであった。

『～第十三章～　涼華のお願い。伊織との対決！　《終》』

～第十三章～　涼華のお願い。伊織との対決！（後書き）

今回は、討学派　徒沙班の２人坂本と伊織の物語を作って見ました。
原作ではさほど出番が無かった討学派、その中でも人気の低かった２人ですが
この２人にも作者独自の設定などを考え出番を増やし、
フラグ率をアップさせて行こうと思います。
また、今まで出てきていた単語『杏都四大人斬り』は、
後世の世に『幕末の四大人斬り』と呼ばれた者達をモデルとしました。
やっぱ人斬りと言えば“人斬り以蔵”ですよね。
さてさて、今回は直接愛津の生徒に接近した幻八。
一体何を考えているのやら。
今後とも、よろしくお願いしま～す。

～第十四章～　頼子と図書館デート！？　逃げる令嬢、桂

―愛津女学園　学園内・図書室―

「（ふーん……これ面白いな）」

愛津女学園の昼休憩、図書室で剣は1冊の本を読んでいた。

題名は『伊達政宗の野望』。最近人気の歴史ライトノベルである。

「（やっぱり歴史系はいいなぁ……）」

「（歴史系の本読んでる時のアニキって、ホント幸せそうだよなぁ～……）」

本を読む剣を横で見ていた甚が、ふとそんな事を考える。

「きゃっ！」

「ふぇ？」

「ん？」

不意に女子の声が聞こえ声のした方を剣と甚が振り向くと、

そこには転んで本を数冊落としてしまった頼子の姿があった。

「頼子さん！」

それを見た剣は頼子に駆け寄る。

「あ、剣さん……」

「大丈夫ですか？」

剣の言葉に『大丈夫です』と返した頼子は、視線を落としてしまっ

た本達に向ける。

「あぅ、またやってしまいました……」

そう言いながら頼子は、落としてしまった本を拾い始める。
それを見ていた剣も、本に手を伸ばす。

「手伝いますよ。」
「え？でも……」
「気にしないで。」

自分の失敗だから断ろうとする頼子だったが、剣のスマイルには勝てず
結局剣も手伝い、本達は元の場所へと戻した。

「すいません。」
「良いから気にしなで。」

謝る頼子に再びニッコリと微笑む剣。

「あ、はい……／／／／／／／／／／」
「そういえば、頼子さんは見廻りには行かないんですか？」

剣はそんな事を唐突に聞いた。真選組は颯間の杏都見廻り組と同様学園内と杏の町一帯の市中見廻りを最大の仕事としている組織だ。
にもかかわらず、その組織の組長の１人がこんな所にいていいのかが気になったのだ。
だが、剣の言葉に頼子は少し沈んだような表情をする。

「……私、役立たずですから。」

頼子の言葉に『え?』とキョトンとなる剣。

「私って、おっちょこちょいでドジばっかりですから。
私なんかが真選組に入ってる事自体が不思議なくらいなんです。」

「頼子さん……」

悲しそうな瞳をする頼子に、かける言葉が見つからない剣。

「だから私は、図書室(ここ)で係りの仕事をしているのがお似合いなんです。」

「……」

頼子の言葉に、剣は言葉が出てこなかった。
自分に自身が持てず、引っ込み思案的な言動が目立つ。
だが、それ以上に剣が目を引いたのは頼子の目だった。
自分に自信がない以上に、何か自分を恐れているそんな目だった。
その目を見た時、剣は自然に体が動き、気が付くと頼子の頭を撫でていた。

「ふえ?つ、剣さん……／／／／／／／／!?」

剣の行動に、頼子は赤面した。

「頼子さん…あなたは役立たず何かじゃない。」

「え?」

「近藤先輩や副長さん、それに皆が聞いたら『そんな事無い』て言いますよ。
だって、頼子さんは真選組、それも組長格じゃないですか。
そんな人が役立たずなんて誰も思ってませんよ。」

そう言って励ます剣だが、頼子は『でも…』とイマイチ自身が持てない。

「松原さんっ！！」

そんな中、不意に図書室のドアが開き1人の生徒が入って来る。
羽織を着てる所を見ると、真選組の隊士のようだ。

「松原先輩！今よろしいでしょ…う…か……」

どうやら頼子を呼びに来たようだが、丁度　剣に頭を撫でられている所だった。
それを見た生徒は、顔を赤くした。

「し、失礼しました。どうぞごゆっくりぃ～……／／／／／／／／／／」
「えっ！？あ、あの、な、何か勘違いを……」
「ん？2人共顔が赤いけど、風邪？」
「アニキ、お願いだからそれ位　理解してくれ。」

甚の言葉の意味が分からず、首を傾げる剣。

「そ、それで、私に何か？」

頼子は話題をやって来た生徒に振る。

「あ、そうでした。先程　討学派との戦闘で負傷した生徒が居るのでいつものをお願いできませんか？」
「あ、はい、分かりました！」

そう言い頼子は、小薙刀を手に佐学派の生徒と共に駆け出す。

「……」
「どうしたんすかアニキ？」
「……甚、俺達も行こう！」
「へ？」

剣の言葉に首を傾げる甚だったが、返事をする間も無く
頼子を追って剣が走り出してしまったので速攻で剣を追い始める。

「アニキーっ！一体どうしたんすかぁっ！！？」

甚が必死で追う中、剣は頼子の事を考えていた。

「（あの時の頼子さんの悲しそうな目、あれは普通の人が出来る目じゃなかった！
頼子さんがあそこまで自分を追い詰めてる理由って、一体なんなんだ！？）」

そう考え心配になった剣は、頼子を追い続ける。
風上　剣、意外と猪突猛進な男である。

―愛津女学園　学園内・生徒会室―
愛津女学園の生徒会室は、生徒会である真選組幹部らの学園での屯所でもある。
頼子がここに駆けつけた時、局長の近藤と共に1人の負傷した佐学派生徒がいた。

「あっ頼子ちゃ～ん、この子が怪我しちゃったの～、直してあげて～。」
「あ、はい。今行きますね。」
近藤が指差す生徒に近づいた頼子は、その生徒の傷の具合を確かめる。
腕から血が流れる、切傷のようだった。
「では、始めますね。」
そう言い頼子は目を瞑り、手を合掌させてなにやらブツブツと小声で呟きだす。
「なんだぁ？」
その様子を見に来た剣と甚が首を傾げる中、
不意に頼子の手元から神々しい光が輝きだす。
それを見た瞬間、剣は目を丸くした。
「これは、“気”かっ！？」
そう剣が呟いた瞬間、光はより強くなり光が晴れた時には負傷していた生徒の怪我が完治していた。
「はい、終わりました。」
「あ、ありがとうございます、松原さん。」
頼子に傷を治してもらった隊士がお礼を言う中、
剣と甚は顔を見合わせて話し合っていた。

「おい甚、どう思う？」
「どうもこうも、ありゃどう見ても“内気功（ないきこう）”による“内養功治癒術（ないようこうちゆじゅつ）”っすね。」

そう言い合い、互いにコクリと頷く2人。

「…え？」

そんな2人の会話が耳に入ったのか、頼子とその近くにいた近藤が近づいてくる。

「あ、あの、御二人共　私の“能力（ちから）”が分かるんですか？」

頼子は目を見開くように驚いている。
頼子の言葉に、剣と甚は互いに顔を見合わせて苦笑しながら答える。

「分かるも何も……これですから」

そう言い剣は手で印の様なものを結ぶ。その姿はまさに忍者。
そして印を結び終えた時、先程の頼子と同じように剣の手元が輝きだした。

「これは……！！」
「ほえ？頼子ちゃんと同じ光…？」

剣の放つ光に驚きを隠せない頼子と近藤。

「『忍者八門（にんじゃはちもん）』の1つに、“気合術（きあいじゅつ）”と言うものがあります。
忍者もまた、気を使う事で戦闘や治癒に生かす事が出来ます。」

そう言い剣は気を練るのをやめ、剣の手から光が消滅していった。

ここで気や内気功、気合術などについて少し説明しておこう。
気とは、人体及び自然界に存在する“生命エネルギー”の事であり、
その力は計り知れない程と言われている。
一般的な武術での使い方は、気合や気迫などを使う“気合術”があるが
それも極めれば、気による遠当や治癒術にも使う事が出来る。
ただ、それ故に扱うのは簡単では無い。
特に自然界に存在する外気を扱うのは難しく
人体に存在する内気を、己の精神力と体力で操る事は出来るが
その為にはかなりの鍛錬と、それを操る一定の才能が必要だ。
外気を扱える様になるには、専用の修行を５０年以上する必要があるが
外気は内気と違い自然界にほぼ無限に存在する為に、
精神力も体力も一切消耗しないという利点もある。
外気を使う術を“外気功”、内気を使う術を“内気功”と呼ぶ。

「忍者は気を使う事で戦闘だけでなく、治癒、密偵等の時にも役立てるんです。」
「ほえ～、忍者って便利だねぇ～。」

剣の説明に感心する近藤と、その横で未だに目を丸くしている頼子。

「……剣さんも、気が使えるんですね…」
「そうですけど……何か変ですか？」
「あっいえ、別にそう言う訳では。ただ……」
「ただ？」

言葉を詰まらせる頼子に首を傾げる剣。

「その……家族以外で気を使える人って始めて見ましたから……ちょっと、嬉しくて……」

「あぁ…」

頼子の言葉に、剣は大体の事を察した。
気を使える人間などそんな簡単には居ない。
ましてや、治癒術などが出来るように成る程となると尚更だ。

「でも、頼子さん本当にすごいよ。気を使える人は元々少ないけどそれをここまで使えるなんて、相当の修行をしてたんですね。」

「え、えぇと、修行というか…運が良かったと言うか……」

「いや、運の良さでどうこうなる問題か?」

頼子の言葉にささやかなツッコミを入れる甚。

「でもよかった。」

「え? 何がですか?」

剣の言葉に首を傾げる頼子。

「頼子さん、先役立たずだって言ってたけど全然役に立ってるじゃないですか。」

「!!」

剣の言葉に、頼子は一瞬目を丸くしたがすぐに悲しそうな目になり、うつむいてしまった。

「あ、あれ？お、おい甚！俺また何か変な事言っちまったのか！？」
「いや、そんな筈はねぇと思いやすけど……」

頼子がうつむいてしまった事に動揺する剣は、
頼子に近づき様子を探る。

「あの、頼子さん？」
「……は、はい？」

うつむいていた頼子が剣の声に反応してこちらを向いて来る。

「大丈夫？何だか、悲しそうな表情をしていたけど……」
「あ、いえ、ちょっと思い出しちゃっただけですから……」

そう言う頼子の表情は、未だにどこか悲しげだった。

その後、頼子と剣は図書室へと戻って来た。
頼子は図書委員としての仕事として、剣は本を読むのもあったが
頼子の悲しそうな表情が気になったのが最大の理由でもある。

「（頼子さん大丈夫かな、すごく悲しそうな表情をしてたけど……）」
「よいっしょ……と。」

そんな剣の視線に気づく事無く、頼子は多くの本を運んでいた。
その多さは半端ではなく、頼子1人ではとても運べる物ではなかった。
そんな様子を見ていた剣は頼子に近づく。

「手伝いましょうか？」
「え！？いえ、大丈夫ですよ。剣さんはゆっくり本を読んでいてください…」
「遠慮しないで、頼子さん1人じゃどう考えても運びきれないよ。」
そう言い剣は、頼子の持つ本の数倍の量の本を軽々と持つ。
「すみません。」
「気にしないで、力仕事は男がやるものって相場が決まってるしね。」
そう言い剣は頼子が示す本棚へと本を入れて行く。
「そういえば、もうすぐ期末テストが近いですね。
剣さんは試験勉強はどうなさるんですか？」
不意に頼子にそんな事を聞かれ、剣は『ふぇ？』と首を傾げる。
「試験ですか……もうそんな時期か……俺　歴史や語学系は得意んですが、
理数系はちょっと苦手かな……颯間に居た頃は龍牙（りゅうが）に、
学友に教えてもらってましたね。」
「そうなんですか。私は語学系が苦手な方ですね。
いつも図書館に行って、そこの本などを読みながら勉強してます。」
「あ、頼子さんも図書館でやるんですね。俺も1人で勉強する時は図書館に行くことが多いですよ。静かだし、落ち着くし。」
「あ、それ分かります。」
2人は次第に、図書館での利用について盛り上がって行く。
元々この2人、図書室を利用したり平和主義者だったりと

何かと気の合う所があるのだ。
そんな2人を『じっ』と見守る影が2つ。甚と谷さんだ。

「おーおー、あの2人端から見るとマジでカップルに見えるな。」
「クルックー（お似合いだぜ、あの2人。）」

甚はからかう様に、谷さんはニヒルに微笑みながら2人の様子を見続ける。

「そう言えば頼子さん、俺は颯間に居た頃は八忍隊の仲間達と勉強したけど
頼子さんは真選組の皆さんとは勉強しないんですか？」
「あ、あははは……」

剣の言葉に頼子は苦笑する。

「頼子さん？」
「え、えぇと、私と副長さん、それに永倉先輩と芹栖さん以外の皆さんは
勉強は苦手でして…そのぉ……」
「あ、あぁ、そう言う事ですか……」

頼子の言葉に、剣に脳裏に勉強を全然やらない
近藤、沖田、斉藤、原田の4人の姿と
それに呆れる土方、やち、芹栖の姿が浮かんだ。

「よーするにアレか？半分は良し、もう半分は赤点組みと。」
「クルックー（まぁ、大体そんな所だ。もっとも、総詩の譲ちゃんはやれば出来る子なんだがやる気が全く無いんだ。）」
「あー、大方予想が出来る。」

谷さんの言葉に『うんうん』と納得する甚。

「…で、でもそれじゃあ、試験勉強の時　大変じゃないですか？」
「えぇ、少し。でも、他の皆さんは忙しいですし、１人で勉強するしかないんです。」

そう言い苦笑する頼子の表情を見ている内に、
剣は何ともやり切れない思いに包まれた。
そして、気が付くと自然と言葉を発していた。

「頼子さん。」
「はい？」
「よかったら、俺と図書館で勉強しませんか？」
「……え？」

一瞬　頼子は、剣が何を言っているのか分からなかった。
剣が女子が苦手なのは颯間はもちろん愛津でも有名な事だ。
それ故に剣は、任務以外で女子と一緒にいる事は殆ど無いのだ。
その剣が、自ら図書館へ行くのを誘ったのだ。
普段の剣を見慣れてるだけに驚くのも無理はない。

「あ、あのぉ、剣さん？」
「はい、何ですか？」

頼子の呼び掛けに、剣は笑顔で返す。

「えっと、よろしいんですか？私なんかといっしょで……」
「良いも何も、１人より２人の方がいいでしょ？
それに、また私なんかって言ってますよ。

そんな事を言っちゃいけませんよ。」

そう言い優しい笑顔を向けて来る剣に、頼子は顔を赤くしてしまう。

「え、えっと、そういう事でしたら、その、よろしくお願いします。」

「はい、もちろん。」

顔を赤くする頼子の表情に気づかず、剣は笑顔で返すのであった。

―愛津女学園　校門・通称：蛤御門（はまぐりごもん）前―

その日の放課後、剣と甚は校門前で頼子を待っていた。

「甚、お前は図書館に入れないけどいいのか？」

「いいんすよ、途中まで付いて行くだけっすから。

それよりも頼子の奴遅いっすねぇ。」

そう言い学園の方へ視線を向ける甚。

頼子は図書委員の仕事と真選組での仕事があり少し遅れるとの事だ。

故に剣は校門前で待ち合わせする事にしたのだが…

「……なぁ、甚。」

「なんすか？」

「先から妙な視線を感じるんだが、気のせいか？」

そう言い周りを見る剣と甚。そして甚は察する。

周りの視線が、明らかに剣に向けられてる事に。

「ねぇ見て！風上くんがいるわ！誰かと待ち合わせかしら？」
「いいなぁ～、あたしもああいう彼を持って
校門前で待ち合わせしたぁ～い！」

剣の姿を見て勝手に盛り上がる討学派。
「ねぇ見て、例の彼がいるわ。」
「誰かと待ち合わせしてるのかしら？」
「う～ん、男ってスケベでバカばっかりと思ってたけど
風上くんみたいな人がいるなら……」

恋愛に悩む佐学派と様々な声が上がる中、
剣は学園の方からやってくる白銀の人物を目で捉えていた。

「剣さーん！」
「あ、頼子さん。」

待ち人来たる。約束していた頼子がやって来た。

「お待たせしてすいません。」
「いえ、そんなに待ってませんから。」
「お約束なセリフだなぁ～おい。」

剣と頼子の会話に甚がツッコむ中、恋愛事などに疎い2人と違い
2人が揃った事で明らかに周りの視線の変化に気づいた甚は
『はえーとこ2人を行かせるか。』と考え行動を起こす。

「そんじゃ、行きやしょうぜ御二人さん。」
「ん？あぁ、そうだな。」
「あ、甚さんもいらっしゃるんですか？」
「なぁ～に、俺は途中まで付いて行くだけだ。」

そう言い勉強道具を持って図書館に行こうとする3人（2人と1羽）。
だが、世の中そんなに甘くはなかった。
「おい待て！」
不意に後ろから声を掛けられた3人は、『まさか』と思いながら振り向く。
そこには、予想通り土方が居た。
「副長さん、どうかしたんですか？」
「それはこっちのセリフだ頼子。」
そう言い土方は、『キッ』と鋭い視線を剣に向ける。
「こんな奴と一体どこへ行こうと言うのだ！？まさかコイツに無理やり……」
「お前バカだろ。」
「なっ！？」
土方の言葉に反発した甚の言葉に、殺気を甚に向ける土方。
「貴様、何が言いたい……！」
「オメェさんがバカだと言いたいんだよ。
あんたこの1ヶ月アニキの何を見た？アニキがそんな事するような奴か？
そんな事も分からねぇたぁ、“鬼の副長”の眼力も高が知れるぜっ！！」
「貴様……！！」

甚の言葉にブチギレ寸前の土方は、
愛刀―兼定を抜き放ち今にも斬り掛からんとする。
だが、ここで土方と甚の間に頼子が入り土方を止めようとする。

「副長さん、落ち着いてください！」
「邪魔をするな頼子！風上なんぞと共に居たら妊娠されるぞ！」
「いや、一緒に居るくらいじゃ妊娠しませんから。」

土方の言葉にささやかにツッコミを入れる剣だったが、土方の怒りは収まらない。
と言うより収まる筈がない。

「落ち着いてください！剣さんはそんな事出来ませんよ！」
「”しない”じゃなくて”出来ない”なのね……ま否定できねぇけどよ。」

頼子の言葉にツッコミを入れながら、甚は羽毛の中から小型の煙玉を取り出す。

「コイツでさっさとおさらばするぜ！くらえやっ！！」

甚が煙玉を投げ付けると同時に、
『ボフン！』という音と共に白い煙が辺りを包み込んだ。

「ゲホッゲホッ！甚、脈絡も無く煙玉使うなよ！！」
「ケホッケホッ、前が見えません……」
「ぐっ！ワンパターンな方法を……ゴホッゴホッ！」
「けっ！食らう方が悪いんだよ！逃げるぜアニキ、頼子！」

そう言い甚は、剣と頼子を誘導し煙幕から脱出、図書館へと向かうのであった。

―杏の町・県立図書館前―

杏の町が誇る歴史溢れるこの図書館の前に剣と頼子、それに甚は来ていた。

「そんじゃ、俺はこれにて失礼。」

「あぁ、またな。」

図書館には動物が入れない事もあり、甚は2人と別れて空へと飛び去った。

「（アニキ、頼子には気を許してるみてぇだしな。これを機に女に慣れてくれよ。）」

そんな事を思いながら。

「さてと、それじゃ行きましょうか。」

「あ、はい。」

そう言い図書館へと入って行く剣と頼子。

図書館内には冷房が効き、

涼しい空間と静かさが漂う勉学には持って来いの空間だった。

「ここは、いつ来てもいいな。」

「あ、剣さんもよくここには来るんですか?」

「えぇ、ここが一番……と言うよりここしか無いですから。」

「あ、あはは、そうでしたね……」

そんな会話をしながら、2人は席を見つけ座りカバンから勉強道具を取り出していく。

「さてと、それじゃあ始めましょうか。

まずは頼子さんが苦手って言う語学系から。」

「はい、よろしくお願いします。」

そう言い2人は勉学に力を入れて行くのだった。

それから1時間後。

「……うん、頼子さん結構出来てますよ。苦手とは思えません。」

「あ、はい。ありがとうございます。

でも剣さんも、理数系苦手って言ってましたけど、すごく出来てますよ?」

「そうかな?」

頼子の言葉に首を傾げる剣。

そう、この2人自分では自覚が無いかもしれない（と言うか完璧に自覚が無い）が

この2人がそれぞれ苦手と言ってはいるが、実際苦手としている成績は良い。

ただ、他の得意教科などの成績がかなり良いだけで
自分で勝手に苦手と思い込んでいるだけだったりするのだ。

「う～ん、それじゃあ今日はこれ位にしますか。」
「あ、でもあんまり時間が経ってませんね。
いつもなら4時間ぐらいやるんですけど。」
「頼子さんも？俺も大体3時間ぐらいはやるけど、
まだ1時間しか経ってないですね。」

意外とガリ勉な2人にとって、1時間などあっと言う間のようだ。

「……不思議ですね、
剣さんと一緒にいるとこんなに時間が早く感じます。」
「ふぇ？」

頼子の言葉に首を傾げる剣。よく見ると、頼子の顔がほんのり赤かった。
そんな2人の様子を、本棚の影から見ている人影に2人は気づかない。

「ちっ、あのニブチンめ。そこはもっと何か言う所だろうが！」
「幻八の旦那、あんま大きな声出すとヤバイっすよ！」

本棚の影から剣と頼子を監視していた人影は小声で怒鳴り、
それを注意するように監視する者の持つカバンから小声が発せられる。
そう、この人影は変装した幻八とカバンの中にいる甚の声である。
実は剣達と別れた甚は、偶然遭遇した幻八先程までの事を報告。
それを聞いた幻八は『面白い予感がする』と言い得意の変装をし、

カバンに甚を入れて図書館にやって来たのだ。

「ちっ奴のニブチンは今に始まった事ではないが、こうも鈍いとイラついて来たぜ。」

「まあまあ、落ち着きやしょうぜ。」

幻八を甚が宥める中、剣と頼子が机から離れて行くのを見た。

「ちっ、追うぞ糞鴉。」

「へいへい。」

それを確認した幻八と甚は後を追った。

剣と頼子の2人は、相談の結果ここで少し読書をしてから帰ろうという事になった。

「おっ、『信長公の野望（のぶながこうユメ）』だ。それでこっちは『雑賀（さいか）の八咫烏（やたがらす）』かぁ……

しかし借りれるのは5冊まで、どれにするか迷うなぁ……」

剣は歴史系小説の棚の所で思い悩んでいた。

「（そういえば、頼子さんてどんな本読むんだろう。）」

不意に、普段図書室で一緒にいる頼子の事が気になった剣は、借りたい本をある程度まとめると、頼子を探して歩き出す。

しばらく歩くと、机に向かって分厚い本を広げて読む頼子の姿があった。

その姿を確認した剣は、頼子を脅かさないように前の方から接近する。

「何読んでるんですか？」
「あっ、剣さん。」
剣に気づいた頼子は、読んでいる本の表紙を見せる。シェイクスピアだった。
「頼子さんって、こういう本が好きなんですか？」
「はい、他にも有名な物は殆ど読みます。」
そう言い互いに微笑み合う剣と頼子。
そんな様子を見ていた幻八と甚はと言うと――――
「ほぉ～、アイツが女相手にあそこまで積極的に動き、尚且つ微笑み合うとは
成長したのか、はたまたあの女だからなのかな？」
「あの2人って、友人以上恋人未満ですからねぇ～。
まぁ、アニキの恋人候補　実質？1ですぜ。」
そう言いながら、再び移動を開始した2人を追い続ける幻八と甚なのであった。
―杏の町・愛津女学園付近―
愛津女学園の近くの大通りに、図書館より帰宅する剣と頼子の姿があった。
「結構借りましたね。」

「はい、あの図書館は何度行ってもやっぱり1番落ち着く所です。」

そう言い合いながら微笑み合う2人の姿を、追って来た幻八と甚だけでなく
付近を歩いていた愛津の生徒達の目にも入っていた。

「ねぇアレって……」

「風上くんと頼子さんだわ、……何だかすっごく仲良さそう……」

「そう言えば2人って、図書室でよく一緒にいるらしいわ……」

「じゃぁ、それが縁で2人は……」

「あぁーんっ！あたしも図書室に行けばよかったあぁっ！！」

そんな声が所々から響く中、剣は首を傾げながら頼子に耳打ちする。

「ねぇ、頼子さん。」

「はい？」

「何か、変な視線感じませんか？」

剣の言葉に『え？』と首を傾げた頼子が辺りを見渡すと、
頼子と視線の合った数名の生徒達が即座に視線を避けた。

「？私達、何か変なんでしょうか？」

「さぁ？」

互いに首を傾げ合う剣と頼子を、少し離れた所で幻八と甚の姿があった。

「やれやれ、アニキもアニキだが頼子も頼子だぜ。」

「……学園公認の鈍感カップル……そんな噂を流すのも悪くないなぁ……」

幻八がそんな不吉一（？）な事を口にしていると、
前方より1人の愛津生徒が駆けて来た。

「あ、いたっ！松原先輩！！」

やって来た生徒は頼子へと駆け寄って来た。

「何かあったんですか？」
「はい、未戸天狗党の者達との戦闘でこちらが劣勢してまして、ケガ人もいます！」

その言葉に目を丸くした頼子は、急いでその場所へ行こうとする。
それを見た剣も、頼子の後を追うように走り出す。

「俺も行こう！」
「剣さん！で、でも私、いま持ち合わせが……」
「これは雇われるんじゃありません、俺の個人的な行動です！
それなら問題ないでしょ？」

そう言い微笑んでくる剣に、頼子は苦笑しながら承諾した。
図書室などで最も剣との付き合いの多い頼子は、
剣がこういう人なんだと言う事を理解していた。
だから何も言わず、剣の動向を許可したのだ。
その様子を見ていた甚と幻八も、屋根の上を通って追い掛けていた。

「クケケケケケ、未戸の連中相変わらずのようだな。」
「この前は“鬼の巣”で颯間の連中とやり合ったばかりなのに、
懲りねぇっすね奴らも。」

そう言いながらため息をつく甚。
そう、甚が呟いたように未戸の生徒達はともかく攻撃的なのだ。
その理由は、『杏都四大学園』の１つである『私立未戸学院』に問題があった。
私立未戸学院は元々、愛津女学園と同様に女子校だったのだが
年々の少子化問題もあり数十年前に共学化したのだが、
共学化当初は男子を見下す女子が多く数も立場も圧倒的に上だったのだ。
だが、共学化から数十年経過して新たに理事長となった“黒川斉晶”は
そんな状況を打開させる為に、今まで男子に対して禁止していた
生徒会などへの推薦や帯刀の許可解放させたのだ。
その結果、男子と女子の立場は対等となって行ったが
今まで蔑まれて来た怨念か、次第に今度は男子が女子を見下し始めたのだ。
その結果　未戸学院は徐々に、颯間に入学出来なかった男子
或いは武以外のとり得のない不良達が牛耳るようになって行き、
ついには不良達による戦闘集団が生まれた。それが『未戸天狗党』なのだ。
学園をほぼ牛耳った天狗党は、次第にその暴行の範囲を広げて行ったのだ。
その余波が、愛津や颯間にも広がって来てるのだ。
その為、主に杏の町の治安維持を仕事としている
愛津の真選組や颯間の杏都見回り組みは
討学派の動きだけでなく、天狗党の暴行も止めねばならないのである。

「あそこだっ！」

走り出してしばらくして、愛津の生徒達と未戸の不良達の戦闘が起こっていた。

「たあぁぁっ！」
「おらあああぁぁっ！！」
「はあぁっ！」
「しゃらくせぇっ！」

数では互角のようだが、真選組側には組長格が居ない。
故に、体力と腕力で勝る天狗党の方が有利のようだ。
愛津の生徒には負傷者も見える。

「頼子さん、ここは俺が前線に出る！頼子さんは負傷者の手当てを！」
「はいっ！」

剣の言葉と共に、剣は小太刀を抜き放ち前線へ駆け出す。

「――――せやあぁっ！！」
「ぐわあぁっ！？」
「な、なんだっ！？」

剣が前線に行くと同時に、剣の小太刀の剣舞が未戸の生徒達を襲う。

「風上くん！」
「剣先輩！」

剣の援軍に、真選組の隊士達も驚きながらも士気を上げる。
元々討・佐両派に対してそんなに悪い印象を持たれていない上に実力もかなり強い剣は、不利な現状況にとっては救世主だった。

「ちぃっ！テメェが噂の颯間からの編入生ってか！」
「上等だ！颯間の連中はいずれぶっ潰す予定だしなっ！！」

未戸の不良達はそれぞれの武器を手に、剣に襲い掛かる。

「――――ふっ！」

だが、相手は颯間最強忍者部隊の切り込み隊長の風上　剣である。
いかに未戸の不良達が武に長けた者達でも勝てる相手ではなかった。
剣が奮戦している隙に、頼子は負傷した味方の治療に専念していた。

「……ふぅ、これでよし。」
「はふぅ、ありがとうございます、松原先輩。」

気を用いた内養功治癒術によって、負傷者の手当てはほぼ完了した
頼子は
背負っている小薙刀を抜き放ち構える。

「（剣さんにばかり頼ってちゃダメです、
私だって真選組の組長なんですから！それに…）」

頼子の脳裏に、剣が言ってくれた優しい言葉が蘇る。

『頼子さん…あなたは役立たず何かじゃない。』

『頼子さんは真選組、それも組長格じゃないですか。
そんな人が役立たずなんて誰も思ってませんよ。』

そんな優しい剣の言葉に、頼子は知らず知らずの内に勇気付けられていたのだ。

「やあぁぁっ！」

頼子は果敢に小薙刀を手に敵に斬り込んで行く。
今でこそ薙刀は非力でか弱い女の武器であるが、元を辿ればその発祥は戦場。
一軍の将が持つ強力な武具なのだ。槍にも匹敵するリーチに加え、極めれば遠中近　全ての距離での戦闘を可能にし、斬る・突く・払うの全ての攻撃が必殺となる変幻自在の多様性ある武器なのだ。
頼子はその特徴を良く理解し、薙刀による攻撃で剣の援護を巧みにこなす。

「はあぁっ！」
「やあっ！」
「ぐわっ！」
「く、くそっ！何なんだこの２人！」

剣と頼子、２人のコンビプレーに未戸の不良達は徐々に圧され始めた。
これを見た他の佐学派のメンバーも息を吹き返し、巻き返しをとばかりに刀を手に攻め始める。

「ぐ、くそぉっ！」
「退却だ！退け退けぇぇっ！！」

その奮戦に、未戸の不良達は撤退して行った。愛津の勝利である。

「やったあぁっ！勝ったわ！」
「松原先輩のお陰です！」
「風上くんもご苦労さま！」

皆が勝利に喜び合う中、剣は頼子に近づく。

「頼子さん、大丈夫ですか？」
「あ、はい。大丈夫です。」

そう言い微笑んで来る頼子に、剣は『よかった』と呟く。

「頼子さん、やっぱりあなたは役立たずなんかじゃ無いですよ。」
「え？」

不意にそう言い放った剣に首を傾げる頼子。

「頼子さんは自分の事を役立たずと思ってたみたいだけど、俺はそうは思わない。
だって頼子さんには、気を使った治癒術に
薙刀による戦闘だって出来るじゃないですか。
頼子さんが役立たずなんて、少なくとも俺は思いません。」
「剣……さん……」

自分が昼に言っていた事を未だに覚え、今でもそれを励まそうとしてくれている。
剣の太陽のように暖かな優しさに、頼子は今の感情を抑えれなかった。
次第に、頼子の瞳からポロポロと涙が溢れ出て来る。

「ふぇっ!?えっ!?よ、頼子さん!?」

泣き出した頼子に、剣は動揺する。
何故かは分からないが、自分が泣かせたような気がするからだが
今日の剣はどうやら鬼に縁があるようだ。

「……風上、貴様なにをしている……」
「ふぇ?」

不に声が聞こえ剣が視線を向けると、そこには援軍としてやって来た土方
及び局長の近藤を始めとした組長格のメンバーが来ていたのだ。
しかも間が悪い事に、たった今やって来た為に真選組メンバーにはどう見ても剣が頼子を泣かせたようにしか見えていないのだ。

「うぐっ…ひぐっ…」
「貴様あぁ~、頼子に何をしたぁ~……」
「ま、待って副長さん!皆も待ってくれ!
俺にも何故頼子さんが泣いてるのかさっぱり……」

「問答無用っ!!」

刀を抜き放つ土方だったが、それを唯一止められる人物によって止められた。
だれであろう、局長の近藤イサミである。

「近藤さん!?」
「歳ちゃん、落ち着いて。ツルくんは何の理由も無く
頼子ちゃんを泣かしたりしなよねぇ~♪」

そう言い視線を剣に向ける近藤だったが、当の剣は何故　頼子が泣き出したのか
その原因が全く分からず困り果てていた。

「ダメだ、何で頼子さんが泣き出したのか理由が分からない……」

困り果てた剣は、とりあえず頼子に事情を聞く事にした。
「…あ、あの、頼子さん？俺、何かマズイ事言ってしまいましたか？もしそうなら謝ります……」
「ひぐっ…違う…違うんです……嬉しかったんです……」
「ふぇ？」

頼子の言葉の意味が理解できず思考しようとする剣だったが、それは出来なかった。
何故なら、不意に頼子の体が動き剣に抱きついて来たからだ。

「ふえぇっ！！？／／／／／／／」
「「「「「「んなっ！！？」」」」」」

頼子の行動に、剣はもちろん周りにいたメンバー全てが驚いた。
それもそうである、普段から温厚で皆から1歩引いた所に居るのが常の頼子が
剣に、それも観衆の目の前で抱き付く等
普段の頼子を見慣れている者達には信じられない出来事だった。

「え、えぇとこれはその、な、な、ななななんでこんな事にいぃぃっ！？
あぁえぇぇとどどどどおすればぁっ！！」
「落ち着けよアニキ。」

見ていられなくなった甚が空から舞い降りて来た。

「ったく、おい頼子、ちったぁ周りの目を気にしろや。」

「ふえ？」

今まで泣いていたから近藤達の接近や皆の視線を全く気づいていなかったのか、

頼子は回りの視線に気づくと顔を真っ赤に染めて剣から離れた。

「あ、あ、あうぅ……／／／／／／／／」

「え、えぇと……頼子…さん？」

「そ、その、ご、ごめんなさいっ！！」

いきなり頭を下げ、そのまま頼子は走り去って行った。

「ふぇっ！？あ、あの、頼子さん！？」

走り去ってしまった頼子に、剣はもちろん周りのメンバーも呆気にとられてしまうのだった。

―愛津女学園　学園寮内・廊下―

「う～む……ダメだ、全然分からない。」

そう呟く剣は、風呂に向かって歩いていた。

あの後、走り去った頼子を寮内で幾度無く見かけたのだがその度に視線を逸らされ、碌に会話も出来なかった。

それ故に、頼子が何故あんな大胆な行動をとったのか分からないままだったのだ。

「（近藤先輩が聞いてみるって言ってたけど、やっぱり心配だなぁ）
はぁ～…」
「ふぅ…」
「ふぇ？」「あら？」

不意に自分と同じため息が聞こえ、声のした方を向く剣。
そこには、やはり自分と同じようにため息を付く桂の姿があった。

「心さん。」
「あら剣様、これからお風呂ですか？」
「えぇ、まぁ……」

そう返す剣の表情はやはり何処か元気が無い事に、桂は気になったのか首を傾げた。

「剣様、顔色が優れませんがどうしたのですか？」
「ふぇっ？あ、いや、その……」
「……ひょっとして、頼子さんの事ですか？」
「う〝っ」

いきなり図星を突かれ、益々表情から元気が無くなる剣。

「知ってたんですか……」
「えぇ、それはもう。普段から温厚で、
あの野蛮な真選組の組長とは思えない程優しい頼子さんが
剣様にあんな大胆な行動をとるなんて。学園中の噂でしたわ。」

「が、学園中……」

剣は軽い目眩がした。自分と頼子が抱き合った事が噂になってるという事は
自分が頼子を泣かせたという事も噂になっていると思い込んだのだ。

「……やっぱり、俺が泣かせちゃったのかなぁ……」

そんな言葉が剣の口からこぼれる。
その言葉に反応したのか、桂は心配そうに剣を見つめる。

「剣様、私(わたくし)は剣様が女性を泣かす様な方とは思えません。
きっと頼子さんの行動には、何か訳がある筈ですわ。
だからそんなに落ち込まないでください。」

そう言い剣の頭を撫でる桂に、剣は顔を赤く染めながら
『あ、ありがとうございます』と返す。

「……そういえば、心さんもため息を付いてましたけど
何かあったんですか？」

剣がそう聞くと桂の表情が曇ったが、すぐにいつも通りの笑顔になった。

「…いえ、ちょっとした我がままがあっただけですわ。お気になさらず。」
「は、はぁ？」

イマイチ桂の言葉に信用が持てなかった剣だったが、
桂がそのまま部屋の方へ戻ってしまい、また自身の風呂の時間もあったので

結局　詳しい事は聞かず仕舞いなのであった。

―杏の町・愛津女学園付近―
頼子との出来事から翌日の休日、
剣は『はぁ』とため息を付きながら杏の町を歩いていた。

「アニキ、元気出しやしょうぜ。」
「そうは言ってもなぁ？」

そう言い剣は再び『はぁ』とため息をついた。
剣がここまで元気が無いのは、無論頼子との件だ。
昨日の件で話をしようと剣は努力したのだが、
その度に頼子に逃げられてしまうのだ。
お陰で朝から1度も会話が出来ていない。

「はぁ、どうしよう……」
「アニキ、元気出してくだせぇ。」

何とか励まそうとする甚だったが、剣は悩むばかり。それがいけなかった。

「ふわっ！？」
「きゃっ！」

悩んで前を見ていなかった剣は、湯帷子姿の女子とぶつかってしまった。

「しまった！すみません、大丈……ぶ？」

ぶつかった人を見た時、剣は我が目を疑った。
その湯帷子姿の女子は、薄緑色のロングヘアーをゆるやかなウェーブに波打たせた
剣がよく知る人物――――

「こ、心さん!?」
「剣様!」

そう、誰であろう愛津討学派・超秀班筆頭の桂　心であった。

「ど、どうしたんですか、その格好!」

湯帷子姿の桂に内心ドキドキしながら尋ねる剣。
お嬢様学園らしくない学園で唯一お嬢様らしい桂が
紺色の大人な湯帷子を着ているのだ、ドキドキするのも無理は無い。
だが、剣の質問に対しいつもならサラリと答える桂が今日はどこか
落ち着きが無い。

「心さん?」
「どうしたんだ?オメェらしくもねぇ。」
「いえ、その……」
「おい、居たか!?」

桂が口ごもる中、不意に桂の背後から声がしその方に視線を向けるとそこには黒のスーツに黒いグラサンというどこぞの映画に出てきそうな
屈強な男達がいた。

「何だろ……うわっ!?」
「剣様、しっ!」

首を傾げてるといきなり桂に引っ張られ電信柱の後ろに隠れてしまう。
しばらくしてグラサンの男達が剣と桂の隠れる電信柱を通り過ぎて行った。

「……ふぅ、助かりましたわ。」
「あ、あああのあのあの、ここ、ここ心さん？」
「はい？」

剣の言葉に首を傾げる桂だったが、剣は視線をずらし赤面したままだった。
何故なら、桂が剣に密着し当たってるのだ、主に胸が。
桂もようやくそれに気づいたのか、或いはわざとやっていたのかは分からないが
ようやく剣から離れた。

「はぁはぁ、で、心さん。何なんですか先の人達は？」
「……実は…」

なにやら言いずらそうだったが、桂は少しずつ話し出した。

桂の話によると、昨晩　父から見合いの話しを出されたらしく
昨日ため息をついていたのはそれが原因らしい。
本人としては父が進める無理やりな見合いではなく、
学園などで楽しく恋愛がしたいと希望してきた為
今回の見合いから逃げてきたらしい。

「それで、心さんはこれからどうするんですか？」

「私はやっぱり、父の進める無理やりな見合いなんて嫌です。ですから……」

そこまで言い、桂は『すすっ』と剣に寄り添って来る。

「こ、心さん？」

桂の接近に顔を赤く染める剣。
唯でさえ女性に対して免疫の少ない剣である、しかも今日の桂は湯帷子姿である。
普段からお嬢様らしいお淑やかな雰囲気のある桂が、
より一層　綺麗に見えて剣は胸の鼓動が止まらなかった。

「剣様、代金は払える限りお支払いします。今日1日、私を守ってください。」
「ふぇ？」

桂の予想してなかった要求に剣は一瞬『ポカン』となる。
普段　剣や伊織のような傭兵はこの学園の共学を賭けた事意外では基本的に雇われないのだ。
その為、桂のこの要求は剣には意外な申し出だった。

「これが私の我がままだという事は分かっていますわ。
でも私、知りもしない方といきなり結婚させられるなんて、
耐えられませんの！」

そう言い桂は剣の手を『ギュッ』と握り見つめて来る。

「お願いします剣様、私の我がままに付き合ってくださいませ。」
「心さん……」

上目使いでこちらを見て来る桂に、
先程からドキドキしている剣に断る理由は無かった。

「分かりました、今日1日、俺は心さんに付き合います。」
「はい、お願いします、剣様♪」

その言葉に、最高の笑顔を向ける桂であったが、
この時、2人を睨むように見ていた3つの影に2人は気づかなかった。
そして剣は、自身の相棒がいつの間にか消えている事に気づけなかった。

―愛津女学園　学園寮内・屯所―
「なにぃっ!!?」

愛津女学園寮内、真選組の集会場である屯所に土方の声が響く。

「間違いないのかカンリュウサイ!」
「間違いないで!ワイはこの目で見たんヤ!
風(か)っつあんと桂ハンが寄り添ってる所を!
しかも桂ハンはなんと浴衣姿やったデーッ!!」

土方の言葉に対しカンリュウサイはオーバーリアクションで返した。

実は剣と桂が話していた時、たまたまゴミ捨て場に捨ててあったH本を
拾って読んでいたカンリュウサイが2人の姿を目撃していたのだ。
当然　桂の湯帷子姿もしっかりと見てしまった訳だから

カンリュウサイはかなり興奮していた。

「くっ、桂め。奴を垂らし込んで一気に討学へと流れを変える気か！」

「そうかなぁ？」

土方の怒鳴りに対し、近藤はやんわりと返す。

「いくら心ちゃんでも、ツルくんをたらし込んだりするとは思えないよ？」

「そうですねぇ～。風上先輩の性格上、むしろ逆効果だと思いますよ～？」

近藤の言葉に賛同するように総詩と総詩の頭の上にいるゲンちゃんが『うんうん』と頷き、土方も『確かに…』と頭を冷やす。

「でもそれじゃあ、どうして桂先輩が浴衣姿なのかが謎ですね。」

「ん～、祭りの帰りじゃねぇの？美味いモンいっぱい食ってよ…」

「あのね紗乃、アンタじゃないんだから。大体この辺で祭りなんてしてないわよ。」

原田の考え方にツッコミを入れるやち。

「せやから、きっと風っつあんも男に目覚めたんヤ！それで桂ハンを無理やり着物姿にさせてそのままラブホテへ……」

「アホ！」

不意にカンリュウサイのアホ発言に誰よりも先に突っ込みを入れた影があった。

その１つの影より放たれた黒い針の様なものがカンリュウサイを貫

き、
屯所に『あぎゃ――――っ!!?』というカンリュウサイの断末魔が響いた。
その針は、黒い棒手裏剣だった。
それを土方達が確認した瞬間、上より2つの影が舞い降りてきた。
甚と谷さんである。

「あ、甚くん、谷さんどうしたの?」
「クルックー（いやな局長、俺も見てたんだよ桂の譲ちゃんの事を）」
「大方そこのアホ狐が何かやらかすと思って谷のオヤジと一緒に来てみりゃ、
案の定だったようだな。」

そう言いながら近藤達の前に舞い降りる2羽の鳥達。

「……それで、剣は桂とデート?」
「クルックー（デートと言うか……）」
「まぁ、大雑把に説明するとだな」

そう言い甚と谷さんは皆に説明をしだした。

―愛津女学園　学園寮内・一室―
時を同じくして、カンリュウサイや谷さんと同様に
剣と桂の様子を見ていたもう1つの影が、学園寮の一室に来ていた。

「ほほぉ～、それはホントかぜよ?」
「バウッ（あぁ、2人の会話も聞いていたからな）」

坂本の言葉に対し、信吾は『コクリ』と頷く。
彼もまた、谷さんやカンリュウサイと同じく剣と桂の様子を見ていたのだ。
この事を伊織と共に坂本に報告に来ていた。

「…で、どうする涼華？」
「……まぁ桂の事情も分かるんが、ちと興味があるのぉ。」

そう言い坂本は伊織と信吾と共に部屋を後にした。

―杏の町　商店街―
「剣様……？」
「……／／／／／／／／」

杏の町の商店街を、桂は剣と腕を組んで歩いていた。
桂の表情はすんごく幸せいっぱいだが、剣はやっぱり顔を赤めていた。
唯でさえ桂の湯帷子姿は目立ち、しかも桂はかなりの美女だ。
そしてその隣を歩く剣もまた、かなりの美男子ときている。
美男美女カップル、目立たない筈が無い。

「おい、見ろよあれ。」
「うっわ！すげー美人！しかも和服かよ！」
「ねぇねぇ、あそこの彼結構イケてない？」
「ホントだ！すっごいかっこいいーっ！！」

所々から剣と桂を絶賛する声が上がる。
その声が殆ど聞こえてくるので、桂はかなり機嫌がいい。

「うふふ♪剣様、私　今とても幸せですわ？」
「え、あ、そ、そうですか……それは何よりです……」

幸せそうな桂とは対照的に、剣は顔に熱が増幅され
今にも倒れそうで気が気ではない。

「（お、落ち着け俺！とりあえずアレだ、
以前　坂本先輩とデートしてた時と同じようにどこかの店で1休みしよう、うん！）
あ、あの、心さん。」
「はい、何ですか剣様♪」

剣の言葉に対し笑顔で返してくる桂に、剣は顔を赤く染めながらも答える。

「あ、あの、み、店で少し休みませんか？」
「はい、剣様とならどこへでも♪……なんでしたら、ホテルでも構いませんわ？」
「そ、そうですか……あははは」

桂の言葉に枯れた声で笑いながら、2人は近くの飲食店へと入って行った。

「あぁ、御二人ともお店に入ちゃいましたよ！」
「ほほぉ、あちのデートの時と同じパターンじゃのう。」

剣と桂から少し離れた所で、真選組メンバー及び討学派メンバーが2人の様子を偵察していた。

実は彼女達、寮を出る時鉢合わせし目的は一緒という事もあり一時共同作戦に乗り込んだのだ。

「ん～どうしようかぁ～？皆で入って私達も何か食べよっか～」
「近藤さん、それでは偵察になりませんよ、食事は我慢してください。
おい斉藤、お前　侵入出来るか？」

食事したがる近藤を抑えて、土方は私服のメイド服に着替え口を×の字にしている（どうやってるのかは知らんが）斉藤に話しかける。

「……何とか行けそう…」
「よっしゃ！んじゃあち達からは伊織を行かせるぜよ！」
「焼き蕎麦パン３つな、行くぞ信吾。」
「バウッ（ホットドック３つ、忘れるなよ）」

それぞれの考えで、斉藤は小柄を生かして通気孔から岡田と信吾は正面か客として入って行く。

「ねぇ副長、あたし達も入りましょうよ～。あたし腹減ったしさぁ。」
「紗乃あんたねぇ、今あたし達が何してるのか分かってるの？」

原田の言葉にツッコミを入れるやち。

「にしても、アニキ大丈夫かねぇ。」

愛津の者達に呆れながら、剣の身の心配をする甚。

「クルックー（まぁ、なんとかなるんじゃないか？）」
「ニャー（うんうん。）」

そんな甚に声を掛けてくれる谷さんとゲンちゃんであった。

―杏の町　商店街の店・角屋（すみや）―

愛津の池田屋、近江屋、颯間の寺田屋と並ぶ飲食店、角屋。
４つの区分されている杏の町の丁度中心に存在するこの店は
愛津、颯間、未戸、規州の者達が訪れる
杏の町　最大級の飲食店である。
この店には２階に貸切部屋が存在し、
その部屋の１つに一際目立つ美男美女カップル
……らしき２人がいる。剣と桂である。

「剣様、私今とても幸せですわ？」
「そ、そうですか……それは良かった……／／／／／／／」

２人っきりの部屋故に、呼び鈴を鳴らさない限りは誰も入ってこない。
そういう環境もあってか、桂は今まで以上に剣にくっ付いてくる。
その行動に剣はタジタジだった。

「（お、落ち着け俺、落ち着け！こういう時は深呼吸して……）」
「剣様……」
「ふぇ？」

何とか落ち着こうとする剣に対し、桂は更に大胆な行動に出た。
それは、注文していたお菓子を自身の口に咥え
それをそのまま剣に食べさせようとしている。

いわゆる、口移しというやつだった。

「なっ！！？／／／／／／／」

この桂の行動に、超純情奥手男の剣が驚かない筈が無かった。

「ん――――――……」

目を瞑り、無言で口移しを迫って来る桂に
剣は金縛りに掛かったように動けなかった。

「（だだだだダメだ！こんな展開の解決策、
ノアの“ノア式デート大原則”にも乗ってなかったぞ！！？
どどどどど、どうすればあぁぁぁぁぁぁっ！！？？）」

「（剣様……私の愛をお受け取りくださいませ／／／／／）」

動揺しまくる剣に、桂の顔が近づく。

「（く…くそぉぉっ！もうどうにでもなれっ！！）」

ついに剣も覚悟を決めた――――――

――――――その時だった！

「……牙突（きばつき）！」

不意にそんな声と共に、剣達のいた部屋の障子が破られ
刀を持った1人の小柄なメイド姿の少女が突っ込んで来た。
剣と桂はその少女の姿に見覚えがあった。それは……

「斉藤さん!?」
「どうしてここに!?」

そう、それはメイド服を私服とした
剣と桂の監視をしていた筈の斉藤だった。

「……剣、大丈夫?」
「ふぇ?あ、はい、怪我は無いですけど……」
「……桂に汚されなかった?」
「ふぇ?」

斉藤の言葉の意味が理解できない剣が首を傾げる中、
剣達のいる部屋に更に入ってくる影が2つ。
伊織と信吾であった。

「伊織さん、それに信吾さんまで、何故ここに!?」
「……斉藤のせいで、焼きそばパン無しになったかも……」
「バウッ（わしのホットドッグも）」
「はい?」

伊織と信吾の言ってる意味が理解できない桂だったが
剣と桂の2人は、斉藤達に何故ここにいるのかを聞き出すのだった。

「えへへ、ゴメンねぇ～。」

「スマンかったのぅ桂。」

剣と桂のいた部屋に、剣達だけでなく近藤達　真選組メンバーと坂本達討学派メンバーが揃って剣と桂に謝罪をしていた。

あの後　剣と桂は斉藤達から皆が付いて来ている事を聞き出し、全員をこの部屋に集めたのだった。

「まさか、見られていたとは……」

「皆様方、無粋ですわ。」

見られていた事に恥ずかしさを感じる剣と剣との時間を邪魔された事に不満を感じる桂。

「それにしても斉藤さんもせっかちですね～。話を聞く限りだと、ほっとけばもっと面白い展開になったかも知れないじゃないですか～。」

「……剣は汚させない。」

総詩の言葉に『むすっ』とした表情で返す斉藤。その隣で剣は、斉藤の言葉に首を傾げながらも甚から貰ったドリンク剤を飲んでいた。

「うぐ、苦い……」

「我慢してくだせぇアニキ。それは幻八の旦那が作った“顔に熱が溜まらなくなる薬”だそうですから。」

そう、剣は先程から顔に熱が溜まりっぱなしなのだ。これ程多くの美女に囲まれ、しかも桂には腕を組まれてる状態だ熱が溜まらない筈がない。

故に甚が持って来た薬を飲んで熱を冷ましているのだ。

「（でも幻八の旦那のことだからなぁ……
何か副作用でもなきゃいいんだが……）」

心中、そんな不安もあった甚だが今はとりあえず剣の熱を冷まし早く薬無しでも顔が赤くならないよう願うのだった。

「ん、ところで剣？」
「ふぇ？」

不意に声を掛けてきたやちに剣は首を傾げた。

「桂とのデートはどうだった？やっぱりドキドキした？」
「おっ！あちもそれは聞きたいぜよ！
あちのデートの時とどう違ったかのう？
やっぱ、桂のようにお淑やかな女子の方が良かったのか？」
「わ、私も是非聞かせてください先輩！！」

やちに便乗して、坂本や芹栖まで剣に迫り来る。

「ふぇ！？え、えぇとその……！！」

この時　剣はある事に気づいた。
自分の顔が、いつもより熱くないのだ。
どうやら薬の効き目が効いて来たらしい。
内心　安心しながら剣は出せる限りの言葉を発する。

「えぇと……やっぱり、その、ドキドキしました……
シャンプーのいい匂いもしたし……清らかな感じがした……かな

？」

「まぁ剣様ったら、本当の事とはいえ恥ずかしいですわ？」

そう言う桂の顔は赤い以上にどこか嬉しそうだった――――――

――――この言葉が発せられるまでは。

「くははははっ！本当無念流（ほんとうむねんりゅう）“煉兵館（れんぺいかん）の鬼女（きじょ）”と言われたオメェが今やお淑やかなお嬢様ってかっ！人は変われば変わるもんだなぁっ！」

「なっ！？」

「「「「「！！！？？？」」」」」

不意に聞こえてきた声に、桂は顔を赤め

他のメンバーは２つの意味で驚いていた。

１つは、いきなり聞こえてきた声そのものに。

もう１つは、声の言葉の内容だった。

「“煉兵館の鬼女”？桂がか？」

「おう、すんげーお転婆娘で強かったぞ。」

「なっ！！？／／／／／／／／」

坂本の質問に対して発せられた声に、

桂は幼い頃の自分の事を暴露されて顔を赤く染めた。

「心ちゃんが？」

「……かなり意外……」
「意外所じゃないぞ……と言うか桂のそんな姿事態が想像付かん。」
真選組のメンバーがそんな感想を述べる中、剣と甚は首を傾げていた。

「この声は……」
「まさか……」
「い、一体誰ですか！私の過去を知っているのはっ！！？」

「ははははっ！ここだよ！」

声のした方である障子の方をメンバーが向くとそこには、
白銀のボサボサした長髪に、獣のように鋭い目付き
そして布でグルグル巻きにされている身の丈程もある巨大な物を背負った年齢１８位の１人の少年がいた。
その姿を見た剣と甚が一斉に声を上げる。

「高杉（たかすぎ）！？」
「高杉（たかすぎ）の旦那っ！！？」
「よぉ、剣、甚、久しぶりだな。」

剣と甚に高杉と呼ばれた男は背中に背負っていた物を置き
部屋にズカズカと入って来た。

「まさかお前ら、それに桂とこんな所で再会すとはな。」

高杉の言葉に、桂は居心地が悪そうな表情をした。

「桂、おんしの知り合いか？」
「……煉兵館と『翔可村塾（しょうかそんじゅく）』にいた頃の知り合いですわ。」
桂の言葉に一同は視線を高杉へと向ける。
「じゃ、じゃあ、桂先輩が鬼女っていうのは……」
「あぁ、マジだぞっ！」
芹栖の質問に『サラッ』と答える高杉。
そんな芹栖を抑えて、近藤が高杉の前に出る。
「ちょっといいかな？私は真選組局長の“近藤　イサミ”、あなたの名前聞かせてもらえる？」
近藤の言葉に『ほぉ』と顎に手を当てながら近藤を見る高杉。
「アンタが佐学派共の頭か、ガッチガチの石頭野郎かと思ってたが中々美人だな。」
「石頭はむしろ土方さんですしねぇ～。」
「誰が石頭だっ！！」
話に茶々入れる総詩に怒る土方を近藤が『まぁまぁ』と止める。
その姿に高杉は『くくくく』と声を殺して笑った。
「お前ら面白れぇ奴らだな。」
「あはははは、ありがと。えっと……」
「おう、まだ自己紹介してなかったな。」
そう言い高杉は改めて皆を見渡し口を開いた。

「俺の名は高杉！颯間討学派　危兵隊総督（きへいたいそうとく）“高杉（たかすぎ）　蛮作（ばんさく）”だ！」

「「「「「っ！！？」」」」」

その言葉に、桂、剣、甚を除くメンバーは耳を疑った。
危兵隊と言えば、颯間討学派の代表的なチームである。
その危兵隊の総督、つまりは筆頭がこの高杉　蛮作だというのだ。

「まぁそう固くなんなよ。別に俺が討学派の筆頭だからって
この店で戦争しに来た訳じゃねぇんだからよ。」

高杉の言葉に息を呑んでいたメンバーも緊張が解けたのか
手にしていた武器から手を引く。

「しっかし、しばらく会わねぇ内にお嬢様らしくなったな桂。」
「……言わないでくださいまし。」

高杉の言葉が気に入らないのか、桂は『プイッ』と視線を背けてしまった。
そんな様子を見ていた剣は『くすり』と微笑んだ。

「でも意外だな、心さんにもお転婆な時期があったんですね。」
「剣様…あまりその話はしないでくださいまし、
恥ずかしいですわ……／／／／／／／／／／／／／／／」

剣の言葉に顔を赤める桂。
だが確かに、ありえない話ではなかった。
彼女の扱う剣術の流派、『本当無念流』の煉兵館道場は
杏都三大道場の１つ、『力の斉藤』と言われた剛剣の流派なのだ。

その荒々しい修行法に、普通の者は入門しようとはしなかった。
そんな道場に入門し、しかも強いと言うのだから
今の桂も昔はお転婆だったと言うことが分かる。

「ははははははっ！まぁ確かに、俺も最初見た時は別人かと思ったしな！
にしても……」

不意に高杉は愛津の皆を見渡し、剣の肩を『ポンッ』と叩く。

「高杉？」
「剣よ、どうなんだよ？」
「ふぇ？」

高杉の言葉の意味が理解できない剣が首を傾げると、
高杉は『ニカッ』と微笑みながら言い放つ。

「だからよ、これは出来たのか？」

そう言い高杉は左手の小指を立て剣に見せる。
が、剣は益々意味が分からなくなる。

「？指きりか？」
「バーカ、ちげーよ。」

剣の天然に呆れつつも高杉は言い放った。

「これは女、つまり彼女は出来たのかって意味だ。」

「ぶふぅ――――――――っ！！？」

高杉の言葉に、剣は飲んでいたお茶を思いっきり噴出してしまった。

「あつぅ――――いっ！！？」

そして噴いたお茶は芹栖にクリンヒット、効果は抜群だ。

「あうぅぅ……はっ！

でででもこのお茶、舐めれば風上先輩と間接キスに……

あぁ、だ、ダメですよ先輩～、間接だからって私と始めてなんて……」

効果は抜群だ、ホント色んな意味で。

「……芹栖、落ち着け。

……て言うかその茶、初音によこせ。」

芹栖にツッコミを入れつつ茶を舐めようとする斉藤を尻目に

剣は高杉の言葉にかなり動揺していた。

「ははははははっ！その様子だとまだみてぇだな！」

「あ、あのな……／／／／／／」

幻八の薬のお陰でいつもよりは大丈夫だが

剣の顔はほんのりと赤くなっていた。

「それにしても高杉、どうしてアナタがここに？」

「ここは杏の町の中心部の店だ、いても可笑しくねぇだろ？」

高杉に先程の件でまだ怒っている桂に対し、
高杉は『へらへら』と笑いながら返しながら不意に立ち上がった。

「んじゃ、俺はそろそろ帰るが、ここで会ったのも何かの縁だ。
少し少ないが、やるよ。」

そう言い高杉は、千円の札束を置いて去って行った。
その札束に、近藤達は驚きつつも手に取った。

「ほえぇ～、私こんな大金始めて見た気がするよ～。」
「これで少ないがって……彼って良い所のボンボンとか？」

やちの言葉に、剣と甚、そして桂は顔を見合わせ苦笑いしながら答えた。

「まぁ、ボンボンではあるよな～。」
「信じがたい事ですけど……」
「高杉は、あの武家・高杉家の嫡男ですから……」
「「「「「えっ！？」」」」」

剣の言葉に、他のメンバーは耳を疑った。

杏都の高杉家と言えば、この町では知らぬ者はいない武家の直系の名門。
その嫡男が、先程の高杉　蛮作だと言うのだ。

「ほえぇ～、そうだったんだ。」
「……意外……」
「へっ？って事はアイツ、毎日美味いもん食い捲くってんのかっ！？
ちっくしょ～、知ってたらもっと金出させて奢ってもらいたかった

～」

高杉が名門・高杉家の嫡男と知ったメンバーがワイワイと騒ぐ中、
土方は1人なにやら気に入らなさそうに先程高杉の出て行った方を
睨んでいた。

「？副長さん、どうしたんだろ？」
「あぁ、あれはですね。」

土方の動向が気になった剣に、沖田は剣に近づき話し出す。

「土方さんは武士や侍に憧れてましたからねぇ～、
だから本物の武家の人間を見ると嫉妬するんですよ～」
「誰が嫉妬だ！！余計な事を言うのはこの口かぁ～っ！！」

沖田の言葉に沖田の口を引っ張る土方にメンバー達が笑い焦がれる
中、
先程から会話に入ってこない頼子にやちが気づき声を掛ける事にし
た。

「どうしたの頼子？」
「え？」

声を掛けてきたやちに驚く頼子に、やちは優しい笑顔を向ける。

「元気ないみたいよ？」
「いえ、そんな事……」
「さしずめ、剣の事？」
「っ！！／／／／／／／／」

やちの言葉に、頼子の顔は真っ赤に染まった。
その様子にやちは『やっぱりね』と言いながら頼子の肩を『ポン』と軽く叩く。

「あたしも聞きたかったんだけどさ、何であんな大胆なまねしたの？」

やちの言う大胆なまねとは、剣に抱きついた件である。
あの一件依頼、頼子は元気が無く剣とも碌に会話をしていないのは誰の目から見ても明らかだったのだ。
お姉さん的なやちの優しい問い掛けに、頼子は少しずつ口を開いた。

「……分からないんです。」
「分からないのにあんなまねしたの？」
「いえ、その、何と言いますか……」

イマイチ言葉の出ない頼子だが、何とか少しずつ声にしようとした。

「剣さんは、私のこの能力（ちから）を恐れなかったんです。」
「んまぁ、剣も気が使えるらしいからね。」
「そうだからかもしれません。
けど、そういった事を男性から言われたのは父以外始めてでしたのですごく、嬉しかったんだと思います。そしてら体が自然と動いて……」

顔を赤めながら言う頼子に、やちは『はは～ん』と目をキラ付かせた。

「つまり、優しい剣に頼子は惚れちゃった訳だ。」
「え！？／／／／／／／／」

やちの言葉に、頼子の顔は更に真っ赤に染まった。

「い、いえその、わわ私は……／／／／／／」

「いやその気持ち分かるわ、あたしも剣の優しい所にはこう胸が『キュン』となっちゃうしね。／／／／／」

自分で言いながら顔を赤めるやち。

「でもね頼子、剣は頼子が元気が無いのは自分のせいなんじゃって思ってんだからちゃんと前を向いて話しなさいよ?」

やちの言葉に、『コクリ』と頷く頼子であった。

―愛津女学園　学園寮内・廊下―

「はぁ……」

愛津女学園寮内の廊下を歩く頼子が、重いため息を付いた。

角屋からの帰宅後　度々　剣と会話しようとしたのだが

一歩勇気が足りず剣に話しかける事が出来なかったのである。

「はぁ……どうしましょう……」

「ありゃ、頼子じゃねぇか。どうかしたのか?」

不意に掛けられた声に頼子が視線を向けるとそこには脱衣所の前に立つ甚の姿があった。

頼子は考え込む内に脱衣所の所まで来ていたようだ。

「言っとくが、今風呂はアニキが入ってるから使えねぇぞ。」
「あ、いえ、そうではなく……ただちょっと考え事をしてて……」
その頼子の言葉に、甚は剣との一件の事を素早く察する。
「……アニキとの件なら、ちゃんと言った方がいいぜ？」
「はう……」
甚に図星を疲れた頼子は、益々悩んでしまった。
「剣さんと、ちゃんとお話したいな……」
「私が何とかしてあげましょうか？」
「「っ！！？」」
不意に声を掛けられた頼子と甚は、一斉に後ろを振り向く。
そこには、１人の女子生徒がいた。
「（ん？こいつ……）」
「え、えぇと、どちら様で……」
「いえ、名乗るほどの者ではありません。
ただの佐・討のどちらにも属さない生徒その１ですよ。それよりも……」
そう言い女子生徒は頼子に近づき、撫で回すような視線を向ける。
「お話は伺いました、風上さんとの件で悩んでいるんですね？」

「え？えと……はい……」

不気味さを感じながらも、素直な頼子は率直に答えた。

「私にいい考えがありますよ。風上さんと話せて、尚且つ風上さんに何をされたかは知りませんが、その御礼をする方法が。」

「え！？」

女子生徒の言葉に目を丸くする頼子の横で甚は冷や汗をかいていた。

「（なんか、やな予感……）」

「あ、あの、それでどんな方法なんですか？」

「それは……」

頼子の要望に答え、女子生徒は甚と頼子の耳元で自身の案を話す。

そして話した瞬間――――――

「え…えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！？？／／／／／／／／／／」

頼子は顔を真っ赤にして驚いてしまった。

「そそそ、そんな恥ずかしいですよ！無理ですよ！！」

「大丈夫、これを着ればいいですから。」

そう言い女子生徒が渡した物を見て、頼子は『これは…』と驚いている。

「いいですか松原さん、ここで風上さんと話しとかないと
今後図書室とかで顔を合わせる度に視線をそらすような
学生生活になってしまいますよ！
それにこの作戦で行けばお礼を返す事も出来る！
そして風上さんの女性に対する赤面症も直るかもしれませんよ？」
「いや、アニキの場合むしろ逆効果……」
「何か言った？」

甚の言葉に睨んで来る女子生徒に、甚は『何でも無いっす』とクチバシを閉じた。

「さぁ松原さん！勇気を出して！ここで出さずにいつ出すんですか！！」
「うぅ……」

女子生徒の後押しに、『コクリ』と頷いた頼子は
女子生徒から貰った服を手に脱衣所へと入っていった。

頼子が脱衣所には言った後には、甚と女子生徒が残った。

「……どういうつもりですかい旦那？」
「クケケケケケ、さすがに分かってたか。」

甚の言葉に、女子生徒は不気味に微笑むと
自分の顔をベリッと剥がす様に引っ張る。
その下からは、悪魔の様なかをと悪魔の如き鬼畜さを持った男、

そう、幻八が出て来た。

「クキキキキキ、これで剣（ヤッ）の女に対する赤面症を直すきっかけを作れればいいんだが……」

「それ本音じゃないですよね？」

「あぁもちろんだ、剣（ヤッ）が赤面し困る姿が見たいだけだ！」

「あぁ、やっぱり……」

幻八の言葉に甚は頭を抱えた。

そう、この幻八　颯間では有名なかなりのドSなのだ。

得意の変装してまで頼子に話しかけたのも、頼子を励ます為ではなく女が苦手な剣をからかいただけなのだった。

「ところで…」

不意に幻八は視線を甚から逸らし、脱衣所の近くの廊下の曲がり角に視線を向けた。

「おい、いつまでも隠れてないで出てきたらどうだ？」

「へ？」

幻八の言葉に首を傾げる甚だったが、すぐに何かを察知する。

「ククククク、“逃げ”の2つ名の如く逃げるのか？」

「……そこまで言われては、黙っていられませんわね。」

幻八の問い掛けに観念した“逃げの心”こと桂　心が曲がり角より姿を現した。

「立ち聞きとはいい趣味だな、桂　心。」

「あら、不法侵入者がそんな事言えますの？」

桂は幻八に対して全く気圧されず、
いつもの色っぽい目付きで幻八に言い放つ。
それに対し幻八も『クヒヒヒヒヒヒヒ』と不気味に笑いながら言い放つ。

「その不法侵入者に何用だ？
用もないのにコソコソ隠れていた訳でもあるまい？」

幻八の言葉に、桂は色っぽい視線から真剣な表情へと変わった。

「……アナタ、頼子さんに何を言ったんですの？」

「何だそんな事か。」

「そんな事ではありませんわ。頼子さん、随分顔を赤めていましたわ。」

そう、桂が気になったのは頼子と甚にしか聞こえない声で言った幻八の提案についてだった。

「クケケケケケ、知りたいか？」

「えぇ、是非。」

『コクリ』と頷く桂に、幻八は『キヒヒヒヒヒ』と笑いながら口を開いた。

―愛津女学園　学園寮内・露天風呂―

幻八と桂が話していた頃、剣は風呂に浸かりながら考え事をしていた。

「ふぅ～、昨日今日と色々あったなぁ～……」

そう言いながら、剣は昨日今日の出来事を振り返る。

昨日は頼子にいきなり抱きつかれ、それ以来顔を合わせる事も出来ず結局今日も顔を合わせれなかった。

そして今日は、桂が見合いから逃げて来てその一件で高杉との関係も分かった。

「はぁ～……そういや結局、今日も頼子さんと話せなかったな…どうしよう……」

そんな事を唸っていると、不意に背後から『ガラガラ』と露天湯への戸が開く音がしたような気がした剣は後ろを振り向こうとする。

「（誰か入ってきたのか？）」

そんな考えが浮かんだ剣は、脱衣所の扉の前には甚が見張りで居る筈だから

入ってこれるのは甚かゲンちゃんを始めとした動物達だろう。

そう剣は考えながら後ろを振り向く。

そして振り向いた瞬間、剣は我が目を疑った。

「あ、あの、剣さん……」

「……んなっ！！？」

剣が視線を向けたそこには、先程まで考えていた頼子本人が居たのだ。

しかも、何故か紺色のスク水姿で。

「よよよ頼子さん！？なななな、何でここに！？しかも何故スク水！？」

「え、えっとそれは……／／／／／／」

頼子は顔を赤くしつつ、何とか口を開き現状況について説明しだす。

「え、え～と……つまりその女子生徒さんに
多少強引な方法でもいいから俺と話しをしろと……？」

「だ、大体そんな感じです……」

頼子の説明に、剣は若干呆れながらも納得をすると同時に1つの疑問を持った。

「（というより、そんな無茶苦茶な案を言うなんて……
まるで幻八みたいな生徒だな……）」

実際、女子生徒の正体は変装していた幻八なのだが
そんな事を剣が知る由もない。

「そ、そういう訳なので、失礼しますね……」

「ふぇ！？あ、あの……」

驚く剣を尻目に、頼子は剣の入る露天風呂にゆっくりと浸かり剣の隣に腰を下ろした。

「あ、あの、それで、剣さん？」

「ふぇ！？あ、はい！？なんでしょうか！？／／／／／／／」

頼子の呼び掛けに、剣は顔を赤面しながら返す。

スク水姿で湯に浸かり顔を赤面している頼子からいつもとは違った魅力というか、色気を感じてしまう剣に頼子はゆっくりと口を開いた。

「その……昨日の事なんですけど……」

「！！」

頼子の言葉に、剣は目を見開いた。

昨日の事、剣もずっと気にしていた頼子が抱きついて来た事だ。

あの一件以来、２人は碌に会話が出来ていないのだ。

その事を、頼子から話に来たようだ。

「私、あの時　剣さんに何の脈絡もなく抱きついちゃって自分でもどうしてあんな事をしたのか、分からなかったんです……」

「……」

剣は黙って、頼子の話を聞き続けた。

「アレから考えたんです、何で私はあんな事したのかって……それで、考えた末に行き着いた答えは……」

そこまで言い、いったん言葉を区切った頼子は

ゆっくりと、しかしハッキリした声で言い放った――――――

「嬉しかったんです……私……」

「ふぇ？」

頼子の言葉の意味が、剣は理解できず首を傾げる。

「私の事を、役立たずじゃない、気の治癒術をすごいって言ってくれて
本当に嬉しかったんです。」
「ふぇ？でも、真選組の皆さんもきっとそう言い……」
「確かに、昔自信の無かった私を励ましてくれました。」

剣の言葉を遮るように、頼子は言葉を続ける。

「でも、不思議ですね……
剣さんに言われた言葉と局長さん達が言ってくれた言葉、
意味は同じなのに剣さんに言われた時の方が
すっごく嬉しかったんです……」

「っ！！？／／／／／／／」

その頼子の言葉に、剣は体が電撃を受けたような感覚を覚えた。
いや言葉だけではない、今目の前にいる頼子に
身も心も奪われたような、今の弱々しくけれどはっきりと言い放つ
頼子に
剣は視線が逸らせれなかった。

「だ、だから剣さん……／／／／／／／」
「ふぇ？あ、はい？」

不意に顔を赤くして離しかけてくる頼子に
剣は何とか緊張を抑えながら返す。
それと同時に、頼子から思いも寄らない言葉が発せられる。

「あ、あの、私、嬉しかったので、そのお礼をしたのですけど……」
「ふぇ？お礼ですか？」

予想してなかった頼子の申し出に呆気に取られる剣に、
頼子はさらにとんでもない事を言い放つ――――

「お、お礼に、その……背中を流させてくれませんか？」

「……ふえええぇぇぇぇぇっ！！？」

頼子の言葉に、剣は一瞬理解が出来ず
理解した瞬間　体中から熱が出てくる勢いで驚いてしまった。
背中流しなど、純情な剣が女子にやって貰った事等ある筈も無く
剣は完全に混乱してしまった。

「え、えええとえとえとえと、そそそそそのその！？
せせせせ背中流しといいいいい言われててててても……／／／／／／／」
「つ、剣さん……」

顔を赤めて驚く剣に、頼子は優しく語り掛ける。

「その……ご迷惑かもしれないのは分かってます……でも私にはこれくらいしかお礼出来る事がなくて……」

実際は変装した幻八に押されてやる事となったのだがそこは純粋すぎて優しすぎる頼子、誰かのせいにしないであくまで自分の意見として言う。

「お願いします……」

「頼子さん……」

顔を赤めながら勇気を振り絞って言う頼子に、さすがに鈍感な剣もこれは断れないと察する。

「……えっと……そ、それじゃあ……お願いします……」

「あ……はい！」

剣の言葉に顔を赤めながらもどこか嬉しそうな頼子に剣は益々　顔を赤めながらタオルを腰につけながら湯船から上がる。

「そ、それじゃあ、お願いします……／／／／／」

剣の呼び掛けに、頼子も湯船から出て剣と共に鏡のある洗浄場へ行こうとする

……が、とことん剣は女子に拘わると碌な目に……もとい色んな目に合うらしい。

「お待ちください剣様！」

「ふぇ!?」「え?」

不意に露天湯への戸が開く音と共に響いた声に
剣と頼子の2人が振り向くと、
そこには服を全て脱ぎタオル1枚姿の桂の姿があった。

「こ、心さん!?ななな何でここに!!?しかもタオル姿で!!!??」

「あら、それは簡単な理由ですわ。」

そう言い桂は『チラッ』と頼子に視線を向け
すぐに視線を剣に戻して言い放つ。

「私も頼子さん同様、今日のお礼の為に馳せ参じましたの。
そう言う訳ですので剣様、背中をお流しいたしますわ?」

桂の言葉に、剣と頼子は声にならない驚きを上げた。

「ど、どうして桂さんが私の件を知って……」

「実は脱衣所の前にいたお方が親切にも教えてくださったんですの。」

頼子の疑問にサラッと答えた桂は、優雅な足取りで剣に近づく。

「っ!!／／／

「さぁ、剣様。私に全てをお任せになって……」
「い、いや、それは……」
「私では、お嫌ですか？」
「うっ……」
桂の『お願い』という視線が、剣の良心をチクチク刺激した。

―愛津女学園　学園寮・屋根の上―
「クケケケケケ、こりゃ面白くなって来たぜ。」
「アニキ、死ななきゃいいけど……」
剣が頼子と桂に迫られる中、幻八と甚は学園寮の屋根の上からその様子を覗き見していた。

「これで奴が赤面してぶっ倒れれば、実に面白いのだが……」
「赤面……あっ！」
幻八の言葉に、甚はある事を思い出す。

「そういや旦那、旦那から貰った“顔に熱が溜まらなくなる薬”ってどれ位　効果が続くんすか？」
甚は、角屋で剣に飲ませた薬の事を思い出し
幻八にその薬について尋ねだすと、幻八はしばし考え込んだ。

「……貴様、アレを飲ませたのか？」
「えぇ、アニキ大変そうでしたし。」

甚の言葉に『ほほぉ』と幻八の『ニタリ』とした微笑に甚は戦慄を感じた。
何故なら、甚は知っていたのだ。
幻八が不気味な微笑をする時は、何か嫌な予感がする時なのだ。

「おい糞鴉、剣に薬を飲ませたのは何時だ？」
「確か、大体午後2時頃だったと思いやすけど……」
「ほぉ～う……」

甚の言葉に幻八は益々ニヤつく様に微笑む。

「あの薬は半日は効果が持つ、故に今　奴はあの2人に迫られても顔はあまり赤くならず正気を保っていられる。」

そこまで言い幻八は視線を剣達に向けながら『だがな』と言葉を続ける。

「あの薬には副作用が1つある。」
「え〝っ」

幻八の言葉に甚は声を上げる中、
幻八は『こりゃもっと面白いもんが見れるかもなぁ～』と密かに微笑んでいた。

「では、剣様。」
「し、失礼しますね……」
「は、はい……」

風呂の洗浄場に、桂と頼子に囲まれる剣の姿があった。
甚と幻八が喋ってる間に、頼子と桂は共同で剣を洗う事にしたらしい。
それぞれ桂後ろ、頼子が前へ赴き
桂はスポンジを石鹸で泡立て剣の体を洗い出し
頼子はシャンプーで剣の長い髪を泡立たせ洗い出す。

「気持ちいですか、剣様。」
「あの、どこか痒い所はありませんか？」
「だ、大丈夫です、気持ち良い……」

2人の言葉に何とか答える剣だが、その心の内は緊張しまくりだった。

「（うぅ、だ、ダメだ、甚のくれた薬のお陰で
何とか顔に熱が溜まって気絶する事はなかったけど
気絶しなかった分どんどん熱が全身に周ってる……）」

そう、剣は確かに薬のお陰で顔に熱は溜まらなくなったが
体中に満遍なく熱さが広がって来ているのだ。
特に、股間の部分に熱さを感じる剣は何か嫌な予感を感じていた。

「？どうかしました？」
「ふぇ？」

不意に声を掛けてきた頼子にキョトンとなる剣。

「え、えっと……何が…ですか？」
「あ、いえ。唯その、何か考えていたような表情でしたので……」

どうやら、内心で色々考え事していたのが表情に出ていたらしい。

「あ、いや、大丈夫。何でもないですから……」

剣の言葉に『そうでしたか』と頼子は納得してくれた様だ。
と同時に、剣は背後に対して異変を感じる。
先程から背中に感じていたスポンジの感触が無くなっているのだ。
不思議に思い剣が後ろを振り向くと、
桂は自身の胸に石鹸をつけていた。

「あ、あの、心さん、何を……」
「ふふ、私もっといいスポンジを見つけましたので……」

桂の言葉に『ふぇ？』と首を傾げる剣に、桂はスポンジの代わりに
石鹸で泡立てた自身の胸を剣の背中に押し付けた。

「ふえっ！！？」

その感触に、剣は思わず声を上げてしまった。

「うふふ、剣様、かわいい……」

剣の反応に満足そうな表情で、桂は胸を動かし剣の背を洗い出す。
スポンジとは違う感触、しかも素材は胸。
その事実が、剣の体内の熱をさらに上昇させた。

「あ、あうぅ……／／／／／／／／／／」
「はわわ……／／／／／／／／／／」

桂の行為に、剣はおろか頼子までも顔を赤めてしまう中
桂はさらに胸を動かすスピードを上げていく。

「うぅ……／／／／／／」
「うふふ、剣様、すごく気持ち良さそうで何よりですわ？」
「……／／／／／／」

そんな桂と剣の容姿を見ていた頼子は、
自分にも何か出来る事は無いかと、辺りを見渡そうとする。

「（私にも何か出来そうな事は……）キャアッ！！？」
考え事をしてて足元がお留守になっていたのか
頼子は下においていた石鹸を踏んでしまい、前の方に転んでしまう。

「！！頼子さ……ふぇ！？」

頼子が転んだ先に居た剣は、驚くと同時に倒れてくる頼子を支えようとするが
そんな剣の間の前に、倒れてきた頼子の胸が顔に見事に激突。

「うぷっ！」
「ひゃんっ！」

胸が剣の顔に当たった事で、剣は益々赤面し頼子は色っぽい声を漏らした。

「頼子さん、早くそこを退いて下さい。剣様が噴火してしまいますわ。」

その様子を、どこか不機嫌そうに見ていた桂の言葉に
『あっ』と頼子は顔を真っ赤にして離れる。

「あら？剣様、今日はあまり顔が赤くなりませんね。」
「あ、はい。甚がくれた薬の効目が続いてるみたいですね……ってあれ？」

不意に剣は、頼子が『チラッ』とこちらを見て顔を真っ赤にして視線をずらしているのを見た。
それに加え、先程から桂の視線が自分に向けられているような気がするのだ。

「あ、あの、御二人とも？どうかしたんですか？」
「えっと……その……はぅ……／／／／／／」
「剣様。」

顔を真っ赤にして視線を逸らす頼子に代わり、
桂が前に出て口を開く。

「どうやらそのお薬のお陰で顔に熱は溜まらないようですが
代わりにそこに溜まってますわよ？」
「ふぇ？」

桂の指差す方に視線を向ける剣。桂の指差す所――――――

――それは剣の股間、勃起した剣の御子息だった。

「ふえっ！！？／／／／／／／／／／／／」

剣も指摘されて気づいたらしく、両手で自身の股間を隠すように塞いだ。

が、その勃起した物はすでに2人に見られており

桂は顔を赤くしつつ『じっ』と見つめ、頼子は恥ずかしさから視線を逸らした。

「うぅ……／／／／／／／／／／／／」

そして見られた剣本人も、恥ずかしさから俯いてしまった。

「（な、何で立っちゃてるんだ！？立った事なんて今まで無かったのに……）」

「……あの、剣様……」

落ち込む剣に、慰めるように優しい声で呼びかける桂。

「は、はい……」

桂の呼び掛けに、どこか元気の無い声で返す剣に

桂はいきなり剣の御子息に手を伸ばしそれを触りだした。

「ふぇっ！！？こ、心さん何を！！？／／／／／／／／／／／／」

「あ、あうぅ……／／／／／／／／／／／／」

桂の行動に、剣と成り行きを見ていた頼子が顔を真っ赤にする中

桂は剣の体に寄り添う。

「剣様、こんなに逞しく立たれて、苦しいでしょ？」
「ふぇ!?あ、いや、その……苦しいと言うか、変な感じが……」
剣の曖昧な答えに対して、桂は『ふふ』と微笑み御子息を掴む手に力を込める。
「ふぁっ！」
「ふふ、剣様、可愛いですわ。」
「あ、あの、桂さん……／／／／／／／」
桂の行動に付いて行けず赤面する頼子に、桂は視線を向けると口を開く。
「頼子さん、貴女も手伝ってください。」
「え？」
「私達のせいで剣様のはこうなってしまったのですから責任を取らないといけませんわ。」
「え、えぇぇぇっ！!?／／／／／／／／／」
「こ、心さん、それって……」
桂の言葉の意味を察した2人の顔は、見る見る内に赤くなって行った。
―愛津女学園　学園寮・屋根の上―
「あ、あの、旦那。まさか副作用って……」
「そうだ、顔の代わりにチ○ポに溜まりやすくなるのさ！知れが例え奴の様なヘタレ暴発野郎でもな！」
甚の言葉に威張るように言い放つ幻八に

甚は呆れ果ててしまった。

「アニキ……どうかご無事で……」

「クヒヒヒヒヒヒ、こりゃ面白くなるぜぇっ！！」

心配そうな甚の横で、幻八はこれでもかと言う位嬉しそうな表情で微笑んでいた。

『～第十四章～　頼子と図書館デート！？　逃げる令嬢、桂　《終》』

～第十四章～　頼子と図書館デート！？　逃げる令嬢、桂（後書き）

十五話目完成です。
今回は原作には無いゲスト的キャラである佐学派のオアシス頼子とお嬢様学園らしくない学園で唯一お嬢様らしい討学派の心の２人という
佐・討両派から主役を選びました。
銀髪で本を愛し気と言う異能力を使う頼子は、
共通点の多い剣の恋人最有力候補です。
一方の桂は、あの“維新の三傑”の１人がモデルと言うこともあり
忠実に桂が練兵館で恐れられていた事などを再現してみました。

今回の話でやりたかったのは事は２つ。
その１つが幻八以外の颯間の生徒を出す。
そろそろ１人ぐらい新しい男子を出してもいいかなぁ～と思い
桂の話で高杉を出しました。
自分は新選組は好きですが、奇兵隊を作った高杉晋作も大好きで
どうしても彼だけは男として出したかったんです。
そして何よりやりたかったのは
２人の背中流し！（剣の性格上、水着及びタオルでだけど！）
さて、この３人のお風呂のやり取りですが、
この続きが気になる方は今すぐ以下へ行ってみてください。
『ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１３３４ｖ／』

1周年記念・幕末伝☆目安箱！（前書き）

今回の特別編では、セリフの前に名前が付きます。
また、作者の言葉がそのまま文章になります。

1周年記念・幕末伝☆目安箱！

パンッ！パパンッ！！

『学園☆幕末伝　八忍隊』1周年記念！
『幕末伝☆目安箱！』を開催いたしま～す！
いや～『学園☆幕末伝　八忍隊』を連載して1周年が経ちました！
早いものですね～。

剣（ツルギ）
「いや、作者さん？」

何だ？我等が主人公、剣よ。

剣
「いやさ、何だじゃなくて、何なんだこの『幕末伝☆目安箱！』って？」

歳緒
「そうだ、詳細を説明しろ！」

おや、男嫌いの土方さんが剣と同意見とはね。

歳緒
「やかましいっ！この状況なら誰だって同意見だろうがっ！！」

へいへい、分かりやしたよ～……と言いたい所だが、
『学園☆新選組』出身の方々なら分かるんじゃないの？

イサミ
「ほぇ～？……そういえば、どこかで聞いた事あるような……」

総詩
「…そういえば、原作の方で『局中☆目安箱！』という物をやったような気がしますねぇ～。」

そのとーリだヨ沖田くん！
この『幕末伝☆目安箱！』は原作『学園☆新選組』の発売日までＭａｙ－Ｂｅ　ＳＯＦＴで行われたイベント『局中☆目安箱！』を１周年を記念してコチラでもそんな感じなのをやってみよう！という事で行う事にしたイベントなのだ！

総詩
「随分唐突ですねぇ～…と言うかどうして絵○教授風？」

何となく？

初音
「…何故疑問系……」

やち
「と言うより何か作者ってば感想に対する返信の時と妙にキャラ違くない？」

当然だ。
感想を書いてくれる人は、店風に言えばお客様だ。
敬語を使ったりするのは当然だろ？

涼華

「つまり客に対しては猫を被ってると……おんしも悪じゃのぅ。」

ここは、お約束的に言っておくか？
いやいやお代官様程では？？。

頼子
「あの～、そろそろ本題に入りませんか？」

芹栖
「そうですよ～、１周年を祝うイベントで
こんなグダグダな事やっててていいんですか？」

いいんだよ。
この小説　原作にしろこちらにしろギャグが主体なんだから。

伊織
「……いや、それで良いのか？」

作者が言うんだから良いんだよ！

総詩
「そういえば、作者さんは近々新しい小説の投稿を考えてるんですよね？」

ん？あぁ、まぁな。

心
「まぁ、私達や『遊戯王』の方でも大変ですのに、まだ増やすのですか？」

紗乃
「そうなのか？根性ある奴だなぁ～。」

甚
「確か、以前の後書きにも書いてたよな。
原作は確か、『絶対★魔王』だったか？」

その通り。
『絶対★魔王～ボクの胸キュン、学園サーガ～』は
『恋姫無双』と同じ絵柄から期待されていたのだが
主人公のヘタレぶりなどから『期待はずれ』『地雷ゲー』と呼ばれている
不遇のエロゲーだ。
金が無いから自分は買えないが、
ネットで調べて見たら、様は『恋姫無双』と同じ絵柄から期待されていただけの話で
それらを抜いて考えればまぁまぁと評価する者もいたな。
何よりキャラが魅力的だ。
故に自分は少ない情報からオリジナルの設定を作り出してるのだがやはり原作を知りたくて後書きのその思いを書いた。

イサミ
「それで、返答は来たの？」

うむ、いくつか来たんだが自分としては原作の世界観及びそれぞれのキャラに対するネタバレな話が欲しいんだよ。

総詩
「ありゃりゃ。それじゃぁどうするんですか？」

初音
「……いっそ諦めるか？」

否！その程度では諦めない！
オリジナルでもいいから投稿して、
感想などから再び情報を手に入れればいいさ！！

涼華
「おーおー、ポジティブじゃのう。前向きで諦める事を知らん。」

まぁな、それに最近通販で『絶対★魔王』の漫画を購入し
さらにネットでもネタバレのレビューや動画を見た。
これで少しは物語り構成に役立つだろう。
尚、これに加え後２つ程　新たな小説を思案中だ。

剣
「まだあるのか！？」

甚
「そんなに多く投稿して、その小説続けれるのか？」

知らん！

芹栖
「分からないんですか！？」

当たり前だ！先の事なんて神でもないと分かる訳がねぇ！
だが少なくとも、自分は諦めるつもりは無い！

頼子

「前向きですね。」

剣
「さすがは、俺らを生み出した作者だ。」

うんうん、優しいな2人共。
ちなみにその2つの小説は、やっぱりどっちも二次小説だぞ。

イサミ
「と言うことは、原作があるんだよね？」

歳緒
「原作は何なんだ？」

まず1つ目は、『戦極姫』！

剣
「こちらが『幕末』に対し今度は『戦国』ですか。」

初音
「……作者は戦国&幕末限定の歴史マニア。」

ちっ、ちっ、ちっ、それは違うぜ。
自分は歴史が好きなのではない！

剣
「ふぇ？」

芹栖
「そ、それじゃあ、一体何が好きだって言うんですか！？

…はっ！もももしや歴史よりも美少女化したキャラが好きなんですね！？

『学園☆新選組』と『戦極姫』、どちらも偉人を元としたキャラがいます！

そうなんですね！！？」

いやそーじゃなくてな、自分は歴史そのものが好きなんじゃない。

戦国時代という群雄割拠の乱世の世を、

幕末と言う思想と思想がぶつかり合った動乱の時代、

その時代を自分の信念の元に戦い続けた

戦国武将や幕末の偉人達が好きなんだよ。

芹栖

「えぇっ！？い、１番好きなキャラは君だよ！？

そ、そんなぁ、わ、私まだ心の準備が……」

初音

「……聞こえてないぞ。」

あっそ。

んじゃあ、もう１つの方。これも戦国だ。

剣

「もう１個も？」

紗乃

「戦国のエロゲー……何か他にあったけ？」

おい、エロゲーなんて一言も言ってないぞ。

紗乃
「え、違うの？」

伊織
「……以外だな。」

おいおい、そんなに以外かよ。

剣
「しかし、エロゲーじゃないにしろ戦国系は結構多いよな……
『戦国無双』とか『戦国ＢＡＳＡＲＡ』とかかな？」

生憎　無双は持ってねぇ。自分はＢＡＳＡＲＡ派だ。

斉藤
「……ＢＡＳＡＲＡって戦国ゲーと言うよりただのキャラゲーじゃん。」

てめＢＡＳＡＲＡ舐めんなっ！
ＢＡＳＡＲＡによって歴史好きに拍車が掛かり歴女が生まれたんだぞ！
それに漫画化もしアニメ化もし、さらには劇場版にまでなっている！
どう考えても無双より人気なら上じゃいっ！！！

剣
「まぁまぁ落ち着いて。それで結局、もう１つ何なんですか？」

……色々言いたい事はあるが取り合えず質問に答えよう。
ずばり、『織田信奈の野望』だ！

心
「確かそれは、ＧＡ文庫刊コメディタッチライトノベルですわね。」

伊織
「……伊織はよく知らない。どんなのだ？」

ぶっちゃけ、『恋姫』と『戦極姫』の融合だな。
戦国武将が美少女になった世界へタイムスリップした戦国ゲーム好き高校生が
戦国ゲームで得た知識で活躍する（？）物語だ。

歳緒
「結局貴様、そういうのばかり書くのだな。」

うるせぇ！
見ていたらインスピレーションが沸くんだよ！
１度沸いたらもう止められない、それが我がモットーだ！！

歳緒
「それはモットーと言うより暴走ではないのか？」

誰がなんと言おうが、これが我が生き様よ！

初音
「何気にカッコいい事言ってるな…」

剣
「ま、まぁ、それはともかく、その２つの小説はいつ出来上がるんですか？」

はっきり言って分からんな。
織田信奈の野望はともかく、戦極姫は自分やった事無いし。

涼華
「んなっ!?おんしゃぁやった事も無いのに小説書こうとしとるのかっ!!?」

戦極姫　面白そうなんだけど苦手なんだよなぁ～、戦略ゲーム。

やち
「あ、あんた……戦国武将が好きなら戦国ゲーム位やった事ないの？」

信長の野望みたいな戦略シュミレーションは
１回やった事あるけど性に合わんかった。戦国ゲームはＢＡＳＡＲＡだけだ！

芹栖
「……え、えぇと、それでどうやって小説書くんですか？」

うむ、信奈の野望は立ち読みできるし
何より何巻か持ってるから特に問題はない。
戦極姫は漫画は持ってるが武田と上杉位しか分からないし、
それに最近『戦極姫３』を見付けたんだけど、
何かすっごいキャラが変わるみたいだから
そっちが出るまで待とうかなぁと。

甚
「随分気の長い話だな。」

二次小説書く時の骨はな、マイペースを忘れない事なんだよ。
それにこの特別編を読んだ方々の中に
ひょっとしたら『絶対★魔王』や『戦極姫』の事を
知ってる人もいるかも知れねぇ。
だったら感想と一緒に書いてもらうさ！

剣
「そんないい加減な……」

うるせーよ。
大体　二次小説にしたい作品を言ったら
ぶっちゃけまだまだあるんだよ。
その中でも特にやりたいのを今回言っただけで、
案外この3つよりも早く別の小説を投稿するかもしれん。

芹栖
「そ、それって良いんでしょうか……」

頼子
「あ、あはははは……」

ま、それは兎も角として、だいぶ時間を使っちまったな。
そろそろ目安箱を実行するとしますか！

剣
「そういえば、結局どんなことやるんですか？
俺はオリキャラだから『局中☆目安箱！』自体を知らないんだけど。
」

甚

「俺もっすよ。」

頼子
「私も、他のゲームからやって来た身ですから分かりません。」

おう、そうだったな。
『局中☆目安箱！』ってのは、原作『学園☆新選組』の発売日までＭａｙ－Ｂｅ　ＳＯＦＴで行われたイベントでな、
送られてきた質問に対し、愛津学園の新選組隊士や対抗勢力志士達がテキトーに親身にお答えする一問一答のイベントだ。
それをここでもやる事にして生まれたのが『幕末伝☆目安箱！』だ。

イサミ
「それじゃぁ、早速やってみよ～う♪
作者さん、送られてきた質問は？」

ん？
ねぇよ、んなもん。

「「「「「「「「「「「「「「……はい？」」」

他の小説ではやってるから、こっちでもやろうって事で始めたものだからさ
唐突に始まったばかりだから何にも送られてきてない訳よ。

剣
「じゃ、じゃぁどうするんですか？」

うむ、これを機に今後感想を利用して応募し
２周年記念の際にはそれらの質問に答える事にする。

歳緒
「貴様……では今回は如何する気なのだ！？
我々を呼んで置いてこんなオチで終わらせる気か！？」

いんや、そのつもりは無いさ。
自分があらかじめ用意しておいた個人及び全員に対する質問があるから
お前らにはこれに答えてもらう。
これでどんな感じでやればいいか、読者の皆様にも分かるってもんさ。

伊織
「…良いのか、それで？」

良いんだよ、作者である我が許可する。
ってな訳で、質問コーナー開始だぁぁっ！！

まず質問１！！

Q【近藤イサミさんに質問、
アナタは甘い物が好きですが同時に体重気にしてますよね？
甘い物と体重、アナタにとってどっちが大事ですか？】

――――――――ガラガラピシャアアァァァァァァッ！！！

イサミ
「……」

歳緒
「き、貴様あぁぁっ！！近藤さんに何と言う質問をっ！！」

いや、待て。
これ、俺が考えた質問じゃないぞ。

歳緒
「では誰がやったと言うのだ！！？」

自分の弟、白鋼（しろがね）だ。

剣
「白鋼さんというと、作者さんのユーザーを使って
『遊戯王～未来からの黒き翼～』を投稿しているっていう、あの？」

うむ、我が弟よ。
1つのパソコンで2人分のユーザー交互にやるの面倒だったから
自分のユーザーで奴も投稿しているのだ。

初音
「……弟の方が、小説人気らしいな……（ニヤリッ）」

仕方ねぇだろっ！
アイツ小説の書き方が雑な分、投稿スピードが早いんだよ！
ましてやこっちは2つも投稿してんだ、遅れるのは当然だろ！！

伊織
「…で、今後はさらに遅くなるかもしれんのだな……」

やかましいっ！覚悟の上だっ！！！

剣
「作者さんと言えば……確かユーザー名を変えたんでしたよね？」

ん？まぁな、前々から考えていた事ではあるんだ。
兄である俺が『黒鋼（くろがね）』で、弟が『白鋼（しろがね）』、だったら2人合わせてって方向で
新ユーザー名『黒白（くろしろ）ブラザーズ』になったって訳。
まぁ、それは置いといて、近藤イサミは心に重症を負い
質問には答えれない様なので、次行ってみよーっ！！

Q【土方歳緒さんに質問、

アナタは俳句が趣味との事ですが、何で俳句が好きになったんですか？】

と言う訳で土方、なんで俳句が好きなんだ？下手なのに。

歳緒
「誰が下手だっ！！……全く、これだから風流を理解せん奴は……」

あんな事言ってるけどどうなんだ？
自称、学園一の風流人、永倉やちよ。

やち
「そうねぇ～、はっきり言って自意識過剰だわ。
あんなの子供にだってできるボヤキ句……って、誰が自称よっ！！」

だよねぇ～。
下手なのに何でそんなに俳句読むのか、意味分かんねぇ。

総詩
「それはですねぇ～、土方さんは武家の人間に憧れがありまして～。
少しでも武士っぽくなる為に始めたそうですよ～。」

なるほど、高杉に嫉妬したのと理由はほぼ同じか。

歳緒
「黙れ貴様！！総詩、貴様も余計な事ぬかすなっ！！！」

はい、沖田と土方は漫才を始めてしまいましたので、次行きましょ

ーう。

Q【討学派の皆様に質問、
原作では真選組（新選組）は土方・やち・芹栖以外は赤点軍団でしたが
討学派の皆様の学業はどうなんですか？】

涼華
「ほほぉ～う、これはまた何とも聞かれたくない質問じゃのぅ。」
って事は、坂本は勉強はダメダメ？

涼華
「いんや、苦手って訳じゃないんじゃが、ただ桂と比べるとどーしてものぅ…」

心
「あら涼華先輩、そんな謙遜な事おっしゃらないでください。
赤点ばかりの真選組に比べれば全然いいですわ。」

歳緒
「桂…貴様あぁ……っ！！！！」

えーあっちの方はほっといて、岡田お前はどうなんだ？

伊織

「……伊織は、剣と焼きそばパンしか興味が無い。」

つまりは赤点と。

さてと、何分質問考えてんの自分と弟だけなんで後２つしかありません。

紗乃

「おいおいもうかよ。」

やち

「ちょっと、あたしへの１０８個ある質問は！！？」

そういうのは今後に期待してくれ。

まぁ、兎も角　残り２つとなりましたが

最後だけに質問の内容は中々のものを用意しました。

さぁ行ってみよおぉぉっ！！！

Q【ずばり！皆さんは主人公・風上　剣の事どうおもってますか？】

頼子

「え！？これって……」

見ての通りさ、皆が剣の事をどう思ってるかを聞くのさ。

剣

「ま、待て！何で態々んな質問を……」

思い付きだ。

甚
「思い付きって、『忍〇たま　乱〇郎』の学〇長かよっ！」

まぁ、そう思っていいよ。
てな訳で、１人ずつ剣の事をどう思っているか言って貰うとしよう。
まずは近藤から。

イサミ
「ツルくんの事？ツルくんは良い子だよねぇ～。
よく助けてくれるし、強いし、優しいよねぇ～。」

ほほぅ、中々良い評価だぞ剣。さすがは我等が主人公。

剣
「あぅ／／／

「まぁ何にしても、どッかのオニさんと比べれば雲泥の差がありますよ～。」

歳緒
「ほぅ、総詩。ならばそのオニとは誰の事だ？」

はいは～い、オニさんが総詩を追いかけて行ったので
次、どうぞ～。

やち
「んふふ～、やっぱり何と言っても可愛いわね。」

どこがどう可愛いんだ？

やち
「ちょっと手を握っただけで赤面しちゃってねぇ。
でも、それでいて何気ない優しさを持ってるのが良いわよねぇ～♪」

ふむふむ、つまりは可愛さと優しさが魅力と……
はい、では次！

初音
「……剣は優しい……そしてバカみたいに律儀。」

バカみたいにか、まぁ、それも言えてるな。

剣
「さ、さいですか……（ガーン……）」

初音

「……でも、それは誇って良いバカだと思う……／／／／／／」

剣
「ふぇ？」

つまりは誇れる程の律儀バカと。
はい、次！

頼子
「えぇっと……剣さんは優しい方だと思います。
よく図書室に来て私のお手伝いをしてくれますし。」

剣は本好きな所が頼子と気が会うようだしな。

頼子
「はい。それに剣さんは私を励ましてくれましたし……それに……」

うむうむ、お前と風呂で色々した仲だしな。

剣
「っ！！！／／／／／／／／」

頼子
「なっ！！？／／／／／／／／／／／／／／」

はい、それじゃ次行こうか。

芹栖
「えっ！？は、ははははははははいぃっ！！
わわ私ふしだらな事なんて考えてません！！！」

んな事聞いてねぇよ。剣の事をどう思ってるのかを聞いてるんだ。

芹栖
「えぇっ!!?か、風上先輩の事を…!!?
そ、そんな私と風上先輩が恋人同士になるなんて、
そそそんな恐れ多い事……!!!」

……こりゃダメだ。ま、嫌ってないって事は分かったからいいか。
次!

紗乃
「ん?風上の事?そりゃやっぱ強いよなぁ。
あたし何度か挑んでんだけど全然勝てなくてさぁ〜。
あ??っ!!何か思い出したら腹立って来た!!!!」

ほほぉぅ、怒れる程　剣に惚れたか。

紗乃
「なっ!!?／／／

「や、やち？？？っ！！！」

はい、紗乃とやちは漫才を始めたので、次　行ってみよう！！

涼華
「剣くんの事？あちは好きぜよ、彼の事。」

おお～と、大胆発言！
やっぱり、デートの時とかに惚れちゃったってか。

涼華
「たははは……ま、まぁ、否定はせんぜよ……／／／／／／／／／／／／」

さすがは我等が主人公・剣、中々罪深いな。

剣
「罪深いって……何がだ？」

甚
「アニキ、アンタはもっと女心　学びやしょうね。」

うむうむ、さてではお次は……

心
「うふふ、剣様は私の将来を誓い合ったお方ですわ……／／／／／／／／／／／／」

っておいおい、いきなり言う事それかよ。

心

「あら、だって剣様は私の初めてを……／／／／／／／」

剣
「わーっ！心さん、それをここで言っちゃダメーッ！！！」

はいはい、お幸せそうで何より。ではお次の方どうぞ！

伊織
「…もぐもぐ……むしゃむしゃ……ん？どうかしたか？」

いやどうかしたかじゃなくて、焼きそばパン食ってないで質問に答えろ。
剣の事どう思ってるんだ？

伊織
「もぐもぐ…ごっくん。……剣は、進が認めた男だ……」

いや、んなこたぁ聞いてねぇんだよ。
お前がどう思ってるかを聞いてんだ。

伊織
「…だから、今のがその答えだ。」

あーったく、そうじゃなくてだな。
…んじゃぶっちゃけ聞くが、剣の事は好きか嫌いか？

伊織
「……ノーコメントだ……／／／／／／／／」

あー…はいはい、何となく分かった。

さてと後は……

土方
「はぁ、はぁ……全く総詩の奴、あの口の悪さは天下一品だな……」

おっ、戻ってきたかオニの副長。
丁度いい、この質問に答えてもらおう。
お前、剣の事どう思ってる？

土方
「ふん、野蛮で思慮のない男がこの愛津女学園に居る事自体が嘆かわしいな。
あんな奴、さっさと颯間に帰ってしまえばいいのだ。」

おやおや、相変わらず男嫌いですねぇ～。
さすがはメインヒロインの中で今の所唯一剣とラブラブな展開を持たない者のだけはある。

剣
「ら、ラブラブって……」

さて、この答えは大よそ予想済みだったし、
いよいよ最後の質問、行ってみよーっ！！！

Q【風上　剣さんに質問。
現在、愛津女学園の生徒達の中で一番気になる女性は誰ですか？】

剣
「……ふぇ？」

いやだからね、愛津女学園の生徒達の中で一番好きな、もしくは気になる女性を言えって事だ。

剣
「え、えぇと……」

ほれほれ、彼女達も気になってるみたいだぞ？

やち
「……（じー……）」

初音
「じー……」

芹栖
「……／／／／／／／／？？」

頼子
「……／／／／／／／／」

涼華
「……（ニカッ）」

心
「じーーーーーーーーっ／／／／／／／／／／？？」

剣
「うっ」

さぁ剣、言え、白状しろ！！

剣
「お、俺は……」

イサミ
「はいは～い、皆そこまで。」

おい、何のつもりだ？

イサミ
「作者さん、人の嫌がる質問をするのはどうかと思うよ～。
それにツルくんには女の子の事もっと知ってもらってから
答えを出したほうが良いと思うし。」

総詩
「そうですねぇ～、風上先輩は優しすぎますから
もっとゆっくりでも良いと思いますよ～。」

やち
「ん～、まぁ剣の本音が聞けないのは残念だけど
局長の言い分にも一理あるわね。」

初音
「……ちょっと残念……」

芹栖
「…そうですね……風上先輩にだって、考える時間は必要ですよね。」

頼子
「ほっ……」

涼華
「あちゃ、ちくと残念じゃが、イサミくんの言う事ももっともじゃ。」

心
「ふふ、焦らずとも剣様の全ては私の物へと……」

ったく、しゃーねぇな。
2周年までには考えとけよ剣……それまでこの小説が続くか知らんが。

剣
「不吉な事　言うなよ！」

まぁいい。
てな訳で、こんな感じに2週年を迎える再はやっていきたいんで質問等々よろしくお願いしまーす！

「「「

『1周年記念～幕末伝☆目安箱

！～《終》』

1周年記念・幕末伝☆目安箱！（後書き）

どうも、黒鋼です。
てな訳で、『学園☆幕末伝　八忍隊』1周年記念！『幕末伝☆目安箱！』
如何だったでしょうか？1年経つのは早いものです。
この特別編の為に、今まで物語の更新を止めていましたが、
ここからは普通に戻るつもりです。
今後は感想を通して、様々な質問を応募しますので
どうぞよろしくお願いしま～す！！！

～第十五章～　剣ＶＳ真選組！怒れる迅風の夜叉！！

―颯間男子学院　学園内・音楽室―

最新設備の行き届いた音楽室に、ヴァイオリンを弾く1人の生徒がいた。

颯間の紺色の学ランに身を包んだ１８０近い長身、

後ろで緩く結んだ腰まである紫色の長髪と

金色に輝く瞳を持つ彼は、剣にも負けず劣らぬ美男子であり

バイオリンを弾く姿が実に絵になっている。

――プツンッ！

「ん？」

不意に耳元で鳴り響いた不可解な音に、

少年はヴァイオリンを弾く手を止め視線をバイオリンに向ける。

「っ！代えたばかりの弦が……」

少年の目に映ったのは、今日代えたばかりのヴァイオリンの弦が

何の前触れも無く『プツンッ』と綺麗に切れてしまったのだ。

この奇妙な出来事に、少年は下駄の鼻緒が切れた際の様な不安を感じた。

さらにそれに拍車を掛ける様に、一陣の風が吹く。

「…っ！」

その風により手元にある楽譜が外へ向かって飛んで行きそうになるが

少年は素早く腕を動かし、宙を舞う楽譜を確保した。

それと同時に、彼の目に窓の外の景色が映る。
そこから見えるのは、現在この颯間学院と共学化の話が出てきている愛津女学園の校舎だった。
視線がそれに行き着いた時、少年は先程の不安を再認識すると同時に愛津に行った友の顔を思い出した。

「……剣…？」

そう呟いた時、少年は既に動いていた。
ヴァイオリンをケースに仕舞い、3階である音楽室の窓から一気に1階まで飛び降り、下駄箱へ向かう。
そこで靴を履き替えると、少年は駆け出し常人離れした跳躍力で建物の上を跳び、電線の上を走っていく。
その姿、まるで軽業師の如く。

「（何だ、この胸騒ぎは？
……何の根拠も無いのに、何かが起こってる気がしてならない……）」

そう心中で思う少年の脳裏に、先程ヴァイオリンの弦が切れてしまった現象が蘇る。
何らかの根拠がある訳ではない、だけど行かねばならない。
そう思った少年は、走る足を速めるのだった。

―愛津女学園・グランド―
グランドのほぼ中央に、2人の戦士いた。
1人は愛刀―兼定を手に握る、真選組・オニの副長、土方歳緒。

「くっ…」

そして歳緒と対峙し、する剣の姿があった。
いや、それは本当に剣なのか？
2人を見ている誰もがそう疑いたかった。
何故ならそこに、いつも優しく、他人を気遣う剣の笑顔がなかったのだ。
怒りの感情を含んだ紅と蒼の左右色違い（オッドアイ）の瞳には、
目の前に対峙する土方の姿が映っている。
そこに、慈悲の光は一切なかった。

「…そんなものかよ……」
「くっ！」

いつもの剣からは想像できないほど殺意に満ちた声に
土方の脳裏に、此度の出来事が起こる数時間前の事が浮かんだ。

―愛津女学園　学園内・教室　２―Ｂ―

時を遡る事、数時間前の教室。
真選組副長・土方歳緒は、ある疑問を抱えていた。
同じ真選組の隊士であり、援護部隊である四番隊組長である頼子の事だ。
最近　彼女の様子がおかしい。
時々顔を赤くししたり、『ボーッ』としてたり、何時もの頼子らしくない。

さらに、時々視線をどこかに向けては顔を赤くしている。
その視線の先には、必ずある2人のどちらかが居る。
1人は討学派・超秀班筆頭である桂　心。
もう1人は、この学園唯一の男子学生であり颯間からの編入生、風上　剣。
いや明らかに剣に向けている事が多い。
そしてその視線に気づき視線を合わせた剣も赤面している。
その度に何やら罪悪感を感じたかの様な思い雰囲気がある様にも見える。

「（何だ、この妙な雰囲気は……）」

頼子、心、剣、3人の中で行われる奇妙な空気に土方は首を傾げるばかりだった。

「おい頼子、お前　何があった？」
「え？」

気になった土方は放課後の見廻り終え生徒会室でお茶の準備をしていた頼子に
思い切って尋ねて見る事にした。

「お前最近変だぞ？風上や桂と何かあったのか？」
「えっ！！！？？／／／／／／／／／／」

土方の言葉に、頼子の顔が『ボンッ！』と真っ赤に噴火してしまった。
頼子が心と剣で思う事と言えば、数日前の風呂での出来事である。

「（わ、私なんであんな大胆な事を……キャーッ！！！／／／

近藤と総詩がそう言い首を傾げていると、
生徒会室から歳緒が慌てて出てくる姿が真選組メンバーの目に映った。

「あっ、副長　何かあったんですか？
……まさか副長、男嫌いだからってそっちの趣味に目覚めて
頼子を泣かせたとか……」
「するかーっ！！！！」

やちのからかいに怒りをあらわにする土方だが、
その様子を総詩は『ほほぉ～う』に目をキラ付かせる。

「でも土方さんって、既にそっちの趣味に目覚めてた筈……」
「えぇい黙れ総詩！余計な事を言うのはこの口か貴様あぁっ！！！！」

土方は顔を赤く染め総詩の口を思いっきり引っ張り出す。

「えぇっ！？じゃ、じゃあ、副長は異性とではなく同性と！！？？
そ、そんな、結ばれたくとも結ばれぬ女同士の恋愛なんて……
そんな、ハードルが高すぎます！！」
「……芹栖、落ち着け、それは大した問題じゃない…」

隣では妄想を爆発させた芹栖を斉藤が宥める等、
マジで収拾が付かなくなって行く。

「はいは～い、皆そこまで。」

と、ここで力も威厳も無さそうな『ポワ～ン』とした声が響く。

真選組の大黒柱、近藤である。
普段どこか抜けてそうな彼女も、こんな時はまとめ役としては最適である。

「歳ちゃんは意味も無く頼子ちゃんをイジメたりしないよねぇ～。何があったか話してくれる？」

近藤の言葉に安堵した土方は『あ、はい』と答え先程までの経緯を説明する。

「……それじゃぁ、頼子ちゃんとツルくんと心ちゃんに何かあったって事？」
「おそらく、そうかと。」

歳緒の言葉にイサミ及び他のメンバーは考え込んだ。

「頼子に、桂に、風上……何なんだこの組み合わせ。」

紗乃の言い分は最もだ。
佐学派・討学派・中立の傭兵、所属も立場も異なる三つ巴の間で一体何があったと言うのだろうか。

「まぁアレですね、頼子さん本人に聞くのが1番ですよねぇ～。」
「……やはりそれが妥当か。」

総詩の案に頷く土方。
結局の所、頼子本人に聞くのが1番ではある。
だが問題がある。

「でも、頼子先輩どこに行っちゃったんでしょう……」

そう、その肝心の頼子が何処へ行ってしまったのかという事である。

「先あっちの方へ行ってたけど……どうする、皆で探すか？」

「んまぁ、それしかないわね。」

紗乃の言葉にそれぞれ頼子の駆け出した方へ向かって
頼子大捜索が開始された。

―愛津女学園　学園寮・一室―

その頃、時を同じくして学園寮の一室に討学派の主要的メンバーが揃っていた。

「……では、計画決行はこの日っちゅーことで良いかのぅ？」

涼華の言葉に、周りの討学派主要メンバー全員は『コクリ』と頷く…否、全員ではなかった。

唯1人、討学派・超秀班筆頭である桂　心だけは首を縦に振らず何か思いに伏せている様だった。

「桂？……おーい、桂、如何したんぜよ？」

「……桂の様子がおかしいぞ。」

様子が気になり、涼華と伊織が桂に声を掛けると
桂は『はっ』と正気を取り戻したようだ。

「あ、あら、すみません、私ったら……／／／／／／／／／」

そう言い謝罪する桂だったが、その表情は何処か嬉しそうで赤面していた。

いや今回に限った事ではない。

ここ数日、桂は顔を赤めて『ボーッ』としている事が多く

度々このように注意を受けているのだ。

一体何があったと言うのだろうか？

そんな疑問がメンバー達の脳内に流れる。

「桂、おんし何があったんぜよ。」

涼華の問いに対し、桂は顔を赤めて視線を逸らす。

「それは……例え皆様にも言えませんわ……／／／／／／／／／

他の討学派メンバーが桂に詰め寄る。

「か、桂おんしゃぁ剣君と何をやったんじゃ！！？」
「心さん、説明してください！！」
「ま、まさか、やったんですか！！？」
「……少し、気になる……」

詰め寄って来るメンバーに対し、桂は『ふふっ』と不敵に微笑むとゆっくりと口を開く。

「教えてさし上げても良いですけど……
この事は内密にお願いしますね？／／／／／／／／／／」

桂の言葉に一同が『コクリ』と頷くのを確認すると、
桂は静かに、そして部屋の外に聞こえない様に小さな声で、
恥ずかしながらも嬉しそうに昨日の事を語りだすのだった。

―愛津女学園　学園寮付近の林―
「はぁ……はぁ……」

その頃、当の頼子は学園寮付近の林に居た。走って来た為か息を上げている。

「あうぅ……絶対　副長さんに不審抱かれちゃいました……／／／／／／」

そう呟き顔を赤く染める頼子。

どうしても思い出してしまう、剣を見ると昨日の出来事を。
夢だと思った、けど体が覚えている、あの時の快感を、
故に思い出してしまう、まともに剣を見れない。

「どうしすれば……」
「あ、いたいた、頼子ちゃ～ん！」

そんな風に悩んでいると、背後から何処かのんびりとした声がして
頼子は声の主を予想しつつ後ろを振り向いた。
そこには手を振りながらこちらにやって来る近藤の姿があった。

「…局長…さん……」
「えへへ、誰よりも早く見つけちゃった。」

その近藤の言葉に、頼子は大方の事を察する。
恐らく自分の様子がおかしいのを副長から聞き探しに来たのだろう。

「……副長さんに、聞いたんですか？」
「うん！」

頼子の言葉に素直に回答する近藤。

「頼子ちゃん、何か悩みがあるの？
別に頼子ちゃんが話したくないんなら無理に話さなくても良いんだよ？」

そう言い近藤は『でもね』とさらに言葉を続ける。

「これだけは分かってね。
歳ちゃんは頼子ちゃんを心配して聞こうと思っただけだから。」

「……はい。」

近藤の言葉に『コクリ』と頷く頼子。それはもちろん頼子は理解している。

土方は性格上キツイだけであり、心底ではちゃんと隊士達の事を心配してくれているのは皆知っている。

「でもね、もし本当に頼子ちゃんに悩みがあるなら局長である私にど～んと任せてね！いつでも相談に乗るから～♪」

「局長さん……」

剣はもちろんだが、この真選組の人達も自分に優しくしてくれる。その事に改めて頼子は安堵を浮かべた。

「おーい、そこに居たか！」

「あ……」

遠くの方から声がし、声のした方を向く頼子の目に土方達が映る。

「頼子、その、何だ、悪かったな。」

「あ、いえその……私、気にしてませんから……」

お互いに頭を下げる土方と頼子の顔に安堵の表情が浮かぶ。

「いや～、これにて一件落着ですねぇ～。」

総詩の言葉にやって来たメンバーが安堵した。

……かに見えたが、世の中そんなに甘くないらしい。

――――シュッ！！

「っ！！？」

不意に何かが真選組メンバーに向かって飛んで来た事に
真っ先に気づいたのは土方だった。
飛んで来た物は、１枚の紙の様だった。
プラスチックのプロテクトに入っていた為か、
紙は折れる事無く近くの木に刺さっている。
プロテクトの隙間から紙がずれる様に出て来ると
真選組メンバーのその紙が、１枚の写真である事を知る。

「写真？」
「これは……」
「っ！！！？？／／／／／／／／／／」

その写真を見て頼子は、いや真選組メンバーは目を丸くした。
何故ならその写真は、昨晩の風呂で頼子・桂・剣の間で行われた
いわゆる３人が男女の関係になった出来事の写真だったのだ。
それに気づいた頼子は真っ先に写真を回収しようと動く。
だが、それ以上に動きの素早い者がいた。芹栖である。

「よよ、よよよよよ頼子さん！！これはどういう事なんですか！！？」
「え、えぇぇとここれはその、う海よりも深い訳がありまして！！」
「……ではやった事は事実なのだな頼子。」

その声に『はっ！』となった頼子が振り向くと、
そこには写真を拾い鬼の形相をした土方の姿があった。
しかもその周りで、写真を食い入るように見ていた。

「ほえ～、Hってこんな風にやるんだねぇ～」
「ありゃりゃ～、頼子さんってばHですねぇ～～♪」
「うほー、こりゃ見ものだねぇ！あたし興奮しちゃうよ～／／／／／／／／」
「……頼子と桂、すごい……いいなぁ～／／／／／／／／／／／／／／」
「うわぁ、すっげーエロい。」

「み、見ちゃダメですーっ！！」

そう言い食い入る様に見る面々から写真を奪おうとする頼子だが、泣きっ面に蜂と言うか、悪いことは立て続けに起こるものだった。
突然、木々の上からバラバラと写真が降って来たのだ。
それはどれも、昨日の出来事の写真を様々なタイミングや角度で撮った物だった。

「な、何でこんなに……」

頼子は最早恥ずかしさを通り越して気絶しそうだった。
その横でメンバー6人は写真を拾い、顔を赤めつつも見てしまう。

「う、うわぁーん！頼子さーん！どうして私を誘ってくれなかったんですか！！？」
「……芹栖、落ち着け。……でも、今回は芹栖に同意。」
「うわぁお、見て見て紗乃！桂ってばすごいエロい顔してる？？！！」
「すっげ……／／／／／／／／」

「あ、あうぅ……／／／／／／／／／／／／／／」

頼子は、もう穴があったら入りたかった。
そんな中、不意に『パンパン』と手を叩く音が響く。

「はいは～い、皆それまで。」

近藤が手を叩く音だった。

「それ以上言ったら頼子ちゃんが可愛そうでしょう？」

その近藤の言葉に、皆は渋々　写真から手を放す。
それを確認したイサミは頼子の方を向き口を開く。

「頼子ちゃん…」
「あ、あああえええっと、こ、これにはその、深い訳がありまして…
…」
「うん♪」

頼子の言葉に対し、近藤は眩しいほどの笑顔で頷く。

「でも先　言ったよね、
頼子ちゃんが話したくないんなら無理に話さなくても良いし、
本当に事情があって説明するならちゃんと聞いて上げるから。」
「局長さん……」

イサミの言葉に、頼子は軽い安堵を感じる。
とりあえず事情を話して剣に非は無い事を証明しよう。
それは頼子にとってはとても恥ずかしい事ではあったが
剣に非難が行くよりはマシだった。

「あれ？土方さんは？」

「え？」

だが、総詩の言葉に頼子はある重大な事に気づく。
土方の姿がいつの間にか消えていたのである。
それと同時に頼子は『まさか』と背筋を『ゾッ』とさせる。
まさか自分が説明する前に剣を殺しに行ったのでは？
ありうる、男嫌いで不順異性行為を嫌う彼女なら
頼子の話を聞く前に剣に非があると判断し、独断で行動してもおかしくない。

「まさか…副長さん……」
「歳ちゃんってば、頼子ちゃんの話を聞く前にツルくん探しに行っちゃったみただね～。」

そんな近藤ののんびりとした口調に対し、頼子は急いで駆け出していた。

「……頼子、どこに行く？」
「副長さんに事情をお話します！剣さんは悪くないんです！！」
「ふ～ん、じゃあ頼子か桂が剣を誘った訳だ。」

そのやちの言葉に、頼子は『え！？』と顔を真っ赤に染め上げてしまう。

「ま、その辺は副長止めてからゆっくりと聞かせてもらうけどね♪」
「あ、あうぅ……／／／／／／／／／」

そう言いながら、新選組メンバーは土方を探しに走り去って行った。
だがこの時、新選組メンバーはあまりの出来事にある事を忘れていた。

なぜあの様な写真が飛んで来たのか、何故束になって振ってきたのか、
どこから飛んで来たのか、
その答えは写真が束になって落ちて来た林の上にあった。

「クヒヒヒヒヒヒ、面白くなってきたぜ。」

そう、あの夜　剣達の行為を知る数少ない人物、
そして写真を取れる唯一の人物、幻八である。

「クヒヒヒヒヒ、写真売って金にするのも良いが
これはこれで金では買えない楽しみが出来たぜ。クキキキキキキキッ！！！」

そう笑いながら、幻八は写真を懐に戻すと木々の間を飛んで行った。

―愛津女学園・グランド―

「ん？」

グランドを歩き寮へと戻ろうとしていた剣は、
不意に背中に感じた冷たさに足を止め後ろを振り返る。
学園の校舎の裏から何やら『ドドドドドッ』と足音の様な音が聞こえる。
やがてそれは土煙となって剣の目に写りだす。

「？何だ……っ！！？」

そして気づいた。

その土煙の主、土方が鬼の面相で愛刀―兼定を抜き放ち
こちらに向かって来ている事に。

「見つけとぅわぞおぉぉっ！！！！！くぁずぁくわみぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！！！！」
「ふぇ！！？」

鬼の形相で迫って来た土方の振り上げた刀を
剣は小太刀を抜き放ち受け止める。

「ふ、副長さん何かご用で……」
「ああそうだ、用がある。貴様を殺しに来たあぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
「は、はいぃっ！！？」

剣には何が何だか理解が出来なかった。
前々から土方が自分の事を嫌っているのは知っていたが
何故　今更　自分を殺しに来たというのだろうか。
少なくとも剣には土方に恨まれるような事をやった覚えは無い。
そう、土方に何かした覚えは。

「貴様　当等　本性を表したなぁぁっ！！！」
「何のことですか！？」
「これを見てもまだしらばっくれるかあぁぁぁっ！！！」

そう言い土方は距離を取ると、懐からあの写真を剣に付きつける。
その写真を見た瞬間、剣は顔を真っ赤に染め上げ体中から大量の汗を流しだす。
誰がこんな写真を！？
いや、それ以前に何故彼女がそんな写真を持っているのだ！？

そんな考えが剣の中を駆け巡る中、土方は刀を構え直す。

「その表情、どうやら合成写真では無い様だな……
貴様、頼子を犯したのだな！！」
「あ、いや、これはその……」

誤解です、そう言いたかった剣だが、
本当に誤解かという考えが剣に言葉を詰まらせた。
事実　自分は流されるまま頼子と桂との間に関係を作ってしまっている。
……頼子の場合、幸い初めてを奪っては居なかったが。
そのことに対する罪悪感が、剣の口を、体を鈍らせた。

「死んで償えぇぇぇいっ！！！」

罪悪感で体の動きの鈍った剣は、
間一髪で歳緒の攻撃を小太刀で受け止めるも完全に出遅れた。
歳緒の猛攻が続き、剣は完全に防御に徹底する形になる。
いや、普段の剣なら防御から一気に攻撃に変換できるだろう。
だが、罪悪感に包まれた今の剣にはそれができない。

「死ね、死ねえぇぇぇいっ！！！」
「あ、あそこ！歳ちゃ～ん！！！！」

猛攻を続ける土方と防御し続ける剣の耳に、
どこかのんびりとしながらも確りとした声が響く。
その声に2人が視線を向けると、校舎の方から掛けて来る声の主である
近藤及び真選組メンバーの姿があった。

「歳ちゃんストップ！頼子ちゃんが話があるんだって！！」
「副長さん聞いてください！！剣さんは悪くないんです！！」

校舎から掛けて来た頼子が必死に土方の説得に掛かるが
怒りに支配されている歳緒には届かない。

「頼子貴様！……そうかそこまで風上に犯されたか！！」
「だから誤解なんです！！！」

そう言い聞かせようとする頼子だが、
土方は怒りで完全に冷静ではなく刀を振り続ける。
それに対し剣は尚も罪悪感から防御に徹底する以上に、
体の動きにいつものキレが無い。
武をする者にとって大切な『心』『技』『体』の内
今の剣は完全に『心』が揺れていた。

「……何だか風上先輩にいつものキレがありませんね。」

剣の異変に真っ先に気づいたのは、総詩だった。
剣技に愛される神童たる彼女は、
剣の動きにキレがなく迷いがある事をすぐに見抜いた。

「……アイツ、剣に迷いが出てるな。」
「って伊織さん！？いつの間に！！？？」

驚く芹栖の隣には、いつの間にやら人斬り伊織こと岡田伊織、
さらには討学派の主要メンバーの姿があった。
どうやら騒ぎを聞きつけてやって来たらしい。

「あ～まぁ、アレじゃのう、

桂にしろ頼子くんにしろ色々あったようじゃし……／／／

「っ！！！？？？」

この言葉が発せられた時、
剣は体内に口では説明できない熱くどす黒い物を感じ取った。
そしてそれを感じた時、剣は動かしていた腕を『ぶらんっ』と力なく下げていた。

「ふん、ようやく素直に断罪される気になったか。」
「……」

土方の言葉に対し、剣は無言だった。
その対応に剣が観念したと判断した歳緒は、刀を上段構えに構える。

「死ねえぃっ！」
「歳ちゃん落ち着いて！！」
「副長さんダメ！！！」

近藤や頼子が必死に止めようとする中、
土方は無情に刀を振り下ろした――――

「……死ぬのはテメェだ。」

「「「

そのセリフが間違いなく彼の口から放たれたと気づいた時には既に彼、風上剣は動いていた。
土方が刀を振り下ろすよりも速く土方の後ろに来ていた。
そしてその手にはいつの間にか小太刀が一刀流から二刀流へと変わり、
その二刀を鞘に納めた時、土方は、いやそこに居る全員が気づいた。
土方の服がボロボロになり、土方が斬り裂かれていた事に。

「なっ!!?」

土方はその攻撃に膝をついくと同時に頭を働かせた。
今何が起こったのか、自分は何故　膝をついているのか、
今の一瞬で何が起こったのかを理解しようとした。
だが理解できなかった、いや出来る筈がなかった。
どんなに考えても答えは1つしか出てこない。

剣はあの一瞬で自分の横を通り過ぎ、通り過ぎ際に自分を斬ったという事だ。

「バカな……」

驚く土方は何とか立ち上がり剣に視線を向ける。
それに対し剣も土方の方を向いた。とても冷たい眼つきを土方に向けながら。

歳緒が数時間前の出来事を振り返る中、剣は小太刀二刀を抜き放つ。

「つ、剣さん！！」

先程まで剣の攻撃に唖然としていた面々の中で
真っ先に声を上げたのは頼子だった。
頼子の声に剣は『チラッ』と頼子たちの方を向く。
その目はとても冷たく、それでいて重くどす黒い闘志を感じる。
剣は視線を歳緒へと戻す。

「っ！！」

その視線に、土方は凍りついた。
そして同時に気づいた、自分は彼に恐怖を感じている事に。
ありえない、自分が男に恐怖を感じるなど。
だがこの感情は恐怖以外の何でもない事を自覚せざる負えなかった。

「俺があの2人にした事に関しては、俺は一切　言い訳はしない。
処罰も受ける、だが。」

そこまで言い一旦言葉を区切った剣は『キッ』と睨みつけると再び
口を開く。

「俺を育ててくれた人への……家族への侮辱は許さん！！」

その言葉と共に、剣は怒りを完全にあらわにした。
それにメンバーは察した、彼は土方の自分に対する仕打ちにキレた
のではなく
親を侮辱された事に怒りをあらわにしているのだと。
そしてその怒りに土方が呑まれている事を察した。

「アンタだけは……テメェのあの言葉だけは許さねぇっ！」

そう言い剣は小太刀二刀を構える。
そのバックに、土方は幻影を見た。
白銀の髪を揺らす、獰猛な鬼の如き幻影を。
その幻影が剣の殺気によって見えるものだと知るのは、そんなに遅くなかった。

時は少し巻き戻って、こちら空を飛ぶ甚の姿があった。
その足には好物の炭酸ジュース『Ｆａｒｔａ（ファルタ）』を大量に入れたビニール袋を持っていた。

「ふぅ～、まさかファルタが大安売りだったとはついてるぜ♪」

そう言いながら上機嫌で愛津女学園へと戻る甚はその最中、何やら焦っている谷さんの姿を見つけた。

「おーい谷のオヤジ、どうしたんだ～？」

何となく声を掛けてみると、谷さんは超スピードで甚に迫って来た。

「クルックー（甚！こんな所に居たのか！！）」
「おおうっ！如何したんだよ谷のオヤジ。」

只事ではない表情の谷さんに甚が困惑する中、
谷さんは事情を説明する。

「クルックー（俺も詳しくは知らないんだが、
副長がボウズを怒らせちまったらしくてな、ボウズと戦いで副長が
負傷した！
怒りまくってるボウズを止める方法を教えてくれ！！！）」
「はあぁっ！！？」

谷さんの言葉に驚く甚。
谷さんは土方が剣を怒らせ、剣に斬りつけられた所を見たとき
何故か知らないが嫌な予感を察知したのだ。
動物というのは人間よりも勘が働くらしく、
その予想通り剣はまだ攻撃をしようとしていた。
怒り狂う剣を止めるには、相棒である甚の力が必要と判断した谷さんは
こうして甚を探しに来たのである。

「おいおいどう言うこった？」

一方の甚は自体が飲み込めず唖然としていた。
あの温厚で仏がそのまま人間になった様な男である剣が
怒り狂い、しかも相手がオニの土方とは言え負傷させるなど
到底ありえない。

「まさか……」

だが甚にはたった1つだけ思い当たる節があった。
昔、自分が知る限り剣が1度だけ本気で怒った時があった。
原因は確か、颯間学院の壁に書いてあった落書きに
自分の育ての親、理事長である祖父を侮辱した言葉を見た時だった。
剣は豹変の如く怒り狂い、落書きした奴等を皆殺しに

……とまではいかなかったが、全治半年の重傷を負わせた事があった。
その姿は、まさに怒り狂う夜叉の如しだった。

「……まさかとは思うが、土方の奴アニキに何か言ったんじゃねぇだろうな？」
「クルックー（俺も詳しい事は知らねぇんだ……おっ、あそこだ！！）」

谷さんの言葉に視線を向けた甚の目に映ったのは、
傷ついた土方と二刀の小太刀を構える剣の憤怒の姿だった。
その姿を見た瞬間、甚は戦慄した。

「（同じだ……あの時と、同じ……夜叉の表情！！）」
「クルックー（どうした、早くボウズを止めて……）」
「無理だ。」

甚の言葉に谷さんは驚く。
普段は剣意外には強気な対応をする甚が、無理と言う所なんて始めてだった。

「……ありゃぁ、あの時の目だ……
アニキが完全にキレた、アニキの怒り狂った目だ！」

そう言う甚の脳裏に、数年前の出来事が蘇る。
未戸の連中に恐怖を植え付けた、あの事件、『未戸天狗党の乱』を。

「ああなったアニキは、怒らせた相手が戦闘不能になるまで止まらねぇ……
たとえ俺の声であっても！」

「クルックー（嘘だろ……）」

甚の言葉に、谷さんは絶句するのだった。

谷さんが甚の言葉に絶句する中、剣は小太刀二刀を構える。

「潰す。」

その一言を合図に、剣は動いていた。
気が付けば土方の目の前にまで移動していたのだ。
速過ぎる。
疾きこと風の如く、そんな名言が似合う速さに
負傷した土方は反応すら出来なかった。

「（やられる……！！）」

土方は気づいた。
自分が目の前の剣に恐怖を感じている事に、
最も自分が忌み嫌う男に、自分が恐怖している事に。
そして覚悟した、自分の敗北を。
だが、それをさせまいとする者も居た、それに反応できる者もいた。

――ガギィィンンッ！！！！

剣の小太刀が土方に届くより早く、２人の間に入った１つの影があった。
金色の髪と浅葱色の羽織を揺らす、１つの小さな影。

「……総詩。」

真選組で、いやこの愛津女学園にて最強と呼び名の高い天才剣士・沖田　総詩であった。

「っ！」

剣は総詩の存在に気づくと、一旦引いて距離を取る。
そんな剣に対し、総詩はいつも通りニコニコした表情だった。
……ぱっと見的には。

「やれやれ～、土方さん随分やられちゃいましたねぇ～。
まさか風上先輩がここまで怒るなんてボクも思いませんでしたよ～。」

「……」

剣は尚も無言の中、総詩はさらに口を進める。

「ですがね風上先輩、ボクってあんまり怒るの好きじゃないんですけど……」

その時、明らかに総詩の周りの空気が一変した事を剣は静かに察した。
普段のどこか自由奔放で猫のように掴み所のないのほほ～んとした空気が、
丸で何かのショックで目覚めた猛獣の様な空気に一変したのだ。

「先輩……土方さんを傷つけましたよね？
何時も弱気を見せない、強気な土方さんを地に着けましたよね？」

そして総詩が閉じていた目を開いた時、空気が完全に一変した。
総詩の目つきは、丸で眠りを妨げられた猛獣のように鋭くなり、
今までの総詩から感じられなかった、殺気が溢れていた。

「覚悟してくださいね、風上先輩？」

総詩が静かに、そして冷静に剣に刀を向けると同時に
剣は見た、総詩のバックに見える幻影を。
怒り狂う獰猛な虎の幻影を。

「なな、何だかとても大変な事になってませんか！！？」

総詩と剣の様子を見ていたメンバーの１人、芹栖が『あわわ』と驚く中、
近藤は冷静に愛刀―虎徹を抜き放つ。

「ツルくんを怒らせたった歳ちゃんもいけないけど、
総ちゃんが相手をしている間に助けるしかないわ。」
「合点だ局長！」

近藤に賛同する様に紗乃は『ブオンッ　ブオンッ』と十文字槍を振り回す。
だがその横では、斉藤と頼子が何やら心配そうな表情をしていた。

「……剣、どうしちゃったんだろう……」
「剣さんのあんな表情、見たことありません……」

斉藤と頼子の目には、怒りの表情を抑えぬ剣の姿があった。
無理もない。
2人は、いやこの学園にいる者全員が驚いているだろう。
普段の優しい剣しか知らない皆にとって、剣の憤怒はかなり衝撃的だった。

「あち達にとっては、沖田くんの怒りも十分衝撃的ぜよ。」
「……確かにな。」
「んまぁ、あたし達もあんま見たこと無かったしね……」

涼華と伊織の言葉にやちが答える中、真選組に続いて桂が愛刀―清光を抜き放つ。

「そんな事より、剣様を止めましょう。
今の剣様は明らかにおかしいです！」

普段は冷静な桂も、愛しの剣の豹変に動揺しているが真っ先に剣を止めようと意気込むが、それに待ったを掛ける近藤がいた。

「今　怒ってる総ちゃんの前に出たら危ないよ～。
ここはツルくんの事は総ちゃんに任せて……」
「無理だぜ！」

近藤の言葉を遮る様に、上空から現れた甚が静止をかける。

「怒り狂ってるアニキを止めるなんざ、
理事長(ジジィ)か八忍隊メンバー数人掛かりでもねぇと不可能だ！！」

そう言い甚は皆を制止しようとする。

だが、真選組は副長・土方を助ける為、
討学派は剣を止める為に出る気満々だった。

「ゴメンね甚くん、それは出来ないわ。歳ちゃんを助けなきゃ！」
「確かにあれはいつもの剣様ではありません。
ですが、だからこそ私が止めねばならないのです！！」
「第一、風上だって無事じゃすまねぇさ。
なんたって総詩を、眠れる虎を起しちまったんだからな！！」

そう言い『ニカッ』と微笑む紗乃。
総詩の強さを、総詩の怖さを知ってるからこそそれは言えるセリフ。
だが、それは甚も同じだった。
剣の強さを、剣の恐ろしさを知ってるからこそ止めるのだ。

「眠れる虎が何だってんだ！
相手は『陣風（じんぷう）の夜叉（やしゃ）』と呼ばれた男だぞ！！？猫風情が勝てるかよ！！！」
「陣風の夜叉？」

迅風の夜叉、それはいつの日からか、誰が言ったのか、それは分からないが
いつの間にか呼ばれていた、剣の異名。
陣風の如きの速さで敵を斬り裂き、白銀の長髪を揺らすその姿は
正に戦場を狩る、夜叉。

「……どけ、貴様に用はない。」
「どきませんよ、アナタを倒すまでは。」

そう言いお互いに譲ろうとしない剣と総詩の睨み合いは続いていた。
総詩は刀を相手に対して水平に構えた、得意の『三段突き』の構えを。
一方の剣は、二刀の小太刀を両手に持った
摩方流剣術の基本の構え“双月刃”だったが、
ここに来て構えを変えた。
2本の刀を肩に乗せるように構えるこの構え、
双月刃が攻防一体なのに対し、これは防御を捨て、攻撃に特化した攻めの構え。

「摩方流剣術、“迅殺舞”。その身に受けろ！！」

その言葉と同時に、剣の姿が総詩の、いやここにいる全員の視界から消えた。

「「「「「なっ！！？」」」」」
「！！」

そして気づいた時、剣は総詩の目の前にやって来ていた。
二刀の小太刀の内、一方は下段を、もう一方で首筋を狙った
防御を考えぬ攻めの技、それが迅殺舞。

「！！！」

それに対し総詩は、得意の三段突きで反撃。
即座に動かす三段突きの一太刀目でまず首筋を狙った攻撃を、
ニ太刀目で下段の攻撃を完全に相殺し、残った三太刀目で止めを刺す。
……筈だった。

「ぜやあぁぁぁぁぁっ！！！！」
「っ！！？」

だが1つ予想外な事があった。
総詩と剣では、男と女ではパワーに差があった。
総詩の三段突きは剣の二刀乱舞を防ぎきれず、後退させてしまう。
その僅かな隙が、勝敗を分けた。
剣の俊敏なる攻撃は、総詩の作った隙を見逃さず即座に前に出ると二刀の小太刀を交差させ、総詩の喉元に突き立てる。

「摩方流剣術（まがたりゅうけんじゅつ）、“風刃交叉（ふうじんこうさ）”……っ！！？」

だが、その小太刀が総詩を斬る事はなかった。
何故なら、剣の小太刀が総詩に届く前に数名の影が立ちはだかったのだから。

「歳ちゃん、総ちゃん、大丈夫！！？」
「おぉ～、危なかったねぇ～。総詩、副長、怪我は？」
「……ギリギリセーフ。」
「おお御2人とも、ご無事ですか！？」
「ったく、派手にやりやがるな風上！！」

近藤率いる真選組の面々だった。
近藤は2人の無事を確認すると、剣に向かい合い口を開く。

「ツルくん、歳ちゃんが言った事に関しては私から言っておくわ。
だから今日の所はここで……」
「どけ……」

不意に剣の放った声に、近藤は『ビクッ』と体を揺らす。

いや、震えてしまっている。剣の放つ異様な殺気に。
その殺気は、他の面々も感じ取っており、目の前にいる剣が
何時もの剣じゃない事を察知していた。

「……悪いけど、それは出来ないわ。」
「……どけ！」

近藤の言葉に対し、尚も剣はその一言しか言わない。
しかも先より強めで殺気を出して。

「……ツルくん……お願い、話を聞いて……」
「そこをどけっ！！！」

そして剣は、今までにない位　殺気を放った。
そして皆は見た、巨大な夜叉の姿を。
全てを喰らい尽くす、白銀の髪を揺らし、戦場を狩る夜叉。
それに比べれば、総詩の放つ虎など猫だった。
その殺気に、近藤はもちろん総詩さえも完全に呑まれていた。
先程まで出していた虎の如し殺気は消え、
真選組は、まさに蛇に睨まれた蛙　状態だった。

「ダメだ、完全に呑まれてやがる。」

その様子を見ていた甚は、歯がゆかい思いをしていた。
剣の相棒を名乗りながら、
剣の怒りと暴走を止める事ができない自分の無力さに。

「のぉ、本当に打ち手はなんか！！？」

涼華が甚に聞いて来るが、甚は首を横に振るだけだった。
何もない、今の剣に近づける者すらいない。
そう思っていた。

「ん、お、おい！」

この時　甚は気づいた。
たった1人、まだあの場に行っていない真選組メンバーの1人の存在を。
剣への罪悪感と剣の豹変振りから動けなかった1人の生徒を、頼子の存在を。
甚がそれに気づいた時、頼子は真選組達の下へ、そして剣の下へ走り出していた。

「邪魔だあぁっ！！！」

剣は即座に走り出し、まず目の前にいる近藤に刀を向ける。
近藤は愛刀―虎轍で防ごうとするが、
剣の小太刀乱舞を受けきる事は出来なかった。
一瞬の内に虎轍を、そして体中に剣劇を受けてしまう。
その隙を狙い剣はさらに前進。
次に立ちはだかる愛刀―氏重を抜刀術の体勢で構えるやちと
無銘の十文字槍を構える紗乃だった。

「く、くそっ！やってやるぜ！！」
「ここは行かせないよ剣！！！」

紗乃は十文字槍を突き出し、やちは得意の抜刀術・“龍飛剣（りゅうひけん）”を繰り出す。
だが、今の剣にとって、その攻撃さえも遅すぎた。
剣の俊足は2人の動きを完全に把握し、
まず小太刀の一刀で紗乃の十文字槍を受け流すと
一気に距離を積め、紗乃の腹に蹴りを入れる。

「がっ！！？」

そのまま今度はやちの居合いを抜き放つ前に
もう一刀の小太刀でやちを斬り伏せる（と言っても峰打ちだが）。
それに続くように、今度は斉藤と芹栖がそれぞれの愛刀、
国重と兼重を手に剣の前に立ちはだかる。

「……悪いけど、行かせない……」
「ここここ、ここは行かせません！！！」

斉藤は得意の平手突き“牙突（きばつき）”の構えを、
芹栖は直進一刀流　独特の真っ直ぐな姿勢で構える。
だがその表情には明らかに恐怖があった。
怒る剣への恐怖、それが2人の動きを完全に出遅らせた。
剣の小太刀が、2人が攻撃する前に2人を斬り裂く。
何も出来ずに2人は沈む。そして残るのは虎の覇気を失った総詩と
剣のターゲットである負傷した土方だけだった。

「終わりだ…」

剣はそれだけ言うと、小太刀を両手にさらにスピードアップする。
避けきれない。
この時、土方と総詩はそう判断した。

あの鬼気迫る殺気に指1つ動かす事が出来ず、
そして今は近藤達がやられて行くのを唯見ているだけだった。
でもそれでも、そんな想いからか総詩は菊文を手に
剣に立ち向かおうとする。

「！！」
「無駄だ！」

剣は無情に総詩に小太刀を向け斬り去ろうとする。
二刀の小太刀を交差させ、総詩の喉元に突き立てる。

「摩方流剣術、“風刃交叉”！！」

だが、その小太刀が総詩の喉元を斬る事はなかった。
何故なら、真選組実質上最後の砦がいたからだ。
松原　頼子と言う名の最後の砦が。

「ダメです……剣さん……」

間一髪、剣の小太刀が総詩を斬り裂こうとした僅かな隙に
二刀の小太刀を交差する部分に
護符を貼った薙刀を刺し込み攻撃を止めたのである。

「お願いします……やめてください……」
「……どけ……俺は……っ！！！？？」

怒りの業火に満ちていた剣の瞳に、微かだが光が宿った。
それは頼子の瞳より流れる雫、涙が原因だった。
図書室という空間で最も接点の多かった女子生徒、
そして数日前の風呂での一件以来、剣は桂を、そして頼子の事で罪

悪感を感じ
今日のこの日まで碌に話をする事もなかった。
その罪悪感を感じている対象の1人である頼子の涙、
それは剣の怒りの業火をたった一滴でその殆どを消してしまう聖水だった。

「バカな……あのアニキを止めた？」

討学派達と共に遠くから見守っていた甚は、
信じられないといった表情でそれを見ていた。
怒り狂った剣を止めるなど、八忍隊のメンバーや祖父でないと無理と思っていた。
だが、頼子は止めれた。しかも武器などではなく言葉で。

「なんじゃか止まったようじゃけんど、大丈夫なんかの？」
「剣様……」
「……！」

討学派達の言葉に対し、甚は『まだ分からねぇ』と呟くように返す。

「（信じられねぇ、あのアニキを止めちまうなんて。）ん？」

未だに信じられない甚は、視線にあるものを捕らえる。
学園の校門に、1人の男がいるのだ。
制服からして颯間学院の人間の様だが、甚はその姿に見覚えがあった。

「あれは……！！！」

「お……俺は……俺は……」
「お願いします…お願い、します……」

戸惑う剣に尚も涙ながらに訴えかける頼子に、
剣はいつの間にか怒りを沈め冷静な瞳に戻っていた。

「お……俺は……」
「女性を泣かすとは感心できないな剣。」

不意に戸惑う剣の背後からした声に剣と頼子が声のした方を向く。
そこには紫色の髪を揺らす1人の颯間学院生徒が居た。
その顔を見た剣は、目を丸くする。

「……魁(かい)……!?」
「久しぶりだな、剣。」

剣に魁と呼ばれた少年は、剣にそう言い微笑みながら辺りを見渡す。
辺りには怪我をして動けない真選組のメンバーが魁の瞳に映った。

「随分　派手にやったみてぇだな。」
「……」

魁の言葉に、剣は言葉を発する事が出来なかった。

「アニキ!魁の旦那!!」

そこへ、今まで様子を見ていた甚が討学派達と共にやって来た。

「甚、これでこの人達の治療を。」
「へ、へい！」

魁が懐から出した札を受け取った甚は、札に“気”を送りその札を近藤達に張る。
するとどうだろう、札が輝きだし輝きが近藤達の体の傷を癒していく。
摩方流護符術（まがたりゅうごふじゅつ）・治癒札（ちゆふだ）だった。

「傷が……」
「治っていく……」
「これは、私の治癒術と同じ……」

札の治癒力に皆が驚く中、魁はそれを見届けると剣の方を向く。

「剣。」
「……分かってる。」

魁の言葉に頷いた剣は小太刀と忍具を全て魁に差し出すと校門の方へと歩き出した。

「あ、剣さん！」
「剣様。」

剣が去ろうとする姿を見て、頼子と桂が真っ先に止めようとするがそれを魁が止めに入る。

「申し訳ありません、愛津で問題を起こした颯間の生徒は颯間に連れて帰りそこで裁きを下すのが

颯間と愛津の間で交わした約束ですので。」
「そんな……」
魁の言葉に絶望した様な表情になる頼子に、魁は優しく語り掛ける。
「大丈夫ですよ、二度とここに来れないって事は無いですから。
裁きと言っても謹慎処分でしょうからね。」
その言葉に頼子が安堵した事を確認した魁は、
近藤達の方を向き口を開く。
「此度の件の謝罪は、日を持って行いますので、これで。」
そう言い頭を下げ、魁は剣と共に颯間へ帰ろうとする。
「待ってくれるかな?」
だが、不意に近藤が待ったを掛け、魁は『何でしょう?』と振り返る。
振り返る姿が夕日と絶妙にマッチし、彼の美しさをより引き立てる。
「剣にも勝る美形だね……」
「はうぅ!だ、ダメですよそんな……2人で私を取り合わないで……!!」
「芹栖、落ち着け。……でも、初音は剣の方が良い……」
あれ程　傷つけられたにも拘わらず剣を思うセリフに、
魁は軽い安堵を浮かべる。
「（アイツ、結構うまくやってたみたいだな。）それで、俺に何か

？」

「んとね、ツルくんは謹慎になるの？」

近藤の言葉に『恐らくは』と答える魁。

「そっか……あ、私は真選組局長の近藤　イサミ。名前、聞いても良いかな？」

その近藤の言葉に『コレは失礼』と魁は答える。

「女性に名を名乗るのを忘れるとは、俺もまだまだですね。」

そう言い魁は近藤の問いに答えるべく、口を開いた。

「自分は“藤林（ふじばやし）　魁（かい）”。
颯間八忍隊（さつまはちにんたい）・斥候方（せっこうがた）を勤めております、以後お見知りおきを。」

その言葉に、近藤達は軽い驚きを覚えた。
彼もまた颯間八忍隊の1人だと言うのだ。

「では、これにて。」

そう言い魁は、剣と共に愛津女学園を去って行った。

「……さてと。」

魁が居なくなった事を見計らい、甚は近藤達の方を向く。

「んで、説明してもらおうじゃねぇか。」
「ほえ?」
甚の言葉に首を傾げる近藤に、『とぼけんな』と返す甚。
その表情には苛立ちがあった。
「アニキが怒るなんて特定の事なくしてありえねぇ。
オメェら一体何をしたんだ?きっちり説明してもらうぜ!」
そう言い甚は、真選組メンバーを睨み付けるのだった。
―愛津女学園　学園内・屋上―
「くけけけけけけけ!やっぱ面白くなったな。」
夕日の差す愛津女学園校舎の屋上で、
此度の事件を起した張本人、幻八はニヤついていた。
「にしても、魁が来るとは予想外だったが、頼子(あの女)が剣を止めるとはな……」
そう言い幻八はグランドにいる頼子を視線に捕らえる。
「剣(やつ)が今後どうなって行くのか、楽しみだぜ。クケケケ

『～第十五章～　剣ＶＳ真選組！怒れる迅風の夜叉！！　《終》』

～第十五章～　剣ＶＳ真選組！怒れる迅風の夜叉！！（後書き）

十六話目完成です。
番外編・『１周年記念～幕末伝☆目安箱！～』での土方の言葉

『あんな奴、さっさと颯間に帰ってしまえばいいのだ。』

が現実となってしまい、剣は颯間へ謹慎となってしまいました。
同時に剣が今まで抑えていた力が解放されました。
『迅風の夜叉』の異名に相応しい風の刃、縮地と小太刀二刀乱舞。
愛津女学園最強と名高い真選組も歯が立たない強さですが、
その攻撃を結果的に止めた頼子の愛に今後注目！
そして新たなる八忍隊メンバー、魁。
今後もバンバン新キャラ登場の予感！！！
さて、次回は更なる急展開！
何と愛津討学・佐学派の主要メンバーが剣に会いに……！！？
次回をお楽しみに！！

～第十六章～　いざっ！鬼の巣へ！！（前書き）

前回までのあらすじ
幻八の写真により頼子と桂との間に関係を作った事を土方にバレた剣は
土方の放った言葉に怒り狂い真選組メンバーを圧倒するも
頼子の説得と同じ颯間八忍隊メンバーである魁により冷静さを取り戻し
真選組に被害を与えた罪で、颯間へと連行されるのであった。

～第十六章～　いざっ！鬼の巣へ！！

―愛津女学園　教室内―

剣が停学処分になって数日が過ぎた。
あれから土方は頼子達から事情を聞き、
一様納得はし（それでも完全には納得しなかったが）
自分の言葉の失言については反省し、剣とのいざこざも一様許す事にした。
桂達討学派とも話し合い、剣との一件はお互いの胸の内に仕舞う事となった。
だが、それでもこの数日間、愛津女学園には寂しい空気が流れていた。

キーンコーンカーンコーン

「では、今日はここまで。」

授業終了のチャイムと同時に、クラス内が騒がしくなる中
剣の席にひっそりと座る黒い影が１つ。

「さてと、ノート書きはこんなもんかね。」

剣の相棒、化け鴉の甚である。
剣が停学処分になって以降、
甚は剣の代わりに授業に出席してノートをとっているのだ。
今日も剣の代理としてやって来た甚は、そのまま学園を去ろうとする。
だが、それをある人によって止められてしまう。

「あの……」
「ん？」

甚に声を掛けて来たのは頼子だった。
ダンダラ模様の入った羽織を揺らしながら、心配そうな表情でこちらを見ている。

「アニキの謹慎ならまだ解けねぇぞ。」

甚は大方の予想をしてそう答えた。
ここ数日、剣が謹慎処分になってから甚の所にやって来る女子が後を絶たず
その女子達の質問はどれも剣の事に関してだった。
『どうして謹慎処分になったのか』、『いつ謹慎は解けるのか』
『元気にしているのか』、『会いに行っても良いのだろうか』
などなど、どれもこれも剣を心配する者達の声だったが
似た様な質問攻めに正直の所、甚はうんざりしていた。
なのでさっさと帰ろうとしたのだが、頼子は首を横に振った。

「違うんです。話はあるけど、ちょっと来てほしくて。」
「あん？」

頼子の予想外の言葉に甚は首を傾げる。
だが自分としてはさっさと家に戻り、剣の様子を確認したい思いがあった。
故にこの事は断ろうとする。

「悪（わり）いんだが、俺はさっさと帰って……」
「Ｆａｒｔａ（ファルタ）にハンバーガー、それにポテトもお付けしますから！」

「っ！！」

が、頼子の言葉に甚は言葉を飲み込む。
大好物の炭酸ジュースＦａｒｔａ、そしてジュースに合うという事で同じ位大好きなハンバーガーとポテト。
それを言われては黙っていられない。

「良いだろう！どこへ行きゃいいんだ！？」

あっさり承諾する甚であった。

―愛津女学園　校舎内・生徒会室―

「んで、俺に話って何よ？」

甚は頼子に案内された生徒会室でハンバーガーとポテトを食い尽くしＦａｒｔａを『グビグビ』飲みながら尋ねる。
生徒会室には真選組の局長・副長・組長格メンバーが勢揃いしていた。

「言っとくけどよ、アニキの謹慎がいつ解けるのかは俺も知らんぞ。理事長（ジジィ）しだいだからな。」

「うん、だからちょっとお願いがあるの。」

そんな甚の言葉に対し相変わらず『のほほ～ん』とした表情の近藤は甚に語りかける。

「んとね、ツルくんは今　何処で謹慎になってるの？」

「ん？何処ってアニキの自宅だけど？」

『あたりまえじゃん』と言わんばかりに言い放つ甚に、
近藤は突拍子にこんな事を言い放った。

「じゃあ今度の休みに、ツルくんに会いに行って良い？」
「……は？」

近藤の言葉に甚は一瞬　我が耳を疑った。
謹慎中の、しかもアレだけ酷い目に遭いながら
剣に会いたいとはどう言うつもりなのか。
甚にはさっぱり理解が出来なかった。

「テメェ、正気か？」
「正気も何も、あたし達も行くよ。」

甚の言葉に今度はやちがそう返す。
どうやら近藤だけでなく他の皆も行く気満々らしい。
否、全員ではない。
明らかに1人だけ『行きたくない』というオーラを出している輩が
1人。
ご存知、土方だ。

「土方さん、土方さんは絶対行かなきゃダメですよ～。
土方さんが剣さんを怒らせたのが原因なんですから～。」
「やかましい！！そもそもあの男が風呂で如何わしい事をしたのが
原因だろうが！！！」

そう言い怒鳴る土方の言葉に、頼子の表情が暗くなったのを甚は見
逃さなかった。

「オメェが気にする事じゃねぇよ。アニキの飲んだ薬に問題があったんだ。」
「甚さん……」
甚の言葉に頼子の表情にやや明るさが戻る。
「ありゃりゃぁ～、土方さんが頼子先輩を泣かせちゃいましたねぇ～。」
「黙れ総詩!!余計な事言うその口を閉じろ!!!」
総詩の言葉に怒る土方の横で、近藤は改めて甚に口を開く。
「皆でツルくんに謝罪したいの。お願い出来ないかな?」
「オメェらの気持ちは分かるがよ、まずジジィの許可を……」
ピリリリリリ…ピリリリリリ……
不意に甚の声を遮る様に鳴り響く音に、
甚は持っているカバンを開け携帯を取り出す。
「ん誰だよこんな時に。」
ピッ!
「はいもしもし……は?マジっすか?……へい、そうですかい……」
甚は会話を終えたのか携帯の電源を落とした。
「あー、ジジィの方は何とかなるかもしんねぇ。」

「どういうことですか？」

甚の言葉に芹栖が首を傾げる。

「ジジィには放浪癖があってな、時々ふらっとどっかに行っちまっては
2・3日帰って来ない事があんだよ。
……まぁ、今回は月曜には戻るって書置きがあっただけマシだが。」

「……それって、理事長としてどうなの？」

斉藤のツッコミに『細けぇことは気にすんな』と返す甚。
その隣でやちは『キラーン』と目を光らせていた。

「…つまり、理事長さんの帰ってくる間に剣に会いに行けば
許可なんて不要な訳ね？」

だがやちの言葉に対し、甚は『うんにゃ』と首を横に振る。

「問題はまだあるぜ？アニキ……もといアニキ達　八忍隊の家だ。」

「へ？お前が案内してくれるんじゃないの？」

甚の言葉に首を傾げる紗乃。

「そりゃ案内はしても良いけどよ、場所が問題なんだよ。」

甚の言葉に真選組メンバーは首を傾げる。
場所が問題とはどういう事なのだろうか。
山中の険しい場所にあるのか、それとも谷底にでもあるのだろうか、
忍びの隠れ里なんて言うのではないだろうか。

「おい、どんな想像してるか知らねぇが言っとくぞ。
別に山中の険しい場所とか、谷底にある訳でも、
忍びの隠れ里なんてものでもないからな。」

様々な想像を膨らます真選組メンバーに入れたツッコミに
数名から『な～んだ』と不服の声が上がる。

「オメェら一体どんな想像してたんだよ……」
「そんな事より、それで風上の家は何処にあるんだ?」

話がずれそうな所で土方がストッパーを果たし、甚はその答えを言い放つ。

「アニキ達の家はな、“鬼の巣”にある。」
「「「「「「「「「「!!!??」」」」」」」」」」

その甚の言葉に、真選組メンバーは息を呑んだ。
鬼の巣、それは杏の町に住むものなら1度は名を聞いた事のある名だった。
颯間と未戸、武勇で有名な2つの地域の狭間の地域を指し
そこは腕に覚えのある者達、主に颯間と未戸の荒くれ共の集う地であり
その者達の腕っ節から、警察でも行くものは少ないといわれる
杏の町の危険地帯区域なのだ。

「そこに、ツルくんのお家があるのね。」
「まぁな。はっきり言って行くのはお勧めしねぇぜ?」

近藤の言葉にそう返す甚。
確かに鬼の巣は好んで行く所ではない。

普通の者なら、その名を聞いただけで行くのをやめてしまうだろう。

「面白そうだな。」

最も、この真選組は普通では無いのだった。
鬼の巣の名を聞いても全く脅えず元気な声で言い放ったのは紗乃だ。

「剣の様子見ついでに、鬼の巣の猛者ってのを見てみっか！」

紗乃の空気を読まない一言に、真選組メンバーは苦笑しつつも感謝した。
正直な所、鬼の巣と聞いて何名かやや弱気になっていたのだ。
そんな状況を甚はため息を付きつつさらに言葉を続ける。

「ま、それでも良いってんなら止めねぇけどよ。」
「じゃあ、案内お願いしていいかな？」

近藤の言葉に甚は観念し『へいへい』と返し、皆と明日の予定を決めるのだった。

―愛津女学園　校舎内・廊下―

「やれやれ、まさか案内役をする羽目になるとは……」

真選組と明日の予定を立てた甚は生徒会室を後にし
今度こそ帰宅しようと廊下の宙を飛んでいた。

「（ん？）」

だがその途中で、甚は視線を感じ後ろを振り向く。
そこには人斬り伊織の相棒、信吾がいた。

「バウ！（よう）」
「何か用か？」

さっさと帰りたい甚はめんどくさそうに尋ねる。

「バウ（討学派の皆がお前に用がある。）」

その信吾の言葉に甚は『まさか』と嫌な予感を感じる。

「おい、その用ってのは……」
「バウ（本人達に聞け）」

そう言いながら2人（1羽と1匹）が向かったのは校舎裏の林だった。
そこには涼華・桂・伊織の3人が待っていた。

「待とったぜよ。」
「お待ちしてましたわ。」
「……信吾、お疲れ。」

伊織が信吾にソーセージを与える姿を見ながら、甚はクチバシを開く。

「んで、用件は何だよ？」
「まぁまぁ、まずはこれを受け取って欲しいぜよ。」

そう言い涼華が差し出したのは、1枚のチケットだった。

そのチケットを見た甚は『こ、これは!!?』と目を丸くした。
それは人気ピザ店『Ｐｉｚｚａ（ピザ）　Ｒａｔ（ラット）』のジュースつき無料割引券だったのだ。
前述にも述べたが、甚は炭酸ジュースＦａｒｔａとそのジュースに合う物に目が無い。
それはピザとて例外ではない。

「意味は、理解してもらえたかのぅ？」
「あぁ、よ～く分かったぜ……」

甚の上得意な表情による返事に、討学派達は『よし』と頷き用件を述べる。

「実は、剣くんの事なんぜよ……」
「あん？」

涼華の言葉に、大方の予想をしていた甚が首を傾げる。

「私達、剣様の様子を見に行きたいのですけれど
謹慎中ですので如何したものかと……」
「やれやれ、やっぱり真選組の連中と同じかよ。」

甚が漏らした言葉に討学派のメンバーは敏感に反応する。

「何じゃ、イサミくん達もあち達と同じ事考えちょるんか？」
「あ～、まぁな。」

甚は先程　生徒会室で真選組メンバーとの会話を説明しだす。
無論その際、剣達　八忍隊の住まいが鬼の巣にある事も説明した。

「なんと……」
「剣様の御宅は、鬼の巣に……」
「……」
さすがに鬼の巣の事には驚いた様だが、
彼女達もまた剣に会う気持ちに変わりは無かった。
「んで、テメェらはいつ来るのよ？」
「それじゃ、案内お願いするぜよ！」
涼華の言葉に甚は観念し『へいへい』と返し、皆と明日の予定を決めるのだった。
―杏の町　商店街の店・角屋（すみや）―
４つの区分されている杏の町の丁度中心に存在する
杏の町　最大級の飲食店・角屋の前に、一際目立つ者達がいた。
「まさか、お前達も来るとはな……」
「ふふ、剣様の安堵を確かめたいのは皆同じ、という事ですわ。」
睨みつける土方に対し、桂は『サラッ』と言い返す。
そう、ここにいるのは甚と剣の家までの案内を約束した
真選組及び討学派メンバー達であった。
結局　甚は、それぞれの案内するのが面倒なので
倒・佐両派を案内する為に全員　同じ所に、すなわち角屋の前に集合させたのだ。
「まぁまぁ歳ちゃん。涼ちゃん達もツルくんが心配なんだよ～。」

「そうですよ～、今日だけは停戦しましょうよ～。」

殺気立つ土方に対し、近藤と総詩は相変わらずな対応で抑え付ける。

「何つーか、目立ってんなー。」

その様子を上空より見ていた甚はやや呆れながらも、皆の前に舞い降りて来た。

「揃ってるみてぇだな。」

「あ、甚くん。」

甚の登場に近藤を始めとした面々が反応する。

「そんじゃ、早速案内してくれる？」

「まぁ待てや。」

やちの言葉に待ったを掛けた甚は、まず全員の腰などを見渡す。

「ちゃんと武器は持って来たみてぇだな。」

「当ったり前だ！鬼の巣に行くんだから当然だろ！！」

甚の言葉に当然とばかりに答える紗乃に呆れつつも、甚はその辺りを安心する。

念の為、八忍隊の幾人かのメンバーと颯間討・佐両派の主要者達に話は通しておいたが、それでもこれ程の美女達が一気に訪れれば混乱などは避けられないかもしれない。

ましてや鬼の巣に行くのだから、武器などは必要だ。

「そんじゃま、行くか。鬼の巣はここから比較的近い、気をつけろ

よ。」

そう言い甚は低空飛行しながら、近藤達を誘導して行く。

「うん、それじゃしゅっぱーつ♪」
「それじゃ、風上先輩に会いに行きましょうか。」
「ニャー（おー）」
「ふふ、剣、やち姉さんが会いに行くよ。」
「お前だけじゃないぜ、やち。」
「えっと、まず剣さんにお会いしたら謝罪をして……」
「そ、そうですね！落ち着いて落ち着いて行きましょう！」
「……芹栖、頼子、落ち着け。剣はきっと許してくれる。」
「クルックー（あぁ、きっとな）」
「ぐへへへへ、安心してや頼子ハン、芹栖ハン。
万が一風っつあんが許さなかった時は、ワイが慰めてやるさかい……」
「貴様は来るな！！」
「あははは、賑やかなはええもんじゃのぉ～。」
「剣様、いまお会いに参ります。」
「……行くぞ。」
「バウ（おうよ）」

甚に誘導され、滅茶苦茶目立つ美女軍団は鬼の巣を目指して行く。
その様子を、店の物陰から覗く影の存在に気づく事無く。

「ケケケケケケケ、甚の様子が可笑しいから様子を見に来たが正解だったぜ。」

颯間の誇る外道の悪魔、幻八だ。
幻八は今朝から様子のおかしかった甚を不審に思い

ばれない様に追って来たのである。
甚もまた、外道と名高き幻八に此度の事を伝えてはいなかったのである。

「クヒヒヒヒ。まぁ、今回は何もせずに見守ってやるか。」

そう言い幻八は店の暗闇へと消えた。
何故なら、幻八はこれより先、
彼女達の向かう鬼の巣で何が起こるのかを知りたいからだ。
鬼の巣は、彼女達の思ってる以上にやばい土地だ。
そこで彼女達がどんな反応をし、どんな事をするのかが楽しみなのだ。
故に今は見守るだけ、彼女達、自分を楽します道化達を。

―杏の町　颯間と未戸の狭間の地域・鬼の巣―
杏の町でも、特に武勇で有名な颯間と未戸。
以前にも述べたが、颯間は帯刀制度を初めとする古風な校風を継承するその一方で、
エレベーター・トレーニング施設など最新技術を取り入れている
『杏都四大学園』の中でも柔軟な学院で有名であり、
その中で帯刀と同じく古風な校風として有名なのは
颯間の校内に存在する危言流道場の存在だ。
危言流は、颯間の地に伝わる古流剣術であり、
その信条は『一の太刀を疑わず』または『二の太刀要らず』と云われ、
初太刀から勝負の全てを掛けて斬りつける
『先手必勝』または『一撃必殺』の鋭い斬撃が特徴がある。
校内にその道場がある事から、颯間の生徒には危言流の剣士が多く

武芸においては杏都最強と名高い。
それに対して未戸の生徒は『未戸天狗党（みとてんぐとう）』を始めとし、
颯間での試験に落ちた者や長年の女尊男卑により鬱憤を溜め込んだ者など
武芸に関する手数の多さなら、颯間をも越える杏都最強の者達である。
そんな颯間と未戸の生徒達が出会えば、戦いになるのは必然であり
両学園の生徒達が出会い、戦ってしまう事で有名な地域が存在する。
颯間の地域と未戸の地域、本来そこには正式な地名があったのだが
今ではこの名が正式名称となりつつある。
戦いに生き、最強の称号の魔力に取り付かれた鬼達の巣窟、鬼の巣と。

「ここが、鬼の巣。」

鬼の巣にやって来た近藤が真っ先に口にした言葉がそれだった。
パッと見的には、荒れ果てた町並みと言う訳でもなく、
西部劇に出てくるような殺風景な感じがする訳でもない、極普通の町並みだ。

「鬼の巣窟って割には普通だな。」
「アンタねぇ、一体どんな想像してたのよ……」

紗乃の言葉にやや呆れながらツッコミを入れるやち。

「でも、確かにそんな殺気立ってる訳ではなさそうですね。」
「そうですね。そんなに怖い所じゃなさそうです。」
「パッと見はな。」

芹栖と頼子の言葉を否定する様に言い放つ甚の言葉に

一同は首を傾げた。
否、全一同ではなかった。
唯1人、まるで甚の言葉を理解してるかの様に鋭い眼光を持つ伊織の姿があった。

「オメェさんは分かってるみてぇだな。」
「……鬼の巣へは、昔　何度か来た事がある。」
「ん？そうじゃったのか？」

伊織の言葉に涼華が首を傾げる。
その言葉に対し、伊織はどこか寂しそうな表情になる。

「……ここには、伊織以外の杏都四大人斬り（きょうとよんだいひとき）が皆いるからな。」
「バウ（伊織……）」

その言葉と同時に、伊織の表情が暗くなったのを信吾は見逃さなかった。
岡田　伊織。
杏都でも名の知れた人斬りにして、杏都四大人斬りの一角。
だが、四大人斬りの中では最弱の烙印を押されている存在。
そんな人斬り達が集う地がこの鬼の巣だ。
ここには、伊織には苦い思い出が存在する。

「（……進……）」
「ぐわあぁぁぁぁっ！！！！」

そんな思いに伊織が浸っていると、不意に叫び声が響く。

「何だぁっ！！？」
「ふふ、不逞生徒ですか！！？」

「…落ち着け、ここは愛津じゃない。」

突然の声に皆が驚く中、真っ先に動いたのは伊織だった。

「ちょ、おい、伊織!?」

涼華を始めとした面々が伊織の後を追う。

伊織は建物と建物との狭間の路地に入り、駆け出す足の速さを増していく。

そして伊織が足を止めた時、そこには伊織の予想通りの光景が広がっていた。

「何だ!?」

「何が起こっちょるぜよ!?」

伊織の後を追って来た皆の目に飛び込んで来たのは、

古びた神社とその神社に集まる人々の姿だった。

その人々の殆どが紺色の学ランか黄緑色の制服に身を包んでいる者が多い。

それは颯間と未戸の生徒である事を示していた。

「何が起こってるんでしょうね?」

「果し合いだよ。」

総詩の疑問に答えたのは甚だった。

その甚の言葉に『果し合い?』と伊織以外の者達は首を傾げた。

果し合い、すなわち決闘を申し込み戦う事である。

それは、この現代にはあまりにも時代錯誤な言葉だった。

「マジだ。この鬼の巣じゃよくある事だ。」

そう言い甚は高く飛び上がると、決闘の場に視線を向ける。
そこには、真っ二つに折れた薙刀を持ち倒れている1人の男と
大柄な体をした1人の男がいた。
2m近くある大柄な体に、腰まであるボサボサした栗色の髪。
手には巨大な長巻を手にしているが、
その長巻ですら男が持つと普通の刀のように見える。

「ん？」

男は目に映った甚の存在に気づき、視線をそちらに向ける。

「甚じゃないか、そんな所で何してるんだ？」
「終兵（しゅうへい）の旦那こそ、そんな所で　つまんねー果し合い受けてるんすかい？」

男、終兵の言葉に対し甚は舞い降りながらそう答える。

「まぁな。果し合いなんて、ここじゃ珍しくないからよ。
そーゆーお前は何やってんだ？剣の所に居なくて良いのか？」
「これからアニキの下へ行くんすよ。あいつらを案内しに。」

甚の言葉に終兵は視線を人ごみの中でも目立つ近藤達に向ける。

「おい見ろよあれ。」
「うおーっ！すっげー美人！！」
「美女が1匹　美女が2匹……」
「鬼の巣でこんな美女に会えるとは……」

終兵の視線により、周りの者達も近藤達の存在に気づき声が上がる中

終兵はその女子達の中に見知った顔を見つけ接近する。

「伊織、伊織じゃないか。久しぶりだな。」

見知った顔、伊織に接近した終兵は伊織の頭を『くしゃくしゃ』と撫でる。

「……やめろ、むかつく。」

が、当の伊織は気に入らなかった様だ。

「ははははは、相変わらず小さいな。」

「……殺す。」

終兵の言葉に怒った伊織は、斬馬刀―忠吉を振るうが終兵の振るう長巻―忠重により止められる。

「おいおい落ち着けよ。俺らの仲だろ?」

「うっさい。」

「バウ（テメェも命知らずだな終兵）」

「よぉ信吾、お前もいたのか。」

終兵は信吾の存在に気づくと、『お～い』と言わんばかりに片手を振る。

もちろん、もう片方の手には長巻を持ち伊織の攻撃を止めている。

「伊織ちゃんの攻撃を片手で止めるなんて、やりますねぇ～。」

「一体　何者ぜよ?」

伊織と信吾、さらには甚とも知り合いらしい終兵に皆が首を傾げる中

甚がクチバシを開く。

「こいつは“田中（たなか）　終兵（しゅうへい）”。颯間討学派（さつまとうがくは）・凄誅組所属（せいちゅうぐみ）にして杏都四大人斬りの1人だよ。」

その甚の言葉に、愛津メンバーは驚きの表情となった。
凄誅組は颯間討学派が誇る剣客集団であり、
その大半が危言流の使い手の命知らずの鉄砲玉軍団。
その戦闘能力の高さは有名だが、愛津メンバーが驚いたのはそこではない。
杏都四大人斬り。
この杏の町で名のある4人の人斬り達の異名である。
伊織もその1人なのだが、この終兵もその1人だと言うのだ。

「おいおい、何か俺、嫌われてるのか？」
「嫌われてるってゆーか、杏都四大人斬りの名を聞けば大概の奴は驚くもんですぜ。」

その甚の言葉に『それもそうか』と終兵は笑いながら納得し、近藤達へと接近する。

「今　紹介された、田中　終兵だ。よろしくな。」
「うん♪こちらこそ、よろしくね～♪」

挨拶をして来た終兵に、近藤は真っ先に笑顔で答える。

「しっかし、愛津の生徒ってのはどの子も美人だな。
こりゃぁ、ますます共学化が楽しみになって来たぜ。」
「おやおや～、ボク達の前でそれを言っちゃいますか～？」

終兵の言葉に総詩がニヤつくのを見た終兵は、ここで愛津メンバーの反応に気づく。
涼華や桂は『うんうん』と同意する様に、
やち・斉藤・紗乃は好戦的な目付きを、頼子と芹栖は反応に困ってる様だ。
そして土方は、今にも腰から抜刀しそうな雰囲気だった。

「……ひょっとして、お前さん達が真選組かい？」
「うん、そうだよ～♪」

終兵の言葉に対しあっさりと答えた近藤の言葉に、
終兵はもちろん、周りにいた者達も驚く。

「真選組？」
「あいつらが？」
「美人揃いだけど、すっげー強いっていう？」
「討学派最大の敵……」

ザワめきが大きくなる中、甚は近藤達に近づきクチバシを開く。

「おいテメェら、そろそろ行くぜ。アニキに会いたくないのかよ？」
「お前ら、“風上　剣”に会いに行くのか？」
「「「「「「「っ！！！！！？？？」」」」」」」
その終兵の言葉に、周りの声がさらにザワめいた。

「風上　剣！！？」
「何でアンナ奴と！！？」
「アイツら一体……」

そのザワめきに、愛津メンバーの方が驚いてしまう。

「あの、剣さんって評判　良くないんですか？」

「アニキと言うより、八忍隊の評判が悪いんだよ。」

頼子の言葉に、甚は思い出す様に言い放つ。

「それって、どう言う……」

「おっと待ちな。」

どういう事なのかを聞こうとした頼子だったが、
そこに終兵が待ったを掛ける。

「ここじゃなんだし、どうだ？この近くに寺田屋（てらだや）がある。そこで話さないか？」

「寺子屋かぁ。あそこの食いモンもうまいんだよな？」

「行く行く～♪私　絶対行く～♪」

終兵の提案にいち早く賛同した紗乃と近藤により、真選組メンバーはもちろん
討学派メンバーも賛同し、皆は未だに驚いている周りのギャラリーを無視して
終兵の案内されるまま、寺子屋へと向かった。

―杏の町　商店街の店・寺田屋（てらだや）―

杏の町が誇る飲食店、池田屋・角屋に並ぶ飲食店、寺田屋。
だがこの店を訪れるのはもっぱら未戸か颯間の生徒ばかりである。
何故なら寺田屋は、一般人も碌に来ない鬼の巣にあるのだから。

そんな寺田屋では、喧嘩も日常茶飯事の為　ここの店主はかなり荒事になれている。
ガタイがよくスキンヘッドの怖風の店主だが、決して悪人ではなく寧ろ優しい人だ。

「いらっしゃい……！！」

そんな店長の顔が、来客した客達を見て不覚にも驚いてしまった。
何故なら、その客達はどれもこれも
この辺りでは滅多に見れない美女軍団だったからだ。
だが同時に、その美女達の中に見知った顔を見つける。

「邪魔するぞマスター。」
「ういーす。」
「終兵、それに甚。」

見知った顔を見た店主は、視線をそちらに向ける。

「どうしたんだ、この美女達は一体？」
「謹慎中のアニキに会いに来た愛津の真選組及び討学派の連中だよ。」

その甚の言葉に『ほぉ』と頷く店主。

「まぁともかく、座って注文しな。」
「は～い♪」

店長の言葉に真っ先に反応した近藤はテーブルの席に座り、注文表に目を向ける。
それに続く様に他のメンバーも席に座り注文表に目を向ける。

否、皆ではなかった。
唯1人、頼子だけは注文表に目を向けず甚に視線を向けていた。

「どうかしたか？」

その視線に気づいた甚が頼子に尋ねる。

「……あの、こんな所でゆっくりしていて良いんでしょうか」

その言葉に甚は頼子の視線の意味を察した。
彼女はここ最近、元気が無い。
原因は言わずと知れた剣にある。
図書室で分かり合い、それに加え剣の停学の原因を作った事を気にしているからだ。
剣に代わり学園に来ていた甚はそれを察していた。
故に剣の事が気になり、一刻も早く行きたくてしょうがない様だ。

「オメェの言いたい事はわかるが……」

そう言う甚の視線の先には
大量の食べ物を注文し食いまくる近藤と紗乃の姿があった。

「この状態じゃあな。」
「あ、あはははは……」

甚の言葉に、乾いた声で苦笑いする頼子であった。

「――――――ふぅ、食った食った。」

そう言う紗乃の目の前には、食い散らかした料理の残骸がテーブルのあちらこちらに転がっていた。

「アンタねぇ、こんなに食い散らかしてお金　大丈夫なの？」
「へ？」

やちの言葉に紗乃は『ポカン』となる。

「そういえば……ボク達、お金大丈夫なんですかね？」
「……近藤さん、アナタ一体どれだけ食べました？」
「ほぇ～？別にいつも通りだよ～♪」

近藤のいつも通りは、常人の倍以上。
その事を長い付き合いの土方は知っていた。

「……マスター、因みに合計金いくらだ？」
「ん。合計で、５万４千８百円だな。」

その言葉に、愛津メンバーの殆どは硬直した。
彼女達は、それ程お金を持って来ていなかったのだ。

「私（わたくし）、キャッシュカードがありますから何とかなりますわ。」
「あちも。というより、そんなに多く食べなかったきに。」

最もそれは真選組メンバーの話であり、
討学派メンバーにとっては特に問題無さそうだった。

「ふぇ～ん涼ちゃ～ん、私達の分も払って？？？！！」
「桂マジで頼む！！あたしの分も払ってくれ！！！」

問題の無い討学派の経済状況に、近藤と紗乃は泣き付く始末だった。

「近藤さんも紗乃も少しは真選組として誇りを持ってください！！
討学派に奢ってもらって如何するんですか！！！」

さすがに討学派に奢ってもらうのはプライドが許さないのか
土方が2人を注意すると、『えー』とブーイングが起こる。

「あち達は別に構わんぜよ？」
「はい、最もタダという訳には行きませんが。」

そう言い放つ涼華と桂の目が『キラーン』と怪しく光ったのを、
土方は見逃さなかった。

「しゃーない。ここはアレでっせ土方ハン。
体でお支払いをするっちゅー方向で……」
「貴様は黙ってろ！！と言うか貴様は帰れ！！」

カンリュウサイの余計な言葉に速攻で斬り掛かる土方により
『あぎゃぁ――――！』とカンリュウサイの断末魔（？）が響く。

「バカが。」
「ニャー（バカだね。）」
「クルックー（やれやれ……）」
「バウ（はぁ。）」

そのカンリュウサイに、甚を始めとした動物達は呆れ果てる。

「……それで、お金どうする？」

「私達はともかく、局長と原田先輩の料金が多すぎますよー！！」

斉藤と芹栖の最もな意見に、土方は頭を抱えた。
金は足りない。
だが討学派に奢ってもらうのはプライドが許さない。

「（くそっ！一体どうすれば！！！！）」
「よかったら、俺様が払いましょうか？」

悩む土方の背後から不意に男の声がし、
驚いた土方　及び愛津のメンバーが声のした方を振り向くと
そこには声の主らしき１人の少年がいた。
歳は１６～１７頃。
緩く逆立った青いショートヘアに、金色の瞳をし顔は中々の美形。
ジーンズとＴシャツに身を包んだ『ニコニコ』微笑んでいる少年は
土方達に対して微笑ましく口を開く。

「こりゃ失礼、立ち聞きしてたらお金に困ってる様だったんでね。
どうでしょう、俺様がそのお金お支払いしましょうかい？」

そう言い微笑みながら語りかける少年の言葉に愛津メンバーは驚いていた。
見知らずの自分達にお金を差し出してくれるとは
この人は何と優しいんだろう。誰もがそう思った。
否、誰もがではない。
唯１人、男嫌いの土方だけは疑いの眼差しをしていた。

「貴様、どういうつもりだ？」
「どうも何も、俺様困ってる女性（ハニー）をほっとけない性質（タチ）なのよ。」
「それで何を見返りを求めるんだ？」

『ニコニコ』していた少年はその声に振り向くと
こちらを睨みつける終兵と甚の姿があった。

「げっ！お前らいたの？」
「いたんだよ先から。」
「乃亜（ノア）の旦那、アンタ本当に女しか見えてないのかよ。」

甚にノアと呼ばれた少年は、『ちっ』と舌打ちするが
気を取り直して土方の方を向く。

「まぁともかく、お金は俺様が何とかしますよ。金ならそこそこありますから。」
「ホントに良いの～？」
「助かったぜ！オメェ良い奴だな！」

ノアの言葉に近藤と紗乃はノアに感謝の言葉を述べるが
その時、ノアの目が『キラーン』と獲物を狙う獣の様な瞳に
怪しく光ったのを土方は、そして甚は見逃さなかった。

「やめとけやめとけ、そいつに奢って貰うなんぞ後で碌な事にならないぜ？」
「……甚、こいつ一体何者だ？」

そう言い甚に尋ねる土方の思い言葉に、甚は『やれやれ』と言いながら答える。

「そいつの名は“加藤（かとう）　乃亜（ノア）”。颯間では名の知れたナンパ師にして颯間八忍隊（さつまはちにんたい）・奇襲方（きしゅうがた）を勤めてる男だ。」

その甚の言葉に、愛津メンバーは驚きを隠せなかった。
颯間では名の知れたナンパ師。
つまり女と見れば誰構わず声を掛けたりするという事になる。
そんな奴だと思っただけでも土方に関しては軽蔑の念を込める所だが
それ以上に驚いたのは、そんなナンパ師が剣や何時ぞや現れた魁と
同じ
颯間八忍隊のメンバーである事にあった。

「おいおいナンパ師って、
それじゃまるで俺様が所構わず女性(ハニー)を口説いてる様に聞こえるぜ？」
「実際そうじゃん。」

ノアの反論に甚は『しれっ』と答える。
事実ノアの女好きはここら一帯では有名であり、
見た目も結構　良い為ノアのナンパの餌食になる女は跡を絶たない。

「……聞いた事がある、颯間の最強ナンパ師。」
「あぁ、そりゃどう考えてもノアだな。」

初音の言葉に『うんうん』と頷く終兵。

「おいおい、いくら俺様がモテモテだからって嫉妬か終兵。
いらぬ噂を立てないでくんない。」
「事実っしょ。」

そう言いツッコミを入れる甚を無視し、
ノアは先程　話しかけて来た近藤に視線を向けた。

「？な～に？」
「ふむ……上から９６……５４……９２か。」

「何やと！！？」

ノアの言葉に、先程　土方により血祭りに上げられたカンリュウサイが復活した。

「あんハン……何故……」

「お、おい、カンリュウサイ？」

いつものカンリュウサイらしくない、真剣に、そして動揺している姿に

土方を始めとした愛津メンバーは驚きを隠せないでいた。

「何であんハン……ワイしか知らん筈の局長ハンのスリーサイズ全部言い当てとるんヤ――――――ッ！！！！！！！！」

「って驚いてるのはそこか貴様っ！！！」

カンリュウサイの言葉に土方は刀を振り下げ、

再びカンリュウサイの断末魔が鳴り響いた。

「どうだいハニー達、俺様と喫茶店にでも行きませんか？

もちろん俺様のおごりで。」

「ほぇ、良いの？」

「マジで良いのか！？」

「もちろん。ハニー達の様な美しい方々の為ならば、

俺様は大統領だってぶん殴って見せるさ！！！」

そう言いノアはオバーリアクションで近藤達を他の店へと誘うとす

るが、
その内の数名はそれを拒否しようとする。

「すみません、私達　急いでますから……」
「誘ってくださるのは嬉しいですけど、私達（わたくしたち）　先を急いでいますの。」

頼子と桂は、一刻も早く剣の様子を見たいが故に先を急ぎたいようだ。
とそこへ、今度は土方が抜き身の愛刀―兼定をノアへと向ける。

「貴様、どうやって近藤さんのスリーサイズを知った？」

どうやら、ノアが近藤のスリーサイズを知っている事に怒りを隠せない様だ。
そんな鬼の面相の土方に対し、ノアは相変わらずの微笑で返す。

「俺様ほどの眼力があれば、大体のスリーサイズはわかる物なのさ。何なら、貴女（ハニー）のスリーサイズも言い当てて見せようかい？」
「せんでいいわ！！！」

土方は怒りの言葉と共に刀を振り下げる。

「ひゅぅ！」
「っ！！？」

だがノアは、驚くべき跳躍で飛び上がりその刀を避けるとそのまま店の天井の柱に飛び付く。

「ヒュー、やるねぇハニー。

俺様　君みたいな気の強い子も　ばっちし守備範囲だぜ？」

そのノアの予想外の高速移動に、愛津メンバーは驚きを感じると同時に
この避け方に見覚えを感じていた。

「これは……」
「剣さんと、同じ……」

そう、それは剣と同じ避け方だったのだ。

「そりゃ当然さハニー達。俺様はアイツと同じ忍術流派“摩方流（まがたりゅう）”にして
奴と同じ八忍隊の一員だからな。最も、跳躍力なら俺様の方が上だけどな。」

そう言いながらノアは懐から出した財布から何枚かのお札を出し
店長に向かって投げ打った。

「それがその子達へのお代だ。じゃーねハニー達!!」

そう言いながらノアは窓から飛び出ると、瞬く間に建物の上を飛び
立って行った。

「すげー……」
「……八忍隊って、あんなのがまだいるの？」

ノアの跳躍力に驚く愛津メンバーの中で、初音が甚に尋ねる。

「まぁな。まぁそろそろお前らにも八忍隊の事を軽く説明しとくか。

」

そう言い甚は、ゆっくりとクチバシを開いた。
甚が言うには“颯間八忍隊（さつまはちにんたい）”は、
全員が現颯間学院の理事長の孫達で構成されており
全員が“摩方流（まがたりゅう）”と呼ばれる忍術と、忍びに必須と言われる
八つの術技『忍者八門（にんじゃはちもん）』の１つをそれぞれ得意としている。
だがそれ以上に、この部隊のメンバーの共通点は
全員が討・佐どちらにも付くことを拒んだ者達らしいのだ。

「総数僅か８人。
だがその戦闘能力を鬼の巣中に鳴り響かせる事件が２ヶ月前に起こった。」
「２ヶ月前？」

甚の言葉に皆が首を傾げる中、甚は話を続ける。
２ヶ月前、それは共学化の話により愛津と颯間が討・佐両派に分かれ
内乱状態になり始めたばかりの頃。
この頃、既に剣達は颯間八忍隊を結成していたが、
当時はその数の少なさから特に注目もされていなかった。
そんなある日、颯間学院の壁に颯間学院の理事長、
すなわち八忍隊の祖父を侮辱する落書きが描かれていた。
この事に対し剣を始めとした八忍隊メンバーは激怒し、
忍者得意の情報収集により、犯人が未戸天狗党である事を突き止める。
そして同時に近々奴等が集会を開く事も知った八忍隊は集会場襲撃を決行する。
未戸天狗党は総勢６００人を超える杏都四大学園　最大の組織だったが
颯間八忍隊は僅か８人で襲撃。

結果、未戸天狗党に一方的な被害を与え八忍隊は圧勝。
以来　未戸天狗党の勢力は大きく削られ、颯間八忍隊の名は鬼の巣はおろか
杏の町中に響き渡った。これが世に言う『未戸天狗党の乱』である。

「それ以来、今まで数の少なさから碌に雇われなかった颯間八忍隊は急激に雇われるようになったって訳よ。」

甚の説明はそこで終わり、それを聞いていた愛津メンバー達は
八忍隊の壮絶な歴史に驚いていた。

「僅か8人で、600人を撃退ですか……
まぁ、この間の風上先輩を見れば納得もしますけど～。」
「ニャー（うんうん）」
「って事は、剣くんやこの前の魁くん、それに先のノアくん見たいなのが
あと5人はいるってことかの？」

涼華の言葉に『まぁな』と返す甚。

「……所で、『忍者八門』って何？」

不意にそんな質問をして来る初音の言葉に『あん？』と首を捻る甚。

「そういや先そんな事言ってたよな。」
「何なんですか、『忍者八門』って？」

初音に続き、紗乃や芹栖、他の皆も聞きなれない言葉に首をかしげ
甚はめんどくさいと思いながらもクチバシを開く。
忍者八門とは、忍術の全ての流派において、

忍者になる為に基本となる8種類の必修科目の事であり、それぞれが素手で敵と戦う武術『骨法術』、“気”を使った武術『気合術』、日本刀・忍者刀などの刀剣を用いた武術『剣術』、槍を用いた武術『槍術』、手裏剣を用いた武術『手裏剣術』、忍者独自の火薬学を伝えていく『火術』、忍者の特徴でもあるアクロバティックな動きを学ぶ『遊芸』、一般常識や軍法を学ぶ『教門』と呼ばれている。

「八忍隊はそれぞれ『忍者八門』の内どれか1つを最も得意としてんだ。
因みにアニキが最も得意としてるのは剣術だ。」

甚の言葉に『だろうな』と一同は納得を覚える。
無理も無い、実際に剣の小太刀剣術を目の当たりにしたのだから。

「さてと…」

とここで、甚の話により沈黙していた終兵が立ち上がり出入り口の方へと向かう。

「何処行くんすかい？」
「寮に戻る。そろそろ鍛錬の時間だからな。」

そう言い終兵は『じゃあな』と言いながら店を後にした。

「そんじゃま、俺らも行くか。アニキに会いに。」

甚の言葉に、近藤達愛津メンバーも席を立ち、店を後にした。
目指すは剣の自宅、そして剣との再会。

愛津の女子生徒達は剣の顔を思い浮かべながら歩いて行った。

―杏の町　鬼の巣・商店街―

鬼の巣の商店街の寺田屋がすぐ見える店の上に、１つの影があった。

「ちっ、つまんねーな。奴ら何も起さねぇや。」

ご存知、幻八である。

先程から愛津メンバーを付けていたのだが、

何もトラブルが起き無い事に不満を漏らしていた。

「つまんねーな、何かトラブルに巻き込まれろや……」

ピリリリリリ…ピリリリリリ……

不意に幻八の声を遮る様に鳴り響く音に、幻八はポケットから携帯を取り出す。

「あ？」

ピッ！

「何だ？……ほう？……そうかそうか……」

幻八は会話を終えたのか携帯の電源を落とすと、

不意に『クククククク』と不気味に笑い出した。

「高杉（たかすぎ）の危兵隊（きへいたい）と宋三郎（そうざぶろう）の杏都見廻（きょうとみまわ）り組（ぐみ）が近くまで来てるか……

こりゃ一波乱ありそうだな、クキキキキキキキキ！」

そう言う表情に、先程までの退屈そうな表情は消えていた。

『～第十六章～　いざっ！鬼の巣へ！！　《終》』

～第十六章～　いざっ！鬼の巣へ！！（後書き）

十七話目完成です。
愛津メンバーが剣に会いに颯間と未戸の狭間の地　鬼の巣へ！
そこで新たに登場したのが伊織と並ぶ杏都四大人斬りの１人　田中終兵。
そして新たなる颯間八忍隊メンバー　加藤乃亜。
今後　更なる新キャラ登場の予感がビンビン！！
どうぞ次回もお楽しみにー！！！！

～第十七章～　鬼の巣の壮絶な日常（前書き）

前回までのあらすじ
幻八の写真により頼子と桂との間に関係を作った事を土方にバレた挙句、
土方の放った言葉に怒り狂い真選組メンバーを圧倒するも
頼子の説得と同じ颯間八忍隊メンバーである魁により冷静さを取り戻し
真選組に被害を与えた罪で、颯間へと連行さた剣に会う為に
近藤達　愛津メンバーは杏の町の危険地帯、鬼の巣にやって来た際に
杏都四大人斬りの終兵や八忍隊の一員ノアと出会いながらも
剣の自宅を目指すのだった。

～第十七章～　鬼の巣の壮絶な日常

―杏の町　鬼の巣・商店街―

鬼の巣の町並みの中の大通りを、一際目立つ美女軍団が歩いていた。
その全てが腰に刀を、もしくは槍や斬馬刀を持っている。
さらにその周りには、黒い猫、きもい顔したハト、白い狐の様な生き物に、
黒い中型犬、そして前方を飛ぶカラスが一羽いた。
アレから寺田屋を出発した愛津メンバーと甚である。

「ねぇ甚くん、ツルくんのお家はまだ？」
「全然まだだ。」

近藤の言葉に甚は『しれっ』と返す。

「つーかアレからまだ１０分と経ってないぞ。もう少し歩いてから聞けや。」

甚のきつい一言に『ぶーぶー』と近藤が唸る。

「お腹空いたよ？……」
「あたしも腹減った？？？」
「……伊織も、焼きそばパン食い足りない……」

歩いてる内に近藤と紗乃は空腹になり、
伊織は手持ちの焼きそばパンを食い尽くしたらしく不満の声が上がる。

「紗乃、アンタ先　寺田屋で食べたばかりでしょ。」

「伊織さん、先あれ程　食べましたよね？」
「近藤さんを風上の家に行く如きの為に餓死させる訳にいかん。
甚、どこかに飲食店は無いのか？」

3人の空腹にやちと桂がそれぞれツッコミを入れる中、
土方は近藤を案じ、飲食店を探す。
オニの副長・土方　歳緒、とことん近藤にはあまい。

「と言われてもなぁ、テメェら金はあんのか？
先みてえに乃亜（ノア）の旦那が都合良く出て来るとは限らねぇんだぜ？」

甚の言葉に空腹を訴えていた3人は『うっ』と返す言葉がなくなってしまう。
今の自分達の手持ち金でどこまでの物が買えるというのか。
その事をすっかり忘れていたらしい。

「ったく……ん？」

呆れていた甚だが、不意にあるものを視線に捕らえ動きを止める。

「……おい、もしかしたらタダでメシにありつけるかもしれねぇぞ。」
「ほえ？」
「どういう事だよ？」

甚の言葉に首を傾げる一同が甚の視線を追うと、そこには一軒の店があった。
それは肉料理店『ヘルジューシー』という名の店であり、
その肉の美味しさは有名だった。
だが甚が向けているのはその店と言うより、その店の張り紙だった。

その張り紙には、こう書かれていたのである。

『超ジューシーボリュームステーキ、３０分以内に食べれたらタダ！
正し食べ切れなければ罰金１万円。』

「「タダ！！！？？」」

タダの二文字に、近藤と紗乃は完全にくい付けになり
口からダラダラと滝の様なヨダレを流した。

「おいテメェら、３０分以内に食えりゃあの話だぞ？
しかも食えなけりゃ１万円　飛ぶぞ。」
「……無理、もう２人には何も聞こえてない。」

そう言い放つ初音の言葉に甚が視線を向けてみると、
２人は既にヨダレを垂らしながら店の前へとやって来ていた。

「はえーなぁ、おい。」
「……でも、何だかあのお店　変じゃないですか？」

不意に頼子がそう言い、近藤と紗乃を除く全員が首を傾げる。

「頼子、何が変なんだ？」
「別におかしな所は無さそうですけど……」

土方と芹栖の言葉に、頼子は今一度　店に視線を向ける。

「何だか……お店から活気を感じないんです。」

頼子の言葉に首を傾げつつも、土方は視線を店に向ける。

言われてみれば、店から声の1つも聞こえず、何だかやる気と言う物を感じない。
だが、タダの言葉に釣られた近藤と紗乃はそんな事　一切気にせずと言うより気づかず、店へと入っていく。

「すみませ～ん、超ジューシーボリュームステーキくださ～い♪」
「あたしもそれで……」

だが、店に入った瞬間、さすがの2人もこの店の異様な雰囲気に気づいた。
何故なら、客が1人もおらず、店の中が暗い雰囲気に包まれていたのだ。

「あ、あれ？誰もいないね？」
「ひょっとして定休日か？」
「……い、いらっしゃい……」

近藤と紗乃が首を傾げる中、店の奥から1人の中年男性が現れる。
コック風の服装から、この店の人だろう。
だが、その声に覇気は無く、目に光がともっていない。

「何なんだ、一体……」
「何だか、お店の雰囲気そのものが荒んでいる気がしますわね……」

近藤と紗乃を追い店に入って来た愛津メンバーも
店の雰囲気に驚いている。

「ははは、分かります？」
「分かるも何も……大丈夫ですか？」
「……目が死んでるぞ？」

男の荒んだ声に愛津メンバーは心配そうに声を掛けるが
男は未だに元気が無い。

「一体何があったんぜよ？」
「別に喧嘩とかで物を壊された訳でも無さそうね。」
「はっ！？もも、もしかして跡継ぎの息子さんが
誰かと駆け落ちしちゃったんですか！！？
それでやる気も何もかも消え去ってしまったんですね！！？」
「……落ち着け、てかどんな妄想だ。」
「待てよ……」

皆が色々騒ぐ中、甚はある事を思い出す。
この店は最近この鬼の巣に出来たばかりの店だ。
店の人もこの辺では見ない男、つまり別の所からやって来た人という事になる。
それならば、ここのルールを、暗黙の了解を知らないとしてもおかしくは無い。

「おいオッチャン、まさかとは思うがその超ジューシーボリュームステーキを
誰かに食いまくられたんじゃないのか？」
「……分かるのかい？」

甚の言葉に、男は『コクン』と頷く。
ショックが大きすぎてカラスである甚が喋った事には特に驚いていない様だ。

「ステーキを食いまくられたって……一体何枚食われればそんなに落ち込むんだ？」

そこへ土方のツッコミに近い言葉が入る。
確かに、いくらタダ同然の肉を大量に食われたと言っても、
そんなに落ち込むほど食われたのだろうか。
その問いに対し、男は泣きながら答えようとする。

「……全部さ。」
「へ？」
「全部？」
「あぁ、超ジューシーボリュームステーキ、
あるだけ全部　食われちまったんだよ！！」

男の叫びにも似た声と答えに、愛津メンバーは驚きを隠せなかった。
飲食店にある肉の全てを食い尽くす、それも３０分以内になど
近藤や紗乃でも出来るかどうか難しい事だった。
しかしそれをやってのけた輩がいるらしいのだ。

「あの後　聞いたんだが、どうやら奴はここえらでは有名な
“怪物（モンスター）”の異名を持つフードファイターらしい。」
「やっぱりそうか。」

男の言葉に甚は納得するかのように頷く。

「おかしいとは思ったんだ。
ここえらではそいつの存在で大食いや早食いのイベントは一切してないんだよ。
そいつのせいで潰れかけた店もあるからな。」
「ははは、俺の情報不足だ……」

甚の言葉に、男は『ガックリ』と膝をつくのだった。

―杏の町　鬼の巣・商店街―

「あ～あ、結局　何も食べれなかったねぇ～」

鬼の巣の道を歩く近藤は不満げにそう呟く。

あの後、結局　男は店を閉め、近藤達は食べ物に有り付けなかったのだ。

「しっかし、ボリュームステーキを食いまくるなんて、何て羨ましい奴なんだ！！」

「アンタねぇ、それ以前の疑問とかがあるでしょう。」

何も食えなかった事に不満を言う紗乃にツッコミを入れるやち。

「はぁ～……あれ？」

歩いていた近藤は、不意に足を止めると『クンクン』と鼻を動かす。

「あれ～、何だかいい匂い……」

「ホントだ、何か美味そうな匂いがするぜ！」

匂いに誘われ、近藤と紗乃は『ふらふら～』と前へ前へと早足で歩いて行く。

「近藤さん！？ちょ、どこへ……」

「ねぇ、何か匂いする？」

「……全然しませんねぇ～。」

「あの2人の鼻は犬並みじゃの～。」

「……信吾、何か匂うか？」
「バウ（微かだが、食い物の匂いがする……ただ、）」
信吾の言葉に『ただ？』よ首を傾げる伊織。
「バウ（何の食い物なのかは、ハッキリ言ってよく分からん。）」
その信吾の言葉に、伊織は『なに？』と首を傾げる。
信吾の鼻は通常の犬の数倍の嗅覚を持つ。
故に大概の場合、匂いを嗅げばそれが何なのか当てる事ができる筈なのだ。
それが分からないなんて事は、今までの経験では無かった。
「信吾さんにも分からない匂いなんて……危険ではありませんか？」
桂の言い分に危機感を感じた土方は、急いで近藤達を追う。
「近藤さん戻って！」
「ちょっと紗乃！止まりなって！！」
「おいしそ～な匂い～……じゅる……」
「食い物～！！」
急いで止めようとする真選組メンバーだが、
食い物の匂いに完全に理性が飛んでる2人は聞く耳持たない。
「ご飯！ご飯！」
「メシメシ？？ッ！！」
そして匂いが近くなり、2人は足を速めていく。

「ちぃ！おい止めるぞ！！」
「え～めんどくさいですよ～。土方さんやってくださ～い。」
「アホか！そんな事言わずに手伝え！！」

相変わらずマイペースな総詩の言葉に怒りながらも
総詩じゃどの道　無理と判断した土方は、ともかく2人を止めようと前に出る。

「待て2人共！」
「ごは？？？？？？ん！！」
「メシ――――――――ッ！！！！」

だが、土方の決死の呼び掛けも食い物の掛かった2人には届かなかった。
そして2人が、匂いに釣られて街角を曲がった、その時だった

――――ドン！！

「うわぁ！」
「ほえ！？」
「どわぁっ！」

近藤と紗乃は曲がって来た通行人に打つかって仕舞った。
そのショックで紗乃は何とか耐えたが近藤と相手は尻餅をついてしまった。

「いたたた……」
「なんだぁ一体？」
「近藤さん、お怪我は？」

近藤達の動きが止まった事で追いついて来た土方達が
近藤の安否を確認する。

「いたた……うん、大丈夫だよ～。」
「痛た……」

近藤は立ち上がりながら、ぶつかってしまった人に視線を向ける。
背は自分と同じ位だが、見た所　男子の様だ。
黒のショートヘアに華奢な体格をしている。

「大丈夫？」

近藤はその男子に手を伸ばす。

「……はい。」

近藤の言葉に顔を上げる男子。
その顔は女に見もえる童顔で、サファイアのように青い大きな瞳が
印象的だった。

「あら、可愛らしい。」
「ボク一瞬　女の子かと思いましたよ～。」

その男子の容姿に、皆はそれぞれの感想を述べる。
だが、その言葉に男子は『ムッ』と機嫌悪そうな表情となった。

「女の子って……初対面の人にそんな言い方は無いと思うッス！」
「あら、ひょっとして出流（いずる）さんでは？」

ムッとなっていた出流と呼ばれた男子は、

桂の言葉に視線を桂に向け、目を丸くする。

「桂さん!?それに甚も。」

「あら、やっぱり出流さんですわ。」

「よぉ、出流の旦那。」

桂と甚の存在に、出流は目を丸くした。

「桂、おんしの知り合いか?」

「えぇ。彼は“伊藤(いとう)　出流(いずる)”、翔可村塾時代(しょうかそんじゅく)の後輩ですわ。」

「どうも。」

桂の紹介に、出流は『ペコリ』と頭を下げる中、
甚は出流のポケットに入っている1本のビンに目が行く。

「旦那、そのビンは?」

「え?」

甚に言われ、出流は視線をポケットに向けると
そこに入っているビンに驚きながら取り出す。

「……何すかこれ?」

「俺に聞かれてもな。ただ……」

そう言いながら甚はそのビンを手に取ると、ビンのラベルをよく見る。
そこには、気づかれない位とても小さな悪魔のマークが描かれていた。

「……こりゃ幻八の旦那のだ。」

「何でそんな物が俺のポケットに……」

幻八の物（ブツ）がポケットに入っていた事に、軽い恐怖を覚える出流。
幻八と言えば、颯間では知らぬ者はいない外道中の超外道。
そんな奴の物がポケットに入っていたら、誰だって恐怖する。

「くんくん……そのビンからおいしそうな匂いがする～」
「うわぁっ！？」

そんな中、いきなり近藤が鼻を『ひくひく』させてビンに近づいてくるもんだから
出流はびっくりしてしまう。

「おっ、ホントだ。先の匂いはこのビンだったのかよ。」
「バウ（どうりで何の食い物なのか分からなかった訳だ。）」

同時に匂いが気になっていた紗乃と信吾も鼻を動かしながら
出流が手に持つビンに近づいて来る。

「あ、あの……」
「皆さん、おやめなさい。出流さんが困ってますわ。」

近藤達を分ける様に間に入った桂が、出流から3人（2人と1匹）を引き離す。

「大丈夫ですか？」
「あ、あ、はい……」

桂の言葉に頷く出流だが、その態度はどこか落ち着きがない。
その態度に、桂は『まさか』とある事を思い出す。

「出流さん、ひょっとしてあなた…」
「オメェの考え通りだぜ桂。」

出流に問い質そうとした桂の言葉を遮る様に
不意に後ろから声が聞こえ、一同は声のした方を向く。
そこには、白銀のボサボサした長髪に、獣のように鋭い目付き
そして布でグルグル巻きにされている身の丈程もある巨大な物を
背負った年齢１８位の１人の少年がいた。
その姿に、一同は驚きの表情となる。

「高杉（たかすぎ）さん！」
「高杉の旦那！！」

真っ先に声を上げたのは出流と甚だった。
そう、それは角屋で近藤達に大金を渡した色男、
颯間討学派の巨星・高杉（たかすぎ）　蛮作（ばんさく）だった。
この高杉の登場に、最も喜んだのは出流だった。

「高杉さん！」
「よぉ出流、無事か？」

涙目寸前の目でやって来る出流に優しく微笑みかける高杉。
その笑顔は優しくもあり、どこか悪戯を考えているガキ大将の様にも見えた。

「やっぱまだ女は苦手か？」
「そ、それは言わないで欲しいッス！」
「出流さん、やっぱり相変わらずですのね……」

高杉と出流の会話に、桂は軽いため息をつく。
翔可村塾にいた頃から、出流は女性との付き合いが苦手だった。
その容姿からよく女子に迫られたのが原因らしい。
だが男子からはその容姿を理由に虐められてもいた。
そんな出流に手を差し伸べたのが、高杉だった。
高杉は横暴なところはあったがアニキ肌であり、弱い者イジメを嫌った。
そんな所が彼の好かれる理由なんだろうか、
高杉の周りには人が集まり出流もそんな中の1人だったのだが……

「（何だか前より高杉に対して犬の様な忠義が芽生えてる様な気がしますわ……）」

そうなのだ。
出流は高杉の男気に感服し、人生の師の様に崇めているのだ。
まるで犬の如き忠誠心、否、その外見からは恋愛感情の様にも見えるほどに。

「ま、そんなお前の為にも、共学化は絶対させてやるけどな。」

そう言いながら高杉は『ニヤリ』と不敵に微笑みながら
意味有り気に視線を近藤達へと向けた。

「…それは私達に対する宣戦布告か？」

高杉の言葉に土方は『ギロリ』と睨み付け、腰の刀に手を掛ける。
それに対し高杉は『おいおい』と手をブラブラさせ呆れるように言い放つ。

「別に俺はケンカ売ってる訳じゃ無いぜ？

最も、時代遅れの剣客集団に俺ら危兵隊が負ける訳無いけどな。」
「なんだと……」
その高杉の挑発的な言葉に、土方は爆発寸前だった。
「高杉、そこで何をしている。」
「あん？」
そこに、不意に声が聞こえ、声の方を振り向く一同。
そこには、黒い羽織を羽織った颯間の男子生徒たちがいた。
その存在に、高杉は『げっ』と嫌そうな表情となった。
「テメェらかよ……」
「市中見廻り中だ。
そしたら君の姿が見えたから何か問題を起しているのかと思いましてね。」
その高杉の言葉に、先頭に立つ男が言い放つ。
歳は１７～１８頃で、身長は１８０前後。
メガネを掛け、長い黒髪を後ろで束ねているその男は
他の羽織を着た者達よりも圧倒的な存在感を放っている。
「別に、俺はコイツらと話してただけだぜ？」
そう言い視線を愛津メンバーに向ける高杉の行動に
男達はここで始めて近藤達の存在に気づく。
「び、美人達だ……」
「す、すげー……」
「良いなぁ、あんな人達と会話してるなんて……」

その近藤達の存在に、男子生徒たちはやや興奮気味に声を上げる。
だが、唯1人、メガネを掛けた男子だけは違っていた。

「騒ぐな、見廻り中だぞ。」

その男子の言葉に、他の生徒達は先程までの騒がしさは何処へやらすぐさま『ビシッ』と背筋を伸ばし整列する。
それを確認した男子は、近藤達に向かって歩き出す。

「失礼、部下が失礼しました。」

そして近藤達の前に来ると『ペコリ』と頭を下げる。
その唐突な行動に、近藤達はやや『ポカーン』となっていた。

「え、え～と……そんなに頭下げなくても良いよ?」

その行動に対し、近藤はやや戸惑いながらも言葉を発する。

「失礼、癖の様なものなので。」
「テメェは堅物すぎんだよ、佐々木(ささき)。」

高杉に佐々木と呼ばれた男子は、その言葉に高杉は睨みつける。

「俺はお前とは違うだけだ。」
「けっ、
そんなんだから『杏都見廻(きょうとみまわ)り組(ぐみ)』なんてつまんねー組織の首領にされちまうんだよ!」
「何だと……」

その高杉の言葉に、佐々木から明らかな殺気が漂う中
近藤達は甚の方を向いていた。

「ねぇ甚くん。」
「何だよ?」
「あの人、杏都見廻り組の人なの?」

近藤は佐々木に視線を向けつつ、甚にそう尋ねた。
杏都見廻り組は、この鬼の巣の状況を見かねた颯間が作り上げた遊撃風紀部隊であり
真選組と同じ様に治安維持を目的とした部隊で
この杏の町では真選組と同様、かなり有名である。
ましてや、杏都見廻り組は真選組よりも早く組織されている事に加え
同じ佐学派として親近感もある様だ。

「まぁな。あの男は“佐々木(ささき)　宋三郎(そうざぶろう)”。
杏都見廻り組を率いる凄腕剣客にして、颯間学院の生徒会長様だよ。」

そう言いながら、甚は視線を佐々木達へと向けた。

「貴様、我々を愚弄する気か?」
「はぁ?オメェらに愚弄する程の価値があるのかよ?」

高杉は尚も佐々木達を挑発している。

「貴様……!」

当等　佐々木は腰から小太刀を抜き放つ。
それを見た高杉は、布でグルグル巻きにされている

身の丈程もある巨大な物に手を掛け、その布を破り捨てる。
その布の下から出てきた物の存在に、近藤達は目を見開いてしまった。
それは、大きな剣の様にも見える。
だが、剣は剣でも、皆が持っている様な日本刀や斬馬刀ではない。
かと言って、中国風の刀でも、西洋風の剣でもない。
しいて言うなら、ＳＦに出て来る様な機械風の大剣だった。
いや、機械風と言うより丸っきり機械で出来ている剣だ。
今にもエンジン音と共に何かが起こりそうな雰囲気溢れる
この奇妙な剣に愛津メンバーは唖然となっていた。

「やば…」

これにいち早く反応したのは甚だった。

「おいオメェら、巻き込まれたくなけりゃ逃げるぜ。」
「ほえ？」
「何だと？」
「どう言う事ぜよ？」

甚の言葉に首を傾げる愛津メンバーに、『いいから来い』と唸る甚。
その時、高杉は懐から一本の小さな笛を取り出すと、
それを口に加え、『ピーッ』と音を鳴らす。
それと同時に、辺りから『ドドドドド』と人が走って来る様な音が響く。
そして気が付いた時、辺りにはそれぞれ一丁のライフルを持った軍団が
辺りを取り囲んでいた。

「な、なんだコイツら！？」

「あわわわわっ！暴動か何かですか！？」
「しかも鉄砲を持ってます！」

いきなり辺りを取り囲まれた事に動揺する愛津メンバー達。

「おい甚、何なんだコイツらは！？」
「アレは高杉の旦那が作り上げた討学派最強兵団“危兵隊（きへいたい）”だ！」

甚はそう言いながら、危兵隊について説明しだす。
危兵隊は、高杉が武芸などを問わず、
志ある者達を自身のカリスマ性でまとめ上げた集団であり、
その大半が、武芸がダメで皆にバカにされる者達だった。
だが、そんな者達を高杉は自身の戦略とある武器によって
討学派最強兵団へと変貌させたのである。その武器とは……

「野郎共！放て！！」

高杉の射撃令と共に、出流は懐からリボルバー銃を取り出し、
危兵隊は一斉にライフルを構え、射撃を開始した。
その銃の弾は、ゴムで出来た　いわゆるゴム弾だった。
ゴム弾は当たる所によってはかなりの威力を発揮する危険物だが、
高杉は自身の財力で大量のゴム弾型銃器を大量に作り上げたのだ。
しかも死なない様に威力はやや弱めに作った事で
隊士達も安心して撃つ事が出来ているのだ。
つまり高杉は、個々の能力ではなく
銃器による集団戦法で危兵隊を最強部隊に育て上げたのである。

「ぐっ！怯むな、斬り込め！！」

だがその攻撃に対し、他の者達が押される中、

佐々木はゴム弾の痛みも省みず愛刀―祐定を手に突っ込んで行く。

「おらぁっ！」

それに対し高杉も愛刀―友安を手に佐々木に斬り掛かる。

「相変わらず卑劣な戦い方だな！」

「はっ！戦いに卑怯もクソもあるかよ！時代は銃器よ！剣なんぞもう古い！

そして颯間のくだらねぇ伝統もなっ！！」

佐々木と高杉の鍔迫り合い（？）は互角。

だが部隊としての能力では、

銃器により遠距離攻撃により見廻り組が圧倒的に不利だった。

だが、佐々木の健闘に見廻り組も巻き返して来ている。

激しい戦闘だ。

「おいおい、なんつー戦いだよ……」

この光景に紗乃が言葉を漏らすと、皆も同じ気持ちだった。

まさかゴム弾とは言え、

銃器と剣の戦いを見る事になるとは思っても見なかったのだ。

「こんなの颯間や鬼の巣じゃあ日常だぜ。」

たった1人（1羽）、甚だけは見慣れていたのか特に驚きもしていなかった。

「まぁ、今回は八忍隊が誰もいないから比較的穏やかだな。」

「いやこれで穏やかなのか！？」

甚の言葉にツッコミを入れる土方だが、甚は『事実だ』とあっさり返してくる。

「今の内に逃げて方がいいぜ……って、おい！？」

逃げた方が良いと言う甚の言葉に対し、紗乃と伊織だけは武器を構え今にも戦いの中へと行きそうな雰囲気だった。

「ちょっと紗乃、何やってんのよ！！」
「伊織！おんしどうしたんじゃ！？」
「決まってんだろ。あんなすごそうな戦い見てたら、参加してぇじゃねぇか。」
「……鬼の巣に来ると、血が騒ぐ。」

そう言い紗乃と伊織は完全に臨戦態勢をとり、今にも動き出しそうだった。

「おいよせ！オメェらの身に何かあったら俺がアニキに殺されちまうんだぞ！！」
「せやっ！あんハン達の見に何かあったらワイは興奮して眠れんがな！」
「貴様は黙ってろ！！！」

余計な事を言うカンリュウサイに土方の上段斬りが炸裂し、
カンリュウサイの断末魔の叫びが響く中、
紗乃と伊織はいよいよ参戦しようとしている。

「行くぜ！」
「…参る！！」

「おいよせ……っ！？」

２人を止めようとする甚は、不意に妙な悪寒を感じ取る。
何かが来る、それも自分のよく知っている何かが。
そして気づいた時、そこに影は舞い降りた。

「失礼。」
「「っ！！？」」

風に誘われる様に現れた１つの影。
人はそれを見た時、誰もがこう感じただろう。
黒い羽をした天使。
彼の周りに舞う黒い羽は誰もがそう幻想させる。
だが、それはただの羽ではなく、敵を抹殺する武器である事を彼女達は知らない。
彼がその羽を手にした時、その羽は戦乱する者達へと向かい飛ばされていく。
そして皆は気づく。
アレは羽ではない、１枚の黒い紙がついた棒手裏剣である事に。
そして無数の棒手裏剣が危兵隊　並びに見廻り組に放たれた時、
黒い紙より放たれし黒い稲妻が、危兵隊と見廻り組を襲う。

「ぐわあぁっ！！？」
「な、何だ！？」
「これは！？」

その電撃に皆が驚く中、唯１人、頼子だけはこの電撃を見た時ある事を感じていた。

「これは……護符術！？」

そう、それは自分が得意とする気のエネルギーを使った
護符術による稲妻だった。
つまり、あの棒手裏剣についている黒い紙は札だったのだ。

「その通り。よくご存知ですね。」

不意にそこへ、舞い降りてきた影、魁(かい)の声が掛かる。

「魁の旦那！どうしてここに！？」
「来るのが遅いから、
もしかしたら騒動に巻き込まれたんじゃないのかと思ってな。
探しに来て見たら、案の定だったな。」

そう言いながら甚と愛津メンバーに微笑みかける魁。

「あら、それじゃあたし達を迎えに来てくれたの？中々　紳士ねぇ～。」
「お褒めの言葉、ありがとうございます。」

やちの言葉に優雅に頭を下げる魁。
まさに紳士の言葉が似合う彼ならではの優雅さと態度だった。

「まぁ？」
「今時いない紳士さ。」
「う～ん……魁くんって、どこかの王子様？」
「ははは、ありがとうございます。」

愛津の魁への印象は良く、にこやかに魁は答えて行く。

「っておい待て魁！何にこやかに答えてんだよ！！」

とそこへ、梭の放った護符術の電撃に縛られ動きを止められている面々から
高杉が吼える様に言い放つ。

「テメェいきなり攻撃して来るたぁどういうつもりだ！！！」

「藤林、事と次第によってはいくらお前でも許さんぞ！」

高杉に続き、佐々木や他のメンバーも声を上げる中
魁は余裕の表情で口を開く。

「どうも何も、他校の学生、しかも女性の目の前で下らない戦いをする
我が校の恥知らずを止めたまでさ。」

「なにぃっ！？」

その魁の言葉に顔をしかめる高杉。

「だってそうだろ？女性、しかも愛津の方々の前で争うなど愚の骨頂だ。
颯間にとって、討学派にも佐学派にも百害あって一理無しだ。」

その魁の言葉に高杉達は言い返す事ができなかった。
何故なら、魁の言い分は的を得てるからだ。
討学派にとっては、例え佐学派との戦いに勝利しても
愛津の前で醜態をさらし愛津の方が共学化を断れば元も子もないのだ。
方や佐学派は、この鬼の巣の治安維持が第一目的である。
故にこれ以上　鬼の巣の事をあまり知らない部外者の前に

醜態をさらして颯間の何傷がつくのは避けたいのが本音だ。

「それでもどうしてもって言うんなら、俺らが相手になるぞ？」

「俺ら？」

その魁の言葉に、高杉達は首を傾げる。

俺らとは言うが、一体誰がいると言うのだろうか。

「俺らって……」

「あぁ、俺らさ。なぁ龍牙（りゅうが）。」

そう言い魁は視線を1つの路地に向けると、そこから1人の少年が現れる。

歳は17~18頃。

剣や魁にも匹敵する美形で、黒のショートヘアを揺らし

白いコートと黒いジーンズを着用し、背には袋に包まれた長い物を背負い、

手には赤い柄の短槍を持っている。

「龍牙！」

「龍牙の旦那、居たんですかい！」

魁に龍牙と呼ばれた少年の存在に、颯間の男達はもちろん甚も驚いていた。

「甚くん、あの人は？」

甚達の驚いた姿が気になったのか、近藤が尋ねて来る。

「あの人の名は“服部（ふくべ）　龍牙（りゅうが）”。颯間学院生徒会副会長にして

颯間八忍隊（さつまはちにんたい）・警護方（けいごがた）を勤めてる人だ。」
「八忍隊！」

彼もまた八忍隊の1人。
その名を聞いた土方が驚く中、龍牙は静かに槍を構え佐々木に視線を向けていた。

「龍牙……」
「生徒会長、魁の言い分を何卒ご理解ください。
俺も会長とは戦いたくありませんから。」

龍牙は、傭兵とは思えない位　穏やかな視線で佐々木を説得する。

「……副会長たる君にそこまで言われては仕方ありませんね。」
「……高杉先輩、ここは藤林先輩の言う通りっすよ。」
「ちっ、しかたねぇな。」

高杉及び佐々木等は渋々ながら武器を収め、
それを見た魁は印を結ぶと『開（かい）』と唱え、符術の稲妻を解く。
それと同時に、高杉は危兵隊を佐々木は見廻り組を率いてそれぞれ去って行った。

「……さて、これにて一件落着、かな？」
「だと良いな。」

そう言い魁は手裏剣と札を仕舞い、龍牙は槍を収め愛津メンバーの方を向く。
魁と龍牙は、剣にも匹敵する美男子だ。
その視線だけでも女子達はかなり意識してしまう。

「まぁ……／／／／／／／／」
「わぉ！美形が2人も！」
「か、カッコイイ……あぁ、ダメです、そんなに見つめないで……」
魁と龍牙に皆が見とれる中、2人は甚に接近する。
「龍牙の旦那も、俺らを探しに？」
「いや、俺は偶々　近くを通り掛ってただけだ。
そしてら魁に気を貸してくれって頼まれてな。」
「さすがに俺1人じゃ、
アイツら全員を縛る程の気を錬る事は出来なかったからな。」
そう言いながら、魁と龍牙は視線を近藤達へと向ける。
「愛津の皆様ですね？」
近藤達と初対面になる龍牙は真っ先に口を開いた。
「うん、そうだよ。」
「自分は颯間生徒会副会長及び颯間八忍隊・警護方を勤めている
服部　龍牙と申します。この度は剣がご迷惑を。」
近藤に対し龍牙は頭を下げ謝罪の言葉を述べる。
どうやら相当　真面目な性格のようだ、と近藤は龍牙の性格を察する。
「ううん、気にしてないからいいよ～。」
「いえ、ですが……」
「龍牙、謝罪は家に行ってからでも遅くないだろ？」

話が長くなりそうに感じた魁が割り込み、龍牙は当初の目的を思い出す。

「あはは、リュウくんマジメなんだねぇ～。」
「りゅ、リュウくん？」

近藤のニックネーム付けに龍牙はやや戸惑いながらも
魁と共に愛津メンバーを家へと案内すべく皆を導こうとする。

「取り合えず、家までご案内します。」
「どうぞ、ここからすぐです。」

そう言いながら、魁と龍牙は愛津メンバーを案内して行った。

―杏の町　鬼の巣・商店街―
鬼の巣の商店街の店の屋根の上に、１つの影があった。

「ちっ、アイツら余計な事を。」

ご存知、幻八である。
出流のポケットに食い物の匂いのするビンをいれ、
佐々木に高杉が何かしているとそそのかし、
愛津メンバーにちょっとしたハプニングをさせようと考えていた幻八だったが
魁と龍牙により全て台無しにされてしまったのだ。

「しゃーねぇ、今回は引くか。」

そう言いながら幻八は忌々しそうに、気づかれない様にその場を去って行った。

―杏の町　鬼の巣・住宅街―

「んねぇ、甚。」

「ん？」

八忍隊の家へと向かう中、やちは甚に接近してくる。

「ふと思ったんだけどさぁ。
八忍隊ってもしかして剣みたいな美形がまだいたりするの？」

やちはそう言いながら色目目線で甚に尋ねて来る。
確かに、今まで愛津メンバーがあって来た八忍隊メンバーは剣にしろ魁にしろノアにしろ龍牙にしろ、誰も彼もが美形だった。
年頃の乙女なら、もしかしたら颯間八忍隊は美形集団なのかもしれない
と考えても不思議ではない。
だが、やちの問いに対し甚はどこかビミョーな表情となった。

「……まぁ、居ない事もないが……八忍隊が誇る美形軍団、アニキ、魁の旦那に龍牙の旦那、それに一様ノアの旦那はもう会ってるし……
後は人の好み次第だな。」

「ほほ～う、それじゃあ見方によっては美形に見えるのも居るって訳ね？」

その甚の回答に、やちは『キラーン』と目を光らせる。

「おい、やち。貴様ここ最近　真選組としての自覚が無いんじゃないのか？」

そんなやちを『ギロリ』と睨みつける土方。
土方からしてみれば、男に現を抜かす事自体が気に入らないのだ。

「副長、あたしは別に共学化に反対してる訳じゃありませんよ？
それに共学化に反対＝男が嫌いって訳でもないですし。」
「そうですね。それに颯間の人達ってなんだか私達に似ている気がします。」

やちに便乗する様に芹栖も言葉を発する。
剣や魁達もそうだが、先程　見かけた高杉や佐々木など
誰も彼もが武で互いを語り己の信念をぶつけている。
それは愛津の生徒達と何ら代わりの無い姿だった。

「ふん、あんな野蛮な奴等のどこが……」
「はいはい歳ちゃん、そんな事言わないの。」

気に入らないといった感じの土方を近藤が宥める中
総詩はふとある事が気になり、甚に接近する。

「ねぇ甚さん。」
「あんだよ？」
「えっと……藤林さんや服部さんを見てふと思ったんですけど、
八忍隊って、皆　風上先輩みたいにあんな感じで優しいんですか？
今まで会った八忍隊の人はみんな傭兵とは思えない位　優しかったですけど。」

「いや、そりゃアニキ達だけだ。」

総詩の言葉に甚は思いっきり首を横に振る。

「アニキや魁の旦那達は抑止力として八忍隊に入ってるにすぎないからな。
基本戦いを好かん人達だ。」

「抑止力だと？」

「どういう事ですか？」

甚の言葉に愛津メンバーが続々と甚に視線を向けてくる。

「それは……」

そう言いながら、甚は言い難そうに前方を歩く魁に視線を向ける。
甚としても、八忍隊の内情を八忍隊メンバーの前で言うのは気が引けるらしい。
とここで、甚の視線に気づいた魁が甚の方へ向く。

「俺は構わないぜ、甚。」

そう言いながら魁は視線を、後方を護衛する様に歩く龍牙に向ける。

「……俺も構わないさ。」

「だそうだ。」

魁の視線に対し、やや遅れながらも言い放つ龍牙の言葉に
甚は改めて愛津メンバーの方を向き、八忍隊について更なる説明を加える。
甚が言うには“颯間八忍隊（さつまはちにんたい）”には、

大きく分けて“武闘派(ぶとうは)”と“抑止派(よくしは)”の2つに分けられるらしい。
武闘派は、文字通り戦いに生きようとする者達で、
方や抑止派は、戦いの抑止の為に雇われる存在とされている。

「最もな、抑止派はアニキとここに居る2人の旦那だけで、後の5人は皆　武闘派だ。
八忍隊の噂となるのは主にこの5人だな。」
「つまり、実質上　頻繁に雇われているのはその5人だけなのか？」

土方の言葉に『まぁな』と頷く甚。
最強と謳われる颯間八忍隊に抑止力の様な穏健派がいるだけでも驚いたが
その実、わずか5人で八忍隊最強の名を守っている事にも驚いた。

「……初音たち、改めて八忍隊を敵に回しちゃいけないって分かった。」
「まぁな。だがオメェらの相手はアニキだったからまだ良かった方だ。
これが“颯間三邪神(さつまさんじゃしん)”だったら……」
「颯間三邪神？」

甚の放った聞きなれない言葉に、愛津一同は首を傾げる。

「……颯間三邪神は知らなくても、
颯間には“神(かみ)”を名乗る超問題児がいるってのは聞いた事あるだろ？」

その甚の言葉に愛津メンバーは『はっ』と思い出す。
颯間には神の異名を持つ、最強最悪の問題児が居るという噂は
この杏の町に住まう者なら聞いた事があった。

「その神の異名を持つ3人の事をな、ここじゃあ颯間三邪神って呼んでんだ。」
「……ひょっとして……その人達って……」
頼子の言葉に、甚は『あぁ』と力なく頷く。
「その3人はな、颯間八忍隊武闘派の中でも最凶と言われてる3人だ。」
その甚の言葉に、愛津メンバーは大きな納得を覚えた。
「……まさかとは思うんじゃが……八忍隊の悪名っちゅーのは……」
「その3人が主だ。」
涼華の言葉に頷きながら言い放つ甚。
「おい甚、話はそこまでだ。」
とここで、無言で道案内をしていた魁の言葉に、一同は視線を魁に向ける。
「見えました。あそこです。」
魁が指差す方に視線を向ける愛津メンバー。
そこには、木製の巨大な門を構える古い和風の屋敷があった。
「あそこが、俺達　八忍隊の家です。」
そう言い魁は、やや足を速めていった。

な日常　《終》』

『～第十七章～　鬼の巣の壮絶

～第十七章～　鬼の巣の壮絶な日常（後書き）

十八話目完成です。
今回は颯間キャラクターのオンパレード！
颯間討学派の大兄貴、高杉蛮作と、その高杉を慕う伊藤出流、
颯間佐学派、杏都見廻り組を率いる佐々木宋三郎、
そして新たな八忍隊メンバー、服部龍牙。
男子キャラクターが益々増える中、愛津メンバーはついに八忍隊の家に到着する。
次回いよいよ剣との対面か！？
どうぞ次回もお楽しみにー！！！！

～第十八章～　八忍隊特別謹慎牢獄（前書き）

前回までのあらすじ
幻八の写真により頼子と桂との間に関係を作った事を土方にバレた挙句、
土方の放った言葉に怒り狂い真選組メンバーを圧倒するも
頼子の説得と同じ颯間八忍隊メンバーである魁により冷静さを取り戻し
真選組に被害を与えた罪で、颯間へと連行さた剣に会う為に
近藤達　愛津メンバーは杏の町の危険地帯、鬼の巣にやって来た際に
様々な颯間の人々と会いながらも、愛津メンバーは八忍隊の魁、
そして新たなる八忍隊メンバー龍牙の案内により、
ついに八忍隊の自宅へとたどり着いたのだった。

～第十八章～　八忍隊特別謹慎牢獄

―杏の町　鬼の巣・八忍隊自宅前―

「ここが、ツルくん達の、お家？」

そう言いながら近藤はその自宅を見つめる。
魁達に案内されてやって来た場所は、巨大な門を構える古い和式の屋敷だった。
年代物なのか、はっきり言ってかなりボロイ。

「んじゃ早速入ろうぜ！」

そう言い紗乃は真っ先に門に手を掛ける。

「あ、ちょっとその扉は……」
「おりゃあぁぁぁ！！！……あり？」

魁が止めようとする中、
紗乃は思いっきり門の扉を押すのだが一行に開く気配がない。

「……押すんじゃなくて、引くんじゃない？」
「それとも鍵が閉まってるんですかね？」

斉藤と芹栖が首を傾げる中、後方にいた龍牙が門の前にやって来た。

「ちょっと失礼しますね。」
「？」

皆が首を傾げる中、龍牙は扉に向かって両手を差し出す。
そして――――――

「――――――――はっ！！！」

龍牙の咆哮と共に、龍牙は両腕で扉を押し込み、無理やり扉をこじ開けた。
『ドシーンッ！』と大きな音と共に扉は全開となった。

「失礼しました、この扉　重すぎて普通の人には開けれないんです。」

そう言いながら説明する魁。

「重いって……」

その言葉をイマイチ信用していないのが土方だ。
いくら重いと言っても、紗乃は真選組の中でも怪力を誇る勇猛な女だ。
その紗乃にすら動かせないと言う事は、一体どれだけ重いというのか、この門は。

「……確かに、相当重い。」

そんな疑問を解決するかのごとく、
伊織が扉を閉めようと押しているが門はビクともしていない。

「もし今後、ここに来る時は呼び鈴を鳴らしてくださいね。」

そう言いながら魁は、龍牙と協力して門を閉めて行った。

「さ、こちらへ。」
「ご案内します。」

門を閉めた魁と龍牙は愛津メンバーを家の中へと案内しようとするが、
愛津メンバーはそこを動かず、自宅内を眺めていた。

「おい、どうかしたのか？」

愛津メンバーの様子が気になった甚が尋ねてみると、
近藤は指を指しながら答えだす。

「ねぇねぇ甚くん甚くん、アレなぁに？」

そう言う近藤の指の先を見る甚。
ここで、この八忍隊の自宅について少し説明しておこう。
まず先程の巨大な門を潜って目に入るのは、２つの建物だ。
１つは２階建ての和風の建造物、母屋だ。
そしてその母屋と廊下によって繋がっている１階建ての大きな建築物がある。
こちらは道場であり、八忍隊による組み手などをここで行っている。
また、庭の方には様々な物がある。
その１つが、混同の視線の先にある、地面に突き刺さる幾つも杭である。

「あぁ、あれはアニキ達の修行道具の１つだよ。
杭の上で腕立てしたり、足腰の動き鍛えんのに使うんだよ。」

甚の説明に『ほぇ～』と感心する近藤。

「お、アレは何ぜよ？」

そこへ近藤に便乗するように涼華が尋ねて来る。
涼華の視線の先には、妙に高い鉄棒と、これまたかなり高い木の柱が立っていた。

「あぁ、それは文字通り鉄棒だよ。色々使い道はあるぜ。そっちの柱も色々使えるぜ。巻きワラにもなるし、登って鍛えるのもありだな。」
「八忍隊って、色々　考えてるのね。」

甚の説明にやちを始めとした愛津メンバーは感心を覚えた。
忍者のやる修行とは、メンバーが思っていた事　以上のようだ。

「……あの、そろそろ良いでしょうか……」
「待て龍牙。」

頃合を見て声を掛けようとした龍牙を、魁は腕を出して止める。

「女性が何かに集中している時に声を掛けるのは無粋だ。もうしばらく待とう。」
「そ、そういうものか……」

魁の言い分に納得した龍牙は、もうしばらく待つ事にしようとする。
が、不意にその視線がある女子――――総詩に向けられるとその体が固まる。

「（あれは……）」

龍牙の目に映ったもの、それは総詩本人ではなく
総詩の頭の上に座るゲンちゃんだった。

「ニャ？」

「ん？どうしたんですかゲンちゃん。」

ゲンちゃん自身も龍牙の視線に気づいたのか、
総詩の頭から降りてくると、龍牙の方へと歩いて行く。

「あっ……」

ゲンちゃんの接近に対し、龍牙はやや驚きながらも動こうとはしなかった。
実は龍牙は、大の猫好きなのである。
故に何故　先程までゲンちゃんの存在に気づけなかったのか
本人自身が気になる位だ。

「ニャー（ボクに何か用？）」

「…か、かわいい……／／／／／／／／／／／／」

「ありゃりゃ、ゲンちゃん可愛いって。良かったですね～♪」

龍牙がつい本音を漏らした言葉に、
ゲンちゃんは嬉しそうに『ニャーン』と鳴き龍牙の肩に乗ってきた。

「え、あ……」

龍牙の肩、そして頭の上が気に入ったのか、
ゲンちゃんはそのまま龍牙の頭の上で寝息を立ててしまった。

「あははは、ゲンちゃんがボク以外の人の頭を気に入るなんて、龍牙さんって、猫が好きなんですか？」
「え？え、えぇ、猫は好きですよ。」

そう言いながら龍牙は頭上に寝むるゲンちゃんの頭を撫でる。
ゲンちゃんは気持ち良さそうに『ニャ～ン』と寝息を立てた。

「クルックー（おーおー、眠っちまったな。）」
「バウ（うむ、良い寝顔だ。）」
「ま、えーんやないか？猫は本来　夜行性やし。」

ゲンちゃんの寝息に、愛津のマスコットメンバーは微笑ましく見守る。
その微笑ましさに、自然と場に優しく静かな空気が流れる……かと思われた。

ドドドドドドドドドドッ！！！！

「な、何だ！？」

不意に地鳴りの様な音が響き、愛津メンバーが驚く中
龍牙と魁、それに甚は顔を見合わせる。

「おい、これって……」
「まさかとは思いやすが……」
「十中八九、我が家が誇るあのバカだ。」

3人（2人と1羽）が頷き合う中、物音は段々近づいて行き、そして――――――

ドバ――――――――――――――――ンッ！！！！！

物凄い勢いで、あの重い門が打ち破られた。そして……

「たっだいま――――――――――っ！！！！！」

門が開くと同時に巻き起こった土煙の中から、
1つの声と共に1人の少年が現れる。
歳は魁達よりもやや低そうに見えるが、
服のボタンを全開にした事でそこから見える引き締まった筋肉はとても年下には見えない。
だが顔の方はやや幼く、あちこちが飛び跳ねたワイルドな金髪に褐色の肌、
さらには靴を履かず素足のその少年は、幼さと野生的な雰囲気を感じさせる。

「お、魁、龍牙、腹減っただ。何か食い物くれ……イテッ！」

魁達にいきなり食い物を要求した少年は、いきなり魁の鉄拳を喰らった。

「勇（イサム）　お前な、帰って来るなりそれしか言えんのか！？」

「ウガ？オラなんか変な事　言ったか？」

魁に勇と呼ばれた少年は首を傾げる。

「あのな！お前は食い物以外　言う事がないのか！？」
「ウガ、ない！」
「即答かよ！！」

勇の即答に魁があきれ果てる中、近藤達は突然の来訪者に付いて行けず
甚に尋ねようと接近してくる。

「ねぇねぇ甚くん、あの子　誰？」
「あの子って……一様アニキ達と同い年なんだけど……」

近藤の言葉にややため息をつきながら甚は言い放つ。

「アイツは“三好（みよし）　勇（イサム）”。
颯間八忍隊（さつまはちにんたい）・猛襲方（もうしゅうがた）を勤めている男だ。」
「やはりそうか……」

甚の回答に納得を覚える愛津メンバー。
事実　先程、勇は『ただいま』と言っていたのだから、ある程度は予想していた。

「うぐぅ……」
「あれ、どうかしたんですか？」
「ニャー（大丈夫？）」

とそこへ、突然　龍牙が腹を抱えてその場に蹲ってしまったのだ。
この事態に、総詩と、先程の音ですっかり目の覚めたゲンちゃんが

心配そうに見つめる。

「だ、大丈夫です……いつもの事ですから……」

そう言い龍牙は懐から粉状の薬を取り出すと、水と一緒に一気に飲み干す。

「龍牙の旦那は生真面目だからな。
身内が何か問題起すとよく胃を痛めるんだよ。」
「へぇ～……何だか土方さんみたいですね～。」
「どういう意味だ！私は胃を痛めた事など……」

『無い！』と言いたかった。
だが、考えてみれば自分も度々　真選組の起す問題に胃を痛めていた時期がある。
紗乃が大暴れして物を壊した事もあれば、
芹栖が妄想を爆発させて暴走した事もあれば、
近藤がお菓子欲しさに駄々をこねる事もあった。
その度にため息をつき、苦労を重ねてきた。
今の龍牙はまさにその時の自分と被る。
それを感じたのか、土方は龍牙の肩に『ポン』と手を置く。

「貴様の心中を察してやる。」
「……それは、どうも。」

一瞬　土方の行動に驚いた龍牙だったが、
彼女が自分を慰めてくれてるんだろうと思い、特に気にしなかった。

「ンガ?所で魁、誰だソイツら。」
「こら！女性に向かってソイツらとは何だ！」

とここで、ようやく愛津メンバーの存在に気づいた勇だったが彼女達をソイツ呼ばわりした事に魁に怒られてしまう。

「この人達は、剣に面会しに来た愛津の人達だ。」

そんな中で、龍牙は勇に愛津メンバーを紹介する。

「あぁ、幻八から聞いてるダ。」

「「え〝っ!!??」」

その勇の言葉に、魁と龍牙は嫌な予感を感じる。

あの最凶最悪の悪魔がこのバカに何を吹き込んだのかとてつもなく心配になったのだ。

「コイツらアレだろ?剣を怒らせた挙句、剣にボッコボコにされた雑魚軍団。」

「お前という奴はあぁぁぁぁぁぁ――――――――っ!!!!!!!」

「あ、あぁ、また胃が……」

悪気0の勇の言葉に、魁は怒りと共にツッコミを入れ、龍牙は胃を痛めた。

「ま、まさかとは思っていたが……勇の旦那、相変わらずのバカ発言だな……」

甚も勇の発言にはあきれ果てていた。

「……おい、甚。」

「あん?」

不意に声を掛けてきた斉藤の方を向く甚。
そこには、静かにではあるが殺気を放ち刀を構える斉藤及び
紗乃、やち、土方達の姿があった。

「おいおい、オメェらの怒りは最もだが、やめとけ、お前らじゃ旦那に勝てん。」
「なにぃ？」

甚の言葉に怒りを隠さない土方。

「勇の旦那は頭はバカだが
純粋な戦闘能力と身体能力に関してはアニキをも上回るんだ。
アニキに勝てなかったオメェらが勝てる訳ねぇだろ。」

その甚の言葉に土方達は言い返す事が出来なかった。
事実、自分達は剣に手も足も出せなかった。
だから他の八忍隊メンバーに勝てる可能性などはっきり言って０に等しい。

「いいか勇！お前は女性に対してデリカシーが無さ過ぎる！」
「でりかしー？……あぁ、自分の考えを口使わずに伝える……」
「それはテレパシーだ！！」
「ウガ？……そんじゃ、瞬間移動……」
「それはテレポートだっ！！！」
「ウガ？」

甚が皆に説明をする中、魁のツッコミに首を傾げる勇の姿があった。

「……確かにバカ。」

「あっ、そういや……」

斉藤の言葉を聞き流し、甚は勇へと詰め寄る。

「勇の旦那。ちょいといいですかい？」

「ウガ？」

「旦那ひょっとして、肉料理店『ヘルジューシー』って所でステーキ肉　食いまくりませんでしたかい？」

その甚の言葉に『ウガ～』と首を捻った勇だがやがて『あっ』と何かを思い出したようだ。

「あぁ、町歩いてたら美味そうな匂いがして、３０分以内なら食い放題って聞いたから食いまくったダ！」

「やっぱ旦那でしたかい。」

その勇の言葉に甚は納得を感じた。

「お前またどっかの店を食い潰したのか？」

「ウガ、美味かったぞ。」

「あのな勇、そう言う問題じゃなくて……」

勇の悪気０の表情にあきれ果てる魁と龍牙。

「ありゃりゃ、大方予想はしてたけど……ん？」

不意に甚は、背後から妙な視線を感じ、後ろを振り向く。

そこには、怒りを露にした近藤と紗乃がそれぞれの武器を手にしていた。

「あ、あの、近藤さん？原田？」
「…今宵の虎徹は……血に飢えてるわね……」
「…そうか……あいつがあたしの食べる筈だった肉を食った奴か…
…」
「ちょ、ちょっと局長！紗乃！？」

明らかに殺気丸出しの2人に流石に驚いたのか
土方達は2人を止めようとするが、2人の耳に届いていない。

「近藤さん落ち着いて！」
「紗乃！いいじゃないのたかが肉ぐらい！」
「ダメだよ歳ちゃん……だって……」
「邪魔すんなやち……」

2人はそう言い武器を構えると同時に口を開く。

「「食い物の恨みは海よりも深い（んだよ）（だ）！！！」」

そう言い近藤と紗乃は勇に特攻を仕掛ける。
紗乃は十文字槍による横薙ぎ払いを、近藤は愛刀―虎徹による上段斬りを
それぞれ勇に向けて放つ。

「ウガ！」
「おっ、おい勇！」

それに気づいた勇は魁が止める間もなく2人に突っ込んで行く。

「（突っ込んできた！？）」
「（何考えてんだコイツ！？）」

その勇の行動に2人は戸惑った。
近藤と紗乃は武器を持ち、特に紗乃の槍のリーチの長さがあるのい対し
勇は武器1つ持たぬ丸腰だ。
リーチでは圧倒的に不利の筈である。
忍者の代表格的武器、手裏剣を使うにしても、普通　距離を取るものである。
だが勇は距離を取る所か、無造作にコチラに近づいてくる。
そして――――

「ウ――――ラ――――――ッ！！！！」

勇は軽く跳び上がり、
まず紗乃の十文字槍の槍に乗っかる様に蹴り込み槍をへし折り、
その勢いのまま裏拳で近藤の虎徹を弾き宙へ舞い上がらせてしまう。

「なっ！？」
「ほぇっ！？」

その事実に、2人はもちろんそれを見ていた愛津メンバーも驚きを隠せなかった。
自分より長いリーチを持つ相手に、
剣（ツルギ）ですら小太刀を使って相手の攻撃を避ける程度だったが
勇は武器を弾き返した、しかも素手で。

「喧嘩　売ったのはそっちダ！怪我してもしらねぇぞ！！
ウ――――ラ――――――ッ！！」

その勢いのまま、勇は拳を近藤に向かって打ち放つ。

「近藤さん！」
「い、いくら何でもマズイですよ！！！！！」
さすがにマズイと判断した真選組メンバーが武器を手に駆け寄ろうとする。
「――――ふっ！」
「くっ！」
だが、それよりも早く動いた2つの影があった。
魁と龍牙だ。
魁は懐より取り出した棒手裏剣と十字手裏剣を勇に向けて投げ打ち、龍牙は近藤と紗乃、そして勇の間に割ってはいると、近藤と紗乃を抱えてその場から猛ダッシュで引いた。
それを本能的に追おうとする勇。
「ウガ！？」
だが勇は不意に何かの視線を感じ、視線を横に向ける。
そこには、数本もの矢が自分に目掛けて飛んで来ていたのだ。
勇はそれを避ける為に横に飛ぶ。
結果、勇は矢及び手裏剣をかわす事に成功する。
「何だ！？」
「この矢は……！」
そして突然の矢に皆が驚く中、魁は冷静に矢の降って来た方を見る。
そこには、この家を囲む塀の上に立つ、見覚えのある男の姿があった。

「帰って来てたのか、乃亜(ノア)！」
「よぉ、俺様の女性(ハニー)達の危機を感じたもんでね。」
魁の言葉にそう言い、男―ノアは『ニヤッ』と微笑んだ。
「と言うか、誰のハニー達だ誰の。」
「ん？もち俺様の。」
魁のツッコミに対しサラリと言ってのけるノア。
「え…えぇ！？そ、そんな、私達まだ会ったばかりで……
あぁダメですよ……風上先輩とで私を取り合うなんて……」
「……芹栖、落ち着け。」
ノアの言葉に妄想を爆発させる芹栖にツッコミを入れる斉藤。
そこへ、ノアは剣をも越える跳躍力で跳び上がり、
それでいてゆるりと、芹栖の近くに舞い降りてくると、
芹栖の手を取り口を開く。
「大丈夫さ、恋とは些細な出会いから始まる事だってある。
さぁハニー、俺様の胸の中へようこそぉ！！」
「お前は棺桶にでもようこそしてろ！」
ノアが芹栖に抱き付こうとしたのを見て、
魁は何のためらいもなくノアに棒手裏剣を投げ打つ。
それに対しノアは『うおっと』と慌てつつも、
手に持っていた鋼鉄板の張られた短弓で弾き返す。
「おいおい、これは俺様のハニー達とのコミュニケーションだぜ？」

「お前の一方的なコミュニケーションなんて却下に決まってんだろ！！」

ノアの言葉に対し即座に却下のツッコミを入れる魁に対しノアは明らかに不服な表情になる。

「おいおい魁、久々にやり合う気か？」

そう言いノアは手に持つ短弓を構え、矢筒の中から1本の矢を取り出す。
その矢は鏃も矢羽も無く、螺旋状の溝を刻んだ鋼鉄製の矢だった。
さらに矢尻の部分には弦(つる)を掛け易いように切れ間が入っている。

「女性の前での暴行は嫌いだが……この際　仕方ないな。」

ノアに対し魁は、懐に手を伸ばす。
その状況に、甚と愛津メンバーは息を呑んだ。
まさか、八忍隊同士の対決を見る事になろうとは思っても見なかったのだ。

「あっ！」

とその時、この状況を見守っていた頼子がうっかり自分の持つ小薙刀を手から滑らせ、地面に『コトン』と落としてしまう。
そして、それが引き金となったが如く。

「ふっ！」
「せやっ！！」

魁とノアはほぼ同時に動いた。
魁は懐から取り出した棒手裏剣を放ち、ノアは即座に3本の鋼鉄の矢を放つ。
それぞれの攻撃は互いにぶつかる事無く、全て的確に相手に向かって飛んで行く。

「ふっ！」
「おらよっと！！」

それに対し魁は横へ、ノアは上へと高く跳び上がり攻撃を避ける。
そのノアの跳躍力に、愛津メンバーは目を見開いた。
何故なら、ノアは軽く屋根をも飛び越えそうな高さまで飛び上がったのだ。

「逃がすかよ！！」

ノアは即座に矢を数本構え、地にいる魁に向かって矢を放つ。

「ふっ！はっ！」

それに対し魁は地を転がりながら矢を避けると、
再び棒手裏剣を取り出し、ノアに向かって投げ打つ。
どんな跳躍力があっても、空中では身動き取れないのが人というものだ。
戦いを見ていた愛津メンバーは誰もがそう思った。
だが次の瞬間、その予想は大きく外れる事となる。

「摩方流遊芸術（まがたりゅうゆうげいじゅっ）――――天馬（てんま）！！」

ノアの行動に、愛津メンバーは我が目を疑った。

ノアが、空中で横へ移動したのだ。
それもまるで空を走るが如く。

「……気の……エネルギー……」

唯1人、頼子だけはその移動法の正体を見破っていた。
ノアの足に気が集中的に集まっているのだ。
その気のエネルギーを利用し、空気中に存在する僅かな気の上を走っているのだ。
それが、摩方流遊芸術・天馬の正体である。

「オラオラオラアァッ！！」

空中を翔るノアは、雨の様に矢を降り注いでいく。
しかもそれは唯の矢ではなかった。
降り注がれる矢の内、何本かは先程から使っている鋼鉄製の矢だがその中に数本、見慣れない矢が混じっている。
先端に鉛の塊、その上に穴の開いた鏃をかぶせ、『ピィィィ』と音の鳴る矢。
さらに不思議な事に、曲がって飛んでくる矢まで見える。

「ちぃっ！」

一方　魁はその攻撃を紙一重で避け続けながら、必死に棒手裏剣を投げ打つ。
だが、どの攻撃も空中を翔るノアにはかすりもしなかった。

「何て戦いだ……」

そんな2人の戦いを見ていた土方は不意にそんな言葉を漏らす。

先日の剣との戦いで八忍隊の強さを痛感した土方だったが
目の前にいる2人、魁とノアの強さもそれに匹敵する強さだ。
とそこへ、ノアの放った2本の矢が土方達の近くまで飛んで来た。
その矢は、1本は愛津メンバーのすぐ近くの地に刺さり
もう1本は近くの木に突き刺さった。

「ここに居ては危険です。どうぞこちらへ。」

そう言い龍牙が皆を安全な場所へ誘導しようとするが
愛津メンバーは戦いのすごさに唖然となり一行に動こうとしない。

「……？」

とここで不意に斉藤は地面に突き刺さった矢を見て
首を傾げながらその矢を抜く。

「斉藤さん？」
「どうしたの初音ちゃん。」
「……何、これ？」

そう言い皆に矢を見せる斉藤。
その矢は一見すると普通の矢に見える。
ノアが抑うつ鋼鉄製の矢と違い、普通に鏃もあれば矢羽もある。
矢尻に弦を引っ掛け易いよう切れ目を入れている事　以外は別に普通だ。
そう思っていた。

「……これ、鏃と羽が変。」
「鏃と羽？」

斉藤の言葉に視線を鏃と羽に向ける一同。
まず鏃だが、妙に曲がっていた。
こんなので真っ直ぐ飛ぶのか？と疑問に思うくらいに。
そして矢羽は妙な位置についている。

「何これ？」
「こんなんで真っ直ぐ飛ぶもんなのかの？」
「飛ばねぇよ。」

そんな愛津メンバーの疑問に答える様に言い放ったのは甚だった。

「真っ直ぐには飛ばねぇよう作られてんだよ。その矢は。」

そう言い甚は説明を開始した。
この矢は『飄(つむじ)』と呼ばれる矢であり、
鏃と矢羽の一定方向に空気抵抗がかかる構造により
曲がる事の出来る矢なのだ。
ただ、射程距離と威力は普通の弓矢の半分程度であり戦闘には向かず
奇襲や援護用に使う矢らしい。

「威力は低いが雨の様に飛んでくる矢の中に
こんなのが混じってたらそれなりに脅威にはなるって訳よ。」
「ほぇ～、面白いねぇ～。」

そう言いまじまじと矢を見る近藤。

「んじゃあ、これは何だ？」

そう言い今度は紗乃が、木に刺さった矢を引っこ抜いて持って来た。
そしてその矢もまた異常だった。

先端に鉛の塊、その上に穴の開いた鏃をかぶせており、
矢尻にはやっぱり弦を引っ掛け易いよう切れ目を入れている。

「こりゃ『風鳴(かぜなり)』だな。」

そう言い甚はそれについても説明をする。
『風鳴』は本来戦用ではない鏑矢(かぶらや)を細工し、
先端の鉛の塊と軌道を安定させる為に被せられた穴の開いた鏃により
凄まじい破壊力と安定性を生み出す矢であり、
穴の開いた鏃から空気が通ることで『ピィィ』と音が鳴る様になっており
攻撃には向いているが奇襲などには使えない攻撃特化の矢らしい。

「因みに、ノアの旦那が普段からよく使ってんのが
あの鋼鉄製の矢羽の無い矢『嵐武(らんぶ)』。
矢羽の代わりに螺旋状の溝を刻む事で命中度と飛行距離を伸ばした矢でな
飛行距離こそ風鳴にやや劣るが
破壊力・命中精度・飛行距離、全てにおいてバランスのとれた矢だ。」

そう言い視線をノアに向ける甚。
ノアは空中を移動しながら嵐武を中心的に風鳴と飄を使い分けながら撃ち放つ。
それに対して魁は巧みに矢を避けつつ、
降り注ぐ矢の合間を見きって手裏剣を投げ打つ。
だが、その手裏剣はノアに届く事無く地に落ちていく。
宙を舞う者と地を駆ける者、弓矢と手裏剣、そのリーチの差は大きい。

「そらそらそらあぁ……っ！！？」

だが不意にノアは矢を放つ手を止め、屋根の上へと着地する。
正し、矢は一本　風鳴を構えた状態で。

「？どうしたんだろ？」

ノアの攻撃停止に近藤をはじめとした愛津メンバーは首を傾げる。
そんな中でただ1人（1羽）、八忍隊の全貌を把握している甚だけはこの状態がいかなる状況なのかを察していた。

「魁の旦那、すでに張っていたのか。」
「張る？」

その甚の言葉に土方が頭上に？マークを浮かべる中
甚は視線を魁とノアの間合いに向けていた。

「……オメェいつの間に張ってたんだ？」
「最初からさ。お前があのまま調子に乗ってくれれば良かったんだがな。」

そう互いに言い放つ魁とノアだが、
愛津メンバーには一体何の事だがさっぱり分からなかった。
と不意に風が吹き、2人の間合いの中を数枚の葉が通り過ぎようとした。
だがその瞬間、葉は真っ二つに斬られ、そのまま風に飛ばされていった。

「な、なんですか今の！？」
「……葉っぱが割れた？」

その出来事に愛津メンバーが驚く中、甚は冷静に言い放つ。

「魁の旦那の周りを良く見な。」

甚の言葉に愛津メンバーは目を細めながら魁の周りに視線を向ける。

「……ん？」

そして土方は気づいた。

先程　葉っぱが斬れた所に太陽の光が反射して糸の様な物が見える事に。

そしてその糸らしき物が、魁を中心に辺りに張り巡らされている事に。

それはまるで蜘蛛の巣の様に。

そしてそれは辺り一面に散らばっている、棒手裏剣に結ばれていた。

「あれが旦那の必勝法だ。」

そう言いながら甚は視線を手裏剣と糸に向けながら言い放つ。

魁は得意の手裏剣術を応用し、棒手裏剣に鉄をも斬り裂く特殊な糸、“鋼糸（こうし）”をくくり付けて投げ打つ事で

蜘蛛の巣の様に鋼糸を張り巡らす暗殺戦法を得意としているのだ。

「後は敵がその鋼糸に絡まって斬られるもよし、

鋼糸でを利用して飛び上るのもよし。

それが手裏剣術を始めとした八忍隊随一の暗器使い、

暗殺の堕天使（ブラック・エンジェル）、藤林　魁の戦い方だ。

あのままやってりゃ、いくら空を走る事のできる男

『蒼き射手座（ブルー・サジタリウス）』と呼ばれるノアの旦那でもやばかったかもしれねぇ

ぜ。」

そう言いながら、甚は再び視線を魁とノアに向ける。

「相変わらずセコイ戦い方するな魁。
それで颯間一の紳士って呼ばれてんだから笑えるぜ。」
「忍びとは元来セコく、どんな方法を使っても勝つものだ。
それに俺は自分の事を紳士と言った事は一度もない。」

そう言いながら魁は腕を動かす。
その魁の行動にノアは注目する。
魁は手裏剣術を始めとした暗器の使い手だ。
その動作1つ1つに暗器を発動させる行動だったりするのだから
ノアは気を抜く事ができない。

「（暗器使ってのはこれだから気が抜けねぇぜ。
しかもこいつの場合　鋼糸（コイツ）があるから遠距離戦でも何が起こるかわかりゃしねぇ。）」
「（俺には鋼糸があるとは言えこれ以上　距離を取られるとさすがに厄介だ。
さて、どうしたものか……）」

ノアと魁は互いに構えながら一向に動こうとしない。
そしてその緊迫した空気に、
愛津メンバーはもちろん甚も勇も一切　言葉が出ずにいた。

「あれ？」
「ウガ？」

だが不意に、近藤と勇が鼻を『ヒクヒク』させながら視線を母屋の

方へと向ける。
そこから白い煙とともに美味しそうな匂いが伝わってくるのだ。

「くんくん……ほえ～、おいしそうな匂～い……」
「ンガンガ、これ龍牙のメシの匂いダ。……こりゃ炒飯ダ、美味そうだ……」

2人の嗅覚は余程　優れているのか、
匂いに釣られて口から大量のヨダレが滝の様に流れていく。

「おっ、ホントだうまそうな匂いがこっちの方から……」
「ちょっと紗乃!?どこ行くきよ!」
「近藤さん!?あぁ、こんなにヨダレが……」

勇と近藤、さらにはそれに便乗した紗乃までもがヨダレを流し
それに愛津メンバー、主に真選組メンバーがツッコミを入れる。
そして、そんな3人のヨダレの一滴がこぼれおちた時、
ノアと魁は互いの武器を手についに動く。

「（いくぜ!）」
「（勝負!!）」

互いの思いと共に、2人はついに動く。
ノアは構えていた弓矢、嵐武を打ち放ち、
魁は隠し持っていた札、『爆竹札（ぼくちくふだ）』を取り付けた手裏剣を投げ打つ。
爆竹札（は気によって発動する札の一種であり、
時間がたつと爆発する仕組みになっている。
そして手裏剣が矢と激突した瞬間、爆竹札の爆発により矢と手裏剣は粉々になり
その一瞬の隙に魁は張り巡らした鋼糸を利用して跳び上がり、

気づいた時にはノアの目の前にまで移動していた。

「ちぃっ！」

しかし、それを予測していなかったノアでは無く
懐から小太刀を抜き放ち魁に向って斬り付ける。
それに対して魁もまた隠し持っていたクナイを手にノアに斬り掛かる。

「せやあぁっ！！」
「そりゃあぁっ！！！」

「「「「「！！！！？？？」」」」」

そして2人の武器は、互いの喉元に向けられ
2人は屋根の上で完全に降着状態となってしまう。

「相変わらず接近戦は弱いなノア。」
「テメェ人のことが言えるかよ！」

そう言い互いに引く気配のない魁とノア。

「はい、そこまで。」

とそこへ、都合良くタイミングを見計らった様に母屋から龍牙が出てきた。

「2人共その辺にしとけ。昼飯もできたぞ。」
「ウガ！メシだーっ！！」

その龍牙の言葉に真っ先に反応したのは勇だった。

「メシー！メシ――ッ！！」

「はいはい、ご飯は逃げやしないから落ち着けって。」

そう言い昼飯の存在に興奮気味の勇を宥めながら、
龍牙は視線を愛津メンバーへと向ける。

「よろしければ、皆さんもどうぞ。多めに作っておきましたから。」

「えっ！？良いの！！？」

「ホントか！？オメェ良い奴だなぁ♪」

龍牙の言葉に近藤と紗乃は喜んで同意する。

「でも良いんですか？」

「こんなに大勢では、量を作るのも大変でしたでしょ？」

だがここで良識ある芹栖と心がそう言い遠慮しようとする。
それに対し龍牙は特に気にせず言い放つ。

「構いませんよ、俺　料理するの好きですし。
それを食べてもらえるなら俺は嬉しいですから。」

そう言いほほ笑む龍牙の笑顔は、
剣や魁にも匹敵する美しさ……と言うより可愛さがあった。

「ふむ…可愛い系か……」

「え？」

「うんん！こっちの話！」

そう言いやちは手を振り『何でもない』という事をアピールする。

「で、でも、料理を作ったらそれだけお金とかも掛かるんじゃあ……」

そう言い今度は頼子が料理にかかるお金の心配をしてくる。

「あぁ大丈夫ですよ。料理と言っても簡単な炒飯ですから。それに魁とノアから罰金しますからそこから金を出せば良いですし。」

「「はあぁっ!!?」」

その龍牙の言葉に今度は武器を仕舞った魁とノアが声を上げた。

「待て!どういう事だ龍牙!?」

「そうだぜ!俺様のハニー達とのデート金が無くなるじゃねぇか!!」

「残念だけど、爺ちゃんと話して決めたんだ。」

そう言い龍牙は魁とノアが戦った所を指さす。

そこには弓矢に手裏剣が地面や塀の壁、松の木などに刺さっている。

「今後　些細な事で喧嘩して壁や床などに穴を開けたりした者は罰金。

特に爺ちゃんが大切にしている松の木を傷つけた場合は罰金は倍になるってね。」

「「なっ……」」

龍牙の言葉に唖然となる魁とノア。

「文句があるなら聞くぞ？最近　胃痛でストレスが貯まってるからな。」

そう言い龍牙は手に朱色の短槍を握りしめる。
その龍牙の行動に息を飲む魁とノア。

「……仕方ないか。」
「ちぇ。」

そう言いながら2人は観念して母屋の食堂へと向かった。

「……何かあっさり言う事を聞いたな。」

そう言いながら、先程の龍牙達のやり取りを見ていた斎藤が不意にそんな事を呟く。
2人の騒動から考えて、3人による乱闘が起こるのではと思っていたのだが
意外とあっさり納得した事に疑問を浮かべたらしい。

「まぁそりゃ、2人は分かってるからな。龍牙の旦那を怒らせたらやべぇし。」
「やばいって、どの位だ？」

甚の言葉に首を傾げる土方。

「普段　胃痛によるストレスがあるからかね。
たぶんキレた時の龍牙の旦那はアニキより怖い。」

その甚の言葉に土方は勿論だが、愛津メンバーは驚きと納得を覚えた。

あの優しかった剣ですらキレたら怖く、そして強かったのだ。
同じ八忍隊メンバーがキレたら怖かったとしても納得はいく。

「まぁそれに理事長（ジジィ）の命令って事もあるしな。」
「ジジィって、剣くん達の祖父、颯間学院の理事長さんじゃな？」

甚の言葉に反応した涼華の言葉に『そうだ』と返す甚。

「どういう方なのですか？」

それに続き心も興味がある様に聞こうとする。
討学派にとって、颯間の理事長の情報は貴重である。
理事長同士を納得させれば、共学化は早々になるからである。
だが、甚のクチバシから出てきたのは予想外の言葉だった。

「ジジィはな、アニキ達　八忍隊が怪物だとするなら
その怪物を生んだ化け物の長みたいな奴だな。」
「ば、化け物…ですか？」
「おう。事実アニキ達　総出でジジィに何度か挑んでんだが1度も
勝った事がねぇ。
ともかく強えんだ、あのジジィは。」

その甚の言葉に愛津メンバーは唖然となった。
あの自分達が手も足も出なかった剣を始めとした八忍隊　総出でも
勝てない？
一体どういう人物なのか。
そんな疑問を抱えながらも愛津メンバーは甚の案内の元
母屋へと歩むのだった。

―八忍隊自宅・母屋１階―

「う～ん、おいしかった！」

そう言いながら近藤は持っていたスプーンを皿の上に置き
『ごちそうさま』と満足そうにほほ笑んだ。
母屋の１階の部屋の大きな食卓にて龍牙の作った大量の炒飯を食べ終えた
愛津及び八忍隊メンバー。
特に愛津メンバーは愛津学園の食堂にも匹敵する
龍牙の料理の腕前に軽く驚きを感じていた。
龍牙曰く『大抵の物は作れるけど一番得意のは中華系』だそうだ。

「美味かったぜ服部！」
「お粗末さまです。気に入ってもらえて良かったです。」

紗乃の言葉に龍牙は『ニッコリ』とほほ笑む。
そのほほ笑みは例えるなら慈愛に満ちた母の様だった。

「ほぉ、おんしゃあまるで優しい母親の様な奴じゃの。
どうじゃ、おんしも愛津学園に来んかの？」
「おい坂本、貴様　何を勝手な……」

涼華の発言に対し『ギロリ』と睨みつける。

「いえ、俺は生徒会がありますし……」
「それにこれ以上　八忍隊の拮抗を崩す訳にはいかないしな。」

「拮抗？」

その魁の言葉に首を傾げる伊織。
それに対し口、もといクチバシを開いたのは甚だった。

「言ったろ、アニキと魁の旦那、それに龍牙の旦那は他の５人を止める抑止力。
アニキが抜けた穴をこれ以上　広げれないって訳よ。」

つまり、抑止力の３人の内　の１人である剣が今抜けている穴をこれ以上　広げない為にも魁と龍牙の存在は絶対と言う事である。

「そっかぁ～、魁くんもリュウくんも愛津に来れないんだねぇ。」
「えぇ、勇とノア（バカ　アホ）をほっとく訳にはいきませんし。」
「おい誰がアホだ誰が！！」
「ウガ、手間のかかるバカがいるもんだな。」
「いや、そのバカはお前だからね勇。」

『ワイワイ、ガヤガヤ』と騒がしくなっていく八忍隊メンバー。
それを見ていた総詩はゲンちゃんの頭をなでながら『くすり』とほほ笑んだ。

「何だかこうして見てると本当に愛津の…と言うより僕達みたいですねぇ～。」
「にゃ～ん（ホントだね。）」
「言われてみれば、確かにどこか似てますね。」

総詩の言葉に頷く頼子。
確かに見てみれば、皆でわいわい騒ぎ、それをツッコミを入れつつもこの状況を楽しんでいたりと、確かにどこか真選組に似ている。

「何をバカな。どこが私達に似ていると言うのだ？」
「そっかなぁ～、私は楽しい所とか似てると思うよ？
あ、このお菓子貰っていいですか？」

否定的な土方に対し近藤は笑顔で答えながら、龍牙の出したお菓子に手を伸ばした。

「あ、あの、私達、本来の目的を忘れてませんか？」

とそこへ頼子が自分達の本来の目的を告げる様に言い放つと、他の愛津メンバーは『あっ』と今頃になって思い出した様だ。
そう、自分達が遥々　鬼の巣までやって来たのは謹慎中の身である剣に会いに来た事なのをすっかり忘れていたのである。

「いけない、すっかり忘れてたわ。」
「……無理もない、色んな事があった。」
「とと、兎も角　早く風上先輩に会いに行きましょう！！！」

芹栖の言葉に全員が頷く。
否、そこにいる全員がでは無かった。
約2名、魁とノアだけは互いに視線を向け合い話し合っていた。

「どう思う？」
「どうもこうも、あの剣（アホ）がそう簡単に会うかねぇ～？」

ノアの回答に『だよなぁ～』とかくりと頭を下げる魁。
その言葉に、愛津メンバーは首を傾げるのだった。

―八忍隊自宅・裏庭―

八忍隊自宅には、林に囲まれた裏庭がある。

いや、それはもはや林とか裏庭という領域を超えて、密林の様だった。

様々な木々が生え、草が生い茂り、怪しさが漂う樹海の様な裏庭だった。

そう、ただ1点を除けば。

「……なに、これ。」

「見て分かんねぇダか？温泉だ。」

斎藤の言葉に普通に回答する勇。

そう、そこには脱衣所などが設備された温泉があったのだ。

「そんなものは見ればわかる！問題はなぜ温泉があるかと言う事だ！」

「ウガ、そこにあるから！」

「勇、それ答えになってねぇよ！！」

土方に対してシンプルに言い放つ勇にツッコミを入れる魁。

「旦那、この温泉　掘り当てた張本人がそんな説明でどうするんすか。」

「え、これって勇さんが掘ったんですか？」

甚の言葉に首を傾げる芹栖に、甚は事の成り行きを説明する。

今から数年前、勇はＴＶで地に埋まっていた財宝を掘り当てた番組を見ていて
その影響で試しに自分も掘ってみようとしたらしい。
その際、何となくここに埋まってる気がすると言う理由で３日間掘り続けた結果、
湯量豊富な温泉を掘り当てたのだ。
これにより温泉を露天風呂に改造し、
以来　この温泉が八忍隊自宅の風呂場となっているのだ。

「ですが、温泉は相当　掘らないと出ない筈では……」
「勇のパワーと体力は八忍隊の中でも群を抜いてますら。
お陰でガス代の節約にもなりますよ。」

桂の疑問に台所事情を言いつつ苦笑する龍牙。

「まぁ、それはともかく。剣の元へ急ぎましょう。」

そう言い皆を案内する魁。
そう、皆がこの裏庭にいるのは、別に密林を探検する為でも
露天温泉を見たり入る為でもない。
この樹海の奥深くに、八忍隊用の謹慎部屋があるらしく
剣はいまそこにいるらしい。

「しっかし、一体どういう所にあるんだ、その反省部屋ってのは。」
「まぁまぁハニー、俺様達を信じて付いて来なさいってね♪」

紗乃の言葉に対しウインクしながら言い放つノア。

「おい貴様、そのハニーというのはやめろ！気色が悪い！！」
「照れるなよハニー。」

「照れてない！それとハニーと呼ぶな！！」

ノアのチャラけた態度に怒りをあらわにする土方。
土方　歳緒、男嫌いで有名故にノアの様にチャラけた男は特に嫌悪する様だ。

「お前な、女性を一々ハニーって呼ぶのいい加減やめろ。最悪の場合、変質者に見られるぞ。」
「おいおい、これは俺様なりのハニー達へのコミュニケーションの取り方だぜ？」

ノアに忠告を告げる魁だが、ノアは『それがどうした』と言わんばかりに言い返し
まったく気にも留めていなかった。
魁とノア、女を思う心は同じでも接し方は全く違う様だ。

「おい待てや、誰の何が同じだって？
俺様こんなエセ紳士と一緒にされたくないぜ。」
「俺も同意だ。誰がこんな煩悩生物と。」

2人の間に、見えない火花が飛び散る。

「……似た者同士？」
「ま、ケンカする程　仲が良いって奴だな。」

「良くありません！」「良くねぇよ！！」

斎藤と甚の言葉にツッコミを入れる魁とノア。

「付きました。」

と、そんなこんなをしている内に、先頭を歩いていた龍牙が足を止める。
そこには、巨大な大樹の根に覆い尽くされた黒い鋼鉄の扉のついたコンクリート製の小さな建築物があった。
龍牙は懐から鍵を取り出すと、扉の錠を開け、黒い扉を『ギィィィ』と音を立てながら開ける。
そこには、地下へと続く階段があった。

「それじゃ、俺ちょっと剣を説得してくる。」
「大丈夫なのか龍牙。あいつ相当　頑固だぜ？」

ぞのノアの言葉に『やってみる』とだけ言い龍牙はその地下へと降りて行った。

「あ、あの……」

とそこへ、そのタイミングを見計らった様に頼子がおずおずと八忍隊メンバーに声をかける。

「何でしょうか？」
「何だいハニー？」

頼子の声に即座に反応する魁とノア。

「……やっぱこの2人、根本は似てる気がするぜ。」
「にゃー（だよね。）」

その隣で小声でそう呟く甚とゲンちゃんであった。

「あ、あの、この地下は、一体……」

その頼子の言葉に魁とノアは『あ～』と顔を見合わせる。

そりゃそうである。

こんないかにも怪しげで危険な香りの漂う暗闇への入り口の様な物を見れば

誰だって不安な気持ちになる。

事実、頼子はもちろん他の愛津メンバーも

視線をこの地下への入り口から外せないでいる。

「ウガ、これ謹慎部屋、“八忍隊特別謹慎牢獄（はちにんたいとくべつきんしんろうごく）”。」

そんな愛津メンバーの疑問に答えたのは勇だった。

最も、かなり簡潔な答え方だったが。

「勇、言うのはいいがちゃんとした説明をしろ。」

「ウガ？」

「ウガじゃねぇよ、ハニー達が困惑すんだろ！」

意味が分からない、とでも言いたげな勇の態度に、魁とノアがツッコミを入れる中

甚は愛津メンバーの方を向きクチバシを開ける。

「まぁ、簡単にいえばな、ここが八忍隊の謹慎部屋なんだよ。」

そう言いながら、甚はこの八忍隊特別謹慎牢獄について説明しだす。

この颯間の地には、かつて1つの城があったらしいが

戦火により城は燃え落ちてしまったのだが、

その城に設備されていた地下の座敷牢だけは奇跡的に残っていたのだ。

そして、その地に建ったのがこの家であり
偶々その地下牢を見つけた颯間学院理事長、島津　隼人は
この地下牢を改造し、自分の孫達が悪さをした時の
反省部屋にしようと考えたのである。
そして、今でも八忍隊が問題を起こすと
八忍隊はその地下牢へと入れられるのである。

「中に一切の光はねぇ。アニキ達は忍者の訓練で暗闇でも目が利くが
時の流れも分からねぇ上に、特殊な罰も付くからなぁ。相当きつい
ぞありゃ。」
「罰って、謹慎以外に何か付くんですか?」
甚の説明に首を傾げる芹栖。

「あぁ。代表的な例は、2・3日の断食だな。」

その甚の言葉に『断食!?』と信じられないといった表情をする近
藤と紗乃。
まぁ、食いしん坊の2人にとっては断食など考えられないのだろう。

「まぁ、普通ならその程度　何だがな……」

とそこへ、勇へのツッコミを終えた魁達が会話に入って来た。

「あいつ、ハニー達に刀向けたのをよっぽど悔いてるみたいでさ、
本来なら謹慎中の内　3日間　断食の予定を、謹慎が終わるまでに
しやがったのさ。」
「ウガ、剣この1週間、水一滴　飲んでないダ。」
その八忍隊メンバーの言葉に、愛津メンバーは硬直した。

謹慎処分の場所だけでも驚いていたが、それに加え剣が断食を取っていたとは
思いもよらなかったのだ。

「剣ってば、よっぽど思いつめてたのね……」
「ま、俺様に言わせれば、ハニー達に怪我させたんだから
死刑になってもいいくらいだぜ。」

やちの言葉にそう言い放つノア。
それに呼応する様に魁は近藤及び土方の前へとやってくる。

「ノアに同意する訳ではありませんが、
俺も女性に手を出すのはどうかと思っています。ですが……」

そこまで言い魁は一旦言葉を区切り、改めて真剣な眼差しで言葉を発する。

「今アイツがそれだけ皆さんに迷惑を掛けた事を悔やんでいる
と言う事だけはご理解していただきたい。」

そう言い軽くお辞儀をする魁。
この魁の行動及び言葉に、近藤達　愛津メンバーは改めて
魁という人物への評価を更に上げるのであった。

「おい。」

とそこへ、地下から龍牙が戻って来た。

「何とか説得した。面会できますよ。」
「よし、勇！」

龍牙の言葉に頷いた魁は勇に声を掛ける。
それに対し勇は、謹慎部屋の横へ回りもう1つの扉を開ける。
そこには、1台の自転車エルゴメーターの様な物が設置していた。
それに勇が乗り、ペダルをこぎ始めると地下への階段の電気に明かりが灯された。

「自家発電ですか？」
「えぇ、電気代の節約と筋肉作りの為に。」

芹栖の言葉にそう返す龍牙。

「さ、ご案内します。いくら勇でも無限の体力がある訳ではありませんので。」

そう言う魁の導きにより、愛津メンバー及びノアと龍牙は
地下への階段を降りて行った。

―八忍隊自宅・八忍隊特別謹慎牢獄内―
コンクリートで覆われた、鋼鉄製の牢獄。
ここはかつて、古い石垣跡に囲まれた、歴史臭さの漂う古びた牢獄だったが
颯間男子学院理事長・島津　隼人の手により改築され
八忍隊の謹慎部屋となっている。
光は一切なく暗闇に包まれ、今が一体何月何日の何時何分なのか
それすら分からない無限の暗闇。
そう、つい先程までは。

今では明かりが輝き、程々に明るい。
それ故、暗闇に慣れる忍びの訓練を受けていない愛津メンバーでも普通に中を歩く事ができる。

「ここが、謹慎部屋……なんだ。」
「確かにこりゃ、部屋ってより牢獄そのものだな。」

皆が謹慎部屋の物々しさに目を奪われる中、頼子と桂は先走る様に歩いて行く。

「剣さん……」
「剣様……」
「御2人共、落ち着いてください。」

そんな2人に声を掛ける魁だが、2人の足は止まらない。
2人にとって、自分達のせいで剣が謹慎となったと言う思いが強い故か
一刻も早く剣に謝罪したい気持ちでいっぱいだったのだ。

「っ！！」
「あれは……」

とここで2人、否、愛津メンバーは気づいた。
1番奥の牢獄に、明かりで白銀に輝くものがある事に。
そしてその奥に血の様に紅く、澄み切った水の様に蒼い輝きがある事に。
見間違える筈がなかった。
あの輝きは、あの美しさは、薄暗い牢獄の中でも決して見間違える筈のないもの。
時に皆を助けてくれた優しい輝きを持つ者。

「剣さん……」

今、風上　剣との再会が迫る。

慎牢獄　《終》』

『～第十八章～　八忍隊特別謹

～第十八章～　八忍隊特別謹慎牢獄（後書き）

十九話目完成です。
今回の話で、さらなる新キャラクター、勇が登場。
さらにはノアも再び姿を現し八忍隊同士の戦いも勃発と
熱い展開の多い今回のお話で、八忍隊の自宅も登場！
モデルは『史上最強の弟子ケンイチ』の『梁山泊』をイメージしてみました。
そしてついに我らが剣との再会！！
どうぞ次回もお楽しみにー！！！！

～第十九章～　再会と謝罪と黒幕（前書き）

前回までのあらすじ
幻八の写真により頼子と桂との間に関係を作った事を土方にバレた挙句、
土方の放った言葉に怒り狂い真選組メンバーを圧倒するも
頼子の説得と同じ颯間八忍隊メンバーである魁により冷静さを取り戻し
真選組に被害を与えた罪で、颯間へと連行さた剣に会う為に
近藤達　愛津メンバーは杏の町の危険地帯、鬼の巣にやって来た際に
様々な颯間の人々と会いながらも、八忍隊の自宅に到着。
剣と同じ八忍隊メンバーである魁・龍牙・ノア・勇の案内により
愛津メンバーはついに剣のいる謹慎牢獄へとたどり着く。

～第十九章～　再会と謝罪と黒幕

―八忍隊自宅・八忍隊特別謹慎牢獄内―
コンクリートで覆われた、鋼鉄製の牢獄の通路で愛津メンバーは
一番奥の牢獄の中で輝く存在に目を奪われていた。
牢獄の中で廊下の電球の明かりにより、白銀に輝く無造作に伸びた
髪と
その髪の奥に輝く焔の様な紅と澄み切った海の様な蒼の瞳は
薄暗い中でも輝いている。
長い期間の断食により体はガリガリ、
美しく輝く髪は整われず無造作に伸ばされているが、
その白銀の髪と紅と蒼の瞳だけは見間違える筈がなかった。

「剣さん！」
「剣様！！」

真っ先に反応したのは頼子と桂だった。
2人は真っ直ぐに剣のいる牢獄へと走り出す。

「あ、待って頼子ちゃん！」
「お、おい、心　待つぜよ！！」

それに釣られて、やや遅れながらも近藤・涼華及び他の愛津メンバ
ーも走り出す。

「あぁ、皆さん落ち着いて。」
「良いじゃないか。皆さん剣が心配だったんだよ。」
「けっ、俺様　激しくジェラシー。」

そんな愛津メンバーの反応を見て、龍牙は皆を落ち着かせようとし魁は微笑ましく見守り、ノアは剣に嫉妬の炎を燃やしていた。
そんな中、いち早く動いた頼子と桂は牢獄で塞がれてるとは言え剣の前に行くと剣の安否を確認した。

「剣さん……」
「……お久しぶりです。」

頼子の呼び掛けに剣はほんの少しほほ笑みながらそう言い放つ。

「あぁ、剣様、こんなにお窶(やつ)れになられてて、おいたわしや。」

そんな剣の腕を見ながらそう言い放つ桂。
1週間　近い断食で剣の体はかなり痩せ細り
あの細くも逞しかった筋肉も肌の艶も失われていた。

「大丈夫です、1週間の断食は今に始まった事ではありませんから。」
「でもでも、ツルくんすっごく痩せちゃってるよ?」
「お前良く1週間も断食なんてできたな。あたしならぜってぇ無理!」

心配する皆に対し苦笑いで答える剣だがあまり説得力がなく、
尚且つ薄幸的な微笑みがかえって皆を心配させてしまった様だ。

「そんな事よりも…」

とここで剣は、即座に正座の体勢を取ると手を地にちけ頭を大きく下げた。
所謂、土下座だった。

「ちょ、剣くん!?いきなり何ぜよ!?」
「この度は本当に申し訳ありませんんでした。」
いきなり頭を下げた剣に驚く涼華だったが、剣の放った言葉に全員が納得を覚えた。
魁達の話からも剣が先日の一件を大いに悔やんでいる事は何となく察してはいた。
そして何より、剣は物事を形から入る事が多い。
ここでの謹慎は勿論だが、断食に今やっている土下座などがその証だった。
「……ツルくん。」
そんな中、真っ先に動いたのは近藤だった。
「ツルくんが反省してるのはよく分かったわ。だから顔を上げてくれる?」
この近藤の言葉に、剣はゆっくりと顔を上げる。
「それじゃぁねぇ〜、1つお願い聞いてくれる?」
「自分にできる事なら何なりと。」
近藤の言葉に実直な剣は即座に答える。
「近藤さん、何をするんでしょうね?」
そんな近藤の行動に首を傾げる総詩。

「分からん。だが近藤さんの事だ、何らかの考えあっての事だろう。」

そう言いながら土方は『ニヤリ』と暗く微笑んだ。

「まぁ、私だったら処罰として奴を奴隷にしたりサンドバックにする所だがな……」

「ふ、副長さん、それは……」

この土方の発言に頼子は哀願する様な瞳で見つめてくる。
頼子としては剣が自分のせいでドSな土方に責められるのが耐えられないのだろう。

「えぇっ!?どど奴隷って……そんな、風上先輩が副長に責められるんですか!?
そして一生、副長の性奴隷にされちゃうんですね!!??」

「……芹栖、落ち着け。どう妄想すればそうなる。」

土方の言葉に妄想を膨らませる芹栖に斎藤がツッコミを入れる中、やちが『でもさぁ』と土方に視線を向けながら言い放つ。

「今回の騒動、原因が剣にあったとしてもさぁ
剣の怒りのスイッチを押しちゃったのは副長の自己責任じゃないの？」

「な!?いやしかしあれは……」

やちの言い分に慌てる土方。
流石の土方も、関係ない颯間の理事長への侮辱に関しては反省していたらしく
言葉が出てこない。

「……どう考えても、剣の怒りという地雷を踏んだのは副長。」
「……言えてるな。」
「ニャー（うんうん）」
「クルックー（副長、素直に認めろや。）」

慌てる土方に続けざまに言い放つ斎藤・伊織・ゲンちゃん・谷さんの言葉に
土方は完全に言葉を失った。

「そうでっせ副長ハン。
責任とって副長ハンがワイの奴隷になるっちゅー方向デ……」
「貴様は黙ってろ！！！」

そして毎度のパターンと言うか、余計な事を言ったカンリュウサイは土方の斬撃に散るのだった。

「はいこれ。」
「？」

そして後ろでそんな会話が繰り広げられる中、
近藤はポケットからあるものを取り出し剣に手渡した。

「これは……」

それは、１つの袋だった。
その中には近藤が先程　母屋の食卓でもらった龍牙手作りのお菓子が入っていた。

「先リュウくんに貰ったの。おいしいよ。」

「でも、俺は……」

貰ったは良いが如何すればいいのか悩む剣。
今　自分は断食をしている、水だろうと口にする訳にはいかない。
だから近藤から受け取った（作ったのは龍牙だが）菓子を食う訳にはいかない。

「ツルくん。ツルくんが反省してるのは良く分かってるわ。
だからもう良いの。
ちゃんと食事を取って、また元気な顔を見せて欲しいの。
それが私のお願い。」

そう言い『ニコッ』とほほ笑む近藤。

「剣、爺ちゃんからは3日過ぎたら断食をやめていいと言われてるだろ？」

とそこへ、近藤に便乗する様に魁が言い放つ。

「何より、女性が許すと言いお前を気遣ってくれてるんだ。
そこは素直に言う事を聞き入れるべきだぞ。」
「ま、それに関しては俺様も同意だわな。」

魁に続きノアも賛同の言葉を言い放った。
さらにそれを待っていたかの様に、龍牙が剣へと近づくと
懐から竹製に水筒を取り出した。

「剣、そのお菓子はお茶と一緒に食べるといいよ。」

そう言い剣に水筒を手渡す龍牙。

「……ありがとう……ゴメン。」
「ったく、お前は謝り過ぎだぜ。もっと気楽に行けよ。」
「ノア、お前はもう少し自分の行いに罪悪感を感じろ。」
ノアのチャラチャラとした態度に呆れながらもどこか安堵した表情で言い放つ魁。
「さて、ハニー達との仲もまとまった所で……」
とここで不意に様子を見ていたノアが動き、剣に詰め寄る。
「ノア？」
「剣、ちょっと耳貸せ。」
そう言い剣に『ちょいちょい』と手招きしてくるノアに首を傾げながらも
剣は耳を傾けた。
「お前さ、童貞　捨てた瞬間ってどんな感じよ？」
「っ！！！！！？？？？？？／／／

そのノアの言葉に剣の脳裏に数日前の風呂での出来事が浮かび上がり顔が一気に熱してしまった。そして……

「きゅぅ～……」

倒れた。

「ちょ、アニキ!!?」

「きゃぁ、つ、剣さん!!?」

「剣様!!?」

「お、おい、ノア!お前　何をした!!?」

「べっつに～、唯　俺様よりも先に童貞　卒業した感想を聞いてみただけよ?」

そう言いながらノアは桂と頼子を眼中に捉えるといやらしそうな視線を向けた。

「まぁ……／／／

った。

「おい、って言うか何かマジで部屋が暑いぞ!?」
「マズい!御2人もそうだが薬の無い状態での剣の体温が
部屋全体の温度を上げまくっている!!」
「アニキ!アンタどんだけ純情なの!!?」
「お前なぁ、童貞　卒業したんならもうちょっとマシになれや。」
「お前が余計な事を言ったせいだろうが!!!」
「あぁ…また、胃が……」
「くそ!直ちに“冷媒札(れいばいふだ)”と胃薬を!!」

剣の体温より放たれた温度は、様々な混沌(カオス)をもたらすのであった。

―八忍隊自宅・八忍隊特別謹慎牢獄前―

「お帰り～。あれ、皆　何で汗かいてるダ?」

地下の八忍隊特別謹慎牢獄から戻って来た汗だく状態の魁達を見て
発した
勇の最初の言葉がそれだった。

「ちょっと、地下がサウナの様になってな……」
「ウガ?」

魁の言葉がイマイチ理解できない勇は首を傾げた。

「えへへ、でもツルくんの顔が見れて良かったねぇ～。」
「…はい、ほんの少しだけ安心しました。」

近藤の言葉に賛同する頼子。

「……でも断食はやりすぎ……」
「ホントにねぇ～。剣はちょっと気真面目過ぎるわよ。」
「風上先輩、ちゃんとご飯　食べてくれるでしょうか……」
「大丈夫ですよ～、風上先輩どこかの誰かさんと違って素直ですから～♪」
「ほぉ……そのどこかの誰かとは誰の事だ総詩？」
「あら歳緒さん、そこですぐ怒ると言う事はアナタにも自覚があるのですね。」
「ははは、これで剣君がこのまま一緒に愛津に帰って来てくれれば嬉しいんじゃきにのぉ～。」
「……剣と、また勝負……」

近藤と頼子の言葉を皮切りに騒がしくなる愛津メンバー。

「ほぉ…」
「ウガ。」
「へぇ…」
「……ふ。」

そんな愛津メンバーを見て八忍隊メンバーは微笑みを浮かべた。

「ほえ？どうしたの魁君。それにリュウくん達も。」

そんな八忍隊メンバーのほほ笑みに気付いた近藤が首を傾げる。

「あ、失礼。何だか皆様を見ていたら颯間の皆との事を思い出しまして。」
「？」
「近藤先輩や皆様のやり取りが颯間の皆とのやり取りに似ていたんです。」

首を傾げる近藤に魁と龍牙がそう言いながら説明しだす。
2人が言うには、颯間は確かに討学派・佐学派と分断してはいるが互いに学院の未来を考えての行動である事は互いに認め合っている所があるのだ。
それ故か争いを繰り広げる一方でどこか楽しげにしている所があるのだ。

「そう言った所が、何だか今のアナタ方を見ていたら似ている様に見えまして……」
「ウガ、そっくりそっくり。」
「それにやはり、ハニーには刀より花と笑顔が似合うしな。」

魁の言葉に便乗する様に勇は『ニカッ』とほほ笑み、
ノアは何処からともなく赤いバラを取り出し近藤達にバラを向ける。

「わぁ～パチパチ～。」
「手品ですか？」
「……忍者だから、何でもあり？」
「ここ、これはつまり！私への愛の証ですか！？」
「そう、俺様からハニー達への愛の証さ♪」
あ、赤より白の方が良かったかな？」
「あはははは、でも藤林先輩達の言い分にはボクも同意ですね。」
「にゃぁ～（ボクも～）」
「あはははは、まぁ仲良き事は美しいって言うからのぉ～。」

そう言い魁達の言葉に同意したり
ノアの出したバラにそれぞれの反応を見せる愛津メンバー。

「所でよ、アニキの様子は見れたがオメェらこれからどうするんだ？」

とそこへ甚が愛津メンバーにそう言い放つ。

「う～ん、確かにツルくんの様子は見れたよね～。」
「私としては剣様のお部屋など見てみたいですわ。」

考え込む近藤に対し、心は剣の部屋を所望する。

「いや、それはちょっと……」
「そうだぜハニー、俺様の部屋ならいくらでも構わないぜ？」

心の申し出にさすがに本人の了解無しはマズイと判断した魁に続くように
ノアは自分の部屋へと誘おうとしている。

「お前の部屋　何かに誘われてお前と2人っきりなったら、明日には女性のお腹に家族が増えてしまうぞ。」
「安心しろ、責任は取るさ！」
「批判しろよ！頼むから！！！」

ノアのヘラヘラした回答にツッコミをかます魁。

「……部屋行くのは、今度にしよっか。」
「ですね。」

そう言い溜息を付くやちと桂。
流石に恋愛に興味ありの2人もノアの部屋は行きたくないらしい。

「ほぅじゃのう、孕まされるんならノアくんよりも……」
「デートした剣の方が良いってか？」
「そうそう、デートした剣くんとの方が……」

そこまで言った時、涼華は『はっ』となり視線を横に向ける。
そこには『じー』とこちらを見る真選組メンバーと
『ほほぅ』と見つめる愛津討学派メンバーがいた。
その事に気付いた涼華は『あわわわわ』と顔を真っ赤に染めてしまった。

「けっ、俺様よりあのヘタレなのかよ…ちきしょぉ……」
「ウガ？」

その雰囲気にノアが暗くなる中、ふと勇が首を傾げた。

「てか今、誰かいなかったダカ？」

その勇の言葉に首を傾げる面々。
言われてみれば、涼華の言葉に対し『デートした剣の方が良いってか？』
と言ったのは一体誰なのか？
愛津メンバーではないし、気付いた勇でもない。
ノアはいじけてるし、魁や龍牙がそんな事を言う筈はない。
一体誰が？
皆が首を傾げる中、魁は静かに辺りを見渡した。

「おい、いるのか幻八（げんぱち）？」
「クケケケケケ、感が良いなぁおい。」
魁の言葉に対し、何処からともなく不気味な声が響く。
「何だ、この声は！？」
「これって、先の声と同じじゃ。」
「てか、この声って……い、いかん、また胃が……」
「想像しただけで胃を痛めんなよ……まぁ、この声の主は十中八九、奴だな。」
「ウガ、幻八！」
そして勇の最後の言葉に、裏庭にうっそうと生える木々の上よりついに影が現れた。
ボサボサした黒い髪、ギラリと輝く鋭い目つき、悪魔の如しの長い耳、
野獣の如く鋭い牙、そして蛇の如く動く舌、全身黒ずくめの服装。
「貴様は！！」
「！！お前……」
「！！！」
その姿を見た瞬間、土方と伊織、そして桂は驚きの表情を浮かべた。
土方は、涼華と剣のデートを監視する際に邪魔をした男の顔を忘れなかった。
伊織は、剣と進次郎の情報を提供した怪しい男の事を忘れなかった。
桂は、愛津女学園寮に潜入し、頼子を剣の元へと導いた
不法侵入者の事を忘れる事がなかった。
「随分な登場のし方だな、幻八。」

「クキキキキキ、今に始まった事か？」

魁の言葉に対しそうニヤつく幻八。

「あ～思い出した～。君あの時の～。」

「…確か、僕達が風上先輩と坂本先輩のデートを偵察しようとしたらいきなり出てきた人でしたね。」

「そういやいたな、そんな奴。」

土方達に続き、近藤達も幻八の事を思い出した。

「彼、君らの知り合い？」

やちの言葉に魁と龍牙はやや口ごもる。

「……知り合いといいますか……」

「……腐れ縁であり、悪魔であり、家族でもあります。」

「っていうか、八忍隊の仲間ダ！」

口ごもる魁や龍牙と対照的に、勇はにこやかに言い放った。

そしてその勇の言葉に愛津メンバーの脳裏に『まさか』の文字が浮かび上がる。

「おい、まさか……」

「ハニー達の想像通りさ。」

土方の言葉にノアがダメ出しをしてしまう。

「そいつは“楯岡幻八”。

颯間八忍隊・密偵方にして“颯間三邪神”の一角さ。」

そのノアの言葉に土方は幻八に睨みつける。
颯間三邪神、颯間八忍隊武闘派の中でも最凶とされる3人、
そして八忍隊の悪名を広げている張本人。
しかも幻八にいたっては外見が既に悪党、
というより悪魔の様な雰囲気が漂っている故か土方の警戒心はかなり高まった。

「クケケケケ、そう警戒すんなよ。」

そう言いほほ笑む幻八だが、何分ほほ笑み方が不気味　故かえって怪しさが高まってしまった。

「よせ幻八。お前のほほ笑みはかえって不気味で誤解を招きやすい。」
「おやおやひどい話だな。」

魁の言葉に幻八は相変わらず『ケラケラ』と不気味にほほ笑みながら言い放つ。
その態度に悲しみとか反省の色などは全く見られない。

「ま、んなこたぁどうでも良いんだよ。」

そう言い幻八は愛津メンバーの桂と頼子に視線を向けた瞬間、
一瞬の内に距離を詰め、2人の前にやって来た。

「え！？」
「っ！！？」

幻八の瞬間移動ともいえる速さに愛津メンバーは目を丸くしたが

幻八はそんな事には一切　目もくれず2人に向かって口を開く。

「御2人さんよ、ちょっと聞きたい事があんだが。」

「え？」

「……」

幻八の不気味な声から発せられる言葉に
頼子はキョトンと首を傾げ、桂は警戒した態勢を取った。

「剣と風呂でやった感想はどうだい？」

「えっ！！！！？？？」

「っ！！！！！？？？？」

その幻八の言い放った言葉に2人は勿論、そこにいた全員が耳を疑った。

「ウガ？風呂がどうかしたのか。」

……訂正、約1名を除いては。

「勇、お前は黙ってろ。さもないとメシ抜きだ。」

「はーい。」

魁の言葉に勇が素直に頷くのを見た魁は
速攻で手に隠し持っていた十字手裏剣を幻八に投げ打った。
だが、その手裏剣は幻八の体を通り抜け、近くにあった木に命中した。

「な、何だ！？」

「しゅしゅしゅしゅしゅ、手裏剣が通り抜けました！！！？？」

「これは……幻術!?」

これに愛津メンバーの大半が動揺する中で、
頼子は『はっ』とそれに気付いた。

「ほぉ、分かるのか?さすがは気を使えるだけはあるな。」
「お前な、態々　幻術による分身なんて使って、一体　何の用だ?」

頼子に関心を寄せる幻八にそう言い放つ龍牙。

「別に。ただ家に愛津の連中が来てるって言うから
その中に剣と風呂でやった奴がいるらしいから分身を飛ばしてみた
だけだ。」

そう言い幻八は愛津の、特に真選組メンバーに視線を向ける。

「ついでに剣に挑んで無様に負けた雌狼共の面も見に来たって訳よ。
」
「!!!!!!!!!!」

その幻八の言葉に真っ先に動いたのは土方だった。
手に愛刀―兼定を持ち、幻八に突進してくる。

「貴様あぁぁっ!」
「やーれやれ。俺は事実を言っただけだぜ?」

突撃してくる土方に不気味な微笑み、
というか完全に挑発した見下したほほ笑みで土方に言い放った。
そして土方の振った刀は、当然の如く幻影の幻八をすり抜ける。

「おいおい、俺は幻影による分身だって先　言っただろーが。
テメェの耳は飾りかよ、キケケケケケ！」
「お前は態々からかう為だけに分身の術を使ったのかよ！！」

幻八の暴挙に流石に魁も怒りを顕わにし、手にクナイを構える。
だが、所詮そこにいる幻八は幻影による分身。
攻撃など効く筈もない故に幻八は余裕の表情だ。

「ケケケケケ、からかいは俺の楽しみだぜ？それに……」

幻八はそう言うと視線を再び頼子と心に向ける。

「ついでに貴様らにもう1つ言っておきたい事があったしな。」
「な、なんですか？」

幻八の言葉に『ビクッ』と震え、明らかな警戒をしていた。

「おいおい、そうビクつくんじゃねぇよ。
何もとって食おうってんじゃねーんだぜ？」
「お前ならハニーの1人や2人　食いそうだから不安だぜ。」
「黙れ色魔。」

ノアの言葉に対し速攻で潰しを掛ける幻八。

「誰が色魔だ誰が！」
「貴様　以外　誰がいると言うのだ、煩悩スケベ生物。」
「かーっ、分かっちゃいないねぇ！
俺様はスケベなのでは無い！！愛の許容量がけた外れなのだ！！」
「おう、それにはワイも同意やデ！ワイの愛は海よりも深く……」
「ノア、話がずれるから黙っててくれ。」

「貴様はいい加減に黙れ！」

ノアとカンリュウサイのスケベコンビに龍牙と土方のツッコミが炸裂した。

「さて、バカはほっといて御2人さんよ。」

そう言い相変わらず不気味な微笑みで
幻八はノアとカンリュウサイから視線をそむけると
頼子と桂に再び視線を戻し、警戒する2人の耳元にそっと近づいた。

「お前ら、愛津女学園の自分の席の机の中を覗いてみな。
良いもんがあるぜ。」

「え？」

「良い物？」

それだけ言うと幻八の分身は陽炎の様に消えてしまった。

「それじゃぁな、また会おうぜ愛津の雌豹共、ケーケケケケケケケケ！！！！！！」

その場に、不気味な笑い声を残しながら。

―八忍隊自宅・母屋1階―

「一体　何なんだあの男は！！」

八忍隊の母屋の1階で、土方が発したと言葉がそれだった。
いや、それはもはや言葉では無く怒鳴りと言って良い。

「あ、あの、お気持ちは分かりますが、
とりあえずこれでも食べて落ち着いてください。」

そう言い龍牙が手作りの羊羹(ようかん)とお茶を差しだす。

「いらん！」
「まぁ、そう言わずに……」
「龍牙の作った羊羹うめぇぞ。いらないならオラが……」
「お前は黙ってろ。」

土方の言葉に羊羹に手を伸ばす勇にツッコミをかます魁。

「兎も角、内の厄病神の不始末について深く謝罪いたします。」
「本当に申し訳ございません。」

そう言い魁と龍牙は深く頭を下げた。

「いや、あのね、君達に謝られてもねぇ……」
「そうですよ～。悪いのはあの悪魔なんですから～。」

魁と龍牙の謝罪にそう言い放つやちと総詩。

「しかしなぁハニー。アイツが頭を下げるなんてこたぁ
この世が最後の時を迎えてもあり得ねぇ。
ここはコイツらの頭2つで勘弁してやってくれませんかね？」
「お前が仕切るな！」

ノアの言葉にツッコミを炸裂させる魁。
その隣では龍牙が胃薬を飲んでいた。

「……ふぅ。」
「大丈夫っすか龍牙の旦那？」
「胃が弱えなぁ龍牙は。
オラみたいにもっと丈夫になれば胃痛なんてしなくなるダ！」
「俺の胃痛の原因の１つは間違い無くお前なんだからな！」

勇の呑気な言葉に流石の温厚な龍牙も口調を荒々しくしてしまう。

「え、えっと、とりあえず落ち着きましょうよ。」
「……羊羹、うまい。」
「あ～初音ちゃんずる～い！私も羊羹　食べる～！！」
「あたしも食べる！服部、まだ羊羹ある？」
「あ、あの、皆さん落ち着いて……」

斎藤の食べる羊羹に声を上げる近藤と紗乃をなだめ様とする頼子だが
食い物を前にした２人は獲物に餓えた狼そのものだった。
止めれる筈もなく、２人は龍牙へと詰め寄って行く。

「は、はい、どうぞ。」
「わぁ～い、ありがとう♪」
「あん……ん～、うめぇ！」

龍牙の出した羊羹に大満足の２人。

「所で、１つ聞いてもいいかのぅ？」

とそこへ、涼華が声を上げ魁達に視線を向けた。

「何でしょうか？」

「……先の幻八ちゅーたかの？彼の事での。」

その言葉に、魁や龍牙はもちろんそこにいた全員が静まり返った。

そしてそれぞれの脳裏に、あの不気味な笑い声が蘇った。

「ぶっちゃけ聞くんじゃが、彼は何者じゃき？」

「……何者、とは？」

涼華の言葉に対し静かに答える魁。

「あの幻影による分身もそうじゃったが、
まるであち達の事を見透かした様な視線や物言いがちょっと気になっての。」

「……それに関しましては私も同意ですわ。」

そこへ、桂が便乗する様に言葉を発する。

「私、あの者を1度、それも愛津学園寮内で見た事がありますわ。」

「なに！！？」

その心の言葉に真っ先に反応したのは土方だった。
規律に五月蝿く男嫌いの土方からすれば、
寮内に不逞生徒が侵入した事は許しがたき事だった。

「どういう事だ桂！」

「……その事は、甚さんが詳しく知っているのでは？」

そう言い桂は視線を、こっそり部屋から逃げ様としていた甚に向けた。

「ギクッ」
「おい待てよ甚。」
「どこへ行く気だ？」

逃げ様とした甚の近くには、いつの間にやらそれぞれの手に手裏剣、短槍、弓矢を構えた魁、龍牙、ノアがいた。

「お前、何を知っているんだ？」
「あ～いやーその……」

魁の言葉に対し思いっきり目をそらす甚。

「そういやテメェ、やけに剣とハニー達とのＳＥＸシーン詳しく知ってたよなぁ？」

そこに追い打ちを掛ける様に言い放ったノアの言葉に甚は体中から汗をかきまくった。

「……勇、今日の晩御飯はカラスの丸焼きになりそうだ。」
「ウガ、カラスって食えるのか？」
「いっ！！！？？？」

その何気ない龍牙の言葉に甚はゾッとなり視線を龍牙に向けた。
そこには、槍では無く包丁を手に甚を冷たい視線で見る龍牙とヨダレをダラダラながしながら甚を見つめる勇の姿があった。
その視線に甚は確信した。
この人達は本気（マジ）だ。

普段　優しいだけに怒ると八忍隊一怖いと評判の龍牙と
食い物の好き嫌いが好きと大好きしかない勇。
彼らなら本当に自分を調理した揚句　食ってしまいそうだ。

「……何でも話します。」

そして甚は、ついに観念した。

そしてその後、甚は自分の知っている限りの事を話した。
あの日、幻八が女子に変装し頼子を風呂場に導いた事。
それを見ていた桂も便乗した事。
風呂での出来事をカメラに収めていた事。
そして本人曰く、半年前から度々愛津女学園に侵入していた事を
隠すことなく全て話した。

「……あ、あいつ、半年も前から侵入していたのか……」
「…あぁ……ま、また、胃が……」
「ちきしょう！何で俺様も誘ってくれなかったんだよぉ！！！」

甚の告白にそれぞれの反応を見せる3人。
魁はあきれ果て、龍牙は身内の起こす犯罪行為に胃を痛め、
ノアは羨ましさのあまり泣いていた。

「ほぇ～、私　全然　気づかなかったよ～。」
「あの時の人が、先の……？」

甚の告白にもちろんではあったが愛津メンバーも驚いていた。

特に変装した幻八によって風呂に導かれた事を知った頼子の驚きは大きかった。

「バカな、そんな事があり得るのか！！？」

中でも特に驚き、同時に怒りを感じていたのが土方だった。
確かに愛津女学園には不逞生徒が数多く侵入するが、
その大半は発見され追い返され、さらに最近では殆どそんな輩はいなくなっていた。
それは真選組の見廻りの成果だとずっと確信していた。
そんな確信と自信をあっさり打ち砕いたかの様に
たった１人の男が、それも半年も前から誰にもバレる事無く
侵入していたと言うのだから驚くなと言う方が無理である。

「う～ん、ボク達の見廻りの目を掻い潜って侵入するなんて……」
「それを可能にしちゃうのが、室町の武士達、
天下人に最も近かった男をも恐れさせた俺様達、忍者の力って訳よ。」

総詩の言葉に対し不敵にほほ笑みながらそう言い放つノア。
室町の武士達、それは室町時代後期の長享元年（１４８７年）、
室町幕府が行った近江守護・六角氏に対する親征しようとしたのだが
その際　六角氏は伊賀・甲賀の忍び達を味方に付け、
ゲリラ戦により将軍の軍を苦戦させた“鉤の陣”。
さらに天下人に最も近かった男『織田　信長』をも苦戦させた“天正伊賀の乱”。
そう、忍者の本領は武士の様な武力ではなく
潜入や侵入、奇襲を得意としたゲリラ戦である。
本来の忍者は、剣達の様な戦闘特化の武芸者では無く
幻八の様な侵入などを得意とした者の事であるのも事実である。

「あれ、そう考えるとオラ達って忍者らしいのかナ？」
「少なくとも、幻八はある意味　忍者らしいよ。」
勇の何気ない疑問にそう答える魁。
「つまり、ボク達　如きの見廻りなど、
あの幻八って人には壁にすらならないって訳ですか。」
「え、まぁ、言い方は悪いですが、そう言う事に……」
総詩の言葉に、龍牙は言い難そうに回答した。
「幻八（アイツ）は八忍隊の密偵方を務めてやがるからなぁ。
密偵や潜入、特に幻八（奴）の変装術はル●ン並だぜ。」
「ルパ●並、ですか？」
「ウガ、ルパン●並だ。」
「いや勇。それ、もはや伏せ字の意味無くなってるぞ。」
「ウガ？」
魁のツッコミに首を傾げる勇。
「あの、まさかあの写真も……」
とここで頼子が不意に声を上げる。
あの写真とは、頼子達、真選組メンバーの所に振って来た
剣、頼子、桂の３人が風呂でやった時の写真の事である。
「まぁ、幻八の旦那　普通にカメラ回してたからな。」
「１００％、奴だな。」

頼子の言葉に対し、甚はやや視線をそらしながら、魁はあきれ果てながら答えた。

「つまり、これらをまとめると、今回の騒動のそもそもの原因って幻八という人にあるって事に……」

「……だな。」

芹栖と斎藤の言葉に、全員が沈黙した。

確かに、今回の騒動の原因は、土方が剣を怒らせた事もあるがそもそもそうなったのは、あの写真を見つかった事にある。

さらにそうなった原因は、剣が入る風呂に幻八が頼子と桂を導いた事が原因。

そしてそこで剣が気絶しなかったのは、幻八の用意した薬のせいでもある。

「……何だか、これだけ考えれると原因と言うか、全てを裏で操っていた黒幕みたいだな。」

「いや、奴の正確なら本当にこうなる事も計算済みだった可能性もあるな。」

「……でも何の為？」

魁や龍牙の言葉にそう言いながら首を傾げる伊織。

確かに、仮に幻八がそこまで計画していたとしてもそんな事をして何の得があると言うのだろうか。

「暇つぶしじゃね？もしくは気まぐれ。」

そんな伊織の疑問に答えたのはノアだった。

「気まぐれって……そんな事あるんですか！？」

「アイツならあり得るぜハニー。」

芹栖の驚きに対しノアはどこかそっけなく答えた。
それに便乗する様に魁達も頷く。

「確かにあり得るな、奴なら。」
「生粋のドSだからな、アイツ。」
「ウガ、幻八って気まぐれだからなぁ～。」
「確かに、旦那ならあり得そうだ。」

この魁達の言葉に愛津メンバーは何となくではあったが
彼らの幻八への評価を理解した。

「……その幻八って人は、そんなにドSなんですか？」

不意に総詩がそんな質問をぶつけてきた。

「ん？まぁ、少なくとも俺様達はアイツよりSな輩を見た事がねぇ。」
「へぇ～、内の土方さんとどっちが上ですかねぇ～。」
「おい待て！どういう意味だ総詩！！」

総詩の言葉に土方は立ち上がると刀を抜き放った。
それを見た総詩は即座に立ちあがって逃げ出した。

「わーい、助けてください～。
妖怪ラディッシュポニーがボクを食べようとしてますよ～。」
「誰がラディッシュポニーだあぁぁぁっ！！！！」

そう言いながら辺りを逃げ回る総詩とそれを追う土方。

それを見たいた面々は、つい口元を緩めてしまう。

「アハハハハハ、いいぞやれやれー！！！」
「お、御2人とも、こんな所にまで来て……」
「良いんじゃないかな頼子ちゃん。いつもの事だし～。」
「うんうん、微笑ましいじゃねぇか。まるで本物の姉妹のようだぜ。」
「あははは、仲が良いんですね。」

そんな2人を見て、愛津メンバーも八忍隊メンバーも
先程の静かで重い空気はどこへやら、
笑顔の溢れる生き生きとした空気へと変わって行った。

「…もしかして総詩さん、こうなる事を予想して？」
「あははは、どうだろうねぇ～。
少なくとも総詩は皆を笑わせる事についても天才だからねぇ。」

龍牙の言葉に対し笑いながら答えるやち。
その回答　及び愛津メンバーの笑顔に龍牙はふと考え事をした。

「（こんな風に、女子と楽しく話したりするのも良いかもしれないなぁ……）」

だが、その考えを龍牙は即座に捨ててしまった。
龍牙は気真面目である、剣　以上に。
それ故に学園の未来を決める事になるであろう共学化を
自身の個人的な感情で動いていいものだろうかと度々　悩んでいたのである。
その為、自身の意見は胸の内にしまい込んでしまう癖があるのだ。

「（それに、共学化するに当たっては、
佐学派の人達と同様に1つの問題があるしな。）」

そう、龍牙　及び颯間佐学派の者共が何より心配し、
共学化に否定的なのには訳がある。
それは、幻八を始めとした颯間三邪神の事だ。
幻八は勿論だが、共学化になった事で愛津と颯間が親密になれば
必ず三邪神の牙が愛津にも向けられる事となる。
幻八に至っては、既に半年も前から愛津に潜入しているのだ、かな
り危険である。

「（……忘れよう、この事は俺の胸の内にしまったおこう。）」

考えた結果、そう答えを出す龍牙。
そんな龍牙の様子を見ていた魁とノアは無言で顔を見合わせた。
互いに妙な所で勘のいい2人は、龍牙の考えをある程度　読んでい
たのである。
魁はそんな龍牙を見て『大丈夫なのか』と思い
ノアは『やれやれ』とどこか呆れたような表情になった。
この時、龍牙は気づく事ができなかった。
そうやって自身の考えを押しこむ事は良くない事を、
そしてそうなんだから、すぐ胃痛を起こしてしまう事を
龍牙は未だ気付けなかった。

―杏の町　鬼の巣・八忍隊自宅前―
そして時は流れ、空は赤く染まっていた。

「皆様、今日は態々　来ていただいてありがとうございました。」
「またいつでも来てください。」

八忍隊自宅前にて、愛津メンバーに対して魁と龍牙は深く頭を下げた。

「ウガ、またなぁ。」
「いつでも俺様に会いに来てくれたまえ、ハニー達♪」

それとは対照的に、勇とノアは頭は下げず笑顔で見送る。

「それじゃぁねぇ♪」
「剣様によろしくお願いしまわ。」

そんな魁達の言葉に近藤と桂もそれに笑顔で返す。

「さようなら～、また会いましょうねぇ～。」
「にゃぁ～ん（バイバーイ）」
「それじゃね～、やちさんに会いたくなったらまた呼んでねぇ～。」
「……剣にもよろしく。」
「よろしくお願いします。」
「え、えとえとえと、まま、また来ます！」
「また来るぜ。メシうまかったぞ～。」
「あちとしてもまた来たいぜよ。……すぐ来る事になるじゃろうけど。」
「……じゃあな。」

近藤と桂に続き総詩達も挨拶すると、愛津の方へ向って歩き出した。

「あ、待ってください。」

が、不意に魁が待ったを掛ける。

「途中まで俺と甚がお送りいたします。」

そう言い魁は愛津メンバーについて行く様に駈け出して行った。

「おいおい、だったら俺様も……」

「お前はダメだとさ。」

「ウガ。」

魁の行動に便乗しようとしたノアだったが、
前もって言われていた龍牙に止められ、勇に押さえつけられた。

「ちょ待て！何で俺様はダメなの！！？不公平だろ！差別は良くねぇだろ！！」

「悪いが、お前を連れて行ったら色々と面倒な事になるから止められてるんだ。」

「ウガ、ノア止める。オラ、飯大盛りになる！」

「結局お前は食い物　目当てか！！」

そう言いながら逃れようとするノアだが、
パワーでは勇に敵わず、そのままズルズルと引きずられ家の中へと戻されて行った。

―杏の町　鬼の巣・商店街―

鬼の巣の商店街を魁を甚を先頭に歩いていた愛津メンバーはある事に気付いていた。

周りには武器を持った如何にも好戦的そうな男達がいるのだが彼らは取り巻きにこちらを見て来るだけで、襲ってくる気配がない。

この鬼の巣に来た時は、今にも襲い掛かりそうな輩はいたが今では誰もそんな気配がない。

「何だか、誰も襲ってくる気配がないですね。」

「そりゃ当然だろ。」

芹栖の疑問に答えたのは甚だった。

「この鬼の巣で魁の旦那を、八忍隊の名を知らねぇ輩はいねぇ。そんな八忍隊と共に歩いている女を襲おうなんて度胸のある輩この鬼の巣にだっていねぇよ。」

甚の説明に納得のいく愛津メンバー。

つまり、八忍隊を好きで敵に回したい輩なんていないと言う事だ。

甚の説明に皆が納得する中、ただ1人、土方はある事を考えていた。

「（……颯間……八忍隊……）」

土方の脳裏に浮かんでいたもの、それは颯間八忍隊の事だった。

1週間前に見せつけられた、剣の圧倒的な速さと剣技。

今日、この鬼の巣で見せつけられた魁の暗器術、

ノアの弓矢による正確無比な攻撃と飛行術、

勇の見せた近藤・紗乃を圧倒する身体能力。

そして、あの幻八という不気味な男の見せた幻影による分身。

八忍隊にはそこが知れない強さと恐怖があった。

「（……恐怖？……私は、あの男を恐れているのか？）」

気づけば土方の手には汗が流れ、知らず知らずの内に握りコブシを作っていた。

まさか、自分が恐れているのか、あの男達に。

こんな事　今までなかった。

男に恐怖するなど。

自分が男に抱いていた感情は、怒りと軽蔑だけだった筈だ。

それなのに……八忍隊と、剣と出会ってからそれが変わりつつある。

「歳ちゃん、どうしたの？」

はっ、と気が付くと目の前には心配そうな表情の近藤がいた。

辺りを見渡せば、そこはすでに集合場所であった角屋の前だった。

考え、悩み続ける内にすでに鬼の巣を抜けていたらしい。

「……いえ、何でもありません。」

「どうかしたんですか？」

土方の異変に気付いた魁は近づいてくるが、

土方はプイッとそっぽを向いてしまい、目を合わせようとしない。

「何でもない。」

「……そうですか。」

土方の男嫌いを剣の話から聞いている魁は素直に引いた。

「では、自分はここで。」

そう言い魁は視線を甚に向ける。

「甚、またな。」
「へい。魁の旦那もお元気で。」
「あぁ、じゃあな。」

そう言い人との会話を終えた魁は突然　跳び上がると
建物の屋根を駆け抜け、鬼の巣の方へと走り去って行った。

「それじゃ、私達も帰ろっか。」

魁が去ったのを確認した近藤の言葉に、
愛津メンバー及び甚は頷き愛津女学園に向かって歩き出す中、
涼華と桂は互いに接近して何やら小声で話をしていた。

「…後で部屋での。」
「はい。」

普段ならこの2人のヒソヒソ話は、隠密部隊である九番隊組長、
みきぽんが察知する所だが、今日はあいにく斎藤が私服だ。
斎藤が私服の時はみきぽんは大概　洗濯機の中である。
みきぽん以外にこの2人の怪しさに気付くとしたら
オニの副長・土方ぐらいだが、その土方も先程と同じ様に考え事をしていた為
気付く事ができなかった。

この時、真選組メンバーは気づく事ができなかった。
この2人の話こそが、後に語り継がれる杏の町の波乱の出来事の序曲となる事を。

そして、討学派メンバーもまた気づかなかった。
この後、真選組メンバーと共に剣の事に関して質問攻めにあう事を今はまだ、誰も知らない。

―八忍隊自宅・八忍隊特別謹慎牢獄内―

「ふぅ……」

一方、自身の熱によりサウナ状態になっていた謹慎部屋にて剣は軽くため息をついていた。
あれから時間が経ち、剣の熱も魁が持っていた冷媒札（れいばいふだ）”により熱は下がり
サウナ状態だった部屋もだいぶ涼しくなり、剣は冷静さを取り戻していた。
甚の連絡から聞いてはいたが、
近藤達　全員がこの鬼の巣にまで来た事に剣は驚いていた。

「……最も、もう愛津に行けるかどうかは分からないけど。」

不意にそんな事を呟く剣だが、正論ではあった。
どのような理由であれ、愛津の生徒と不純異性行為をした挙句暴力ごとまで起こしたのである。
今後、愛津に行けるかどうかも分からない。

「ん？」

そんな事を考えていた剣は、不意に自分が手に握っていた物の存在に気付く。
それは、先程　近藤から貰ったお菓子と龍牙から貰った水筒だった。
それを見ていると、近藤の優しい笑顔を、愛津メンバーと過ごした短いながらも、そして赤面しながらも楽しかった愛津女学園での生活を。

「……っ」

気付いた時、剣の目からは一滴の涙が流れていた。
今　分かった。
最初は帰りたいと思っていた愛津女学園が、
自分にとってかけがえのない物になっていた事を
今日、近藤達と対面してそれに気付けた。

「……行きたい……また、行きたいよ……」

愛津の皆にまた会いたい。
そんな気持ちが込み上がったその時、剣はある事に気付いた。
近藤の渡してくれたお菓子に1枚の紙がついていた事に。
気になった剣はその紙を手に取った。
そこには何やら文字が書かれていた。
そして、その文字を見た時、剣は目を見開いたのだが
その事を知る者は、誰1人としていなかった。

―杏の町　鬼の巣・近くの山の山中―
剣が謹慎部屋で涙を流していた頃、鬼の巣の近くの山にて。
この山の山中には霧に包まれた地帯が存在し、
そこには地元の人々が『幽鬼の館』と呼び近づこうともしない
古びた西洋風の不気味な館があった。
なぜ、誰もここに近づきたがらないのか。
実は、ここには古びた館にはよくある噂があったのである。

誰かが言ったのである。
この古びた館から、地獄の底から悪魔がほほ笑むかの様な
不気味な笑い声が聞こえると。

誰かが言ったのである。
この館が経つ前、そこには江戸時代の処刑場があり、
その処刑場を壊して建てた館には、
処刑場で無念の死を遂げた者達の亡霊が住み着いていると。

誰かが言ったのである。
ここには亡霊達の王が住まい、毎晩　亡霊達と宴を開いていると。

誰かが言ったのである。
この館に迷い込んだ者達が、翌朝　白骨化して戻って来たと。

誰かが言ったのである。
この館は地獄に通じていて、そこからやって来る死神の住処がこの
館なのだと。

この際、ハッキリ言ってしまおう。
そんな物は嘘である……半分。

何故なら、実際にこの館からは笑い声は聞こえるし、
ここにはかつて処刑場だったのも事実である。
その証拠に、館の庭の隅っこに、その頃の面影を残す和風の建築物
がある。
だがこの館、実は数年前にある男に秘密裏に買われているのである。
そして、この館の地下には、最新のコンピューターを始めとした機
械から
怪しげな実験用のメカ、黒魔術にでも出てきそうな不気味な魔法陣
など
様々な物が置いてある。
そしてそこにある1台のパソコンの前に、
キーボードをカタカタ動かすこの館の主たる男がいた。

「キヒヒヒヒヒ、良いねぇ、高く売れるねぇ。」

不気味にほほ笑む男の開くパソコンの画面には、
幾つもの男と女が交わる写真があった。
どの写真も目や大事な部分にはモザイクが掛かってはいたが
それは、間違いなく剣と桂と頼子が以前　風呂で行った際の写真だ
った。
その写真の下には、幾つもの値段が書かれている。

「ケケケケケケ、愛津女学園。写真にしろ下着にしろ、まだまだ儲
けれそうだぜ。
クヒヒヒヒヒヒヒヒ！！！」

そう、この館にまつわる噂で、まだまだ本当の事がある。
その1つが、死神の住処。
そう、この館の主、楯岡　幻八は間違いなく、“死神”と異名を取
る男であった。

『～第十九章～　再会と謝罪と黒幕　《終》』

～第十九章～　再会と謝罪と黒幕（後書き）

二十話目完成です。
今回の話で、等々　剣と対面を果たした愛津メンバー。
何とか再会と謝罪を果たした剣と愛津メンバーですが
ここで等々、八忍隊が誇る最恐の男にして今回の騒動の黒幕
幻八が愛津メンバーと正面から（分身だけど）対面。
そして様々なフラグが設立。
何かを企む討学派、八忍隊しいては男に対して悩む土方、
愛津が自分の中でどれほど大きな存在になっていたのかを自覚する
剣、
そして不気味な微笑みを浮かべる幻八。
今後も目が離せません！
今後もご期待ください！！

～第二十章～　討学派の策略！発生、文久の政変！！（前書き）

前回までのあらすじ
幻八の写真により頼子と桂との間に関係を作った事を土方にバレた挙句、
土方の放った言葉に怒り狂い真選組メンバーを圧倒するも
頼子の説得と同じ颯間八忍隊メンバーである魁により冷静さを取り戻し
真選組に被害を与えた罪で、颯間へと連行された剣に会う為に
近藤達　愛津メンバーは杏の町の危険地帯、鬼の巣にやって来た際に
様々な颯間の人々と会いながらも、八忍隊の自宅に到着。
　そこで遂に剣との再会を果たしたものの、
同時に八忍隊という少数ながらも強大な組織の力を目の当たりにした愛津メンバー。
　そんな中、討学派メンバーは何やら不穏な動きを見せていた。

～第二十章～　討学派の策略！発生、文久の政変！！

―愛津女学園　学園寮内・屯所―

その日、いつにも増して暑い日の事だった。

「副長さん、見廻り終了いたしました。」

真選組の屯所に入って来た頼子は、見廻り報告を土方にしていた。

「うむ、ご苦労。今日は特に問題なく終了したな。」

「そうですね、毎日がこれくらい平和だったらいいんですけど。」

土方の言葉に芹栖が同意する様に言い放つ。

事実、ここ数日の間、討学派は鳴りを潜めた様に何の活動もしていない。

それ故か最近ではこの見廻りも散歩の様なものとなっている。

「それにしてもさー、今日の討学派は大人しかったよなー。いつもだったら歯向かって来るクセにさ。おかげであたしの活躍の場がなかったよー。」

だが、その平和……と言うか退屈な雰囲気に紗乃は物足りなさを感じていた。

「なに言ってんのさー。アンタが暴れると学園の損害が凄い事になるなじゃない。紗乃の活躍なんて無いほうがいーのよ。」

そんな紗乃を笑い飛ばすやちに、皆が同意する様に笑う中、

頼子は自分のポケットの中に手を伸ばした。

「（……これ、どうしよう……）」

頼子のポケットには、1本の小瓶が入っていた。
小瓶にはエメラルドグリーンに輝く薬品らしき液体が入っており
その液体は、ポケットの中でも怪しく輝いていた。
これは、剣に会いに八忍隊の自宅に行った翌日、
学園の自分の机の中にあったものだ。
最初は何かと思ったが、すぐに思い当たる事を思い出した。
それは先日、八忍隊の1人だと言う、幻八という男に耳元でささやかれた言葉。

『お前ら、愛津女学園の自分の席の机の中を覗いてみな。
良いもんがあるぜ。』

これがその良いもんらしい。
が、ハッキリ言ってこの薬の使い道を頼子は思い悩んでいた。
この小瓶と一緒に、薬に関するメモがあったのだが、
その内容は、頼子にとっては使い難い内容だった。
その内容は、以下の通りだ。

『ケケケケケ、こいつを読んでるってこたぁ、ちゃんと気付いたみてぇだな。
貴様らのその素直さに免じて、この薬の正体を教えてやろう。
これはな、以前　剣に片方は飲ませ、
もう片方は針で注入した2つの薬を融合させたものだ。
顔の赤面を抑える効果と、媚薬の効果を持っている。
これがどういう意味か分かるな？

剣とまたしたくなったらいつでも使いな。
尚、使う気がないなら他の奴に渡してもいいぞ。
ま、せいぜぇがんばれよ、キキャキャキャキャキャキャキャキャキャ！！

Ｂｙ：幻八』

「（……あうぅ～……）／／／／／／／」

この薬が何なのかを思い出した頼子は、
思わずあの日の夜の出来事を思い出して顔を赤くし、俯いてしまった。

「あれ？どうしたんですか頼子先輩。」
「ニャー（顔赤いよ？）」

そんな頼子の状態に気付いた総詩とゲンちゃんが頼子の顔を覗いて来る。

「えっ！？い、いえ、別に何も……」
「頼子ちゃん、顔　真っ赤だよ？」

その様子に近藤も頼子の顔を見に来る。
すると、その様子を見ていたやちが『ははーん』と目をキラつかせる。

「頼子、もしかして剣との事でも思い出した？」
「っ！！！？？／／／／／／／／／／／／／／」

やちの言葉に図星を疲れた頼子は、さらに顔を真っ赤にさせた。
まるで熟成したトマトの様に。

「ありゃりゃ、図星ですか頼子先輩？」

この様子を見ていた総詩のニヤ付き顔に、周りの面々はある者はほほ笑ましく、ある者はからかう様に微笑んだ。

「あ、いえ、その……／／／／／／／／／」

「お前達、下らん話をするな。」

顔を真っ赤にする頼子に助け船を出す様に、土方が声を出す。

「副長さん……」

「……頼子、剣（あの男）との事は忘れろ。悪い夢だ。」

そう冷たく言い放つ土方だが、頼子としてはあの事は悪い夢とは思わなかった。

むしろ、剣に早く会いたいと言う思いがある。

「……剣さん……」

「でも、ツルくんもう戻ってこないのかな～。

また一緒に見廻りとかしたいよ～♪」

寂しげに呟く頼子とほぼ同時に、近藤が不意にそんな事を言い出した。

「そうですね～、風上先輩　雇わないとボクの昼寝の時間が減っちゃいますよ～。」

「ん～あたしとしても～剣とは色々な事してみたいしねぇ～。」

「えぇ！い、色々……色々って何ですか！！？

まだ夜でもないのにそんな事していいと思ってるんですか!!!?
?」
「……落ち着け、夜でもダメだから。……でも、初音も剣がいない
と寂しい。」
「あー、風上の奴、あたしともっぺん戦(や)ってくんねぇかなー。」

そんな近藤に同意する様に、他の真選組面々も声を上げた。
事実、問題を起こして愛津を去った剣は、
もうこちらに来ないのではないのかという噂が飛びまわっていた。
この噂に、討学派は勿論、一部の佐学派達は不安に襲われていた。
それほどまでに、剣は皆に愛されているのだ。

「ふん。あんな奴がいた所で何が良いと言うのだ?」

ただ約1名、このオニを除いては。

「そうでっせ皆ハン。風っつぁんの代わりならこのワイが……」
「ニャー(無理だね)」
「帰れ。」

ここでいつものパターン的に、カンリュウサイが出ようとしたのだが
ゲンちゃんにひっかかれ、珍しく発したみきぽんの言葉に止められてしまう。

「確かにカンリュウサイと風上先輩とでは天と地ほどの差がありますもんねぇ~。」

総詩の言葉に、土方を除く全員が『うんうん』と同意し
その言葉に『そんなぁ~』と涙目になるカンリュウサイ。

「兎も角だ。今日の所はこれにて終了とする。解散！」

頃合いを見て、土方が全員に解散を命じた、その時だった。

「クルックー（おい大変だぜ！！）」

窓から突如としてニヒルな表情の谷さんが、珍しく慌ててやって来た。

「谷さんか。どうした？」

「クルックー（討学派の連中が、どういう訳だがグランドに大集合してんだ！
何かやらかすつもりかも知れねぇ！！）」

この谷さんの報告に、土方達は驚いた。
ここ最近、動きがあまり活発でなかったのかと思った矢先
討学派達が一斉にグランドに集まり出したと言うのだ。

「しかし、奴ら一体何を……」

「……ひょっとして、町にでも出るんですかね？」

その総詩の呟きに、土方と近藤は互いに顔を見合わせる。

「歳ちゃん！蛤御門だわ！」

「はい！！」

近藤の言葉に頷いた土方は、２人で屯所を後にした。
その２人の行動に、他のメンバーもやや遅れながらも
２人の後を追い、愛津女学園正門、通称：蛤御門へと向かった。

―愛津女学園　正門・蛤御門―

正門近くのグランド。

そこに、討学派の超秀班が大勢の列を作っていた。

その先頭では、超秀班筆頭である桂と、やって来た土方達が対峙していた。

「桂、これは一体どういうつもりだ！！？」

「ですから説明したとおりですわ、歳緒さん。

私達（わたくしたち）　超秀班はこれより颯間学院へ赴き、

理事長と直接話をつけてこようと思っていますの。」

怒りの形相で睨んで来る土方に対し、桂はサラッと言い放つ。

つまり桂達　超秀班は、颯間学院へ行き颯間の理事長、

つまりは八忍隊の祖父と直接交渉しようと考えて、拠度の行動を起こしたのである。

「でも心ちゃん～、私達や愛津の学園長の許可も取らずにそんな勝手な事をするのはどうかと思うよ～？」

「元はと言えば、学園長が颯間の理事長と談合をしないのが原因です。

それ故に生徒同士の争いが起こるのです。

ですから逃げ腰の学園長に代わり、私達　討学派が話をつけて参ります。」

近藤の言葉に対しても、桂は一歩も引く気は無いらしい。

その近藤の後ろでは、総詩が愛刀―菊文に手を伸ばしていた。
真選組としては、討学派のその強引なやり方が気に入らないらしい。
だが、桂の後ろでも徒沙勤能党筆頭・岡田　伊織が斬馬刀―忠吉を構えていた。
さらに、騒ぎを聞きつけた討・佐学派　両派の生徒達が集まりだし、
まさに一触即発の状態となった。

「よろしいですわ、貴方達がその気ならば相手になりますわよ？
“逃げの心”と呼ばれてはいますが、
いつまでも退いてばかりもいられませんものね。」

そう言い桂は自らの愛刀―清光を抜き放つ。
真選組のメンバーもそれに対抗しようとそれぞれの武器を抜き放つ。
互いに一歩も引かぬ状態となった。

「みんな待って。」

だが、そこに近藤が待ったをかけた。

「こんな所で大規模な闘いを起こす事は学園の名を落とす事になるわ。
それは共学化を行う上でも問題ではないかしら？」
「ふふ……さすがは新選組局長・近藤先輩……ですわね。
けれど私達はここを動きませんよ？
これだけの人数を動かしたんですもの。
簡単には引き下がることは出来ませんから。」

近藤の言葉に対し、桂はそう言いながら不敵にほほ笑む。

「なら私達もここを離れないだけです。……お互いに長い一日になりそうね。」

そう言い討・佐学派の両派は、互いに引きながら睨みあう事となった。

「……これは我慢比べになる。」

斎藤の言葉通り、愛津の両派は蛤御門の前で睨みあう事となった。後に、『文久の政変』と呼ばれるこの事件は、こうして幕を開けた。

―八忍隊自宅・母屋1階―

一方その頃、こちらは八忍隊の自宅の母屋1階。

そこに、座布団の上に正座する2人の男がいた。

1人は、2mを超える長身を誇る長い髪とヒゲが特徴のジジィ、“島津　隼人”。

もう1人は、伸びた白銀に輝く髪を後ろで結んだ青年、つい先程まで反省部屋にいた“風上　剣”であった。

「剣よ。」

「はい。」

隼人の言葉に頷く剣。

「お主の謹慎処分は、これを持って終了する。そして、愛津との件じゃが……」

一旦言葉を区切る隼人。
その区切りに、剣は息を飲んで待った。

「この件に関しては、颯間及び愛津の話し合いの結果、
互いの校風である生徒同士の自主性を重んじる事に当たり、
お主と愛津の生徒達との話し合いによって解決すべし、となった。」
「それじゃぁ……！！」

その言葉に、剣の眼に光が宿る。

「うむ、主はこのまま愛津へと向かえ。既に甚は愛津へと向かっておる。」

その隼人の言葉に、剣は心の中で喜びを感じた。
また皆に会える。
その事が剣は何よりうれしかった。

「じゃがの剣。」

そんな剣に、隼人はやや厳しそうな目で言い放つ。

「次、此度の様な事を起こし、愛津に迷惑をかけた場合は
わしも庇い切れぬかもしれぬ。その事を努々　忘れる出ないぞ。」
「は、はい！」

隼人の言葉に、剣は慌てて回答した。

その剣の態度を見た隼人は『うむ』と頷くと、視線を台所へと向けた。

「台所に龍牙の作った飯がある。行くのなら、それを食べてからにしなさい。」

「あ、はい。」

隼人の言葉に頷く剣。

それを確認すると、隼人は立ち上がり外の方へと歩き出す。

「では、わしは学院に戻るからの。ちゃんとせぇよ。」

そう言い、隼人は母屋を出ると軒下にある草鞋を履きそのまま颯間学院へと歩いて行った。

「……とりあえず、腹ごしらえが先だな。」

残された剣は、隼人に言われたとおり台所へと赴く。

台所の冷蔵庫の中には、龍牙の握ったと思われるオニギリが６つほど、

ラップをした状態で皿にあった。

ラップには、『ツルギの』と書かれたメモ書きが張ってある。

それを手にした剣は、オニギリを電子レンジに入れて２分近く待ち、

温まったオニギリを頬張る。

「（……愛津……か……）」

オニギリを食べながらも、剣は愛津の事を考えていた。

自分は愛津の皆と会える事を嬉しく思っている。

それはもう疑い様のないものだ。
だが、どんな顔をして会えばいいのだろう。
どのような理由であれ、皆に刀を向け、傷つけた事は事実だ。
以前　会いに来てくれた時、皆は傷つけた自分を心配してくれた。
こんな自分に会いに来てくれた。
それが剣は死ぬほど嬉しかった。
だからこそ、自分がどんな顔をして会いに行けばいいのか分からなかった。

「どうしよう……」

そう呟き、手をポケットに入れた時、
剣はポケットに何か入っている事に気付き、それを取り出して見る。

「これは……」

それは、以前　近藤から貰った龍牙手作りのお菓子に紛れていた1枚の紙だった。

「……近藤先輩……」

その紙を見た時、この紙に書かれていた事を思い出す剣。
それと同時に、紙をポケットに仕舞い込むと
残っていたオニギリを一気に口に入れ、お茶で流し込んだ。

「（行こう！そして会おう！どうするかはそれからだ！！）」

そんな思いで、剣は靴に履き替えると愛津へ向って走り出した。

「……ふふ、良い顔をする様になったわい。」

そんな剣の様子を、道場の屋根からひっそりと見守る隼人の姿があった。

先程、颯間学院へ行ったと思われた隼人だったがこの老人、老人に似合わぬ巨体と、その巨体に合わぬ忍びの技を駆使する八忍隊の祖父であり師でもある男だ。

学院へ向ったふりをして剣に気付かれず道場の屋根に隠れるなどお手の物。

「やはりあの子を愛津へ行かせたのは正解だった様じゃ。」

そう言いほほ笑む隼人。

隼人は前々から自己主張が少なく、女を苦手とする剣の事を心配していた。

故に、愛津との共学化へ向けてのテスト編入を提案した時既に剣を愛津へ向かわせる事を確定させていた。

そこでの経験で、剣が少しでも女の子との関わりを深くして欲しかったのだがどうやら予想以上の展開みたいだ。

最も、約1名のせいで展開が深くなりすぎた気もするが。

「さて、あの子の為にも愛津の教員たちを納得させる策を実行させるとするかの。」

そう呟き、隼人は今度こそ、電信柱の上を走りながら学院へと走り去って行った。

―愛津女学園　正門・蛤御門―

正門近くのグランド。

今だに、討学派と佐学派とのにらみ合いは続いていたが、状況的にはある意味　佐学派が不利な状況だった。

なぜなら……

「あーくそーっ！腹減ったぁーっ！

こんな長丁場になるんならオニギリくらい持ってくるんだったよ、もー！」

まず、早くも紗乃が根を上げ始めたのが始まりだった。

「あーあ、今から何か取って来ようかな……」

そう呟いた瞬間、紗乃は自分への当てつけの様な人物を見つけた。

「もぐもぐ、むしゃむしゃ……」

それは、幸せそうな表情……と思われる表情で焼きそばパン食べる岡田　伊織だった。

しかも態々　紗乃の前で食べているのだから始末が悪い。

「お前この野郎……もう許さねえ！」

この伊織の行動に怒りを燃やす紗乃。

そして遂に――――――

「一口ください！！！！」

仕事へのプライドを捨て、力強くスライディング土下座を伊織に向けるのだった。

「あらあら、紗乃ちゃんったらダメだよ～？
真選組たるもの、食べ物なんかで志を売っちゃ～。」

とそこへ、紗乃の行為をとがめる様に近藤が言い放つ。
さすがは真選組の局長である。
……と思われた。

「近藤先輩。近藤先輩の為に当社比五倍にもなる
どら焼きを焼いてみたのですけど、いかかですか？」

桂　及び超秀班の誘いに対し、近藤が断れる筈もなく
即座にどら焼きにくらいついてしまった。

そして、この2人を皮切りに、他の真選組メンバーの殆どが
討学派の生徒に丸め込まれて行った。
斎藤は討学派の作る蕎麦に舌鼓を打ってお替りし、
土方は討学派の挑発に乗せられ完全に怒り心頭状態。
芹栖は討学派の出すＢＬ本に釣られ、やちはその本を無言で読んでる。

「あ、あの、皆さん……」

「ありゃりゃ、ダメですねこりゃ。」

唯一丸め込まれていないのは、頼子と総詩のみだった。

「いや～退屈ですね～。退屈なんで、ボクちょっとお昼寝しますね……

すやすや……」

「そ、総詩さ～ん……」

そして遂に、総詩は居眠りを始め、残ったのは頼子1人になってしまった。

その時だった。

「……オメェら、何やってんだ？」

不意に上空からした声に皆が上に視線を向ける。

そこには、通常よりも一回り大きく、赤い瞳をした一羽のカラス、甚がいた。

「甚さん。」

「やれやれ、あっちで討学派が走ってるかと思ったら、

今度はグランドで睨み合いかよ。テメェら一体、何がしたいんだ？」

「！！？」

甚の呆れ果てた言葉を聞いていた土方が

その言葉を聞いた瞬間、目を丸くした。

「おい甚！今　何と言った！！？」

その土方の言葉に『あん？』と首を傾げる甚。

「いやだからさ、あっちでは討学派の連中が走ってるかと思ったら……」
「討学派が走っていた!?一体どこをだ!!?」
「どこって……坂本を筆頭に駅に向かって走ってたみたいだぜ?」
その甚の言葉に、土方は全てを理解した。
「しまった!こいつら囮か!!!」
そう、つまり桂達は真選組を引き付けて置く為の囮。
本命の坂本達はすでに駅に向かい、颯間へと行こうとしているのである。
「あら、やられたわね。一番から四番隊は私と共に来なさい!!」
土方の言葉に反応した近藤がそう言い放つ。
そこに、いつものぽわ～とした表情は無く、
凛々しく、それでいて美しい真選組・局長の姿があった。
「あらあら……気づかれてしまいましたか。
もう少し稼ぎたかったのですが、仕方ありませんわね。
皆さん行きますわよ!」
そして、真選組の動きに桂は愛刀―清光を抜き放つと同時に討学派生徒達に指令を下す。
それと同時に、討学派達は一斉に突っ込んでくる。
「迎え撃て!!」

だが、単純な戦闘なら愛津においても最強を誇る真選組だ。
土方の指令の下、五～十番隊が討学派を食い止める。

「近藤さん！行ってください！！行って坂本を追ってください！！」
「そうですよ！ここは私達に任せてください！！」
「そーいう事だ！」
「グヒヒ！ワテの技を乳とか尻に刻んでやらあぁー！！！」
「ニャー（ボクもー！！）」
「クルックー（派手な夜になりそうだぜ……）」

土方に続き、それぞれの隊の組長達の声を背に、
近藤及び一～四番隊の生徒達は、坂本達を追い走り出した。

「任せたわよ、歳緒！」
「はい、イサミさん！」

この時、近藤と土方が、プライベートでの呼び方をしたのを知ったのは
長い付き合いの総詩と、上空より状況を見定める甚のみだった。

「おーおー、成程ね、そう言う事かい。」

上空を飛んでいた甚は、愛津校舎の屋上に降り立つと
持っていたカバンから携帯を取り出した。

「ま、念の為　報告はしとくかね。」

そう呟きながら、甚は携帯のボタンを押し始めるのだった。

―杏の町　商店街―

「来たわよ、真選組だわ！ここで迎え撃つわよ！」
「！！」

坂本達を追う為に近藤達が商店街を走っていると
商店街に配置されていた数十名の徒沙班の待ち伏せ部隊が現れ、
近藤率いる一～四番隊の生徒達を取り囲む。

「……皆、お願いできる？」

そんな中、近藤は冷静に皆を見つめ言い放つ。

「ＯＫ局長。まかせといてよ。」
「……余裕だぜ。」
「はい～、ここは任せてください～♪」

近藤の言葉に、やち、斎藤、総詩の３人は二つ返事で言い放つ。

「頼子ちゃんは私と一緒に来て、私のサポートをお願い。」
「は、はい！」

その近藤の言葉に、
頼子は任務の度に最近やる様になった秘密のおまじないをし始めた。
それは、ある人の言葉を思い出しながら、数珠を握り祈る事だった。

『頼子さんは自分の事を役立たずと思ってたみたいだけど、俺はそうは思わない。
だって頼子さんには、気を使った治癒術に薙刀による戦闘だって出来るじゃないですか。
頼子さんが役立たずなんて、少なくとも俺は思いません。』

「（剣さん……私、がんばります！）」
「それじゃ、行くよ！！」

近藤の言葉と同時に、近藤と頼子は駅に向かって駆け出す。
討学派の生徒達がそれを阻もうとするも、
総詩達により阻まれ、２人は突破に成功し、駅へ向って走り出して行った。

「くっ！追うのよ！！」

すぐさま討学派の数名を追おうとする。
だが……

「……行かせない。」

それを阻む斎藤の突き。

「悪いけど、行かせやしないよ。」
「近藤さんと頼子先輩、特に頼子先輩は最近がんばってるんですから邪魔はさせませんよ？」

さらにそこに、やちと総詩も加わる。

「くっ！皆、取り囲むのよ！！この数ならいくら“三武狼（ミブロ）”でも多

勢に無勢よ！！」

１人の討学派の生徒がそう言い放ち、他の生徒達が総詩達を取り囲む。

だが、３人の表情は余裕に満ち溢れていた。

「ひのふのみ……。ざっと３０人くらいかね？
やれやれ随分安く見られたもんだねぇ？」

「あはは、この３人でやるのって結構久しぶりですよねぇ？
また誰が１番多く倒すか賭けますかぁ？」

総詩達は完全に余裕の表情だ。

無理もない。

総詩、やち、斎藤の真選組一番隊、二番隊、三番隊組長は“三武狼（ミブロ）”の異名を持つ佐学派最強の剣客なのである。

「く！バカにして！！」

「……しゃーないじゃん。」

怒る討学派生徒に対し、斎藤はぼそりと言い放つ。

「……お前らなんて、剣に比べればモブキャラもいい所。」

「ぷ、ぷはははははは！言うねぇ斎藤！それは言えてる！！」

「あはははは、確かに風上先輩の強さを考えたらそうなっちゃいますねぇ～。」

斎藤の言葉に、やちと総詩は同意する様に笑いこけた。

「だ……誰がモブキャラよ誰が！もう許さない！！」

その総詩達の態度についに堪忍袋の緒が切れた討学派生徒が刀を手に『掛かれー！』と号令を掛ける。
どうやら彼女がこの者達を指揮する存在の様だが桂や涼華と比べると、冷静さなどに掛ける様だ。

「いけぇ！」
「誰が風上君と比べたらモブキャラよ！」
「風上君を追い出した真選組が抜かすなー！！」

そして司令官を同じ様に、他の生徒達も右へならえ。
怒りに身を任せて三武狼に挑んで行く。
だが、戦いにおいて冷静さを失った者から死んで行くもの。
その相手が強ければ尚更だ。

「おっとと、元気いいなあ。でもそんな無粋な剣じゃアタりゃしない…よっと！」

斬り掛って来た討学派の生徒に対し、
やちは軽口を叩きながら、間合いを計って相手の刀を避け続ける。
そしてやちが腰を落として鞘に収めていた愛刀―氏重に手をかけた瞬間――――

シュバンッ！！
ガキィンッ！！
「きゃあっ！？」

気付いた時には、やちは刀を抜き放ち、相手の刀は宙を舞ってい

た。
やちの必殺技“龍飛剣（りゅうひけん）”である。
「さあ、次にやられたいのは誰だい？」
そう言って楽しそうな笑顔で刀を振るい続けるやち。
ガガガキイイィィンンッ！！！
「きゃあぁっ！」
「ぐ、つ、強い……！！」
「……お前らが弱いだけ。」
その横では、斎藤が得意の突き技“牙突（きばづき）”を繰り出していた。
突きは、１度外せば隙を生む技だが、斎藤は躊躇なく繰り出し
その度に討学派の生徒達の刀を、そして戦意をも奪っていく。
「……やっぱり、モブキャラ。」
そう言いニヤつく斎藤。
「……あれれぇ？せっかく囲んだのに来ないんですかぁ？」
さらにその反対側では、
総詩を取り囲んでいる徒沙班の生徒達は総詩を攻めあぐねていた。
「少数精鋭とはいえ、せめて伊織ちゃんはこっちに回すべきでしたねぇ。」

総詩がそう呟いた瞬間――――――

ガガガキイイィィンンッ！！！

「え？」

「な、なに！！？」

討学派の生徒達は唖然となった。

ほんの一瞬の間に、取り囲んでいた討学派生徒達の刀が数本宙を舞ったのだ。

その速さは、明らかに総詩の得意とする“三段突き”を超える速さだった。

「ば、バカな。いくら三武狼でも、ここまでの強さだったの！？」

三武狼の圧倒的な強さに、驚きを隠せない討学派生徒達。

だが当然と言えば当然、否　必然な事だった。

「ふふ、残念だったわね。」

「……お前らなんて、剣に比べれば、アリと巨象。」

「風上先輩との戦いも、無駄じゃなかったんですよね～。」

そう言いながらほほ笑み合う3人。

実は真選組のメンバー達は、剣に惨敗したあの日より

自分達の未熟さを思い知ると同時に、

剣に今一度戦って勝ちたいという思いが込み上がったのである。

以来この日まで、鍛錬を行わなかった日は無く、

真選組　組長格達、特に三武狼の３人の腕は以前の数倍上昇したのである。

「さぁ、行くよ！」
「……推して参る。」
「さっさと片付けちゃいますか。」

そう言い口元がほほ笑んだ３人は、刀を手に討学派へと斬り込んで行く。
その勢いを止めれる者は、討学派に存在しなかった。

―杏の町・愛津駅前―

「あっ来ましたよ坂本さん！あれに乗れば颯間駅にいけます！」
「ん、ようやく来たぜよ。」

杏の町の愛津駅の前に、涼華率いる徒沙班の生徒達が颯間駅へと向かう電車の到着に笑顔を浮かべていた。

「よし！さっそく乗り込んで……」
「残念ね、リョウちゃん。
もうちょっとだったみたいだけど、一足遅かったみたいよ～。」

即座に乗り込もうとした涼華達だったが、
背後からの声にその足を止め後ろを振り向く。
そこには愛刀―虎徹を引き抜き、威風堂々と立つ近藤の姿があっ

た。

「近藤先輩、口におイモの残りカスが……」
「ほえ？」

……訂正、威風堂々ではなかった。
近藤の口にはここに来る途中　焼きイモでも買って食べたのか、
イモの残りカスがついていた。

「うわっちゃ、やっぱりそうは問屋が卸さんか～。」

そんな近藤の事は日常茶飯事の如く慣れているのか
涼華は特に気にせず残念そうに言い放つ。

「あの、坂本先輩。今日はこれくらいで終わりにしませんか。」

近藤の顔についていた残りカスを拭き取った頼子がそう提案してくる。

「ふ。本当に優しいの頼子くんは。
じゃが、あち達もここまで来て引き下がるわけにはいかんちや。」

頼子の言葉に涼華は微笑ましい笑顔を向けるが、それも一瞬の事。
組の長としてここで引く訳にはいかない様だ。

「皆、行くぜよ！」

涼華の合図と共に、討学派の生徒達は刀を抜き放ち
近藤と頼子に斬りかかって行く。

「それじゃ私も、押し通ぉ？？るっ！」

向かって来る討学派に対し、近藤は愛刀―虎徹を手に、文字通り押して参った。

仮にも真選組の大黒柱である近藤　イサミ。

普段はのんびりそうな表情だが、一度　剣を抜けばかなりの実力者である。

討学派の名も無きモブキャラ生徒ごときが敵う相手ではなかった。

「やぁ？？とぉ？？！」

のんびりした声と共に刀が振られる度に、討学派生徒の刀が宙を舞う。

「きゃあ！」

「ぐっ！つ、強い……」

次々と破られる討学派達だが、彼女達もタダではやられない。

「（……今だ！）」

近藤が突っ込んで行き、

後ろに隙ができた所を1人の討学派生徒が不意打ちを狙った。

「――――！」

「させません！」

だが、その討学派の刀が近藤に向けられる事は無かった。

真選組きってのサポーター、頼子が小薙刀を手に討学派の攻撃を防いだのだ。

「くっ！」
「やぁ！」

討学派の刀を弾いた頼子は、そのまま近藤のバックアップに専念した。
近藤が天然無心流独自の力技で押し切り、その後ろを頼子が薙刀と護符を用いてバックアップする。
討学派生徒の大半は、ある者は近藤に押され、ある者は頼子の薙刀により刀を弾かれ、あるいは護符による結界により阻まれた。
状況は、完全に真選組側が圧倒した。
だが……

「……よっしゃ、そろそろ準備はええかのぅ？」

坂本　涼華。
討学派の中でも柔軟性に優れた行動力と奇襲を持ち味とした奇抜さの目立つ徒沙班の筆頭たる彼女がこのままで終わる筈がなかった。
彼女にはある秘策があったのだ。

「坂本先輩、準備できました！」
「よっしゃ！行くぜよ！！」

討学派・徒沙班の中でも精強で知られる生徒達が、涼華の言葉と共に手にある物を構える。
それは長く、黒い筒の様な物だった。

「頼子ちゃん！このまま押し切るわよ！」

「はい！」

そして丁度その時、近藤と頼子が討学派生徒達を突破し涼華達の前まで迫って来ていた。

「涼ちゃん覚悟！」
「そこまでです！」

近藤と頼子がそれぞれ虎徹と小薙刀を手に涼華達へと向かう。
だがその時。

「今じゃ！」
「構え！放て！！」

バン！ババン！ババアアァァンッ！！

「！？」
「きゃあ！！？」

幾つもの銃声と共に討学派の持った黒い筒から、緑色の弾が放たれる。
それは、ライフルから放たれたゴムの模擬弾だった。
近藤と頼子は咄嗟に避けると同時に、近くの電信柱とポストの影に隠れる。

「な、何ですかあれ！？」
「分からない！けど何処かで見たような……」

近藤の言葉に、頼子は心の中で同意した。
2人はあの銃にどこか見覚えがあった。

「ゴム弾の銃って……あっ！」

その時、頼子の脳裏に鬼の巣に言った時の事が蘇る。
そう、頼子は鬼の巣でアレと同じ武器を見た事があった。

「アレって、危兵隊の銃に似てませんか？」
「ほぇ？」

頼子の言葉に首を傾げる近藤だったが、
やがて何かを思い出した様にはっとなった。

「そういえば、似てるねぇ～。」
「あちゃ、気付かれたぜよ。」

近藤の言葉に涼華は悪戯のばれた子供の様にやんちゃな笑顔を浮かべた。

「ちょいと、颯間の高杉君との♪」

そう言いニカッとほほ笑む涼華。
実はあの鬼の巣での出来事の後、高杉の開発した銃器に興味を持った涼華は
高杉と連絡を取り合って話す内に、銃器に関する事は勿論
共学化の件に関する話が盛り上がり、機嫌を良くした高杉は
涼華のリボルバー2丁をゴム弾用に改造した上で、
ゴム弾ライフルを格安で売ってくれたのである。
と言っても、まだ数に限りがあるので討学派の一部の生徒にしか

持てれないのだが
その分、撃てるのは涼華の指導の下、射撃に優れたメンバーが選ばれている。

「さぁ、皆頼むぜよ！！」
「はい！てぇ――――っ！！！」

バン！ババン！ババアァァンッ！！

涼華の指示と共に、討学派生徒のライフルが火を（正確にはゴム弾を）噴く。

「くっ！」
「ど、どうしましょう……」

討学派の思わぬ攻撃に戸惑う2人。
行くら2人が戦闘経験豊富な真選組でも、
飛び道具、それも銃器を相手にした事は無く、相手が悪すぎる。

「……そうだ。近藤さん。」
「ほえ？」

そんな中、不意に頼子が何か閃いたのか、近藤に呼びかける。

「私に考えがあります。任せてもらえませんか？」
「頼子ちゃん……」

その頼子の提案に、近藤は軽く驚いていた。

不断はあまり自己主張をせず、皆のバックアップに専念していた頼子が
自ら打って出ようとするのは珍しい。
いや、今回に限った事ではない。
ここ最近の頼子は度々　自己主張をする事が多くなった事を近藤は気づいていた。

「（……これもツルくんの影響かな……）」

不意に近藤は、ここに居ない筈の剣の事を思い出し、
それと同時に頼子に再び視線を向ける。

「分かったわ、頼子ちゃんに任せるわ！」
「はい！」

近藤の言葉に頷いた頼子は懐から４枚の符を取り出すと、その符に気を送りだす。

「“関口神甲流護符術（せきぐちしんこうりゅうごふじゅつ）・結界四方陣（けっかいしほうじん）！！”」

頼子は気によって輝き出した符を、己を中心に四方向へ投げ打った。
それと同時に、４枚の符から発せられた気が繋がり、
頼子を覆い囲う結界が生まれた。
その結界は、ゴムの模擬弾をも弾き返す。

「ほほぉ～、それが結界ちゅうものかの。」

その結界の防御力に不敵にほほ笑む涼華。

「じゃがの。あちは結界とかはよぉ分からんが、気をずっと練るってのは結構大変なんじゃろ？」

そう言い放つ涼華。

そう、森羅万象、あらゆる物に宿るエネルギーである気を練ると言う事は、

それだけ体力も精神力も削る事を意味する。

ましてや、これほど強力な結界ともなるとその消費力も半端ではない。

そんな事は頼子も百も承知だ。

「分かってます、ですから……」

そう言い頼子は両手を前に振りかざすと、ゆっくり歩き出す。

すると、同時に四方を囲む結界もそれに合わせて動き出したのだ。

「なっ！？」

「な、なに！！？」

驚いた討学派の生徒達が発砲するが、ゴム弾は結界により跳ね返ってしまう。

気を送る都合上、頼子は体力の消耗からゆっくりとしか歩けないがそれでも確実に討学派生徒達との距離は埋まって行く。

そのさまは、まるで動く要塞の如しだった。

「ちぃ！しゃーないの！」

この光景に対し涼華はチラッと駅に視線を向ける。

新たに電車が2つは行って来るのを確認し、涼華は今がその時と判断する。

「皆、後を頼めるかの？」
「はい！」

涼華の言葉に討学派生徒達は頷き、
それを見た涼華はニカッとほほ笑みながら駅に向かって走り出した。

「！！いけない、時間稼ぎだわ！！」

涼華の行動に近藤はその事に気付いた。
そう、涼華達は近藤達の出現で先程来た電車に乗り損ねたので
ここで迎撃しつつ次の電車が来るまで時間稼ぎをしていたのだ。

「追いましょう！」
「させないわ！！」

それを見て追おうとする頼子だが、
それを阻むべく討学派生徒達が銃を乱射しだす。
それに対し頼子は結界を張らなければならず、思う様に動けない。
かと言って、近藤にはこのゴム弾の嵐を掻い潜る様な術は無い。
まさに万事休すだった。

「くっ！」
「このままじゃ……」
「撃て撃てぇ！このままいけば私達の勝利は確実よ！！」

涼華を含み討学派は勝利を確信した。
いける。
これで我々の勝利となる事を。

「さて、それじゃあちはこれにて。」

そう呟いた涼華が、前もって買っておいた切符を取り出したその時。

シュキンッ！

「！！？」

不意に涼華の前に黒い物体が飛んで来たのだ。

涼華は紙一重で避けたが、完全には避けきれなかった。

飛んで来た物体により、涼華の手にあった切符が手より離れ宙を舞う。

「あ、あかん！」

それを見た涼華は必死に宙を舞う切符を取り戻そうとする。

だが……

シュッ！

「！！？」

続けて飛んで来た物体が切符に辺り、

切符はその物体と共に駅の壁に突き刺さった。

「これは……」

飛んで来た２つの物体に、涼華は目を細めた。

それは２つの黒い手裏剣だった。

最初に飛んで来たのは、棒状の棒手裏剣で、床に突き刺さっている。
次に飛んで来たのは、よく知られる十字手裏剣。
これにより切符は手の届かない程高い位置で突き刺さっている。
だがそれ以上に涼華が、そしてその光景を見ていた近藤達は手裏剣が飛んで来た事そのものにある考えが浮かんだ。
自分達の知る者達の中で、
手裏剣の扱いに手慣れている者などある者しか思いつかない。

「まさか……」

そして、涼華が後ろを振り向いた瞬間、そのまさかは現実のものとなった。

「何がまさか何ですか、坂本先輩。」

振り向いた所に立つ声の主。
白銀に輝く腰まである髪を後ろで一束に結び、
紅と蒼の左右色違いの瞳(オッドアイ)の輝く背の高い青年が、1本の小太刀を手にしていた。
そう、涼華達のまさかはまさに現実のものとなった。

「……剣……くん？」
「はい。お久しぶりです、坂本先輩。」

涼華の言葉に、剣は優しく微笑んだ。

『～第二十章～　討学派の策略！発生、文久の

政変！！

《終》」

～第二十章～　討学派の策略！発生、文久の政変！！（後書き）

二十一話目完成です。
今回より、少々小説のか書き方を変えてみました。
。を終点に新しく始める行は１スペース開けてから書く事にしてみました。
この方が行などを読みやすいと思ったからです。

さてさて、今回の話は討学派がついに本格的に動き出しました。
原作では『８月１８日の政変』となっていましたが、
それだと夏休みになりそうなので、別名の『文久の政変』にしてみました。
また、史実だと討幕派に銃器を届けたのは坂本龍馬率いる海援隊でしたが
ここでは史実における高杉が坂本にピストルを送った逸話から
高杉から買い取ったゴム弾の銃器を討学派が使いました。
いくら真選組でも銃器が相手ではなす術がありません。
そこへさっそうと現れたのが我らが剣です。
次回、剣の復帰とさらなる展開にこうご期待ください。
ではでは～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0542l/

学園☆幕末伝 八忍隊

2011年11月16日15時56分発行